

# 総研大文化フォーラム2020報告集

文化のレジリエンスとは？：〈異〉をつなぎ、未来へ

於 国際日本文化研究センター

2020年12月5日～6日

# 総研大文化フォーラム2020報告集

文化のレジリエンスとは？：〈異〉をつなぎ、未来へ

於 国際日本文化研究センター

2020年12月5日～6日



## はしがき

本報告書は、2020年12月5日（土）6日（日）に実施した総合研究大学院大学文化科学研究科による企画事業「総研大文化フォーラム2020 文化のレジリエンスとは？－〈異〉をつなぎ、未来へ－」の活動報告書です。

総研大文化フォーラムは、総合研究大学院大学文化科学研究科の学生・教員の学術交流を図るために実施されてきた事業です。総研大文化フォーラムとしては今回で5回目の開催となりました。COVID-19の感染拡大が広がり、多くの集合型のイベントが中止やオンラインでの開催となっている中、オンラインと現地での併用方式でプログラムを構成することで、従来の研究発表やポスター発表、シンポジウムなどを行いながら、多くの方が、参加できるように環境を整えました。その結果、文化科学研究科ならびに学内他研究科を含めた多様な方が参加することができるフォーラムとなりました。

その一方でフォーラムの準備に際して、事業実施の可否を始め、前例のない中でいかにして実施するのかを中心に、学生・教職員の間でフォーラム事業の目的や意義、各企画の立案・実施について協議と交渉を重ねてきました。初めての開催形態となった本年度の記録を残し、今後の糧としてほしいとの思いから学生企画委員の意見により発行することとしました。

また、本フォーラムを準備、実施、そして報告書を作成する過程の中で、改めてそこには学生・教職員の協働のあり方や外部団体との協力体制の構築など、本事業に関与した全ての方々と共有すべき成果と課題を認めることができました、その点についても本報告書が今後のための資料として活用されることを願っております。

執筆にあたっては、学生企画委員会で用いた議事録、本事業実施に際して作成された内部資料を用いております。

本報告書が総合研究大学院大学文化科学研究科における、フォーラム事業の道標として今後の学生企画委員を導くとともに、大学院教育に携わる研究者・教職員の方々にとっても、教育プログラムの開発や改善の一助となることを願ってやみません。

2020年3月吉日

2020年度学生企画委員長

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

石原 知明



# 目 次

1	総研大文化フォーラム2020について	1
1-1	総研大文化フォーラム2020概要	1
1-1-1	総研大文化フォーラム概観	1
1-1-2	学生企画委員による開催趣旨の検討	1
1-1-3	予稿集の発行	4
1-1-4	開催プログラムについて	5
1-2	当日の内容	8
1-2-1	開会式の挨拶	8
1-2-2	基調講演	12
	基調講演「見えない物に対する恐れと人間—文化科学研究の観点から—」	
	小松 和彦	13
1-2-3	シンポジウム	32
	講演1「平安前期のレジリエンス—六国史時代と現代を見比べて—」	
	相田 満	35
	講演2「Resilience?：—（マイナス）から始める現実生活」	川村 清志 39
	講演3「怪異のつくり方」	木場 貴俊 44
	講演4「被災地における民俗芸能の役割とそれへの支援	
	—脆弱性とレジリエンスから考える—	林 勲男 48
1-2-4	閉会式の挨拶	63
	学生企画委員長の挨拶	石原 知明 63
	挨拶	稲賀 繁美 64
2	総研大文化フォーラム2020の運営について	68
2-1	学生企画委員について	68
2-1-1	学生企画委員の組織と会議	68
2-1-2	対面とオンラインの併用開催について	70
2-1-3	会場準備	70
2-1-4	開催後の活動	71
2-2	基調講演	72
2-2-1	企画趣旨	72
2-2-2	準備の経過	72
2-2-3	当日の様子	73
2-2-4	今後の課題	74

2-3	口頭発表	75
2-3-1	企画趣旨	75
2-3-2	準備の経過	75
2-3-3	当日の様子	76
2-3-4	今後の課題	77
2-4	ポスター発表	78
2-4-1	企画趣旨	78
2-4-2	準備の経過	78
2-4-3	当日の様子	79
2-4-4	今後の課題	80
2-5	シンポジウム	82
2-5-1	企画趣旨	82
2-5-2	準備の経過	82
2-5-3	当日の様子	82
2-5-4	今後の課題	83
3	オンライン開催について	84
3-1	オンラインツールの選定	84
3-1-1	配信系ツールの選定	85
3-1-2	連絡系ツールの選定	86
3-1-3	広報系ツールの選定	88
3-1-4	その他のツールの選定	88
3-2	各プログラムへの適応について	89
3-2-1	開会式・閉会式	89
3-2-2	基調講演	89
3-2-3	口頭発表	90
3-2-4	ポスター発表	90
3-2-5	シンポジウム	91
3-3	オンライン配信環境の整備	93
3-3-1	配信機材の接続構成と確保	93
3-3-2	ネットワーク環境	94
3-4	オンライン開催の結果	95
3-4-1	開催前の運用状況	95
3-4-2	当日の運用状況	97
3-4-3	今後の課題	97

4	関係者による開催総括およびアンケート結果 .....	99
4-1	総研大文化フォーラムの評価と展望 フォーラム事業担当 国際日本研究専攻 専攻長 稲賀 繁美 .....	99
4-2	アンケート分析 .....	105
4-3	学生企画委員としての総括と反省 2020年度学生企画 副委員長 前山 和喜 .....	118
5	資料 .....	120
5-1	第1～8回学生企画委員会議事次第・議事録 .....	120
5-2	参加募集要項 .....	159
5-3	広報チラシ .....	163
5-4	当日プログラム .....	165
5-5	当日会場案内図 .....	167
5-6	アンケートの項目 .....	169
	当日の発表内容 .....	175
	当日の写真 .....	194
	謝 辞 .....	195
	編集後記 .....	196

本文中で用いる略語について

総研大：総合研究大学院大学  
 民 博：国立民族学博物館  
 日文研：国際日本文化研究センター  
 歴 博：国立歴史民俗博物館  
 国文研：国文学研究資料館

# 1 総研大文化フォーラム2020について

## 1-1 総研大文化フォーラム2020概要

総研大文化フォーラムは、「総合研究大学院大学文化科学研究科事業に関する申し合わせ」(平成28年4月15日文化科学研究科専攻長会議承認)第3条第2号に以下のように定められている。

### (2)「総研大文化フォーラム」の開催

基盤機関を会場に、文化科学研究を切り口とするフォーラムを開催し、研究科内外の様々な専門分野の教員・学生に、研究発表と学際的な交流の場を提供する。

実施に際しては、本研究科の学生をRAとして雇用し、フォーラムの企画・運営を主体的に担わせることと併せ、事業運営の体験を通じて実践的な問題解決能力を養成する。

これに従い、例年、各基盤機関を会場に総研大文化フォーラムが開催され、2020年は国際日本文化研究センターを会場として開催されることとなった。

### 1-1-1 総研大文化フォーラム概観

2020年総研大文化フォーラムの開催趣旨は最終的に下記の通り決定した。

#### 開催テーマ

文化のレジリエンスとは？—<異>をつなぎ、未来へ—

#### 開催趣旨

今、私たちは、新型コロナウイルス(COVID-19)をはじめとし、国家間対立、民族紛争、自然災害など様々な困難に直面し、文化や文化研究に何ができるのかを問われています。人類の歴史を振り返ると、こうした予期せぬ事態に幾度となく見舞われ、そのたびに試行錯誤し、乗り越えてきました。私たちは文化の柔軟性や多様性を考え信じることによって、<異>なるもの同士の対話を促し、未来に向けて歩を進めていかなければなりません。そこで、本年度のテーマは「文化のレジリエンスとは？—<異>をつなぎ、未来へ—」を掲げます。

レジリエンスとは「復元力」「反発性」「弾力性」「再起性」「適応力」「柔軟性」「回復性」などといった広い意味合いを持った言葉です。今回のフォーラムではあえて定義をせず、多彩な視点から「文化のレジリエンス」を検討することによって、文化科学の可能性を共有したいと思います。さらに、文化科学研究の知見で社会におけるレジリエンスを問い直すという、より踏み込んだ視点も提供したいと考えています。

今年の総研大文化フォーラムは、国際日本文化研究センターをメイン会場とし、オンラインでの参加もできるように環境を整備します。学問的垣根を問わず、様々な<異>をつなぐ機会となるように、皆様の参加をお待ちしております。

### 1-1-2 学生企画委員による開催趣旨の検討

開催テーマ・趣旨の決定に至るまでの過程は以下の通りである。

- ①学生企画委員による開催テーマ案の提出
- ②各委員による開催テーマ案の説明、意見交換(第1回学生企画委員会)
- ③開催テーマ・趣旨の検討(Slackを活用した意見交換)

- ④開催テーマの決定
- ⑤開催趣旨文の作成
- ⑥決定テーマ・開催趣旨の確認（第2回学生企画委員会）
- ⑦開催通知提出

### 学生企画委員による意見交換 ―開催テーマの方向性について―

第一回学生企画委員会において、各委員が開催テーマ・趣旨案を説明した。各委員のキーワードとして挙げられた言葉は、「災い」「災禍」「弾力性」「過去を見つめ直す」「つながる力」「参加」「レジリエンス」「つながる」「文化」「知恵」「怪異」「疫病」「人災」「異分野」「異文化」「知」「変化」「不変」「過去」「未来」である。

2020年は新型コロナウイルスの世界的な蔓延により、今までの考え方や生活様式が大きく変わった。委員の中からは、疫病や自然災害、緊迫する国際関係に対して、文化に何ができるのか、或いは異文化の垣根を越えて対話を促すためにはどうするべきかを問う意見が多くあがった。また、本年度のフォーラムを通して、文化科学研究の成果を共有し、他分野との交流の積み重ねをしていきたいという意義が確認された。

会場となる日文研の特色を反映させたテーマにしてはどうかという意見も出た。例えば、キーワードに挙げられた「異分野」「異文化」の「異」という言葉である。日文研には「怪異データベース」をはじめとする、「怪異」についての研究が特色の一つとしてある。「怪異」だけではなく、「異文化」や「異国」などさまざまな「異」が集まっている日文研から、多くの人の「異」を伝え理解しあうフォーラムにしたいという思いも、委員間で共有された。

各委員の意見を踏まえて、「レジリエンス」という言葉を中心として全体の意見をまとめるという意見が出された。

### 開催趣旨の検討 ―「レジリエンス」という言葉をめぐって―

「レジリエンス」とは、「復元力」「反発性」「弾力性」「再起性」「適応力」「柔軟性」「回復性」などといった広い意味合いを持った言葉である。心理学、都市工学、自然科学、工学などで使われ、現代の科学技術のキーワードとして「レジリエンス」は欠かせない言葉になっている。この様々な意味を持った「レジリエンス」の中に、災禍や危機を乗り越えようとする文化の強靱さや復元力を重ね合わせられるのではないかという意見が出された。

しかし、「レジリエンス」は、危機や予測不能などコンテキストの下で使う言葉であり、従来の文化研究の場ではあまり使われていない。委員の中でも、「レジリエンス」という言葉に疑問を呈する意見があった。その理由は、耳慣れない言葉である「レジリエンス」を使うことで、テーマの意味が伝えにくい可能性があるからである。また、「文化にはレジリエンスがあって然るべき」との断定的な見方が生まれることへの心配や、文化が「レジリエンス」で価値判断されてしまう危険性も考えられた。正しい理解なく、「レジリエンス」というカタカナ語を乱用することは危険であり、きちんとした概念の説明が必要であると思われた。

慎重な意見がある中、本年度のフォーラムでは敢えて「レジリエンス」という言葉を用いることになった。その理由は、「レジリエンス」という概念が、見る者の想像力を掻き立てるような、度量の広さや寛容さを含んだ言葉であると理解したためである。また、人文社会系の研究は、多様で複雑な社会や思想の構造を受け入れるクッションの役割であったり、新しいモノ

の見方・考え方を啓蒙するエンジンの役割であったりする。文化科学研究の成果が、昨今の災禍に対して、回復・緩衝・適応・反発・弾性（まさにレジリエンス）を提供できるのではないだろうか。

加えて、開催テーマに「？」をつけることで、「異」なる者同士の内的対話が進むような表現を使った。「レジリエンス」というものに対して疑問を投げかけ、本フォーラムを通して「文化のレジリエンス」を意欲的に考える機会にしたいと考えた。

### 開催趣旨の整理 —「レジリエンス」と「<異>をつなぐ」との関係性—

開催趣旨作成に当たって、以下の二点に整理された。

①文化のレジリエンスを考える。

→その時に「<異>をつなぐ」ことは大切で、その研究成果を未来へ残す。

②「文化」を見つめなおすことで「レジリエンス」を考える。

→総研大（特に文化科学研究）の研究・視座で「レジリエンス」を問い直す。世界が先行きの見えない不安が広がっている今だからこそ、文化科学研究の知見が「レジリエンス」の原動力にもなりうるのではないか。

委員の意見交換により、テーマ的な広がりと言語の良さを尊重し、①の意図を含んだテーマである「文化のレジリエンスとは？—<異>をつなぐ、未来へ—」を開催テーマとした。しかしながら、主題の「文化のレジリエンス」と副題の「異をつなぐ」とが、どちらも重要なキーワードであるために、どちらが主題なのかを判断し難い。そこで、主題と副題との関係について、意見交換が行われた。

両者の関係性を整理するための一つの見方として、「レジリエンス」を、様々な<異>によってその都度定義される対話の柔軟性のように捉えてはどうかという方向性が示された。つまり、「レジリエンス」を定義する対話の種のようなものとして<異>を捉えるのである。また、「<異>のつながり」を柔軟な方向に開かれる対話と考えると、その柔軟性としてのレジリエンスは比較的イメージしやすく、関係も整理されるのではないだろうか。

時に、<異>というものは、未来を閉ざしうる何らかの重大な問題でもある。しかしながら、やっかいなく<異>でさえも、様々な「<異>のつながり」の中で、複雑に絡み合い、ほどけていくような可能性があるのではないか。

今回のテーマには、さまざまな困難を乗り越え、未来に向かっていきたいという強い“願い”も込められている。委員同士の意見交換により、「異文化」や「異分野」の集まる日文研から、<異>をつないでいくという意味も込めるためにも、<異>という言葉は欠かせないことを確認した。

### 今後の課題

開催テーマ・趣旨はフォーラムの根幹となる部分である。各委員が積極的に意見交換を行い、開催趣旨を練っていったことは評価できるが、もっと時間をかけて決めるべきであったと感じる。また、最終的にできあがったテーマが、委員の意見をつなぎ合わせたという印象も受ける。具体的なイメージ（何を扱うのか）を考え、個々のセッションが成立するようにアイデアを出していく必要があったのではないかと思う。



### 1-1-3 予稿集の発行

#### 予稿集概要

2020年総研大文化フォーラムの予稿集の内容は例年のものを踏襲し、プログラム内容や発表要旨、日文研交通案内等を掲載した。表紙は本年度のフォーラムポスターを予稿集用に改変したものをを用いた。

配布形態は電子媒体での配布を基本とした。総研大文化フォーラム2020のSlackチャンネル「# general」にPDFで掲載し、参加者が閲覧・ダウンロードできるようにした。また、会場参加者には、日文研で印刷したものをホチキス止めした簡易的な予稿集を配付した。

#### 準備の経過

予稿集の作成作業は2020年9月中旬頃より始め、フォーラム開催の5日前の11月30日の納品を目指した。予稿集担当の企画委員と、その企画委員が所属する基盤機関の事務（本年度は国文研）と連携して作成にあたった。作成作業は以下の手順で進められた。

9月下旬	作成スケジュール、台割り案作成、予稿集の位置づけや配布形態の検討
10月上中旬	業者決定・依頼、口頭・ポスター発表者への予稿集原稿作成依頼
10月27日	入稿
11月2日	初校の出校、発表者への初校依頼
11月11日	初校戻し
11月17日	再校の出校、発表者への再校依頼
11月20日	再校戻し
11月25日	校了
11月30日	納品

#### 実際の作業の様子と今後の課題

予稿集の作成にあたって、はじめに、スケジュール（納期、校正スケジュール）、仕様（作成部数、ページ数、台割、カラー印刷について）、作業分担（各原稿の作成担当者）を決めた。特に予稿集の位置づけや配付形態について、企画委員会で検討をした。紙とデータの両方を作成するという意見も出ていたが、本年度のフォーラムは対面とオンラインの併用開催であるため、紙媒体の冊子を何部用意するのかを推定できないという問題があった。このことから、電子媒体での配付を基本とした。

予稿集を電子媒体としたことで、色校の作業を減らすことができ、作業日程の短縮化に繋がった。しかし、発表者申込締切を延長した影響により、発表申込締切日と原稿締切日との日数が短くなり、発表者には急な原稿依頼になってしまった。発表者の協力により、予稿集作成を問題なく遂行することができたが、プログラム内容の決定を含め、ゆとりのある作成を心がけたい。また、基調講演やシンポジウム登壇者のプロフィールは、事前に登壇者本人に確認をとらなければならない。そのことも踏まえて、各委員が連携して動くことで、よりスムーズに予稿集作成が進められると思う。

## 1-1-4 開催プログラムについて

### 概要

昨年度のプログラムは、1日目に基調講演、ポスター発表、館内ツアー、口頭発表、懇親会、2日目にポスター・口頭発表、館内ツアー、シンポジウムを行う流れであった。そこで、本年度のプログラムについても、基調講演やポスター・口頭発表、シンポジウムを行うという大枠は従来のプログラムを踏襲することとし、開催形態はオンラインと現地開催を併用することを前提として検討された。本年度のプログラムの詳細は以下の通りである。

プログラム	
1日目 12月5日(土) 13:30~18:00	
会場: 1階セミナー室1	
13:30 ~ 13:45 開会式	YouTube
13:45 ~ 15:15 基調講演	YouTube Slido
見えないものに対する恐れと人間—文化科学研究の観点から— 小松 和彦 (総合研究大学院大学 名誉教授) 司会: 荒木 浩 (文化科学研究科国際日本研究専攻 教授)	
15:15 ~ 15:30 休憩	
15:30 ~ 17:00 研究発表会 口頭発表	YouTube Slido
昭和初期の日本でのソヴィエト文化への視線 —第一次五カ年計画(1928-32)への評価を中心に— 吉川 弘晃 (文化科学研究科国際日本研究専攻 学生)	
中国人日本語学習者の連語習得に及ぼす要因 黄 叢叢 (明治大学国際日本学研究科 学生)	
『平家物語』の堅牢地神 児島 啓祐 (文化科学研究科日本文学研究専攻 学生)	
17:00 ~ 17:15 休憩	
17:15 ~ 17:45 研究発表会 ポスター発表	Zoom Slack
17:45 ~ 17:50 休憩	
17:50 ~ 18:00 一日目総括	Zoom



2日目 12月6日(日) 10:00~16:30

会場：1階セミナー室1

10:00 ~ 10:30	研究発表会 ポスター発表	Zoom	Slack
10:30 ~ 10:40	休憩		
10:40 ~ 12:10	研究発表会 口頭発表	YouTube	Slido
	神儒仏三教思想と国教一川合清丸の思想について 宋 琦 (文化科学研究科国際日本研究専攻 学生)		
	災禍におけるアマの適応と生業の再編—三重県志摩半島を中心に— 金丸 雄一 (文化科学研究科地域文化学専攻 学生)		
	近代科学資料アーカイブ構築のための課題分析 後藤 真 (文化科学研究科日本歴史研究専攻 准教授) 前山 和喜 (文化科学研究科日本歴史研究専攻 学生)		
12:10 ~ 13:00	休憩		
13:00 ~ 14:30	シンポジウム 災いから考える文化のレジリエンス	YouTube	Slido
	報告1 平安前期のレジリエンス—六国史時代と現代を見比べて— 相田 満 (文化科学研究科日本文学研究専攻 准教授)		
	報告2 Resilience? : — (マイナス) から始める現実生活 川村 清志 (文化科学研究科日本歴史研究専攻 准教授)		
	報告3 怪異のつくり方 木場 貴俊 (国際日本文化研究センター プロジェクト研究員)		
	報告4 被災地における民俗芸能の役割とそれへの支援 —脆弱性とレジリエンスから考える— 林 勲男 (文化科学研究科地域文化学専攻 教授)		
	司会：安井 眞奈美 (文化科学研究科国際日本研究専攻 教授)		
14:30 ~ 14:45	休憩		
14:45 ~ 16:00	シンポジウム (総合討議)	YouTube	Slido
16:00 ~ 16:10	休憩		
16:10 ~ 16:30	閉会式	YouTube	

## 準備の経過・様子

従来の文化フォーラムでは、対面での開催に意義を見出してきた。本年度のフォーラムは、対面とオンラインとの併用開催であり、開催形態を念頭に置いたプログラムの検討が進められた。

プログラムを決めるために考慮すべきことは、二点あった。

一点目は、文化フォーラムの開催日程と各基盤機関の行事との日程調整である。本年度は新型コロナウイルスによる影響により、各機関において行事等が後ろ倒しとなり、文化フォーラ

ムの開催日程と重なる可能性があり得る。場合によっては、連携開催をすることも可能であり、各委員が各基盤機関で開催される行事に注意する必要がある。

二点目は、開催形態や使用ツールについてである。オンラインで開催した学会の例を参考に、開催形態やプログラムを検討し、具体的なイメージを委員間で共有した。本年度のフォーラムでは、最終的に、Zoom、YouTube、Slido、Slackを使用することに決定したが、各プログラムをどのようなツールで行うのかについては、さまざまな意見が出された。

プログラムの検討にあたり、見送られた案も多くあった。そのひとつが、基盤機関の特色を生かした企画である。京都周辺の博物館施設や歴史的建造物等の見学があがったが、現地とオンラインの両方で開催できるプログラムの準備は難しく、見送られた。また、各基盤機関を中継で繋ぐプログラムの検討も行われたが、企画・準備不足のため見送られた。なお、懇親会については、Zoomのブレイクアウトツール等を活用して開催することは可能であるが、現地とオンラインとの兼ね合いが難しいため、本年度の開催は見送った。

### 今後の課題

本年度のフォーラムは、はじめてのオンライン開催であったため、従来の手法にとらわれない柔軟な意見が出されたが、プログラムの実現やスケジュール管理など、困難なことが多かった。例えば、口頭・ポスター発表の人数が集まらなかったために、募集期日を延長し、各基盤機関から発表者の選出を依頼した。しかし、無理に発表者を募らなくても、開催期間を2日から1日に減らしても良かったのかも知れない。開催形態やプログラムはフォーラムの核となる部分であるが、臨機応変な変更も念頭に置ければと思う。

## 1-2 当日の内容

本章では、当日の会場・オンライン配信でのやり取りを書き起こしたものを掲載する。

### 1-2-1 開会式の挨拶

総合研究大学院大学学長 長谷川真理子

長谷川でございます。今日は、本当はそちらにお伺いするはずだったのですが、新型コロナウイルスの感染拡大がなぜかこの頃ひどくなってきて、行かないことになってしまいました。皆さんとお会いできないのがとても残念でございます。

毎年、本当に文化フォーラムは、学長、副学長が参加させていただきまして、大変面白い活発な議論をしていただいているのを楽しんできました。去年は国文学研究資料館でしたか、あそこで楽しく拝見いたしました。今年は、学生企画委員長は石原さん、そして文化科学研究科長の池谷先生、それから国際日本研究専攻長でフォーラム担当の稲賀先生にいろいろとご苦労いただいたところですが、ありがとうございます。とてもいい会になることを期待しております。

皆さん本当にこの一年ぐらいになりますか、随分長いことコロナのことで普通に研究ができなくなったり、場合によっては研究所、博物館に行けなくなったりとか、そんなことで随分研究の進展にご苦労されているかと思います。その中でも頑張ってください、いろいろ良い成果を挙げられていること、本当に皆さんの努力でよくやっていただいていると思います。

でも、本当に大変でしたでしょう。そのことは、理系の学生たちも、実験ができなくなるとか観測ができなくなるとか、本当にみんな影響が大きかったようです。また、生活のほうでもいろいろ不便が生じて大変だったと思います。大学としてはできる限りのことはしましたけれども、まだまだ本当に元には戻らないので、しばらくいろいろな点で不便かなと思いますが、どうぞ頑張ってください。

その中で、こういうフォーラムを学生の皆さんたちが一致協力して開くことができ、とてもうれしく思います。オンラインはいいところと悪いところと両方あって、結局私は行かないから、今日は自宅から、すみませんが参加しています。それでも、いろいろな活動を拝見できるというのはとても素晴らしいことなのですが、やはり対面で本当にその場を共有しながら一緒にいるというのとは違うので、お休み時間にちょっと雑談したりというのもできないし、みんながその場を共有しながら、雰囲気が何となく分かるということがない。画面と自分だけしかいないので、その辺が少しもどかしいですね。

そういうこともあります。この技術があるので、これがまがりなりにも開催できるという強みもありますから、これからみんな、オンラインだと何ができて、何ができないのか、オンラインはどう使ったらいいのか、どう使っても駄目なのか、そんなことをみんなで学んでいく時期なのではないかと思います。その点も考えながら参加してみましょう。

では、本当にたくさんの方々がこのフォーラムを成功させるために頑張ってくださいと思います。お礼を申し上げるとともに、本当に2日間、楽しい有意義な会議になることを願っております。

この「文化のレジリエンス」というのはとても大事なことです。皆さんどうお考えか、結論はないのだろうけれども、異なる<異>をつないで未来へどうするか、とてもいい着眼点だと思います。

それでは、いい会になることを期待しております。どうぞ頑張ってくださいませ。私の話はここまでいたします。

**進行** 長谷川先生、ありがとうございました。

続きまして、国際日本文化研究センター所長、井上章一先生よりご挨拶を頂きます。それでは、井上先生、よろしく願いいたします。

国際日本文化研究センター所長 井上 章一

マスクを取らせていただきます。井上といいます。今日は、オンラインで皆様、研究会への参加、ありがとうございます。

「文化のレジリエンス」という表題について、私は少し違和感を持ちました。文化はそんなに柔軟で弾力性のあるものだったのかと、一つ思い出すことを語らせてください。

私は、ブラジルのリオデジャネイロという町で三か月ほど暮らしました。町を歩いているときに、つまずいて顎を打ってしまいました。地元の人に案内されて病院へ行きました。医者は「ベッドへ横たわれ」と言います。私は、靴を脱いでベッドへ横たわろうとしました。すると、医者が怒り出したのです。「靴を脱ぐな。そんなところへ靴を置かれると邪魔になる」。私は靴を履いたままベッドへ寝ました。そして、たまらない違和感を抱いたのです。ベッドの上で靴を履くのは嫌だと、しみじみ感じました。寝る場所で靴などを履いてはいけないという日本のルールに、私は洗脳され切っている。家の中では靴を履かない日本人に育て上げられている。この拘束には相当厳しいものがあると思います。

今、日本では社会の分断が言われます。学歴の違い、収入の違い、人々は分け隔てられています。ですが、どうでしょうか。高学歴者も低学歴者も家の中では靴を脱ぎます。右翼も左翼も家の中では靴を脱ぎます。文化の拘束力は相当侮れないような気がします。ここから目を背けてレジリエンスはなかなか語りづらいのではないかと。

ただ、こうも言えます。私たちは、100年以上ほど前は、例えば今私たちがいるような場所、オフィスでも靴を脱いでいました。侍たちもお城での勤務にさいして、わらじを脱いで、裸足でオフィスワークに向かっています。劇場でも靴を脱いでいました。百貨店も初期は靴を脱いでいました。ですが、今はこの文化が保たれているのは家の中だけです。ほぼ家の中だけです。つまり、相当厳しく我々を束縛していると思われる文化も、条件が変われば柔らかく変動している、レジリエントな面を持っている。そこに目を向ければ、「文化のレジリエンス」は語れると思います。

文化の束縛力は期間の長短に左右されますね。短期的には、そうとう強い。長期にわたれば、歴史的な過程を考えると、ゆるやかに変わっていく。でも、最後まで変わらないところも、靴の場合は家の中ですが、あるわけですね。いろいろ考えてみるべきことはおありになるのではないかなということを申し添えて、今日の会の最初の言葉にかえたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

**進行** 井上先生、ありがとうございました。

続きまして、総合研究大学院大学文化科学研究科長、池谷和信先生よりご挨拶を頂きます。それでは、池谷先生、よろしく願いいたします。

皆さん、こんにちは。聞こえているでしょうか。オンラインの方もいらっしゃるのですが、皆さん初めましてといいますか、今回、一年生の方とは恐らく今日初めてお会いすると思いますので、よろしくお願いします。

今、既に長谷川学長と井上所長のほうからご挨拶があったと思いますが、私としては総研大のことを少し話させていただきながら、今日の話にしたいと思います。やはり学長が常日頃言っているのですけれども、この総研大というのは日本で最も小さい大学であり、皆さんも既に入られて、志は非常に大きいと。特に三つのことを歴代の学長、長谷川学長もおっしゃっております。

その三つのことという一つは高い専門性、二つ目が広い視野、最後は国際的な通用性ということの三つ。恐らくこの国際日本研究専攻でも類推することがあるのではないかと思います。特に高い専門性は、きっと皆さん平素、基盤でいらっしゃいますので、恐らくそれに努められていると思いますけれども、広い視野というのは、ふだんそれぞれの基盤にはなかなか難しいところがあると思います。そういう点で、この総研大フォーラムというのは、先ほど長谷川学長も毎年一回ありまして、去年は国文学研究資料館でやりました。そのときのテーマは、様々な学問分野の融合といいますか、今日も少し似ているのですけれども、異なるもの、多様なものが出会うといいますか、そういうようなことがありました。

ですので、皆さん今日は本当に欠席された方はすごく損していると思ってほしいのですけれども、広い視野を身につけるといえるのは、皆さんの周りには今回初めてお会いする方もきっといらっしゃると思うのです。なかなかやはり自分たちの専攻の中で一緒にいる場合と、緊張感が少し高まっているのではないかと思うのですが、そういう点でぜひいろいろな発表を、今日はいろいろな発表があって、テーマを聞くだけで、もうこれはどこに聴きに行こうかという思いがあるかもしれないのですけれども、ぜひどこかでやはりつながるといえるのをじっくり粘るといえるのが、まさに広い視野の、我慢も必要なのが広い視野ですので、ぜひ積極的に自分の研究との関係であるとか、そういったものを身につけてほしいなと思います。

それで、先ほど井上先生から今回のレジリエンスについていろいろコメントがあったので、私も一言。やはり片仮名用語要注意といいますか、一体レジリエンスとは何なのかという、日本語にした場合にはこの言葉は本当に必要なかどうか、そんなところもきっと明日のシンポジウムにもあると思うのですけれども、日本語にすると、適応性だとかいろいろあると思いますが、ただ言えることは、きっとこのコロナ禍の中で、まさに今私たちの日常がこういう危機の中にさらされているということですので、本当に研究というより、日常の新たなレジリエンス的な対応を考えなくてはならないと、そういう切羽詰まったテーマであるということは言えるかと思っておりますので、ぜひ私たちフィールドワークといいますか、どのようにまさにこのコロナ禍を生きていくのか、そういったところもひとつ今回、発表だけではなくて、皆さんのいろいろなつながりの中で考えていただきたいと思います。

これから2日間になると思いますけれども、やはりなかなか最後まで持久力が要ると思いますが、ぜひ皆さん、これは研究科長として言いたいことは、オンラインでの発表というのはなかなか質疑が出なかつたりするのです。これは結構難しく、でもぜひ積極的に議論に参加して、皆さんはお客さんではなくて、会を作っていくってほしいと。ですから、年に一回のチャンスで、しかもいろいろな広い視野を身につけるといえることは、決して恥ずかしいということとは

ないと思いますので、ぜひ積極的に新たな出会いを求めていただけたらと思いますので、ぜひ皆さんで盛り上げていけたらと思います。

簡単ですが、2日間充実した会になるように皆さんで頑張ってください。これで挨拶を終わらせていただきます。(拍手)

**進行** 池谷先生、ありがとうございました。

それでは、今年度の総研大文化フォーラムの開催趣旨につきまして、学生企画委員長、石原知明より説明いたします。それでは、お願いいたします。

学生企画委員長 石原 知明

本年度学生企画委員長の石原です。開催趣旨を説明いたします。

今、私たちは新型コロナウイルス（COVID-19）を初めとし、国家間対立、民族紛争、自然災害など様々な困難に直面し、文化や文化研究に何ができるのかを問われています。人類の歴史を振り返ると、こうした予期せぬ事態に幾度となく見舞われ、そのたびに試行錯誤し、乗り越えてきました。私たちは、文化の柔軟性や多様性を考え、信じることによって、異なる者同士の対話を促し、未来に向けて歩を進めていかなければなりません。

そこで、本年度のテーマは「文化のレジリエンスとは？—〈異〉をつなぎ、未来へ—」を掲げます。レジリエンスとは、復元力、反発性、弾力性、再起性、適応力、柔軟性、回復性など幅広い意味を持った言葉です。今回のフォーラムではあえて定義をせず、多彩な視点から文化のレジリエンスを検討することによって、文化科学の可能性を共有したいと思います。さらに、文化科学研究の視点で社会に向けるレジリエンスを問い直すという、より踏み込んだ視点も提供したいと考えています。

今年の総研大文化フォーラムは、国際日本文化研究センターをメイン会場とし、オンラインでの参加もできるように環境を整備しました。学問的垣根を問わず、様々な〈異〉をつなぐ機会となるように、ぜひ皆様の積極的なご参加をよろしくお願いいたします。

以上です。(拍手)

**進行** 石原委員長、ありがとうございました。

以上をもちまして、総研大文化フォーラム2020開会式を終了いたします。



## 1-2-2 基調講演

### 基調講演の挨拶

進行 続きまして、基調講演に移らせていただきます。基調講演の司会は、国際日本研究専攻の荒木浩先生にお願いいたします。荒木先生、よろしくお願いいたします。

荒木 浩

どうも皆様、こんにちは。国際日本研究専攻の荒木と申します。今日は、この「文化のレジリエンス」というメインテーマの基調講演として、総研大の名誉教授であり、国際日本文化研究センター（日文研）の名誉教授でもある小松和彦先生に、ご講演していただくことになっております。

小松先生については、ご紹介するまでもないのですが、信州大学、それから大阪大学、そしてこちら日文研へいらして、総研大の国際日本研究専攻をご担当なさるなど、長い間研究・教育に尽力されました。特にこの八年間は、日文研の所長として激動の学術・文化行政と戦ってこられまして、日文研に非常に大きな、そして新しい展望をもたらしたことは、内部の人間はよく存じ上げているところでございます。

それから、いささか世間的なことともなりますが、紫綬褒章を受章され、文化功労者になられた後、今年の10月に、コロナの影響で半年遅れた最終講演をなさいました。これで本当にご苦労さまでした、ということで、少し寂しい思いをしていたのですが、その数日後の11月3日、文化の日に、瑞宝重光章という、非常に大きな受章をなさいました。私の存じ上げている方々の叙勲は、旭日中綬章をお祝いすることが多く、それは大体新聞の欄の真ん中ぐらいのに掲載のものですから、最初はそこを見ていたのですが、少し目を動かしたら、小松先生が一番上の段におられたので、非常に驚きました。

そういう幅広いレンジで、学問、教育、そしてまた世の中へと様々な影響力を持つ先生ですが、先ほど池谷研究科長からのご紹介もありましたように、ミクロネシア、それから日本、また高知とか、非常に広く深いフィールドワークを経験され、積み重ねてこられた、その上での学問ですので、まさに今回の基調講演としてふさわしい先生ではないかと思えます。

それでは、小松先生、よろしくお願いいたします。

## 基調講演

### 「見えない物に対する恐れと人間—文化科学研究の観点から—」

小松 和彦

ただいま紹介していただきました小松和彦です。今回、一か月ほど前に遅ればせながら私の退任の講演会が終わって、ああ、これで公務から解放されたと思ったのですが、総研大のほうから講演をということで、こうしてやってまいりました。ただ、今回のテーマは、お話を聞いて何かしゃべれと言われても、何をしゃべっていいか分からないということもありまして、先ほどの石原さんと何度か話し合いをいたしました。

まず一つは、レジリエンスという概念は、もともとは生態学の考え方なので、それを文化にどのような形で使えるかという疑問がありました。一体、何を希望して私に話せと言われていいのか、ということです。文化とレジリエンスの関係を皆様がどのように考えるのかということだろうということです。私は地球研などの方々と一緒に仕事をやっていて、先ほど言われましたように環境の生態の中におけるレジリエンスというのは分かるのですが、文化と言われたときには分からないのです。さらに、何を話してほしいかについてのもう一つとして、コロナ禍の中でそれをどのように考えるか。とりわけ妖怪研究者である私に、アマビエの問題などを考えてほしいと言われて、さらに分からなくなってしまったのです。

アマビエとレジリエンスとそして文化。こんな大きな、というかレベルが異なる問題にはにわかには答えられないので、随分頭を悩ました。アマビエはメディアではブームになりましたけれども、妖怪研究者からいえば、わずかたったの一例でしかありません。皆さん大騒ぎをされているので、それに石原さんたちも思わず反応したということなのでしょうね。

それで、石原さんに、具体的に何を中心に話してほしいのかということ、もう一回実行委員の方々と相談して絞ってもらえないだろうかとお願ひしました。例えば、レジリエンスの問題と<異>という問題は、かなり難しい問題、画一化の問題を含んでいる。現在地球が抱えている問題は、このまま行ったら文明が滅びるのではないかというような、長いスパンの中で考えなければいけないような問題を含んでおります。そういう意味では、簡単に未来を創り出す、あるいは意味づけていくような可能性をどこまで持っているのかというようなことは、これは簡単には考えられない、と思ひました。

相談して、いろいろと実行委員の方々も相談されたように思うのですが、その結果、私は私でレジリエンスという問題について勉強させていただきました。言葉では聞いていたのですが、一体どのような概念なのだろうか、にわか勉強をさせていただいて、今日持ってきましたけれども、恐らく文化研究者にとっては、にわかにはぴんとくるよう話ではないかもしれません。

『レジリエンス思考』<sup>1</sup>という本があって、それを読ませていただきました。そこにいろいろなことを書かれていたのですが、問題はレジリエンスを高める、現在の状況が果たして良い状況なのか、改善すべきでないか、これからレジリエンスを高めていく社会を想定していくということですね。現状と未来、その二つが大きな問題になってくるだろうと思ひます。これはあくまでも生態の問題、自然環境の問題なのですが、その中で文化をどのように考えるのかということが大きな、現在、私たちが地球的規模で考えている問題です。

1 ブライアン・ウォーカー、デイヴィッド・ソルト著、黒川耕大訳『レジリエンス思考—変わりゆく環境と生きる』、みすず書房、2020年。



一番分かりやすいのは、温暖化、二酸化炭素の排出量の問題であるかと思います。このまま行ったら地球はどうなってしまうのか、人間はどのように生活していけるのだろうか、それをどのように抑えていったらいいのだろうかというようなことが議論されているわけで、非常に大きな問題を含んでいるかと思います。

改めて、私が非常に気になった言葉が、その本の中にありました。今回の課題に関わるだろうと思いますので、スライドに引用しておりますが、いちおう読み上げます。

「世界は多くの意味で縮みつつある。増加しつつある人口と減少しつつある資源基盤、この縮小は多様性の喪失」、多様性が失われていっていると述べています。「容赦ないグローバル化に伴い、人と人との間の距離が縮まって、文化・市場・生物相の一体化が進んでおり、私たちはますますつながりを深め、均質化しつつある」と、均質化の問題が提起されています。

「私たちの間を隔てて、それぞれに個性をもたらした差異は小さくなっていく一方である。つまり、多様性は減少している」わけです。「未来に至る道筋は何通りもある。しかし、効率化や利潤の追求を重視する道筋を選んでいる場合には、そこに住む人々の未来の選択肢がどんどん狭まりつつある。」ここが非常に重要だと思うのですね。

けれども「一方、実験と革新を促す道筋を選べば、レジリエンスを高めたり地域に根差した社会ネットワークを深化させたりするのに必要な多様性が維持される。こうした道筋こそ、人々の長期的な幸福はもっとも達成されやすい。そうした手法は余地（選択肢）を生み出すからである。」

つまり、ここで提起されているのは、長い目で、長期のスパンで、長い時間的なスパンで、人々はどうやったら幸福でいられるのだろうかということ。このために多様性をいかに維持し、あるいは多様性を増やしていくか。なかなか難しい問題ですけれども、そこが肝要なんです。そうした手法は余地（選択肢）を生み出すからである」と。「余地」というのは「選択肢」という意味です。こうした大状況の中で、文化を考えなければならない、ということなのだろうと思います。

しかし、人類文化というマクロなレベルだけではなく、例えば日本文化のレジリエンスとか、あるいは小さな島のレジリエンスも考えなければなりません。例えば、よく環境問題で、イースター島の例が出されます。昔はあの島は豊かな森があったけれども、あの有名なモアイをつくって、そしてお互いに戦争したりしながら資源を全部使い切って、ヨーロッパ人に発見されたときには、非常に小さな、文化も後退したような状態の中で生活していた。これを地球的規模で考えると、将来の地球がイースター島のようになるかもしれない、というようなことが述べられてきました。

そういうことで、レジリエンスは、小さなレベルでも考えられるわけですがけれども、大きな問題としては地球の問題が念頭に置かれているのだろうと思います。その中で考えていく必要があるかと思います。

(スライドより引用)

目先の利益追求・効率化（強欲）の結果

生物の多様性の減少

文化の多様性の減少

レジリエンス思考に基づいて人々の長期的な（望ましい）幸福の追求をする

それで、目先の利益追求・効率化、強欲という言葉も使われておりますけれども、大きな問題は、生物の多様性が減少し、たくさんの目先の利益のために、人間の働きかけで、つまり文化の働きかけで、いろんな魚がいなくなって、動物がどんどん減っていつている、多様性が失われている、つまり、生物多様性の問題というのが指摘される。

同時に、文化の多様性も失われていつているわけですね。例えば、先ほど井上所長が言っておりましたが、私たちは私たちの伝統的な文化から西洋の文化へと切り替えることによって、地球上の多くの人々が多様性の文化を持ちつつも、しかし一方では多様性を失いつている。ネクタイをしたり靴を履いたり服を着たり、どんどん画一化へ向かつていつているわけです。これは非常に悲しいことでもあり同時に、ある意味では共通性を獲得することによって、多くの人々が共通の目的に向かって進むことができるということでもあるわけです。

ですから、レジリエンス思考に基づいて、あるいは、レジリエンスで、私たちのこれからの幸せをどのように考えるか。それぞれの文化の多様性が失われいつつあるのかもしれないそのなかで、文化をどのように追求・進展させいくかということだろうと思います。

一応、レジリエンスの高い社会というのを幾つか挙げておきましたので、これはざっと見ておいていただきたいと思います。

(スライドより引用)

レジリエンスのある（レジリエンスの高い）世界では、

- 1 あらゆる形（生物・景域・社会・経済）の多様性が促進され、維持される。
- 2 生態系の変動が受け入れられ、その存在を前提に物事が営まれる（変動性を制御したり減少させたりしようとはしない）。
- 3 モジュール性のある要素から成り立っている。
- 4 閾値を伴う“遅い”制御変数に政策の焦点が当たる。
- 5 緊密な（ただし緊密すぎない）フィードバックがある。

このような特徴を持っているのだよと。より高い社会を目指すためにということであるかと思ついます。

### 七つのテーマについて

こういったことを勉強しておりましたところ、その後、実行委員会の方から、話し合いの結果、次のことを話してほしいということになったと、たしか六つか七つのテーマが提案されてきました。さすがに、これにはびっくり仰天いたしました。しかも一から優先順に列挙されていつました。

一は、「研究の問いの立て方」を教えてほしい、「文化の研究」は未来に何をつなぐかということをお先生に話してほしいということでした。

次は、先生は妖怪を研究していつ、妖怪研究は「人間学」だとよく言うが、それはどういつことなかを話してほしいということでした。

三番目の問は、さらに具体的になり、古くから人々は見えないものに対する恐れ、恐怖、畏怖があり、今も見えないウイルスに対して、市民レベルでできる対策を講じるという人間の行動変化をもたらしました。かつて、人間がつくり出した自然災害等への解釈である怪異、幽

霊とか精霊とか妖怪などが、現代の自然災害等の問題に対してもある種の対応策を生み出したり、人間の行動変容をもたらす。こうした人間の意識や行動の変化、社会の変化などを怪異との関係でしゃべってほしい。

さらに、人は今日のような病気や災害などの困難と対峙したときに、どのようにその困難に打ち勝ってきたか、とも質問してきました。

これまで疫病の流行に人類が打ち勝ってきたと言われると、ちょっと首をかしげざるをえないのです。近代になってワクチンや抗生物質ができるまでは、ただ祈るだけでなすすべはなく、おおむねただ落ち着くのを待って耐えていただけなのです。

そして最後の質問として、コロナが流行している初期の段階で、改めてクローズアップされたアマビエの流行に見える人間の心理はどのようなか、ということがありました。

以上のことに、順に答えろというのですから、これはとんでもない話でした、私も困りました。ですが、整理しながら、お話をしていきたいと思います。

まず、1についてなのですが、もし問いを立てるとしたら、例えばさきほどのレジリエンスの問題にひきつけて、レジリエンスすなわち文化の現状回復力を高める世界を望むということであれば、「人々の長期的な幸福を最も達成されやすい」という選択の方向をどうやって実現するかということになります。

ですから、ここで研究の問いの立て方をどのようにするか。これはいろいろなレベルがあると思うのです。基本的には疑問点や問題点であり、そしてその疑問や問題はどのような意義を持っているのか、どのようなことに向かって答えるべきかということになります。この設問にはいろいろなレベルがあると思います。

例えば「先生は、妖怪学を何のためにやっているのですか」と聞かれたとき、幾つかのレベルが異なる意義があります。例えば、これまで妖怪というものについてあまり考慮されないで日本の文化史が構築されてきたが、日本のさまざまな文化的側面において、妖怪が、文学であったり演劇であったり、それこそ日常生活の中の様々な遊び道具、そんなものまで浸透しているのだから、妖怪もちゃんと文化史の中に入れて、日本の文化史を構築する必要ある。そういうような意義があるので研究する意義がある、というふうに、日本文化史というレベルで問題を設定することもできます。

あるいは日本文化を他の文化と比較するとき、その比較の指標として妖怪というものを比較の視点として設定できるのではないかと。それによってそれぞれの文化の違い、あるいは特徴みたいなものが分かる。そういう比較文化のレベルで、その意義を設定することもできるだろうと思います。ただ、そこで、このレジリエンスの問題と妖怪を結びつけることはにわかにはできない。私もあまり考えることはありませんので、いいかげんなことは言えないだろうと思います。

ただ、大事なことは、どういう目標に向かって問題を設定したのか、そのことを考えたい人たちにとって望ましいと思う答えをどうやって導き出すか、そのためにどのような研究対象を選ぶかというのは、それぞれだと思うのですが、研究の問いの立て方というのは、まず達成すべき意義があってこそその問いの立て方だろうと思います。一概にどうだということはいえないかと思いますが、ただ言えることは、意義が見出せないまま調査しているという例が結構あるのです。

私は、大阪大学で教えていたとき、卒業論文とか修士論文とか博士論文なんかを指導していたのですが、卒業論文なんかでは、ただ調べました、それは誰もまだやっていないので独創的

ですと言う学生がけっこういたのですが、それは何のためにやるのかというのがなければ、その調査のデータは意味がないのですね。

極端な例ですが、私はこんな例をよく学生に出して、これを諫めました。阪大の豊中キャンパスのごみ箱を全部調べて、プラスチックがどれぐらいで、缶がどのぐらいでいったように調査データを出して、誰もやったことがないから、これは独創的な研究だと主張してはならない。調べることはやろうと思えば誰にでもできる。大事なことは、そのデータの結果がどういう意味を持つのかということを考えなければ、そのデータに価値はない。研究は独創的な考察にある。そういうようなことを言って、考察の大切さを説きました。

調査するということと、何のために、何を解明するためにそれをするのかということ、常に意識して研究しなければならないのです。次の時代の、これからの未来に向かって、そのための文化や知識を拡張していく、役に立つ、賢くなる、大学からの独創的な知の発信はそういうものでなければならない。誰もやっていないことが独創だと言うのではなく、大学はそういう論理な方法での分析・考察が大切なのだと思います。

少し脱線しましたがけれども、ようするに、私たち文化科学研究者というのは、文化を研究して未来の文化をつくるということなのですね。文化をどのようにこれからつくっていただけるか。これからの私たちの文化をどうやってつくっていただけるか。それが先ほど言いました、望ましい未来ということを念頭に起きながら考えていくことだと思います。

ただ、文化人類学の研究者、あるいは民俗学の研究者としては、その文化が多様性を失っているということ、どんどん失っているという問題があります。多様性が増えていっているわけではないのですね。そこのところが悩ましいところでもあります。

例えば、私が調査していたミクロネシアの文化でも、どんどん伝統的な文化は失われていております。あるいは、私が調査している四国の山の中の村もどんどん過疎化し、そして高齢化し、その地域のかつてあった文化はどんどん失われていております。逆にいうと、どんどんその地域も画一化されていっている。そういうようなことを考えていくと、文化の多様性という問題は、なんと大きな課題が重くのしかかっているのかと思います。本当に地球上の文化の多様性が減少し、文化が画一化する中で、いかに文化の多様性、地域文化を維持し高めるか、レジリエンスが低下している。これは本当に難しい問題だと私は考えているのです。

大きなスパンの中で、文化が地球環境との関連の中で変化していっているということは、大いに研究していく必要があるだろうと思います。そういう意味では、私たちはこの地球環境の問題と、個別的な小さな研究とが、どこかで結びついていかなければならないだろうと思います。

これまでの話で、おおむね一番目と二番目の間にお答えしたと思いますので、次に、「小松先生は妖怪研究をしているけれども、人間研究だというのはどういうことなのか」という問いに移ります。

これについては、ここでは述べません。私の本を、たとえば『妖怪学新考』などを読んでください。そこで精いっぱい私としてはその意義について語っておりますし、その他いろいろなところで講演をしてきましたし、先ほど言いましたように、妖怪研究することの意義というのは、そのレベルで幾つか設定することができるかと思います。

次に、四番目の問題になります。古くから見えないものに対する恐れがあり、今も見えないウイルスに対して、市民が様々な精いっぱいの対策を講じております。こういった行動、人間がつくり出した自然災害に対する対策であるとか、そういったものがどのように人間に対して



影響を与えたのかということでもあります。これは具体的にこれまでの過去の事例等々を考えていく必要があると思いますので、これについては後ほど少し詳しく見ていきたいと思います。

五番目のほうに入ります。コロナが流行して、初期の段階で改めてクローズアップされたアマビエの問題をどう考えるかですが、残念ながら、私はアマビエ流行の担い手たちのことをよく知りません。このムーブメントは、たしか京都の妖怪専門の掛け軸を作っている人だったと思うのですが、アマビエの絵入りかわら版を紹介し、疫病（コロナ）退散の思いを込めて、アマビエかわら版が「私を写せ」と呼びかけていたので、それに応じて、みんなで同じようにアマビエの絵を描きましょう、自分たちの気持ちを表現しましょうと呼びかけた。そうしたら多くの方がSNSで、「私もこんな絵を描きました」、「私も描きました」といった具合に、非常に広がっていったのですが、たしかに興味深い現象ですが、それについては、どういう気持ちで彼らがそういう絵を描くようになったのかというのは、調査してみないと分からない。ですから、社会学者とか、そういうような人たちに調査していただき、その調査データに基づいて、総体として、そのブームを担った人全体として、どういう傾向が言えるのかを述べるべきかと思います。個人的な見解を述べることはできるのですが、調査してみないと分からないだろうな、と思っておりますので、思いつきになるような個人的な見解については控えたいと思います。

次の問いに移りましょう。一番重要なのはこの問いだと思います。私が私に課せられた問いだと判断したのは、日本人は、古くから見えないものに対する恐怖、これに対して人々がどのように対応してきたのかということです。具体的には特に自然による災厄・災害に対して、ということですね。

### 自然災害（洪水）と怪異・妖怪

これからは、この話題について少しお話をしていきたいと思います。ただ、自然災害というような言葉でくくられていますけれども、中身はいろいろあります。ここでは例えば、大雨が降って、あるいは台風が来て、川が氾濫して土砂崩れがあったとか、洪水が起こったといったときに、人々はどのような対応をしたのか、それと妖怪とはどのような関係があるのかというような問題ですね。

それから、自然災害の原因として地震があります。地震が起きたときに人々はどのように対応したか。

そしてもう一つは、今回のような疫病が流行したときに、どのように人々は対応したのか。それが怪異とか妖怪とかにどのように結びつくのか。どのように対処したのか。

一言で言えば、石原さんや実行委員の方は打ち勝ってきたかのように言いますが、残念ながら、ほとんどの場合打ち勝ってきませんでした。それを受け入れて、受け入れた後、どのように対応するか、ということを考えてわけです。今でもそれは変わっていません。

なぜかという、今でも台風による災害は毎年のように起きております。災害と戦っているのかもしれないけれども、多くの被害を出している、残念ながら打ち勝ったなどとはいえる段階ではないと思います。

地震については、科学の発達で地震のメカニズムというのが分かったとしても、地震を止めることことはできないし、予知さえもできておりません。ですから、人々は地震が来たらどのようにして身を守るのか、ということぐらいしか対策がないです。地震に打ち勝ったなどは

とても言えません。

疫病に対してもそうです。ただし、これまで起きてきた疫病についてはワクチンと予防薬というものが作られ、たとえば、天然痘についてはこれを完全に制圧したということはあっても、これはあくまで特定の疫病についてであって、ある程度までは対応してきておりますけれども、今回のように新しいウイルスには、残念ながらお手上げの状態です。ですから、部分的に打ち勝ちつつ、しかしなお新しい疫病に打ち負けるというようなことを繰り返しているのだと思います。

そういうわけで、残念ながら、歴史を振り返ると、打ち負けてきた人々の災厄・災害への対応の仕方というのを見てみるということになる。過去から何を学べるかはまた別の問題ですが、大ざっぱに言えば、そういうことが言えるかと思います。

まず洪水を例に見てみましょう。洪水への対処、治水というものは、時の為政者の一番大きな関心事だったと思います。治水を制した者が王様であるみたいな言い方をされます。何度も洪水の被害を受けながら、その経験から被害を受けないような土地に住居を構えとか、河川の流れを変えとか、土手を高くするとか、今ではレーダーで大雨の予想をして予めそれに備えることはしても、大雨・台風を阻止したり消滅させたりはできません。洪水は起きるということを前提に、起きてしまったときに被害に遭わないようにすることが精一杯なのです。そして、妖怪との関係で言えば、信仰にも依存してきたと言えます。水神に祈るということです。

### 長野県南木曾町与川の「蛇抜け」伝承

一例ですが、私の調査したことのある長野県の南木曾の与川の例を紹介したいと思います。これは「蛇抜け」と呼ばれている伝承として現在伝えられているものです。以前、信州大学に勤務していたので、これに興味を持った事例です。研究もされております。

今から六年ほど前、広島で大雨で大きな災害があった少し前に、長野県の南木曾で大雨のために土石流が出て被害が出ました<sup>2</sup>。この地域には、そのときに地元の民俗知識と言われるものが脚光を浴びました。その現場にはそのことを刻んだ石碑が建っていたのです。昭和28年にやはり同じ地域、南木曾で水害の被害を受けたとき、人々がそれを忘れないために、被害から逃れるために、ということで書き記した「蛇抜けの碑」です。土木関係者の間でもこの碑は注目されているものです。広島や長野でもものすごい雨が降って被害が出たようなとき、白い雨が降ったとか、土石流が発生する前にきな臭い匂いがしたとか、いろいろなことが言われました。それは山がぬける（洪水になる）前兆だった、と。それとほぼ同じことが、既にこの「蛇抜けの碑」の中に刻まれておりました。

#### 蛇ぬけの碑

俚諺／白い雨が降るとぬける／尾先 谷口 宮の前／雨に風が加わると危ない／長雨後  
谷の水が急に／止まったらぬける／蛇ぬけの水は黒い／蛇ぬけの前にはきな臭い匂いがする

こうした異常な動きがあったら、山が崩れ、洪水が起きるので、逃げろ、ということを俚諺・教訓として書き記して残したのです。洪水に打ち勝つわけではないけれども、それが発生

---

2 「朝日新聞」2014年7月10日記事、台風8号被害 長野県南木曾町土石流。

するときに、いかに身を守るか、危ない地域にいる人は早く逃げろ、ということを示唆しているものであります。これは長い経験の中から培ってきた、その人たちのある意味では知恵、経験知、あるいは民俗知と言っていいと思いますし、こういうことを口伝で伝えるだけではなくて、碑にすることによって、そのことを記憶させておこう、忘れないようにしておこうと、そういうものだと思うのです。これが洪水への対応だったのです。

蛇抜けというのは、蛇（大水）が川を抜けていくということです。上のほうに住んでいた蛇が川下に下りていって抜けていく。よくある話で、蛇行するなどという表現あるように、川自体が蛇に似ていると考えていた。長野あるいはその近辺に伝えられている言葉です。山崩れとか土石流とか洪水、そういったものを表しています。

こんな伝説が伝えられております。天保4年（1833）のこと、南木曾（当時は尾張藩領）の与川の上流で、役人の命令でたくさんの木を切った。その伐採に動員されたきこりの中に与平という正直者がいた。ある雨が激しい晩、トントンと戸をたたく音がして目を覚ました。恐る恐る戸を開けると、白い着物を着た女が立っていた。女は「これ以上、木を切るな。切ると良くないことが起こる」と告げて、消え去った。

翌日、このことを役人に告げた。しかしながら、聞き入れられずに、与平は怖さのあまり仕事を休んだ。夜になると、また、あの女が現れて与平に「明日、雨になったら山の頂に逃げなさい」と言い残して消える。次の日、大雨になり、山が崩れ、洪水になって、伐採現場も集落も跡形もなく押し流されていった。そのとき、与平は土砂に混じって流されていく白い大きな蛇を見た。与平は、あの女は白い蛇の仮の姿だったのだ、と思った<sup>3</sup>。

この話をレジリエンスの観点から考える、どのように言えるでしょうか。山林の乱獲というものが続くと洪水が起きますよ、ということ告げている。ある一定の閾値を超えると洪水が起きる。そういうことを教えている。白い着物の女の怪異は、そのことの暗示でもある。ですから、これは、その土地の人々の間で、経験的に、あるところまで山を切るとレジリエンスが効かなくということが承知されていた、ということでもあるわけなのですね。先ほどのイースター島の話とも重なるのですけれども、目先の利益のために山林をどんどん切って、それを売って、何かに使う、というようなことをし続けると、元も子もなくなるようなことが起きるということでもあるわけです。山林が修復困難な状態になるということの、ある意味では民俗的な知、文化的なレジリエンスとすることができるかもしれません。もっとも、こういう事例は、怪異と必ずしも結びついて語られるとは限らないと思いますが、災害と民俗知とレジリエンスを考えると参考になるかもしれません。

### 自然災害（地震）と怪異・妖怪

続けて、地震についてお話ししたいと思います。地震、「なゑ」、これはもう古くから日本ではいろいろなことが言われてきました。日本は地震列島と言われているように、地震がしょっちゅう起きていて、大地震の度に被害がありました。しかし、地震は、先ほど言いましたように、地震に打ち勝つどころ、台風・大雨とは違って、現在でも予防することも、予想することもできませんので、突然襲ってくる地震にどうやって逃れるか、身をどうやって守るか、ということが基本になります。

3 笹原正治『蛇抜・異人・木霊—歴史災害と伝承—』、岩田書院、1994年。

阪神・淡路大震災のときに、私は地震に遭っております。大地震が起きたら、動くこともできない。ただただ、その場で地震が収まるのを待っている。そのような状態でした。地震が起きたからといって、どうこうできないのですね。

地震に対する私たちの対応は、「岩盤のしっかりしたところに住みなさい」とか「軟弱なところに住んではいけませんよ」とか、どういうところに住んだらすぐ逃げられるとか、耐震の建物も増えていますけれども、強い地震が起こるとその都度耐震工事しなければいけない、というような状況です。私たちの日文研の講堂もこれまでの地震の耐震基準では対応できなくなったということで、耐震工事をいたしました。が、どんどん地震も強まっている。あくまでも対処法は、防災、あるいは減災です。

一例だけ紹介しておきます。これは妖怪とも関係しているものなのですが、安政2年(1855)の江戸大地震の時のことです。当時の江戸の人口は百万人とも言われていますが、そのような人口密集地帯ですと、家が非常に密集しておりますので、家屋が崩壊し、さらに火事も起き、たくさんの方が死にました。防災は小規模な、貯めていた水を掛けることぐらいしかできませんので、多くの人家が焼かれ、人の命も失われました。

民間信仰では、地震は地下にすんでいる龍、もしくは大鯰<sup>ナマズ</sup>が引き起こすという説明がされておりました。今でも何となく、地下にいる大鯰が悪さをすると地震が起きるというようなことでは言われていて、ひょっとしたら実際の鯰も地震を感知することができるのではないかとその研究さえもなされてきました。

これは古い時代からの信仰であって、中世では龍でした。龍が地下にいて、巨大な龍の上に日本列島が載っている。それがある時期から大鯰へ変わっていったようです。

よく言われているのは、歴史学者の黒田日出男さんという方が、『龍の棲む日本』という本で、中世ぐらいにはそのような地震は龍が引き起こすと言われていて、しかもその龍を要石という特別な石で押さえているという信仰もすでにあった言っております。

そのことを物語る「ゆるぐとも よもや抜けじの かなめ石 鹿島の神の あらんかぎり」<sup>は</sup>というまじない歌も知られていたようです。それは、鹿島神宮の要石は揺れてもけっして抜けることはない、という信仰を語っているのですが、安政2年に、大地震が襲い、鹿島の要石が抜けてしまったと、大騒ぎになったんです。

このとき、こうした民間信仰をふまえて、今日では「鯰絵」とか「地震鯰」とか呼ばれている錦絵かわら版が大量に流布しました。そのテーマ(趣向)は鹿島の神が要石や神剣で改めて大鯰を押さえる図柄、鹿島の神が出雲に出かけていた隙に大鯰が暴れ出したという図柄、地震で被害にあって困っている者たちが大鯰に怒りをぶつけている図柄、地震で困っている者たちのために金持ちからお金を吐き出させている図柄、さらには地震のおかげで大儲けしている職人たちが鯰男を接待している図柄、この地震が契機となって世直しが行われるという期待を表した図柄など、さまざまでした。スライドで、その数枚を見ていただきますが、日文研には「鯰絵コレクション」としてたくさんの鯰絵が収集され公開されていますので、ぜひ興味のあるかたはご覧ください。

さて、ひどい震災直後にもかかわらず大評判になった鯰絵に関しては、なぜ売れたのか、どのような効果や意義があったか、何のために描かれたのか、ということなのですが、これにつ



いて何人かの研究者がコメントをしています<sup>4</sup>。

歴史学者の北原糸子さんは、「自らも被害を蒙りながら、そこから立ち上がらねば明日の展望がない江戸地震の罹災者が自分たちを励まし、同じ境遇にある人たちを励まそうとした応援版錦絵」<sup>5</sup>であったと述べています。また、鯨絵研究者の気谷誠は「地震という悪夢を払い除けるために江戸の人々が工夫したサイコセラピーの一種であった」<sup>6</sup>、民俗学者の大塚英志は、「震災後の人心を特定のマイノリティを標的にすることなくソフトランディングさせた」（『奇書あれこれ—初心者のための「怪」文学入門 第七講』（『怪』33号））などと評しています。

こうした評価は、震災という悲劇、家族や親族を亡くしたあるいは家屋を失った人々の心の傷を癒し、生起している現実をゆるやかに受け入れる効果をもっていたという点で共通しているようです。これも、言い換えれば、レジリエンスの問題ともいえるでしょう。

同様の効果は、アマビエ騒動についても言えるだろうと思います。アマビエも、「みんな被害を受けているけれども、一緒になってそこから立ち直りましょう、私はこうしてアマビエの絵を描くことによってその気持ちを表現しています、その思いを共有しているしるしにアマビエの絵を写しませんか」ということなので、災害によって生じた持って行きようのない怒りや悲しみ、喪失感を、アマビエを描くことで癒やしているともいえるでしょう。

鯨絵を理解するためには、絵柄や詞書を丹念に考察する必要がありますが、ここでは、次の点をとくに指摘しておきたいと思います。地震の被害を受けて困っている人たちが、ナマズが引き起こしたのだからといって、ナマズに攻撃をしたりする、ナマズをひっぱいたりというような、そういうものを描いた絵があります。もう一つは、これも大事なことですけれども、ナマズを喜んでいる人がいる。地震が起きて大もうけしている人もいる。地震の二面性ですね。こうしたことは地震に限らず災害には見出されることです。昨今のコロナ騒ぎに引きつけて言えば、コロナで困っている人たちがたくさんいます。しかし、そのいっぽうに、自分も困っているんだけれども、同時にそれで大もうけしている人たちもいる、ということです。

じつはアマビエにも類似したメッセージが託されていました。疫病でたくさんの方が亡くなるという好ましくない予言と豊作が続くという好ましい予言の二面性です。

もう一つは、この地震がこれまでの社会状況、政治体制や社会システムなどが壊れて、新しいシステムが始まるという側面です。レジリエンスが復元可能域を超える、閾を超えて、元へ戻らない。レジリエンスが働かなくて、新しい（場合によっては望ましい方向へ、場合によっては望ましくない方向へ）状況に移っていかなければならない。鯨絵にはそのことも暗示されているのです。私たちは長期にわたるコロナ禍が収まったとき、はたしてコロナ以前の生活に戻るだろうか、それともオンライン会議に象徴されるような新しい生活様式に移行してのではないかと考えているはずですが。これはレジリエンスの問題でもあるのですね。

---

4 鯨絵の意義に関しては、コルネリス・アウエハント著、小松和彦他訳『鯨絵 民族的想像力』、岩波文庫、2013年、或いは高田衛・宮田登編『鯨絵—震災と日本文化』、里文出版、1995年、を参照。

5 北原糸子著『地震の社会史—安政大地震と民衆』、吉川弘文館、2013年。

6 気谷誠「地震を洒落のめせ—鯨絵サイコセラピー説」、宮田登・高田衛監修『鯨絵—震災と日本文化』、里文出版、1995年。

## 疫病と信仰・妖怪（天然痘・麻疹・コレラ）

時間が無くなってきましたので、話題を疫病に移しましょう。疫病は古代から現代まで絶え間なく人々に襲いかかってきました。そのなかでも代表的な疫病は、天然痘とか麻疹、そしてコレラですが、コレラは幕末になって外国船がもたらした新しい疫病でした。

疫病の記録がたくさんあるのですが、それを見ればわかりますが、こうした感染症に対して、人々は打ち勝ってきたかということこれも否としかは言えないのではないのでしょうか。

疫病が流行すれば、長い間、神仏にすがり、ひたすら自然に終息するのを待つしかなかったのです。何度も何度も祈って、たまたま疫病が収まったときに、「ああ、この神様のおかげだ」みたいなことがずっと繰り返されてきたんだろうと思います。西洋の医学が入って来るまでは、せいぜい滋養つまり免疫力を高める食べ物や解熱効果のある漢方薬などで症状を軽くする程度しか人間の力（文化）はなかったのです。疫病による生死は、運しだい、たまたま死なずに済んだら、神仏のおかげというわけ。現在でも、ワクチンがあるインフルエンザでさえ、毎年、たくさんの方が亡くなっていますよね。ワクチンは死者や重篤になる患者の数を抑制するにすぎないともいえるのではないのでしょうか。

というわけで、近代以前の人間と疫病の関係の歴史は、おおむね疫病と信仰、神仏との関係の歴史ということにならざるをえないのです。

ご承知のように、ウイルスは人間や動物に寄生することでしか生きられない。寄生する相手が死んでしまったら自分も死んでしまうので、そうならない前に流行は一段落し、また増殖して流行を引き起こす。疫病の歴史はそういうことに繰り返してました。また、新しい脅威的な疫病は外部から侵入して来るわけですから、日本の場合、海外との交流が盛んに時代に流行しています。

以下では、繰り返し流行した代表的な疫病であった「疱瘡」（天然痘）と「はしか」（麻疹）、そして幕末の海外から入ってきた「コレラ」を取り上げ、それに対して、人々はどのように対処したのか、を簡単に見てみましょう。

これらについてはすでいくつかの研究もありますので、詳しくはそれを見ていただきたいと思うのですが、疱瘡の場合には「疱瘡神」というものが想定され、さらにその疱瘡神も、地震を妖怪鯨として絵画化して、さまざまな思いをその絵に託したように、江戸時代には図像化されています。それが「疱瘡絵」として知られているもので、疱瘡の場合は、赤色を疱瘡（神）が嫌うと信じられていたので、疱瘡に罹らないように、罹っても軽く済むように、赤い着物などを着たりしました。疱瘡絵の図柄の基本は、疱瘡よりも強い神が疱瘡神を追い払うというもので、源為朝や鍾馗しょうきなどが疱瘡神を退治しているモチーフの絵がたくさん描かれています。源為朝が八丈島に流されていたとき、八丈島に疱瘡がはやらなかった。これは為朝の武威のせいだ、ということで、それにあやかって為朝の絵を描いたのですね<sup>7</sup>。鍾馗も疫鬼を追い払うほどの豪傑とされていたので、疱瘡流行のときには疱瘡絵の図柄となっています。それを家に貼って護符にしたようです。また、ムラなどから疱瘡を追い出すことのために「疱瘡送り」という儀礼も行ったところもあります。当時は疫病に強い神様を描いたり、それを象った人形などを飾ったりすることと疱瘡を追い払うことができると信じていたのです。今ではこんなことをしたところで、疱瘡に対処できるわけがない、迷信だと笑うかもしれませんが、私には、こうし

7 歌川国芳画「為朝と疱瘡神」や、月岡芳年画「新形三十六怪撰 為朝の武威痘鬼神を退く図」のこと。

た行為は、新型コロナの前で、なす術がなく途方に暮れている人たちが、アマビエの絵を描いて疫病退散を願った行為とさほど違いがあるようには思われぬのです。

「はしか」(麻疹)も流行いたしました。はしかは誰でも一度は罹る、言ってみれば通過儀礼のような病気なのですが、これもやはり民間信仰で対応していたと言っていると思います。鈴木則子さんという総研大の国際日本専攻の卒業生で、今、奈良女子大の先生をされている方が研究し、『江戸の流行り病』<sup>8</sup>と本を書いておりますので、ぜひとも読んでいただければいいかと思っております。このはしかでも、江戸時代には「疱瘡絵」と同様に、それをテーマにした絵がたくさん描かれています。その「はしか絵」は護符のような機能もあったかと思いますが、詞書の部分にははしかに罹ったさいの民間療法、例えばこれこれの食べ物は食べてよい、これこれは食べてはいえない、といったことが書かれているところに特徴があります。一例を示しますと、節分の夜、魔除けとして門に刺したヒイラギの葉を、三十三軒から一枚ずつ集め、それを煎じて飲めばはしかにならないとか、あるいは「麦殿」と呼ばれている神様がいて、その神様に頼むとはしかが軽くなる言われていたので、「麦殿は 生まれたまふ はしかして かせ(癒せ)たるのちは 我になりけり」のような歌を作って、子どもの名と年を書いて川に流すと軽くなる、というような信仰がありました。また、「疱瘡送り」と同様、はしかをその村から追い払う「はしか送り」もあったようです。これによってはしかに効果があったかどうか疑わしいのですけれども、こういうことをすることで、はしかを退散させたり症状を軽くすることができると思っていたのです。これもアマビエ描きに参加する気持ちと同質の心意を見出せると思います。

最後に、「コレラ」について若干触れて、講演を終わりにしたいと思います。コレラは幕末に入ってきたものです。文政5年(1822)に長崎から入ってきたと言われております。これが終息したり、また再発したりして、日本に定着していくわけなのですが、これを当時の人は「コロリ」という言葉で表現していました。これは、ころりと死ぬ、罹るとすぐ死んじゃう。つまり即死病を意味していました。

安政2年の大地震からわずか三年後、関東、江戸にもコレラは入ってきます。江戸は百万という人々が住み、その半分を占める町人は密集して生活していましたので、コレラは猛威をふるい、次から次に死者が出る。火葬にするのにも大変で、火葬場が大混雑するという状況が絵にも描かれておりますし、どこの町内で何人死んだかの貼り紙も出されておりました。

コレラにどう対応したかですが、東洋医学的対応と言ったらいいのか、黒豆を煎じて飲むといいだとか、桑の葉を煎じて飲むといいだとか、茗荷の根を食べるといいと言われていたようです。さて効果はどうだったのでしょうか。今日の医学的な観点から、効果があるかどうか分かりませんね。

もう一つの信仰のレベルからの対処もいろいろ行われました。町内でお題目、「南無妙法蓮華経」を唱えたり、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えたりとか、あるいは「<sup>コレラ</sup>神送り」する、密教(大日如来)の曼陀羅を飾って祈る、空鉄砲を撃つ、道祖神祭りするなどです。道祖神は塞の神<sup>さえ</sup>=境を守る神ですから、「道祖神よ、しっかりせい」と祈ったのでしょうか。悪い年はこれまでにしてというような意味で、正月のやり直したりをしたところもあったようです。ニクノク<sup>ニクノク</sup>の黒焼きを戸口に吊るしたり、「みもすそ川のまじない歌」(いかで我はみもすそ川の流

8 鈴木則子『江戸の流行り病 麻疹騒動はなぜ起こったのか』、吉川弘文館、2012年。

れ汲む 誰に頼らん えきれい（疫癘）の神）を記したお札を戸口などに貼ったりしました。みもすそ川とは伊勢神宮の内宮内を流れる川のこと、言葉だけですが、疫病の神に向かって、そのような聖なる川の水を身を清めたので、私には病気はかからないぞ、と宣告したものです。

私が若い頃に憑き物の研究した関係でとりわけ興味深いと思うのは、三峰の大日眞神と称する神が脚光を浴びたことです。三峰山の神は山犬（狼）を眷属としている神社で、実際に近隣の村々では、この眷属の犬を借りてきて、コレラを追い払おうとしたのです。当時、江戸を含む関東地方では、「コロリ」が流行っているのは、黒船が日本を滅ぼすために持ち込んだキツネのせいだ、という噂が広がりました。だから、そのキツネを追い払うために、キツネが嫌う山犬を持ってくるといい、ということになって、三峰に山犬を借りにたくさんの人がやって来ました。多くの山犬が貸し出されたという記録が三峰神社に残っております。余談ですが、別次元の観点から言うと、山犬（ニホンオオカミ）が絶滅したのは、こうした信仰のせいだとも言われております。

ところで、私がとりわけ興味深く思っているのは、疫病が流行すると、それに関わる「疱瘡絵」や「はしか絵」、地震の場合「鯰絵」がたくさん描かれ、それが直面している危機への医学的ではないにしろ、自然がもたらした恐怖による崩れた精神の安定にながしかの効果があったにもかかわらず、このコレラ流行の際には、「コレラ絵」と称すべき絵が描かれなかったことです。

売れることならなんでもした江戸の情報屋（かわら版売り）なのに、なぜ描かれなかったのか、よく分からないのですが、コロコロ、コロコロが人が死んでいくので、絵なんか描いている余裕がなかった。コレラを対象化する暇もないくらい凄まじい状態だのだと思います。

それでも、コレラが終息したのち、江戸の人らしい洒落っ気を発揮している刷り物が出回りました。「三十六歌仙」をもとにして、例えば天智天皇の「秋の田の かりほの 庵の 苫を 荒み わが 衣手は 露に濡れつつ」をもじった、駄洒落のような歌を載せています。「あきれたよ 鍼や 薬の 間もあらで」、鍼や薬で何か治療してもらおう暇もなく、「ただ ころころと 人は逝きつつ」。コロコロ、コロコロ、病気の治療をする暇もなく死んでいった。山部赤人の歌は「あきれたの かかあに死なれ そのあとは わが こどもらも すぐに死につつ」。次から次に死んでいっているという悲惨な状態をこんなふうに歌にしているのですね。私は不謹慎にも笑っちゃうのですが、こういう、洒落っ気があった。コレラの絵ともいえるべきものが出たのは、明治になって石炭酸で消毒するという知識が入ってきたときの対処法を反映した、虎・狼・狸を三つの妖怪の身体を混成した妖怪を退治する絵があるだけです<sup>9</sup>。アマビエとの関係をいうと、アマビエの仲間の猿の頭で三本足のアマビコの予言が、コレラ流行時にも話題になったと言われています。

以上、自然災害にしても、地震にしても、そして疫病にしても、次から次に襲ってくるわけなので、それに対する対処の方法を少しずつ少しずつを見出してきたとしても、それはあくまで信仰による対処、部分的対処であって、台風や地震、疫病を完全に根絶したり制御できるようになったわけではなく、とても打ち勝ったというふうには言えないのです。現在でさえせいぜい、科学によってそのメカニズムがわかってきたので、それに基づいて可能な限り命を守るた

9 「虎狼狐の奇薬」（明治19年、日本医学文化保存会蔵）。



めの予防の方法、あるいは被害にあったときの体や心のケアをどうするかといったレベルにあるのではないかと思います。近代の医学も、今回のような新型コロナ・ウイルスの流行に直面したときには、ワクチンも適切な治療薬もないためにすぐさま対応できず、江戸時代のコレラに遭遇した状況とさほど変わりがないといえるのです。

繰り返しますが、私たちは疫病に打ち勝ってきたわけではないのです。このことを強調するのは、最初の問いである「研究の問いの立て方」とも関係してくるからです。それは、自然との関係を勝ち負けで判断することが危険だと思うからです。むしろそうした自然の猛威に人間はどのように対処してきたのか、どのように付き合ってきたのか、ということのほうが設問としてふさわしいのではないのでしょうか。

これまでは、信仰的な対処を中心に述べましたが、これはミクロなレベルでの対処ですが、もう少し引いてその前後の状況を眺めると、政治的・社会的不安とも関連して、人々の心の中に鬱積したエネルギー、負のエネルギーが噴き出して、「ええじゃないか」のような狂乱的な集団の踊りとなり、また現在の生活・社会システムを否定して新しい世の中を期待する「世直し」運動にまで広がっていったことも見逃せません。どのような世の中を期待していたか分かりませんが、幕藩体制に戻ることができなくなってしまったのですね。このレベルでも文化とレジリエンスの関係を考えるべきでしょう。

そういうことを考えると、この新型コロナ禍の状況が収まったとき、元の生活に戻る程度のものなのか。現代文化はそのような修復力をもっているのか。もはやその閾を超えて新しい文化へと移行することになるのか、ということも問われているのです。元に戻ってほしいと思っている人もいるかもしれませんが、新しい体制を望んでいる人もいることでしょう。このコロナウイルスによる感染症の大流行が、現在の生態学上の環境やグローバルに展開する文化、そして政治や経済などとも関連した蓄積された負のエネルギーを噴出させて、どんな方向に世の中を導いていくのか。そのようなことを考えることを迫っているようです。

この講演では、レジリエンスと文化、質問が多様で異なったレベルにわたるものでしたのが、私の専門に引き付けた事例を紹介しました。皆さんも、それぞれの関係する事例を通じて、レジリエンスについて考えていただければと思う次第です。

以上、私の講演を終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

## 質疑応答

**荒木** 小松先生、どうもありがとうございました。もう十分に語り尽くした内容で、まとめる必要はありませんが、広い意味ですと、洪水、地震、疫病という大きな災害について、前近代から近代までの流れを先生ご専門の知識のお話をいただきまして、私が非常に印象的だったのは、絵の問題と、あと歌が非常に重要な、いわゆる災害の文化表象としての絵と歌をまとめようと思ったら、コレラに関しては絵がないという、これも非常に重要な現代的な問題で、文化表象ということを考えて重要ではないかと思います。

それに対して、踊りが展開したということですが、あまりメタボリカルに考えてはいけませんけれども、現在、我々がこのコロナウイルスに対してどのような文化表象を見出し、また先ほど最後のおまとめにあったレジリエンスという点で、どこへ戻り、どこへ戻れないのかという問い掛けもあったと思います。

今回は小松先生、最初に2020年の本から議論を始められまして、そして鯨絵に話を展開されました。その後、鯨絵の翻訳のお仕事をされていますが、先生が修士のとき修士論文で「信貴山演義」をお書きになった、その期間の中で鯨絵というものに当時先生が注意を向けられて、それから高い関心をお持ちになって、したがって、まさに先生の持っている研究の起源と現在とが結びついた講演であったと思いますし、また、その鯨絵を研究された方というのは、オランダのライデン出身で、日文研とも連携のあるライデン大学に出された論文が日本で受け止められ、そして現在の私たちの鯨絵から今、文化のレジリエンスを議論しているということで、さらにその鯨絵の先に大津絵という、ちょっと面白い民間の絵がありまして、大津絵は、今度フランスのクリストフ・マルケさんという人が膨大な資料を集めて、昨年小松先生とパリで劇的な対話がございまして、今年東京で大きな展覧会があって、新聞にも取り上げられたりしてまして、まさにこの問題は文化の国際性にも展開する話題かと思います。

それで、そんなに時間はないのですけれども、会場の皆様で質問があれば手を挙げていただき、それからオンラインの方はスライドというシステムに書き込みをしていただきますと、こちらのほうでそれを受け取って小松先生に質問を向けることができますが、まず会場、もしすぐにちょっとこれは聞いてみたいとかで。どうぞ、お願いします。

**澁谷** プレゼンテーション、ありがとうございました。非常に興味深く拝聴いたしました。文化科学研究科の一年の澁谷と申します。

災害とか疫病に対して民衆の人たちがどういった対応をしたのかとか、反応とかを非常に興味深くお聞きしたのですが、私の質問として、民衆一人一人にしても、いろんな例えば支配階層、江戸時代の士農工商とかがあったり、そういうのを一括りにしていく面と、みんな同じような対象を信仰していたとか、同じような対応を大所高所であったりとか、それとも、その社会階層には異なる信仰のあり方とかそういうのがなかったのかなと、そこがちょっと疑問に思いまして質問させていただきました。

**小松** ありがとうございます。どこかの国の首相のように、「お答えは控えさせていただきます」と言わないで、答えさせていただきます。

自然災害や地震、疫病、それぞれの研究があるのですが、例えばコレラに関して言いますと、たまたま高橋敏さんという方の『幕末狂乱』の文庫版が『江戸のコレラ騒動』と改題してまもなく刊行されますが、これには、江戸のコレラ騒動を民衆のレベルから、

すなわち、江戸の庶民（町人）と静岡に当たる農山村の村民や町場の人たちがどのようにコレラの対応したのかということが、史料を使って書かれております。江戸と地方では、そこに示される対処状況は微妙に違います。要するに、江戸民はどちらかという、信仰などに対して冷やかな態度が見受けられる、「三十六仙」の歌をもじった歌を歌ったりしているわけですが、まあどちらも似たりよったりで共通しております。

ただ、農山村では、どういう神様にお願いをすると疫病退散に効果があるかを村を挙げて考え、一生懸命に、お題目を唱えたり、近くの大きな神社に頼んだけれど、ダメだった。そうすると、もっともっと大きな神様に頼まなければいけないということになって、静岡県の富士山を神格化した神を祀る浅間神社に参拝したり、秩父の三峰神社に「お犬様」を貰いに行ったりしていることです。京都の吉田神社の神様がどうも効果があるらしいということを知って、吉田神社まで人を派遣して、そしてそれを勧請したというところもありました。その地域によって、地元の民間信仰的な神様では駄目だったら、より大きな地域を超えた確かなものを求めていっておりますが、一概にそれとは言えないですけども、今言ったような越後、関東地方、江戸もそうですけれども、首都圏も一部に共通した部分もあります。

大名たち政治的支配層は調べていないのでわかりませんが、知識人層は信仰的な対応には距離をとっていたと思います。でも、庶民とある程度共通した信仰行動を取っているということも書かれています。この本は間もなく角川ソフィア文庫から刊行され、私が解説を書いていますので、ぜひそれを読んでいただきたいと思います。

先ほどの話の中で申し上げましたように、コレラにせよ、地震にせよ、疱瘡にせよ、研究書がすでにありますし、そういうものを読んでいただいて、あなたの関心にそって興味を深めていけば、問題がクリアになるのではないかと思います。

**澁谷** ありがとうございます。

**荒木** ありがとうございます。今回の「おしなべて」という言葉は、災害はまさにおしなべて到来し、身分を問わず対等な過酷さを与えるのですけれども、それに対する対応というのは、確かにおっしゃるように身分とか環境、あるいは場所ですね。それは非常に面白い問題。面白いと言うとちょっと語弊がありますが、文化分析としては面白いテーマではないかと思います。

もう一人ぐらい。どうぞ。お名前とご所属をお願いします。

**宋** 総研大の国際日本研究専攻の宋ですが、先生は先ほど「地震を引き起こしたのは、古い時代は龍が起こした」とおっしゃいましたが、その時代は龍をどのようにおさえたのか。そして、なぜ龍からナマズに変わったのでしょうか、その二点についてすごく興味を持ちました。以上です。

**小松** 龍はやっぱり同じです。先ほどの絵になっている、龍はぐるっと回ってですね、頭と尻尾を交差させて、そこに頭を下げているのですね。ですから、頭で押さえているということと、要石で押さえている。ただ、龍からなぜナマズに変わったのか、残念ながら現在も分かっておりません。

それから、いろいろ議論をしているのですが、はっきり分らないですね。ナマズのほうが、江戸や、あるいは関東地方ではナマズを食べたりして、ナマズに親しんでいたなどというふうなことを推測する人はいますけれども、分かりません。

宋 ありがとうございます。

荒木 宋さん、むしろ中国でのナマズの形象というのは、何かないですか。

小松 鯨絵の根拠は何だとか、下にいて地震を起こすのは、世界でいろいろ地震を起こすのは下にいる動物だというふうに言われています。中国では。

宋 亀ですね。

荒木 ありがとうございます。

あと、何かございますでしょうか。お願いします。

池谷 研究科長の池谷です。

大変興味深いお話で、おそらく科学全体の方向性みたいなものが大きなテーマになるかと思います。が、前半では現在の文化多様性の創出であるとか、どっちかという民間であるとか、日本式文化とか地域文化で、後半は歴史的なことで、おそらく日本の文化史の研究のあり方ともかかわるかと思っています。全体に議論は二つ、文化研究の現代と歴史の未来のところで、一つ目は小松先生がおっしゃったように、地域文化の多様性が失われる方向に懸念を持っています。例えば国立民族学博物館の展示では地域性というのは全然得られなくなると地域別の展示の必要がなくなってくるのです。道具一つ出せば世界中の……の、あれだけたくさん面積がなくなって、民博の人は困っちゃうのですけれども。

そういう意味で、やはり一週間前に開催された比較文明学会なんかでも、現代文明の消滅論について議論されていました。むしろ、僕個人的にはホモサピエンスが消滅して、ネアンデルタールに、文化の多様性みたいなのが加わって、ホモサピエンスのほうの適応……、そういう多様性の……だと思うのですけれども、やはり小松先生は今後、民博……そういうことを言っただけではいけないでしょうけれども、また、現在の文化の多様性がなくなると困る分野っていっぱいあると思うのですね。そっちの方向でいくと、文明研究という、まさに近代文明研究の方向に文化関係がいつてしまうのか。でも、何となく、やはり小松先生がおっしゃったように常に現状の文化が再編されているわけです。ので、よほど大事だと個人的には思うのですけれども、なかなか力のパワーバランスがますます文明研究のほうへ行ってしまおうというような、その方向性について教えてほしいのですが。

もう一つは、先ほどから議論になっている音楽とか絵とか、この辺の重要性というのは、人類史上で非常に重要で、むしろホモサピエンスらしさみたいな、むしろ人間とは何かみたいな議論に通じる大きなテーマだと思うのです。そういう点で、今回の報告では江戸時代の事例とはいいいながら、かなりこういったものというのは、例えば三陸の津波のときの様々な言説であるとか、いろんな災害とか危機とかリスクときょう話したことは非常に重要なテーマだと思うのです。だから単なる芸能研究とかではなくて、こういうレジリエンスという切り口で、また新しい分野といいますか、そういったような方向性がないでしょうか。今後、文化学はみんな歴史研究になっちゃうのでしょうか。結局、一般の展示というのは歴史博物館になってしまうということで、では歴史研究としてのそういうところから文化学をやっていくのがもう一つ残っているので、その辺、過去と現在について、ちょっと大きなテーマなのですから、すみません。

小松 大きな問題ですね。ここでそれに全部は答えられないと思いますが、民博の方々と基



本的には僕も同じような文化人類学的な研究をやっているの、同じような悩みを抱えています。どんどん文化の画一化が進み、そしてかつて例えば50年前に書いた人類学者のエスノグラフィーを読んで、そこに書かれていることがそのまま現在もあるのだと思ってしまいがちですが、実際あるわけではないですよ。どんどん変化しているのです。50年後にそこに出かけて、50年前にこんな神話や習慣があったといったところ、もはや誰も知っている人はいない。そういうふうなことになる。なっている。僕は思うのです。

私が恐れているのは、物質文化を中心とした文化面での画一化が進むということは、強い文化が弱い文化を駆逐・消滅へと追いやっているということなので、ひょっとしたら日本文化の弱い部分は消滅するだろう、と思われることです。日本人が国際的に通用するためには学校では日本語を教えるのをやめて英語を教えるべきではないかと、そういうふうになってしまうのではないかと。自分たちではそう思わなくとも強い権力によってそうさせられているところもありますよね。ひょっとしたら100年後は中国語と英語と何々語とか限られた言葉しかしゃべることができる人がいなくなるみたいなことが起きるかもしれない。それに並行して伝統文化も消滅する、過去の文化になる。

それでも、私はそうした画一化に抵抗したいのです、ヨーロッパ研究が日本で研究されるのはどういう意味があったのか、これからどうあるべきか、と問いかけたいのです。そういう画一化に並行しつつ、少なくとも日本文化というのは日本語と結びついていたので、未来にもそれを残していきたい。文化の多様性の一角に留まり続ける、というよりも画一化した文化、強い文化のなかでのある意味では特殊性というか特徴の一部になる、同様に画一化した文化のなかの他の文化に由来する特徴と並べながら、新しい日本文化をみんなで作るなり役立たせるようにしたいなと思っています。アニメや音楽、絵画などの大衆文化研究は、そのための武器になるのでは、と思っています。

**池谷** ありがとうございます。文化科学の存在意義という点で非常に参考になりました。どうもありがとうございました。

**荒木** これは本当にまた別企画で議論したいテーマですが、ちょっと重いテーマでございます。

一つだけオンラインで質問がありまして、善としての鯨絵で紹介された地震で儲ける職人や遊女と鯨絵についてですが、あれは江戸では新たな恵みをもたらすものとして受け止められるのが普通で、当時災難に遭った人々の裏で、暴利を得る人間として復讐としての受け止められ方はなかったのかというのが、イワサキさんからご質問がありますが。

**小松** ありがとうございます。鯨絵は色々な描かれ方をされるのですが、ご指摘の鯨男を接待する職人の絵は、地震で儲かっている人々への批判・皮肉さらには羨み・妬みなどを込めたものだと思います。地震はその後の「復興景気」「災害ユートピア」をもたらした側面がありますが、あの絵にそこまできがえるのでしょうか。「持丸」と呼ばれた金持ちから小判を吐き出させている絵には、鯨が金持ちの暴利・悪行への復讐を代わってしてくれているという思いが託されていると思います。例えば、今このコロナ禍の影響下で、儲かっている人たちがいるわけですよ。そういう人たちのなかには犯罪もしくは犯罪に近いやりかたで儲かっている人もいます。そうした人をどのようにして批判したり風刺したいできるか。江戸ではそういうことがけっこうできたのです。かわら版はその役割も担っていた。それは長い歴史をもつ「落書」の伝統を引いていると説く研究

者もいます。

現代ではその伝統は生きているのでしょうか。私は新聞の漫画や俳句、短歌などに引き継がれているように思っていますが、どうでしょうか。

**荒 木** ありがとうございます。絵の問題は本当に非常に大きなもので、私のさばき方も悪くて、時間がちょうど来てしまいました。先生にはまだまだ質問があると思うのですが、これで小松和彦先生の基調講演を終了したいと思います。皆さん、温かい拍手をお願いいたします。(拍手)

ありがとうございます。それでオンライン上はSlackという書き込みの、それぞれ皆さん、アカウントを取ったりされていると思います。そこでは質問は受けますので、聞きたいということがあれば入れていただいて、それから事務局や企画委員のほうで整理をされると思います。

それでは、このセクションはこれで終わります。交代します。

**進 行** これにて基調講演を終了いたします。小松先生、荒木先生、ありがとうございます。皆様、いま一度、小松先生、荒木先生に大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

休憩を挟みまして15時30分より、こちらの会場で口頭発表を行います。ご来場の皆様、お尋ねしたいことなど何かございましたら、お近くの学生企画委員に気軽にお尋ねいただきたいと思います。Web参加の皆様は引き続きYouTubeで配信しますので、このまましばしお待ちいただければと思います。ありがとうございました。

### 1-2-3 シンポジウム

#### シンポジウムの挨拶

**進行** 今回のシンポジウムは、司会を含む全ての登壇者をZoomでつないで実施いたします。

シンポジウムにおいて、従来の学問分野の枠を越えた異分野連携的・国際的な学術研究の推進並びに伝統的学問分野を開拓するという総研大の目的を推し進めると同時に、学際知が持つ社会的責任への鋭い意識が分かち持たれました。

本年度のシンポジウムにおいてもこの目的を共有し、報告者として日本文学研究専攻・相田満先生、日本歴史研究専攻・川村清志先生、国際日本文化研究センター・木場貴俊先生、地域文化学専攻・林勲男先生にご登壇いただき、国際日本研究専攻・安井眞奈美先生の司会の下、異なる地域、時代、文化や学問諸領域の枠組みを横断した文化科学研究の知見とその営みから、文化のレジリエンスとは何かを考えることで、過去、現在、未来へとつながるヒントを得る機会になればと思います。

さて、ここからは総研大文化フォーラム学生企画委員長の石原知明さんに、今回のシンポジウムの開催趣旨を説明いただきます。

**石原** 代わりまして、石原です。シンポジウム「災いから考える文化のレジリエンス」、開催趣旨を説明いたします。

総研大文化フォーラム2020は、「文化のレジリエンスとは？—〈異〉をつなぎ、未来へ—」をテーマに、文化の柔軟性や多様性を通して異なる者同士の対話を促し、COVID-19のパンデミックを乗り越え、未来に向けて進めていくことを目的としています。

このシンポジウムは、今年度の総研大文化フォーラムと関連して、「災いから考える文化のレジリエンス」というテーマで行います。ここでの災いは、自然災害や疫病など様々に降りかかる危機を指します。人間は、多くの災いに見舞われながらも生活を営み、文化を育んできました。そこには、災いから起き上がるための文化のレジリエンスがあり、それは文化のあちこちに形を残しています。

今回のシンポジウムでは、異分野の研究者が多様な視点、時代、文化から研究成果を共有し、還元すると同時に、文学、歴史学、文化人類学、民俗学などの学問領域を横断し、包摂している文化科学研究の知見とその営みから、文化のレジリエンスとは何かを考えることで、過去、現在、未来へとつながるヒントを得る機会になればと思います。

以上で、開催趣旨の説明を終わります。

**進行** 石原さん、ありがとうございました。

ここからは、国際日本研究専攻教授の安井眞奈美先生に、ご登壇いただく先生方を紹介いただきます。安井先生、よろしく願いいたします。

## 登壇者の紹介

安井眞奈美

こんにちは、安井眞奈美です。

本日のシンポジウム「災いから考える文化のレジリエンス」によるこそお越しくございました。4時までの長丁場ですが、どうぞお付き合いください。

昨日のフォーラムでは、小松和彦先生が基調講演をされて、タイトルにあるように「見えない物に対する恐れと人間—文化科学研究の観点から」というお話をされました。文化フォーラム実行委員会の院生の皆さんのリクエストにもお応えされ、レジリエンスと予言する妖怪アマビエの関係—レジリエンスは元来、環境学、生態学の概念であります—を基に、文化人類学の立場からどのようなことが言えるのか、そういった点を中心にお話しされました。

今日のシンポジウムでも、登壇者の皆様には実行委員会の方から、アマビエやレジリエンスといったキーワードが事前にお話しされていますので、さらに議論を深めていけるとと思います。昨日から話題になっています、均質化していく世界の文化や多様性の維持にどう迫っていきけるのかについても考えたいと思います。これは、基調講演の中で小松先生が取り上げられた、ブライアン・ウォーカーとデイヴィッド・ソルトの『レジリエンス思考—変わりゆく環境と生きる』<sup>10</sup>の「レジリエンス思考」に関連しています。「レジリエンス」とは、持続性とか復元力とか修復可能性とか、そのような言葉に置き換えられ、『レジリエンス思考』の中では、幸福の追求された望ましい世界では、文化の多様性が非常に大事だという点、一方で世界中の文化が均質化しているという点が指摘されています。これは、昨日の質疑応答の中でも出てきた論点ですので、シンポジウムでは、その点についてもぜひディスカッションできればと思います。

加えて、身体の問題についても触れたいと思います。昨日の挨拶の中で、日文研所長の井上章一先生が、文化と身体との関わりで、日本の私たちは家では靴を脱ぐ、老若男女、貧富の差に関係なく、皆、家で靴を脱ぎます、と例を挙げられました。それほど文化が身体に重くのしかかっている。あるいは身体は拘束されている、という話をされました。

井上先生は、ご挨拶の後、席に戻られまして、ちょうど私の前に座っておられたのですが、小さな机のついた座りにくい一人掛けの椅子で、やおら靴を脱いで、なぜか座禅を組むというか胡坐をかくようにして、座り直されました。文化が身体にのしかかっているという趣旨のご挨拶からすれば、家の外で靴を脱ぐあの姿勢は、文化に拘束された身体に対する“抵抗”のスタイルなのか、“レジリエンス”のスタイルなのか、何なのだろうと、いろんなことを考えました（笑）。ディスカッションでは、身体性の問題を、文化の多様性に関連させて取り上げたいと思います。

それでは、報告者の皆さんをご紹介させていただきます。お一人目は、国文学研究資料館の相田満さんです。相田満さんのご専門分野は和漢比較文学、説話文学・人文情報学などでございます。総研大では日本文学研究を担当されています。主要著書の『和漢古典学のオントロジー』など、情報学の技術を駆使して人文学と情報、理系の学問をつなぐような、たいへん興味深いご研究をされています。

相田さんには、私が日文研で担当しております共同研究会「身体イメージの想像と展開」に

10 ブライアン・ウォーカー、デイヴィッド・ソルト著、黒川耕大訳『レジリエンス思考—変わりゆく環境と生きる』、みすず書房、2020年。

もご参加いただき、そこで相田さんには観相を担当いただいています。人の顔や声、容貌などで、その人の人となり、幸福、不幸などを占ったり、見通したりするという観相について、非常に興味深いご研究をされています。

お二人目の登壇者は、国立歴史民俗博物館の川村清志さんです。専門分野は文化人類学、民俗学です。川村さんは総研大では日本歴史研究を担当されています。東日本大震災の後は文化財レスキューに加わるなど、各地で多彩な活躍をされています。長年にわたって石川県輪島市門前町七浦<sup>しつら</sup>の山王祭りに関わっておられ、調査もしつつ、祭礼の実践にも関わりつつ、民俗映像も撮っておられます。

ついこの間刊行されました『比較日本文化研究』20号では、「人文社会科学の四半世紀を振り返る」という特集の中で文化人類学、映像人類学の映像としてどのように作品を作っていくか、批判的なまなざしを持って「民俗文化の表象批判からその実践へ」という論文を執筆されています。現在、二作目の民俗映像を作っておられるとのこと、その辺りについてもぜひ聞いてみたいと思います。

三人目のご登壇者は木場貴俊さんです。木場さんは、国際日本文化研究センターのプロジェクト研究員でいらっしゃいます。専門分野は日本近世文化史で、最近、『怪異をつくる—日本近世怪異文化史』を刊行されました。

12月1日に発表されました2020年の流行語大賞に予言獣の「アマビエ」が選ばれました。そのときに賞状を受け取っておられたのが、妖怪研究者の湯本豪一さんで、彼のコレクションを集めた「湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）」で、現在、「京都からやってきた妖怪たち」という展示をしております。これを一緒にプロデュースされたのが木場さんで、現在、すでに来館者1万人超えという人気の展示となっております。

四人目のご登壇者は、国立民族学博物館の林勲男さんです。林さんは、総研大では地域文化学を担当されています。専門分野は社会人類学、オセアニア研究です。フィールドとされてきたパプアニューギニアでは、1998年7月にマグニチュード7.0の地震が起き、壊滅的な被害を受けました。そのようなパプアニューギニアでいち早く調査を開始し、インフラが整備されていない地域での生活の支援、生活の再興など、調査の依頼を受けて研究を続けておられます。この点については、日本語、英語で論文を発表されておりますので、今回の「レジリエンス」という用語は、研究の中で早くから使っておられますので、世界的な視野の中での災害人類学、災害支援などについてもお伺いしたいと思います。

それでは、発表に移っていききたいと思います。お一人のご発表は20分をめぐりに考えておりました、15分で一鈴、ベルが鳴ります。20分たちましたら二鈴ということですので、聞いておられる皆様にも音が聞こえるかもしれませんが、その点はよろしく願いいたします。まず相田満さんに、「平安前期のレジリエンス—六国史時代と現代を見比べて—」と題して発表していただきます。よろしく願いいたします。



## 講演1 「平安前期のレジリエンス—六国史時代と現代を見比べて—」

相田 満

資料(P183)のほうは見えますでしょうか。それでは、こちらの資料(P183)を使わせていただきます。

「平安前期のレジリエンス」というタイトルにしましたが、題を与えられましたときにレジリエンスというテーマに結構難渋しました。今回のお話は、まず流行病と疱瘡神、そして平安前期となりますと、何ととっても東北震災ですね。それからの復興に何が考えられたか。そして、実はその時代と対照的なものとなりますものに、現代も考えたいということと、さらにもう一つ、その後に編纂されました『古今和歌集』を考えたいと思います。

最初に、今のコロナウイルス、疫病退散ということでは小松先生の御講演にもありましたが、冒頭の資料(P183上段)は調布市の布多神社のお札です。その摂社に疱瘡神社というのがありまして、そのお札です。調布市は水木しげるの家がありますところで、その水木プロの製作のアマビエのキャラクターがこのように疫病鎮静の御札となっております。布多神社はその裏の森に鬼太郎が住んでいるという設定になっておりますので、こういうお札があるわけなんです。

その摂社としまして、三つの神様が祭られております。御嶽、祓戸、そして疱瘡の三つ神社です。疱瘡は、疫病退散のための象徴としまして、赤い房で祭られております。

そうした疫病とか、あるいは地震とかが盛ん、盛んというのは変ですけども、そういうものがすごく多くありましたのが平安時代前期でありました。その平安時代前期の貞観年間を中心とする出来事をいろいろ書いておりますのが資料4(P184下段)の表です。特に薄だいたい色で記しましたのが、貞観11年(869)5月26日の貞観大地震です。『三代実録』を読みますと、非常に現代と共通するお話、出来事がたくさんあります。例えば、熊本の台風(貞観6年(864)7月14日)、これは2020年にもありました。それから、播磨国の大地震、これは1995年阪神・淡路大震災が想起されます。そして、何ととっても貞観大地震からは、このことが古代地震についての関心が喚起されました。そしてまた、少し異色な共通点になるのですけれども、貞観の入寇は、地震の直後辺りから新羅が多く攻めてきたことが想起されます。というのは、2011年の頃の日本といいますと、日韓関係が悪化し、韓国というのは新羅の後裔ということをお認めしておりますので、そんな所まで重なってしまうのです。

そういうようなのが立て続いて起きていることが、『三代実録』をひも解くと、数多く見えてくるわけですけども、その最後の巻には、光孝天皇の亡くなる寸前に京都の大震災があったことが記されています。そうした災害と、それがどこであったかというのを『古今和歌集』の東歌と重ねてみたものが資料13(P188下段)の図です。こちら資料4(P184下段)の表の歌番号は『古今和歌集』の東歌の番号です。そうした自然災害と東歌とを重ねてみると、また面白い仮説も浮かんでまいります。そのことと併せまして報告してみたいと思います。

六国史の時代といいますのは、『日本書紀』から、さらに『三代実録』まで続く六種の史書がまとめられていたの時代です。その最後の『三代実録』の記録が一番詳しくて、しかも取り扱われている時間が29年1か月、ちょうど平成の時代と同じぐらいの長さであります。

また、内容もすごく濃密で、例えば六国史に出現するキツネの記事というのが資料6(P185下段)に示しましたように、一番多く現れますのが、この『三代実録』の時代です。

また資料7に示しましたように、その東北震災が起こった頃、新聞記事に「海底遺跡が語る

貞観地震」ということで、平安時代の仙台湾に沈んだ伝説が実は事実であったということで、河野幸夫氏が記事を出しました。それは何かといいますと、「君をおきて あたし心を 我もたば 末の松山 なみもこえなむ」、という歌が、実はこれが貞観地震の津波にちなんだ事実に由来するものであったということが、実際に調査を行って証明されたという記事です。そもそもそのことを言い出したのは、『大日本地名辞書』で有名な吉田東伍であります。資料8 (P186上段) に示した論文が吉田東伍が我が国で初めて貞観地震に触れた論文です。また、河野幸夫論文で、海底調査を行った神社といますのは、今では「聖地」七ヶ浜と言われる、鼻節神社です。その元社がかつて陸にありまして、それが海底に沈んだ訳です。その陸に再建された鼻節神社です。実はこの神社はアニメにもなった武梨えり作の漫画『かんなぎ』の舞台なのです。いわゆるアニメの聖地にもなっているのです。

場所は、仙台、東北の宮城県のこの奥。現在地の鼻節元社はこちらですが、その少し海底の奥のところで元社が発見されました。

東北大震災は資料10 (P187上段) のような悲惨な状態をもたらしたのですけれども、末の松山と比定される沖の石の中にある奥まった所まで波が来たわけです。そして、鼻節神社は、有名な塩竈神社の摂社になっております。多賀神社、多賀城の辺りにあった沖の石というものもこんな悲惨な状態で、こうした実際の津波被害を目の当たりにすると確かに末の松山というのはフィクションではないということが分かるわけです。

その話で先程申しました『古今和歌集』の巻20・東歌というのは、陸奥から始まってだんだんと西に向かい、そして最後は京都で終わる配列になっています。その中に登場する歌枕となった場所が、実は『三代実録』に記される、あるいはその前後に記される被災地と重なっているということに気づきました。例えば、「君をおきて」というのは1093番のところですが、末松山が宮城県多賀城市にあるということにもなっております。

なぜそうなのかといいますと、貞観年間、『(貞観) 儀式』にある、12月の大饗儀（大饗之儀）というのがあってこれは、平安京内の疫鬼を本来隠れ住んでいた四方の堺の域外に追い払う儀式でありまして、それと歌の効用が重なっているわけです。東歌の配列というのは、陸奥から相模、そして筑波、富士、伊勢、賀茂というような順番に東国から都へ近づいておりまして、そこに歌を重ねてみると、歌の持つ鎮魂の意図が働いているのではないかと考えてみるわけです。

そもそも『三代実録』の序文には、「祥瑞は天の人主さいはひに祚する所。災異は天の人主を誡むる所」という考えのもとに、天人感応説と呼ばれる考えのもとに、不可思議な現象まで細かく記録して、それを多く採録しております。そうした考えにも通底して、『古今和歌集』の東歌というのは歌集の最終巻にあります。そこで初めての仮名の勅撰作品の掉尾を飾る東歌一群を全て読み直してみたことがあって、かつて『時空間とオントロジで見る和漢古典学』（2016年、勉誠出版）にも書きましたが、そのことを今改めて述べている次第です。

資料13 (P188下段) には、Google Earthとこちらに挙げます参考文献を頼りに緯度経度情報を求めて、それぞれの地域を重ねてみました。それぞれの歌と、そして番号とかをこのように記しております。そういう状態で、貞観から、元慶年間、そして仁和時代は災害とともに巡り、最後の時に『三代実録』がまとめられる。そして、さらにその後、『古今和歌集』がまとまっていったわけですが、その『古今和歌集』が編まれたとき、その鎮魂の意図がどこまで掘り下げられるかということを考えてみますと、これは現代の出来事と気運と併せて考え

てみる必要と意味があると思います。それが資料15～18（P189下段～P191上段）の災害と文化、特に歌・音楽の発生を表にして相関関係を示そうとしたものです。

例えば、阪神・淡路大震災は、1995年のことでしたけれども、20年で23件の災害を記念するイベント、モニュメントなどが行われており、さらに東日本大震災でも27件が確認されます。阪神・淡路大震災は死者6,500人、そして東日本大震災は1万5,000人という大災害になっておりました。

そういう大災害の犠牲者を悼むイベントの発生順の時系列を追ってグラフ化してみますと、阪神・淡路大震災のときには、10年後、10年忌を記念する営みが繰り返し催されております。東日本大震災は、本来はもっと多くの所で行われるべきだったでしょうけれども、コロナ禍でそういう余裕もなくなっているというのが現状であります。

実際、どういう作品が生まれたかという例を資料17（P190下段）に挙げてみましたように、非常にたくさんものがあります。それらがどれだけ発生したかを大つかみのグラフにしたのが資料15（P189下段）です。まとめ方については、Wikipediaを参照して、そこに現れた文化現象をジャンル分けして資料17（P190下段）にまとめ、何があったかということ进行分类してみたのですが、その中で、緑色で示したのが音楽関係になります。いわゆる震災発生とか大事故が起こったすぐ後というのは、追悼の気持ちを持って既存の曲、あるいは新しく曲を作るということも合わせて、歌や音楽の営みがまず行われるということがわかるわけです。

このことはGoogleの検索でも認められることで、音楽との掛け合わせ検索を二回にわたって示した結果が資料18（P190上段）です。これは台湾に行った時に、検索したデータです。なぜ台湾かといいますと、東日本大震災は東北関東大震災という単語でも、こちらのほうが本来の正式名称なのですけれども、それが多数台湾の方が規制のないデータが拾えるのです。台湾で検索を行いますと、とても日本では見られないような凄惨な写真とか、そういうものまでヒットして公開されており、別の意味でも当時の貴重な情報を数多く拾うことができました。

そういう災異に対する考え方も、古典作品の中に反映していることが分かると、作品の読み方も変わってきております。例えば資料19（P191下段）に示したように、古典的な世界ですと、大きな自然災異がありました後、『今昔物語集』の中に、松原で鬼が人となって女の人を食う話がありますが、というのは『三代実録』の記事が基になって、それが切り取られて説話となっております。その他の作品ですと、『発心集』にある入間川の洪水のことは、川が逆流するから入間川としても有名だった話です。他にも、史書なんかで災異を回顧するものもありますし、さらに、災異が起因となって生まれる言葉もあります。「むくりこくり」は元寇の記憶から生まれた言葉ですね。また人魚には、地震と緊密な話が多く生まれております。その他の、文芸作品にも災異の記憶が反映したものがあのではないかとということで、その枠組の中で『古今和歌集』の東歌群もそうではないかと考えているわけです。

あと、災異の記憶が多く残っておりますのが、歴史地名です。たとえば、九頭竜という名は暴れ川で度々の氾濫で洪水の記録が反映されたものは有名です。あとは、蛇ですね。これは広島島の2014年の土砂災害の起きた場所が、蛇陀羅<sup>じゃだらくあしだに</sup>区悪谷、いわゆる真砂土<sup>まさど</sup>という崩れやすいところという伝承があったわけですが、その記憶が忘れ去られたために、再び多くの人々が住み、そこに悲惨な事故が起こったことになっております。

そういうことが日本では繰り返し起きているわけですが、災害と向き合う心情を反映したものに、江戸時代に、それをよく示す資料が資料20（P192上段）以下に示してあります。これ

は以前、私が書いたものですがけれども、「地震津浪末代嘸乃種<sup>じしんつなみまつだいはなしのたね</sup>」という地震や津波が起こった事故に関する、そういう嘸本をまとめた本です。そこに書かれている津波に翻弄される人々の顔を見ますと、どう見ても笑っているとしか言いようがない顔になるわけですね。これは小松先生もおっしゃいましたように、ナマズという地震の神様が生み出す一つの破壊と一つの再生の営み、破壊が新たな世界を生み出すという、再生の喜びが津波に流される人々のこの顔に映っているわけでしょうか。

それが本当にそうなのかなという疑いの気持ちを持たれる方も多いと思いますけれども、例えば先ほどの資料の中に、「大地震大津浪世直し万歳」というような文言も示されています。そういう災害も、ある意味で古い世のしがらみということから抜け出して、新たな再生に向かうという様々なことがある。その一環としまして、祭りや歌があり、そういう営みの中でまた人々は悲惨な記憶を和らげ、また新たな生きる糧にして、次なる生に臨んで行っていると思うわけです。

私の発表は以上でございます。

**安井** 相田さん、どうもありがとうございます。災害に遭った地域と歌を関連づけてご発表いただきました。論点が、六国史時代だけではなく、現代にも敷衍して分析していけることがわかりました。現在のコロナ禍に関しても、どのようなことが言えるのか、後ほどディスカッションの中で考えていきたいと思います。

続きまして、お二人目の発表に移ります。川村清志さんのタイトルは「Resilience? : - (マイナス) から始める現実生活」です。よろしく願いいたします。



## 講演2 「Resilience? : - (マイナス) から始める現実生活」

川村 清志

どうも、こんにちは。画面共有は大丈夫でしょうか。

私のほうからは、今ご説明いただいたように、「Resilience?」です。あえてクエッションをつけてみました。この発表は、ほぼ出落ちになっております。できればこのタイトルバックでずっと話をしたいぐらいなのですが、さすがにそういうわけにはいきませんので、早速、今日のテーマについて考えていきたいと思っております。

私のほうにも、最初はアマビエについてお話し願えませんかということをおっしゃいました。これも昨日の基調講演の小松先生と同じく、「私には基本的には無理だよ」と突っぱねたわけですが、もう一度、シンポジウムという形で話していただきたいということでしたので、自分なりにアマビエの問題を問いながら、そしてそれをレジリエンスの問題とどうつなげていくのかということをお悩みながら、この発表の趣旨を作っていました。

昨日から散々出ている話題ですので、レジリエンスについて今さら説明はいたしません、先に言っておくと、私は近年のレジリエンスという言葉の使い方には、かなり違和感を感じております。例えばこれが心理学の用語として使われる個々人の意識における回復力であったり、逆境とか、何らかのプレッシャーの中での心の弾力性みたいなものを、個々人の主体とともに考えていくなら、まだわかります。けれども、東日本大震災以後の社会状況の中で、しばしば社会とか共同体に対してレジリエンスという言葉が使われるようになってきました。しかもそれは外部の眼差し、もう少し言ってしまうと上から目線で、この社会とかコミュニティはどの程度のレジリエンスを持っているのかとか、そういう話になってしまいます。

私自身は、ここ10年ぐらい、東北では主に気仙沼の文化財レスキューや、その後の生活文化の推移を見てきましたが、それを簡単にどの程度回復しましたといった言明や、あるいは回復の値とか数値的な形で社会を比較するということには強烈な違和感があります。この違和感から今日の発表は出発したいと思っております。

さて、PDFで配られているかと思っておりますので、そちらを参照しながら聞いていただくことを前提にお話ししていきます。今日は、アマビエやアマビエの基になった、あるいは同種の予言する怪異としてのアマビコのような存在ですね。そういった存在が想起される歴史的な背景とか文化的な構造については、お配りした資料による最小限の説明ですましておきたいと思っております。

詳しくは、配布された資料のアマビエやアマビコの摺絵をご覧いただいて、この後にご発表される木場さんの議論などを参照いただければと思います、あるいは注に小さく書いてありますが、長野栄俊さんという方の「予言獣アマビコ考」が、これらの怪異についてまとめておられるので、ご覧いただきたいと思っております。

私がアマビエやアマビコについてここで注目したいのは、次の点です。一見すると、これは三本足の猿であったり、三つのひれを持つ人魚のような姿が描かれているわけです。これは三本足という過剰性よりも、人を含めた動物の四肢という点からみれば、むしろ一つ少ない欠損であると捉えられるのではないかと考えています。

また、気になるのが、これらの図像はことごとく横からの姿、つまり半身しか描かれないという特徴もあります。今日は紹介しませんが、資料の中には、アマビコに「天日子」という字を当てる資料があります。これ以外には「海彦」とか、あるいは「天彦」とかいろいろありま



すが、「天日子」の「日子」というのは、「ヒルコ」と読むこともできるわけです。つまり、日本神話のイザナミ、イザナギの最初の子どもにして、不具の子だったために海に流されてしまった神様です。あるいはアマビエ／コにはこのヒルコともどこかで重なり合うイメージがあるのではないかと。こういった存在は、例えば人類学者のロドニー・ニーダムが言うところの「片側人間」のような表象とも結びつくように思います。こういった身体の欠損を伴った表象が、この幕末の動乱期、しかも近未来を予言する存在として描かれていることは、この議論の後半で紹介する事例とも重なる背景があるのかもしれないと考えています。

もっとも片手、片足、あるいは片目といった表象は、説話レベルとか伝説レベルでは非常にたくさん存在します。これも文字が小さいですけれども、もしご関心があれば、日文研が作っておられる怪異・妖怪のデータベースで、片足とか一本足、あるいは一つ目といった検索キーワードを入れていただければ、多くの事例が出てくると思います。とりわけ、日本の各地には山神であったり、年神といった存在に、片手片足とか、あるいは片足片目といった姿の神様や異形の存在が登場します。

ただ、こういった怪異は物語レベルでは頻繁に出てくるけれども、図像化されたり、さらには三次元化するということがほとんどないように見受けられます。もちろん図像化が全くないわけではありません。例えば、この後にPDFで紹介した夔ヒという中国の「山海経」などに出てくる異形の存在があります。これは果たして神様なのか妖怪なのか、とりあえず鬼神の類いと捉えておきますが、資料の中には、一本足の牛のような姿で描かれているわけです。実はこの夔が日本の山梨県で表象化されて神様として信仰対象、とりわけ雷除けなどの信仰対象になっていくという話があります。こちらについてもまた時間があればご紹介するというところで、PDFで見いただければと思います。

そのほかにも、江戸時代に出版物で紹介される怪異の中に山精ひでりがみであったり、あるいは魅ひでりがみとされている存在は、片足、あるいは片手片足の表象としてビジュアル化された事例がみられます。こういった版本などでのビジュアル化や本草学的な知識の普及が既に江戸時代のある時期から広がっていたということは、少し留意しておいてもいいかもしれません。

しかしながら、先ほど申し上げたように、三次元化された身体的欠損というものはなかなか見当たらないのではないかと、私自身の数少ない知見のなかでは感じていました。しかし、文化財レスキューで入った宮城県気仙沼市で、震災で被災した記念碑などとともに、地元の石碑類などの悉皆調査を行って行く中で、ここに紹介することになるすごく不思議な像に出会ったわけです。これらの像は、気仙沼の中で鹿折地区ししおりという地域に見られました。地区の中心部を鹿折川という川が気仙沼湾へと流れ込んでいるのですが、その川沿いの流域に集中してみられる像です。

一つずつ紹介していきますと、まず、これは鹿折の八幡神社—旧鹿折村の村社に当たる神社ですが—、その境内の中の石碑群の一つとして、片手片足の像とされる石像があります。神社の方によると、これは疱瘡の神と言われてきたと説明を受けました。この像の年代については、よく分かっていません。

次に少し見えにくいのですが、石碑の下の方、若木山おさなぎやまと書いてある字の下に、これも片手片足の像らしきものがうっすらとレリーフになっています。石碑の碑文を見ていくと、安政4年、つまり1857年にこの碑がつくられたことが分かっています。この若木山信仰と、東北地方に広く信仰されている民俗信仰です、本山は山形県に位置して、この神様が疱瘡を治してく

れると一般に信じられているわけです。だから逆に言うと、先ほどの鹿折八幡の神様も、若木山石碑に彫られたレリーフからの類推で疱瘡神として祀られた可能性もあるのかもしれませんが。

三番目に気仙沼市史の資料編には、弘法大師像と記されている像があります。その典拠は分からないのですが、こちらも片足像です。ただこの像については、手の欠損は見当たりません。この像も鹿折川の上流部に位置する八雲神社の境内にある石碑の中の一つです。恐らくこれが一番古く、文化14年（1817）につくられたと記されています。市史に弘法大師と記されている理由の説明は見いだせないのですが、私自身もこれをタイシ、弘法や聖徳ではない、広義のタイシ信仰に基づくイメージで彫られたものではないかというふうに捉えています。

さて、こういう半身像が気仙沼の中でもある特定の地域に存在していて、それが近世、19世紀初頭から中期に集中している。翻って考えるとこれはアマビエ、アマビコとほぼ同時期に作られたものであることが分かってきました。

それでは、これらの像を地元ではどのように捉えられているのでしょうか。一般的というか当たり障りのない解釈として、恐らくこれはこの19世紀の初頭から中期ぐらいに局地的に信仰された流行り神のようなものではないかと、地元の研究者が語ってくれたことがあります。この地域は、明治までは修験道を中心とした神仏習合の信仰が盛んでした。先ほどの鹿折八幡なども、修験系の人たちが所轄する神社兼お寺の要素を有していたわけです。ですから、その信仰の中に、ある種密教的な要素が入っていたというのも考えられますし、そういった場所でちょっと特殊な神的な存在が信仰された時期があったのかもしれませんが。

また、別のところでは、より現代的な解釈を聞くこともありました。かつて鹿折川の上流部には鹿折金山という鉱山がありました。モンスターゴールドと言われているような大変金の含有率が高い、そういう鉱石を産出した場所として知られています。こういった鹿折金山のいわゆる鉱毒みたいなものが、場合によっては、そういう身体的な障がい者を生んでしまったのではないかと解釈される地元の方もいました。

先ほども申し上げたように、市史には「弘法大師」と表記をされていました。この市史の資料編纂に関わった方からは、地元到大師講を初めとした行事があり、大師仏と言われる仏への信仰もあった。この石仏もそれらの影響があったのではないかとご教示いただきました。今のところ、私自身もこの説に少し注目しております。片足のタイシの伝承は、気仙沼だけではなくて全国に見られるものです。タイシをもてなす婆様の足が不自由だったとか、タイシ自身の片足が悪かったとも語られます。足は完全に一本足のこともあれば、ちょっと特殊な形であった、すりこぎのような足だったといった伝承も各地にみられます。

さらに気仙沼の中で少し調べていくと、これは鹿折から少し離れた場所なのですから、同じ気仙沼市内の階上<sup>はしかみ</sup>という地域で次のような語りが残されています。昔、この地区の最知というところにお寺があって、そのお寺には「太子仏」と言われる像が安置されていた。しかし、この太子仏は、田の代かきの手伝いに行き、戻った時は泥だらけの足でお堂に上がったそうです。それでかってに動き回らないように和尚さんに片手片足をもぎ取られたという伝承があります。この太子仏も聖徳太子なのか弘法大師かは、判別できません。むしろ、弘法や聖徳といった特定の信仰対象には還元できない、柳田國男が言うような山の神の末裔としての「タイシ」への信仰を垣間みることができるのではないのでしょうか。同時に説話のレベルでは、タイシが片手片足のイメージで語られることがあったということも分かってくると思います。

さて、ここで研究の方向として、民俗学や説話研究ならば、この辺りの結びつきをもっと掘

り下げざるべきかもしれません。石像の由来の補足であったり、周辺地域の説話や信仰についての情報を探索していく必要もあるでしょう。ただここでは、本日のタイトルの回収も兼ねて、やや大胆で独善的な解釈をしておきたいと思います。

このような身体性が欠損している存在が疱瘡の神であり、病氣や身体の癒しや回復を願う対象として存在するのはどうしてかということを考えてみました。

かなりいろんな論証を端折って、結論だけ申し上げると、回復祈願の対象に欠損があるということは、現実社会やその社会の成員自体が、多くのものを失った状態に陥っているからであると捉えてよいのではないかと思います。つまり、身体的な欠損が示すマイナスの表象というのは、共同体やその一員である個別の家族や一人一人の主体に刻まれた痛みや傷が、簡単に癒されるものでも回復されるようなものでもないことを暗示している。例えば病氣が治るというのは、良くてゼロに戻ることであって、プラスではないのですね。しかも家族や親しい人が亡くなってしまえば、取り返しはつきません。身体を基盤に構成されている我々の生活空間は、一度失われたものを取り返すことは叶わないのです。それでもそう言った抗うことのできない喪失を意識しつつ、そこから少しでも日常を取り戻したいと願う思いが、これらの欠損した身体を持つ像に投影されていたのではないかと考えております。

それでは、どうして特定の時代や地域で、このような説話や神話的な表象が、あえて造形化されたのでしょうか。逆に言えば、語りのレベルではかなり普遍的に見られる表象が、ビジュアル化のみならず、気仙沼では三次元化されたのは何故なのでしょう。

残念ながら、何故、気仙沼なのかという地域性について確固たる説明はできていません。先に記したように語りのレベルでは半身像が存在したわけですが、場合によっては実際に半身のタイン像が他にもあったのかもしれませんが。

むしろ私が注目したいのは、この半身像が19世紀に入り、日本の国内外が非常に騒がしくなってきた時期に作り出されたという点に注目したいと思います。それはあのアマビエ、アマビコといった予言獣の現れた時期とも重なります。さらに今日はお話しできませんでしたが山梨県の夔も、見出されたのは少し遡りますが、地域内外で注目されるようになったのは、やはり19世紀の半ばくらいからと考えられます。

気仙沼は中央から離れた場所にみえますが、当時から日本各地からの船が行き来し、様々な情報が飛び交っていたものと思われれます。同時にこれらの信仰の背景となりえた修験道にも独自のネットワークがあり、そこから時代の変わり目を、あるいは地域内外で起きた出来事—疫病や地震、火山噴火、黒船の来航など—を感知し、敏感に反応しうる状況にあったのかもしれませんが、そのような時代の所産として、これらの半身像を捉えることができないのでしょうか。

これらが立体的なものに造形されたことは、おそらく、言葉よりもまた絵画のような二次元よりも、より直接的に人々に訴えかけようとする情念があったのではないかと考えています。それは病に対する危機感だけではなく、その時代を取り巻く社会不安といったものが影響している可能性もあります。ここで、参照したいのは、精神分析家のジャック・ラカンによる無意識の三層構造の仮説です。ラカンは象徴界—想像界—現実界というように主体の発達段階と対応する形で人間の無意識が構造化されていると捉えています。象徴界とは、人間が言葉を含めた様々な象徴を駆使して生活する領域のことであり、想像界とは、主体が母親との同一化が失われたことを補うために想像された領域です。そして、逆説的な表現ですが現実界とは、主体が形成される以前の虚無、言語化し得ない根源的な不安として感じられるものとされます。

私はこの欠損した身体をあえて三次元化する、象徴化する実践とは、ひょっとしたらラカンが言う現実界 (le Réel)、主体化以前の脅威や恐怖と密接に結びついているのではないかと想像します。むしろ、そのような狂気に近い場所から生み出された脅威や不安であるがゆえに、より“リアル”なものとしての三次元的な表象がつけられたのではないか、そのように捉えたいと思っております。

というわけで、私自身の取りあえずの解釈は以上になっております。これがレジリエンスの問題とどのように関わってくるのかということは、また後ほど時間がありましたらお話ししたいと思っております。

私のほうからの発表は以上になります。ありがとうございました。

**安井** 川村さん、タイトルだけでは想像できないような内容のご発表、ありがとうございます。片手、片足などの伝承や造形物には片目の伝承も関わってきますね。レヴィ＝ストロースが神話学の中で、これら片目、片足が、世界中の神話の中に出てくることを指摘していますが、その解釈についてもディスカッションの中で触れたいと思います。

レジリエンスとアマビエに関連させて、いよいよ妖怪、怪異についての話が深まってきたところで、三人目のご発表者の木場貴俊さんに「怪異のつくり方」をご発表いただきます。木場さん、よろしく願いいたします。



### 講演3 「怪異のつくり方」

木場 貴俊

よろしく申し上げます。まずは、画像を共有させていただきます。それでは、早速話をさせていただきますと思います。

簡単な自己紹介から始めたいと思うのですが、先ほど安井先生からご紹介いただいたように、私の専門は日本近世文化史で、歴史学をやっております。最近、『怪異をつくる』という本を書きました。それにちなんで今回「アマビエで話してほしい」と依頼されたのですが、「アマビエだけでは20分も話すのは無理だ」と言ったところ、それでは最近出した本を基にしゃべってほしいということになりました。そこにレジリエンス、これもまた私としてはあまり馴染みのない言葉で、まだあまり咀嚼できていないのですが、なんとか今回の話に組み込めるように努めつつ、自分の研究対象とレジリエンス的なものを実験的に組み合わせて報告をさせていただきますと思います。

そもそも怪異という言葉について、自分の研究では次のように設定しています。それは、「あやしい物事を指し、化物・妖怪・不思議などと表現する対象を包括する概念」です。中には、天変地異とか憑物つきものを含むこともあります。端的には、怪異とは「怪しい物事」を指すものだと思います。

「怪しい」という感覚を持つというのは、人間のいとなみと深く関係しています。つまり、人間がいて初めてある物事を怪異だと認識することになります。それを踏まえて何らかの対処法、それを記録として書き留める、あるいは彫刻や絵画、文章など、自らの手で創作・表現などが行われてくるのだと思います。そうしたいとなみを、私は「つくる」と著書では表現をしています。これを前提として、これからいろいろな怪異をめぐる側面についてお話をしていきたいと思います。

まず、何かしら変なことが起きると、我々はそれを自分の常識の中に当てはめようとしません。言い換えれば、日常を逸脱した出来事に対して、何らかの説明を与えようとするわけです。そうした行為に、妖怪や怪異というものが関わってきます。それを端的に象徴している事例が、「妖怪ウォッチ」です。「妖怪ウォッチ」では、何か変なことが起きると、「妖怪のせい」になる。一時、子どもたちが宿題をやらないのは妖怪のせいだと言って、保護者を困らせるという話題が新聞記事になったと記憶しています。普通ではちょっと考えられない、少し普通とは違う、常識とは少しはずれたような出来事、変わった出来事、それを「異変」と言ってもいいのかもしれませんが、その原因を妖怪に求める。そうした設定が「妖怪ウォッチ」では採用され、結果的に人気を博しました。

ただ、そうした常識的には起こらない不思議な出来事に対して、何らかの原因を求めるといのは、別に今の話だけではなくて、紀元前に遡ることができます。先ほど相田先生が取り上げていた天人感応説と全く同じ意味で、天人相関説（災異説）というものがあります。これは、中国の董仲舒とうちゅうじよという学者が提唱したもので、天変地異や怪異—例えば、牛が人の言葉をしゃべったり、鶏が夜鳴いたりするなど—が起きると、それは為政者が悪い政治を行っていることに対して天が警告しているのだと解釈がされました。それを受けて、政治が改善されるとよいのですが、改善されないでいると革命が起きて王朝が減んでしまうのです。この場合、怪異の解釈として、政治に対する天からの警告となるわけです。天人相関説は、律令制度の導入とともに日本に入ってきました。



これも相田先生のご指摘されたことなのですが、中国由来の天人相関説が次第に日本風にアレンジされていきます。10世紀頃になりますと、怪異は、争いごとや疫病、天災など、政権にとっての危機が起きる前に神仏が示す予兆だという意味に変わっていきます。

これは、日本では天という概念があまり定着しなかったという理由があると思いますが、とにかく神仏がそうした不思議なことを起こすのだという理解を前提にしています。それに対して、政権はうまく対策を練る、例えば争いごとが起きないように防止策をとる、疫病が起きても早い段階で処置をするなど、適切な危機管理が求められました。危機管理ができれば、それは統治が行えているという自らの王権を示すことにもつながっています。そうした危機管理の対象として、怪異は位置づけられていきます。

そして、地方で不思議なことが起きれば、すぐさま中央に報告され、これは怪異なのかどうか、もし怪異であればどんな悪い出来事の兆しなのか占いによって判断され、適宜対応が取られました。怪異かどうかという認定も、当時は王権が担っていたということになります。

10世紀頃に怪異が起きたと、よく発信してくるのは寺社です。先に述べたように、それは怪異が神仏と関わりがあるからで、寺社側はなぜ怪異をよく報告してくるのかというと、政権からの何らかのリアクションを期待しています。リアクションとしては、例えば建物の再建・修復するための費用やお供えものなどの助成です。それを政権から引き出そうとしています。

一方の政権は政権で、そうした寺社が報告してきた怪異をうまく收拾することができれば、自らの統治能力を社会に知らしめることができる。つまり、寺社と政権は怪異を媒介にしてWin-Winな関係になっているのが、平安時代の終わりぐらいから見られるようになります。

また、時間を少し遡りますが怪異は神仏が引き起こすものという考えと関係しているのが、怨霊です。天人相関説からずれた日本独自の怪異の解釈は、聖武天皇の頃から行われています。一方、祟りとは、もともと神仏の意思表示のことを指しました。そして、平安時代になると、祟りを起こすものとして怨霊が現れ始めるわけです。

怨霊といえば、今だと特定の人物を復讐のために襲うという印象を受けますが、本来は、疫病や天変地異など、個人ではなく社会全体に害を及ぼす恐ろしい存在でした。例えば、平安京に遷都した桓武天皇の周辺人物が病死したり、旱魃・飢饉・疫病などが発生したりしたことに対して、それを桓武自らが政敵として追い落とした弟の早良親王の怨霊の仕業だと解釈し、慰撫する行事を行いました。

少しここでまとめると、疫病とか災害とか、大きな異変が起きると、とにかく何かしらの説明が欲しい。原因が分からないのが一番不安ですから。その理由として、天とか神仏とか怨霊とか妖怪とかのせいだとすると、そうかもしれないと一先ず納得する。今だと、そこにプラズマなどの科学的な言説が入ってくるわけですが、とにかく説明を聞いて納得したい。不安に対する説明として、怪異という設定が関係しているのです。

次に進みます。こうした怪異は、現在の我々は記録や絵によって知ることができます。ここでは記録に注目したいわけですが、記録というものは、歴史書あるいは日記の類いに記されています。日記というと、その日に起きたことをそのままさらさらと書くものだと思いますが、昔の日記は公的記録という側面もあります。ある程度記事がまとまると、後世に引き継ぐべき事柄を取捨選択し、整理しながら編纂していきます。

そうした記録の中に、「ああ、あれはあの出来事の前触れだったのか」と解釈されそうな怪異が記録されていきます。もともとは、そうした予兆としての怪異は、政権が何らかの対処を

するのですが、中世になると何も対処しない、単に予兆としてだけ書き留められる怪異の記事が出てきます。

ただの前触れとしての怪異は後でも触れるアマビエとも関わってきます。

幾つかの事例を見てみましょう。豊臣秀吉は慶長3年（1598）の8月18日に亡くなるのですが、その年の春に下京の神明堂で、人ならば二、三十人の声で30日余り踊るかのような音が聞こえていたのが、後で泣き声になったという出来事があったり、秀吉が亡くなる8日前に、將軍塚という桓武天皇が平安京の守護としてつくった塚で、今はデートスポットになっていますが、これが鳴動したというのですね。後で解釈すると、これらは太閤の凶兆、つまり秀吉が亡くなる凶兆だったのだと解釈がされています。

ほかにも、寛政4年（1782）に島原の雲仙普賢岳が噴火して、向かいの熊本にも津波などの被害を及ぼし、「島原大變肥後迷惑」と呼ばれました。熊本側の見聞録である「両肥大變録」には、災害前に起きた「奇怪ノ説」というものが紹介されていて、これは本当にあったのだとして、やはり前兆として起こる怪異という理解が前提にあったことを意味しています。

災害とは言えないのですが、深川の富岡八幡宮の祭礼で人がドッと押し寄せて、永代橋が人の重さで落ちたという事件が文化4年（1807）に起きた際、うわさ話のレベルですが、前日に富岡八幡宮の社壇が鳴動したとか、鐘楼堂が勝手に鳴ったとかの記事が「風聞怪異」として記されています。

そして、アマビエです。三人連続してアマビエが出てくるというのは、このご時世ならではのことなのですが、1846年のアマビエ以前にも疫病が流行するという予言をする怪物が出ています。例えば1819年には神社姫、1836年は件が、疫病などの流行を予言しています。

これまでの流れだと、予言を解釈するのは人間側なのですが、ここに至っては、怪異のほうから予言してくるという逆転現象が起きているわけです。これらは予言獣と呼ばれますが、予兆という側面から見ると、歴史的な流れで捉えるべき事例として解釈することもできるのではないかとと言えます。

そして、予兆として最後に取り上げたいのが鯰絵です。安政の大地震が起きた原因は、鹿島神社の下にいた大鯰が動いたからだというわけですね。例えば「鯰と要石」と呼ばれるこの絵は、巨大な鯰が怪獣のように暴れているような雰囲気のある絵がありますが、一方で「安政天下泰平」というコミカルなものもあります。これは、前日の小松先生の講演にもありましたが、地震のような大災害を笑い飛ばすことで、ある種の世直し的な出来事として受け入れて、前を向いていこうという希望が込められています。笑いによって不安を乗り越えようという意識が見えます。怪異の解釈も、時代を追うごとにいろいろな側面が見えてきます。

もう時間がありませんが、最後にもう一つだけ。復元という側面を考えると、無念を形にすることによって心を落ち着けるという動きもあると思います。ここでは死というものを取り上げますが、例えばウブメという妖怪がいます。これは、出産で死んだ女性が化けたものです。古くは12世紀の「今昔物語集」に登場しているのですが、ウブメが出てくる背景には、出産で亡くなった女性の無念が忖度されている、つまり、死んでかわいそうだ、無念だから現世にまだ未練があって出てくるのだらうなど、生きている人間側がそう感じて、産死者の霊を産み出しているのではないかと考えることができます。

そして、江戸時代になるとウブメはよく絵に描かれるようになりますが、18世紀以降のものをみると、背景に布を張った竹が川辺に指されています。これは、「流れ灌頂」と言って、

出産での死亡など異常な死に方をした人の供養法として行われるもので、布に書いた梵字に水を掛け、それが消えると成仏できるというものです。ウブメの背景に「流れ灌頂」が描かれるのは、意図的なものなのです。

「流れ灌頂」は現在も行われていて、ちょうど先週、高野山の奥の院へ行ったのですが、そのときに「流水灌頂」、つまり「流れ灌頂」が実際行われていました。現在進行形で、無念な死に方をした人の供養法として今も機能しているのです。そうした供養法と連動する形で幽霊とか妖怪というのが表現されているのは、興味深いことだと思います。

以上、非常にざっくりした内容でしたが、怪異とレジリエンス的な関係について、予兆をテーマに報告をさせていただきました。私の報告はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。

**安 井** 木場さん、どうもありがとうございます。昨日の基調講演で小松先生が、アマビエは妖怪研究の中では、たった一例しか描かれていない一過性のもの、そういう妖怪に過ぎませんよ、とおっしゃっていました。現代のコロナ禍におけるアマビエについては、コロナの終息を願ってアマビエの絵を描いている人たちのフィールドワークをしないと、なかなか全体像はつかめません、ともおっしゃっていました。怪異、鎮魂、それから怨霊といった中に位置づけられるアマビエの特徴が、たいへんよく分かりました。また後ほどいろいろとお伺いしたいと思います。ありがとうございます。

レジリエンスという用語の使い方、そしてレジリエンスから見えてくる文化のあり方など、いろいろ疑問が挙がってきた中で、この言葉をどのように積極的に使っているのか、その点を、次にご教示いただきましょう。それでは最後に、林勲男さんからご発表いただきます。タイトルは「被災地における民俗芸能の役割とそれへの支援—脆弱性とレジリエンスから考える—」です。どうぞよろしく願いいたします。

#### 講演4 「被災地における民俗芸能の役割とそれへの支援—脆弱性とレジリエンスから考える—」

林 勲男

民博の林でございます。画面共有のほうは大丈夫でしょうか。

最初に、もう既に皆さん、三人の方が触れられておりましたけれども、レジリエンスという言葉、いろいろな分野で使われるようになってきておりますけれども、一般的な定義からすれば、外から加えられた力に対する回復力、反発力、復元力ということで、一番早くから使われた分野としては、物理学、生態学、心理学などがあったと思います。

それが2011年の東日本大震災以降、防災関係の行政等の実務分野の人たちに注目されて、一つのキーワードとなってきたわけなのですが、防災、それから災害の研究者の間では、今から20年ほど前からキーワードとして使われ始めたというように私は記憶しております。当時、一緒に調査とか研究会等をやっていた防災分野の人たちの話の中では、ソフトテニス、かつては軟式テニスと呼んでいましたけれども、ソフトテニスのボール、いわゆるゴムボールですね。あのイメージ、押したときの反発する力、元に復元しようとする力、それがレジリエンスというふうに理解できるのではないかという話をよくしていました。

当時は、まだレジリエンスという言葉は使われ始めたばかりでして、災害研究、防災の研究の分野では、それ以前から脆弱性、バルネラビリティという言葉のほうが社会を捉えるときにより重要視されていたと思います。地理的な脆弱性から人々が、災害が起きたときに大きな被害を受ける人たちというのは、居住環境とか、その居住環境を決定する経済的な要因とか、その弱さというものを改善していこうというところで、女性、子どもたちを含めたエンパワーメントという言葉、それからコミュニティの防災力の強化ということも注目されていく中で、次第にレジリエンスという言葉が使われるようになっていったと思います。

日本政府は、2011年の東日本大震災以降、このレジリエンスというものを強靱化という言葉に訳して使うようになりました。最初は、東北の太平洋沿岸が津波の被害を受けたわけですが、そこに防潮堤を建設して、それが国土強靱化の一端であるというようなことを打ち出してきて、それ以降、様々な国家的な危機に対応して、それが発生したとき、起こってしまったときに、いかに迅速な復旧・復興を成し遂げるかというところで、ナショナル・レジリエンス、国土強靱化ということをさらに推し進めてきているわけなのです。

ちょっと細かいところは飛ばして進めていきたいと思います。

それで、ほぼもう10年になりますけれども、東日本大震災が起きた後、3月に起きて、その3か月後ぐらいなのですが、6月の下旬に復興構想会議が提言を発表いたします。その中には、レジリエンスという言葉は出てきません。ただ、再生とか回復という言葉は何度も数多く出てきております。

ここで注目したいのは、その復興構想会議が復興への提言を発表した中に「復興構想7原則」というのがあるのですが、その真っ先、最初の原則1として挙げられているものの中に、追悼と鎮魂こそ復興の起点であるということが言われているわけです。すなわち、被災から生活再建・地域の再興への第一歩として、追悼と鎮魂というのは非常に重要視されているということです。これは、恐らくですけれども、復興構想会議のメンバーの中に当時、福島県立博物館の館長をなさっていた赤坂憲雄さんとか、それから福島県のお寺の住職であって、作家でもある玄侑さんとか、そういった方がいらっしゃったということを考えると、そういった方たちの発言といえますか、考えもかなりこの原則の1というものに反映されているのではな



いかなと思っています。

ただ、これに対しては大分批判もあるわけです。そのうちのひとつとしては、多分に情緒的に「鎮魂」と科学的記録と教訓の提示を述べていると。鎮魂とは宗教的用語であって、思想信条の自由の見地から使うべきでないというような批判も出てきていました。

これがその一から七までの原則なのですから、その第一のところですよ。

この東日本大震災が起きる前に、私はちょっと防災のほうの方たちと委員会に入っているということがありまして、その中の一つで総務省消防庁の「災害対応能力の維持向上のための地域コミュニティの在り方検討会」というのがあったのですけれども、この検討会自体が非常にユニークなもので、ここに書いてあります内山節さんとか、あるいは劇作家・演出家の平田オリザさんなんかメンバーに入っていたのですが、その委員会の中で、ある時、内山さんが、「日本の共同体は『自然と人間』『生者と死者』によって作られている」という発言をされたのです。これが2008年から09年ですから、その後、彼は「共同体の基礎理論」とか「文明の災禍」という本を出しておりますので、いろいろ構想を練っている最中だったので、この言葉が出たのかもしれませんが、やはりほかの方たちからは、あっけにとられたといいますか、唖然としてしまったという反応が見受けられたわけです。

その頃、私はずっとパプアニューギニアの津波被災地、先ほど安井先生からご紹介いただきましたけれども、被災地の調査をしていました。こういったところの調査だったのですけれども、被災後の人々、村落の移動状況とか、それから生活の再建、経済的な支援などがどういう形で進んでいるのかということは何年かにわたって調査していたわけです。それと同時に、この地域の過去の災害と、それからの復興プロセスについても、歴史文献というのはほとんどないような地域ですので、聞き取り調査とか、あるいは数少ない文献に当たっての調査をしていたわけです。

それと同時に、将来の防災といいますか、人々に少しでも役立つのかなと思って、防災教育用のビデオを向こうの国立博物館と一緒に制作して、それからウェブページなども作ったりしていたわけなのです。

その中で、やはり目にするとといいますか、実際そこに立ち会うのですけれども、なかなか一歩踏み込めないというのは、人の死ということなのです。これは災害で亡くなったというわけではないのですけれども、死、それから死を受け入れようとする遺族の姿というのを何度か目にすることがあったわけなのです。同じように2011年の東日本大震災のときには、ご存じのように多くの方が亡くなり、その何倍もの遺族という形で人々が悲しみに暮れるという状況が生まれてしまったわけなのです。

東日本大震災の被災地の調査というのは、幾つかのテーマを持ってやってきたわけなのですが、私が特に関心を持ったのは、災害遺構、震災遺構と呼ばれているものの保存か解体かをめぐる地元での様々な議論なのですが、その中に、両方とも解体されてしまったのですけれども、遺族の方たちが亡くなった人へのメッセージというのを書き残すというのすまいいますか、そういう場所というのがありました。ここの写真で紹介しているのは、左側の釜石市鶴住居地区の防災センターと、それから陸前高田市の中央公民館・体育館に書かれたものです。左側の鶴住居のほうは、紙に書かれたものを貼り出していたのですけれども。

こういったことを、要するに災害で亡くなった人とその遺族の関係というものが、その人が亡くなった場所でのどのように行われていたのかという話を、ある研究会、防災関係の人たちの



集まっているところだったのですけれども、その話をすると、やはり防災関係者からは、なぜそんな死んだ人の話をするのかというようなことが出てくるわけなのです。

そうこうしているうちに、被災地の調査をしている中で、「鹿踊り」と書いて「ししおどり」と読むのですけれども、被災した鹿踊り三団体への支援活動に関わるようになってきたわけです。

岩手県で何人かの方たち、地元で活動されている方たち、研究活動であったり、芸能の支援活動をされている方たちに会った中で、大船渡の二つの鹿踊りの団体が被災してしまって、道具、衣装を流されてしまったと。しかし、その年の8月の盆までには、再びその衣装、道具を調べて、亡くなった人の供養を何とかしたいんだということで、ついてはそこでどうしても必要な鹿の角、本物の鹿の角を何とか入手を手伝ってほしいということを言われたわけなのです。そのとき渡されたのがこのメモなのですけれども、やはり結構条件が厳しくて、長さが55センチ余り、それから角度が60度ぐらい開いているもの。角の枝が四本なければ駄目だと。

鹿踊りというのは、大きく太鼓踊り系と幕踊り系に分かれるのですけれども、ここで私が微力ながらもお手伝いしたのは、この太鼓踊り系の鹿頭につける鹿の角ということです。

確かに災害直後からこの鹿踊り、ほかの芸能もそうなのですけれども、やはり亡くなった人を供養する活動というのは行われておりました。これは大船渡市の<sup>おきらい</sup>越喜来というところで撮影されたものなのですけれども、黄色い頭巾といますか、ほおかぶりしてしゃがんでいる人、手には香炉を持っています。このお宅で亡くなった人を供養するという踊りがされております。

それで、西日本といますか関西を中心にして、長野県のほうにも出かけたりして、鹿の角を集めるという活動をしていました。なかなか楽しくもあり、大変でもあったのですけれども、こちらで集めたものは、取りあえず岩手県立博物館のほうに送って、そこから向こうの同じ活動をしているほかのメンバーに託して、大船渡のほうに送っていただきました。そのことは、新聞なども取り上げていただいて、それを読んだ人が「うちにも鹿の角だったらあるよ」というような情報をお寄せいただいて、さらに多くの鹿の角が集まりました。私が現地へ送ったのは全部で48対になります。

送られた鹿の角というのは、このように頭に取り付けるための加工がされていって、そして衣装も新調されて、右下の写真にありますように完成したというわけです。

再び踊りが踊られるようになると、これは大船渡の笹崎鹿踊の団体ですけれども、その方たちを関西にお呼びして、踊っていただいております。

ただ、やはり先ほども触れましたように、本来この踊りというものは、主にお盆のときに亡くなった人の供養ということで踊られるものでして、それは2013年の春といますか、初夏になって初めてそれが可能になったわけです。そのときの様子です。

これは大船渡のもう一つ別の団体で行われた死者の供養の踊りです。

その後、これは私個人の活動というよりは、民博の活動になっていったのですけれども、被災地の無形文化遺産といますか、郷土芸能、民俗芸能を支援するという活動が始まりました。その最初の頃は、関西にお呼びして、踊る、演じる場の提供ということから始まったわけなのですけれども、次第に現地のほうでの生活が日常性を取り戻していくに従って、なかなか関西に来るのに時間が取れないということもありまして、それだったら我々のほうから現地に出かけていって、そこでできる形の支援というものをやろうではないかということで、一番下に赤丸印をつけてありますけれども、「郷土芸能復興支援メッセ」というのを大船渡市と釜石市で開催いたしました。

そのときのチラシがこういったものですがけれども、行政、それから芸能関係の業者さん、太鼓を作ったりとか衣装を作ったりとかしているところ、それからいろいろな支援団体、そういった団体の方たちにも来ていただいて、何か支援を受ける際の申請書の書き方とか、あるいは道具類の調整の仕方、そういったことの相談もその場でできるような形でこのメッセというのを行ったわけなのです。

要するに、上のほうに書いてありますけれども、人々の生活再開のための第一歩を踏み出すのに、亡くなった人の供養というのは重要なだけでなく、それを行うための芸能団体が被災してしまった。その支援をしたわけなのですが、ではそういった芸能団体が活動を持続的に続けていけるといいますか、継続していくためには、やはり自分たちの持っている脆弱性といえますか、弱い点というのを克服していく、そのお手伝いという形でこれを行ったわけなのですが、それ以外にも高齢化、それから担い手が不足して若手が育っていないとかということになれば、その育成ということ。それから、文書類、衣装・道具類などを安全な場所にどう保管していったらいいのか、それから記録というのをどのように取っていったらいいのかということを考えていくということをやってきました。この辺の活動については、東京文化財研究所なども中心になって、いろいろな研究会などでやってきているということがあります。

あと、動画もあるのですが、もう時間が過ぎておりますので、私の発表は以上にしたと思います。ありがとうございました。

**安井** 林さん、どうもありがとうございます。「レジリエンス」という言葉がどのように使われてきたのか—脆弱性、バルネラビリティという言葉に代わり、レジリエンスが使われ始め、東日本大震災後には日本政府が強靱化と訳して「国土強靱化」といった使い方をするようになったことなど、私たち全員で共有させていただきました。また林さんが、民俗芸能の復興支援にも関わっておられる点、全国的に民俗芸能や祭礼はいずれも担い手不足の問題を抱えておりますので、そういった点についても議論したいと思います。その際に、ご指摘いただいた鎮魂、供養という点も併せて考えていきます。

それでは、四人の登壇者の皆様のご発表が終わりましたので、ここで休憩を取りたいと思います。

## 総合討論

**安井** 皆様お待たせいたしました。今から約1時間、総合討論、ディスカッションに入りたいと思います。登壇者の皆様、よろしくお願いいたします。

参加者の方々からの質問も届いていますが、まずはご発表の内容に関連させて、ディスカッションのポイントを幾つか、司会の安井からご提示させていただきます。お互いの発表を聞かれた中で、「この点はこうだ」とか、「この点については補足したい」という部分もあるかと思しますので、のちほど併せてご発言ください。

今回のシンポジウムでは、「レジリエンス」が一つの重要なキーワードとして上がっていました。この用語を積極的に捉えるかどうかを考える上で、林さんがレジリエンスの用語の由来について、また日本での用いられ方—とくに日本政府が東日本大震災後に「強靱化」と翻訳して使用するようになったことなど、丁寧にご紹介してくださり、理解にたいへん役立ちました。

また川村さんは、たとえば被災地で「どの程度、回復しましたか？」と質問するような「レジリエンス」に対して強烈な違和感を抱くと発言され、これら「レジリエンス」の示す姿勢は「上からの目線である」、「外からの評価である」と指摘されました。川村さんのご指摘のように、レジリエンスが「外からの評価」であるとすれば、たとえば私たちが調査研究する中で、フィールドの外側からではなく内側から物事を見ようとした時に、「レジリエンス」という外からの押しつけ、“上から目線的な”評価とは異なる、どのような記述が可能になるとお考えでしょうか。レジリエンスという用語の来歴を共有した上で、ご意見をお聞かせいただきたいです。これが一点目でございます。

二点目は、レジリエンスの中で付随的に言及された鎮魂についてです。これは林さんがご指摘された、東日本大震災の復興構想の最初に追悼と鎮魂が取り上げられてきたこと、一赤坂憲雄さんが関わっておられた、という補足説明もありましたが—、生者と死者が一緒にいるんだという点を改めて確認する、このような追悼、鎮魂そして供養についてどのように考えていくのか、という点です。

それぞれのご発表の中で、たとえば相田さんは、ご専門にされていた六国史の時代だけでなく現代も、災害などが起こった場所で歌を歌うという鎮魂について言及されましたし、川村さんは東北の災害支援に関わる中で、この点について触れておられました。木場さんはご発表の最後に、高野山の流れ灌頂の写真を紹介されました。たとえば妖怪・ウブメは、子どもを産みたかったのに産めずに亡くなった無念さを抱いていて出現した妖怪であり、流れ灌頂は、そうした産死者に対する供養でもあった。高野山で現代も行われている流れ灌頂は、産死者に限らず、さまざまな死者への鎮魂を含んでいますが、この流れ灌頂という儀礼のあり方についてもお伺いしたいと思います。

三点目は、文化表象という点です。川村さんがご発表の中で、二次元的な絵画的なものだけではなく、たとえば石像などを含む三次元的な造形物の中に、より無意識の部分表現していくような力があるのではないかと指摘されました。文化表象のあり方について、これはフロアからの質問にもありますので、その点、お答えください。

文化表象に関連させて、片目、片足、つまり欠損する身体という点についても再度、取り上げます。欠損という概念、発表では「ゼロからではなくてマイナスからだ」と指摘された欠損の概念について、少し早足で川村さんがご説明されましたが、「失われて

しまったものからの出発」という点について、議論を深められればと思います。

今いくつか提示した点について、また皆さんのご発表を聞かれた中で、気のつかれたことを含めてご発言ください。発表の順番に従って、相田さんからお願いします。

**相 田** 先ほどの補足も兼ねて、説明をし損ねてしまったところが、こちらの資料4（P184下段）の表をご覧になっても分かりますように、まず大きな病気があるときに、これはコロナに重なりますが、貞観5年と14年の所の咳逆病しはぶきのやまいですね。それが霊の祟りだということで、神泉苑で御霊会を行い、その後、またそれを意識して一年後に始まった御霊会が恒例となり、これが祇園祭になるわけです。その祇園祭は今に至るまで1000年間続いてきています。

この咳逆病、恐らくは一年間続いたものですが、貞観14年のときにも流行ります。そのときにその最初の神泉苑の流行の時のことが思い出されて、その際も鎮魂の集まりが行われている。そして、こういう記憶は『古今集』の編纂者たちだけでなく全ての同時代の人々の記憶と、体験であったということが言えるわけです。

その鎮魂という意識が、最後に東歌として共有の記憶をそこへまとめられたという仮説だったのですが、ただ、後々にそういうものがそういう悲惨な時代に役立っている状況を示した注釈書というのは『古今集』の注釈書には全然残っておりませんというか、おくびにも出されていないというわけですね。

思いのほか歴史的なものに悲惨な記憶に関する記述というものは、大勢が死んだとか、そういう即物的な表現でしかなされていないものですね。あとはその鎮魂のために行われた演芸とか、あるいは謡曲なんかもそもそも鎮魂のために起こったものなのですけれども、そういう魂を回復させる営みが、文化とか文学、音楽とか、様々な芸能を生んでいっているということは、文化の中で大きな意義があることではないかと感じております。また、そういう諸事象をたどって行くことによって、改めてこの文学的な意義というのを強く、また確かに共有していくというようなことが大事だと思います。

レジリエンスという言葉を最近に聞きましたのは、トランプ大統領（当時）が宇宙にロケットを発射するプロジェクト視察した際に発されたキーワードが、レジリエンスでした。そういう何か、みんなで共有する夢みたいな、古いところでは歌とかというようなものに表象されるわけです。やはり催行される際には、とにかく一番効果的で効率的な形でできるものがある。そこには音楽が一番手っとり早いということが再確認できた。繰り返しになりますが、いかがでしょうか。

**安 井** ありがとうございます。補足していただいた中で、レジリエンスが皆で共有する夢である、という定義も、現代のコロナ禍の時代にはたいへん説得力のあるものかと思います。

相田さん、一つ質問があります。三代実録の時代にキツネの記事が多くなるという点、キツネの絵の図も出してご説明くださいました。この点少し補足していただけますか？文化表象や鎮魂などにも関わってきますか。

**相 田** 当初、キツネというのは六国史には二種類の形で現れていたのです。つまり祥瑞と、それからあと凶兆の二種類のイメージがあったわけです。ところが、時代が下るにつれてだんだんとそれが凶兆の象徴になっていきます。吉祥の形で現れたものは『日本書紀』に記された数例しかありませんで、後にはどんどん凶兆の象徴になって、六国史時代よりも後の時代には稲荷とかそういうふうなところと関わって幸福を与えるものとい



うふうに変化することはあるのですけれども、ただ、『三代実録』の時代に見えるキツネは、いろんないたずらをしたり、宮中に上がってきて、糞をしたりとか、ろくなことはしていませんね。

また仁和地震の時も、大勢の人が急に集まって大きな声が聞こえるけれども、行ってみると誰もいないという不思議なことがあったと、どなたかおっしゃりました、やはりこの縁起の仁和地震のときにも同じことが現れていてというふうなことがあります。

そういう意味で、キツネの凶兆というのは時代とともに性質を変えていっているわけです。ただ不思議なことに、実は狐狸といいながら、キツネの事象はどんどん増えているわけですが、タヌキは必ずしも多くはない。現代の表象でいきますとタヌキが映画になったのは『平成狸合戦ぽんぽこ』とか篠丸のどか原作の『うどんの国の金色毛鞠』や森見登美彦原作の『有頂天家族』など、数例しかないのですけれども、キツネというのはそれこそ、日本人とか世界的にも好まれて多数現れています。こういう現象も今後どういうふうに変わっていくかということも、その怪異の表徴の例として非常にメジャーなものと言えます。ということですか。

**安 井** ありがとうございます。キツネの表象が多いということがよくわかりました。

それでは次に川村さんにご発言お願いします。幾つも質問を挙げましたが、どこからでも結構です。

**川 村** すみません、二つぐらいかと思うのですけれども、もう少し簡単に質問内容を言っていたいただければ助かります。

**安 井** はい、一つは発表の中で石像を挙げられたときに、二次元のものよりも三次元のものに、より表象の無意識の部分が現れたり、様々なものが見えていたりするのではないかとおっしゃった点について少し補足いただけますか。

**川 村** はい。半分ぐらいはこちらの解釈ですが、基本的には三次元作品として、身体の欠損像が見当たらないという事実から出発しています。これは気仙沼だけではなくて、様々な地域の石仏や木彫などを見ても、ほとんどみることができませんでした。確かに歴博の所蔵品の中には、九州の大分のほうの山の神として、一つ目の神の像の複製をみることはできます。そういう特殊な例を除いて今のところ、欠損像というのはやはり一般的ではないと思っています。逆に身体の過剰性については枚挙にいとまがありません。例えば仏様、菩薩や明王、天部の象などでは、一面六臂とか三面六臂みたいな形で過剰なものは幾らでもつくられるのです。千手観音なんてそのさいたるものかもしれません。けれども、欠損した身体、過少な身体というのがほとんど見当たらない。そのことが、どうしてまたこの気仙沼で見られたのかということから出発しての今回の解釈になります。

だから私自身、今のところはこれらの像を無意識の発露、より深いところから出てきたがゆえに、単なるビジュアル（二次元）ではなくて、具体的なもの（三次元）という逆のベクトルが働いて造形されたというふうに解釈したわけです。できれば今後、他の地域にもこういう事例があるのかを含めて考えていきたいし、それは特定の時代状況に収斂するのかということも、もう少し見ていかないと分からないかなと思っています。

**安 井** ありがとうございます。フィールドワークから出てきた見地ということで理解いたしました。確かに一つ目、片目、片足の妖怪など身体部位が欠損した妖怪の中でも、一つ



目小僧はたくさん描かれてきました。一方で、それを造形物として造るときにはどうだったのだろう、と興味深く思います。

絵画と像の、二次元と三次元の表象の違いについて、片目、片足の妖怪などを例に木場さんにぜひ伺ってみたいと思います。質問が変わりましたが、よろしく願いいたします。

**木場** 鎮魂のところだけをまず。

**安井** はい、どうぞお願いいたします。

**木場** ウブメの話になりますけれども、確かに18世紀後半からウブメの背景として流れ灌頂という供養法が描かれるというのはそのとおりなのです。一方で、それを装置として活用しているのが、四世鶴屋南北の『東海道四谷怪談』です。お岩の亡霊が伊右衛門に復讐する話ですが、その中で今は「提灯抜け」となっているお岩の出現場面は、本来流れ灌頂の布が燃えて、そこから出てくるという演出になっていました。それは当時、ウブメや流れ灌頂が人びとにとって常識だったことを前提にしている、それをひっくり返したもののですね。

お岩は、『東海道四谷怪談』の中では成仏できたのかどうかわからない終わり方をしています。勧善懲悪の枠を超えています。これは、鎮魂とは正反対の展開として評価できるのですが、その前提にやはり流れ灌頂といったある種の特定の死に対する供養法が常識として知られていたことが背景にあるのではないかなと、さっきの安井先生の話聞きながら思いました。

あと、ウブメの説明として、白装束を着て、下半身が血に染まっているという表現がよくあります。出産における出血を表しているのですが、損傷という点はさっきの川村先生の報告と若干重なるところがあるのかなと思いつつ聞いていました。

**安井** ありがとうございます。ウブメの絵には、流れ灌頂が併せて描かれることが多いです。出産の穢れと死の穢れの二重の穢れから、女性を成仏させるための流れ灌頂という、女性に対する穢れの考え方が根底にあると思います。時代によって解釈が少しずつ変わってきていると、そのように考えます。

次に、林さんには、レジリエンスのご説明の中で、鎮魂と追悼という点も挙げていただきました。調査地であるパプアニューギニアでも、震災直後から活動をされてきましたが、その中で広くオセアニアでの死の迎え方、あるいは死者儀礼、鎮魂といった点をどのように捉えておられたのでしょうか。日本の文化との違いについては、いかがでしょうか。

**林** ありがとうございます。オセアニアといってもかなり広くて、文化の多様性というのがありますし、私がずっと調査しておりますパプアニューギニアという国の中だけでも、言語でいうと800以上あるというふうに言われているわけです。誰も正確に数えたことはないわけですが、それだけ文化の多様性があるわけで、そうしますと、鎮魂の在り方といいますか死との向き合い方というものも違って来るわけです。

私が長期のフィールドワークで関わったのは、1998年の津波被災地を含めて二つだけなのですね。一つはもっと内陸のほうの、熱帯ジャングルの中の人たちで、二年間調査しましたが、その人たちも、それから津波の被害を受けた沿岸の人たちも、今は一応キリスト教徒になっているのですけれども、ただ、内陸の私の最初の調査地です

けれども、そちらのほうはキリスト教には禁じられている、日本語で言うと交霊術とい  
いますかね。霊と交わる、そういう会合というのが夜な夜な行われていて、その中に靈  
媒が語る歌とか語りで霊の世界が描かれるのですけれども、そこには当然、亡くなった  
人の語りといえますか、その姿も描かれるわけです。

その、ベダムニという人たちなのですからけれども、かつては人が亡くなると家のベラ  
ンダにその死体を放置するといえますか置いていて、その様々な、血液それから体液な  
どが流れ出てくるのですけれども、遺族、とりわけ配偶者はそれを体に塗って、その悲  
しみというものがある意味で身体化していくということがあったりしたわけなのです。

その違いといえますか、その話をし出すとそれだけで時間がたってしまうのですけ  
れども、死との向かい方というより、死者を記憶にとどめるということと、そうした記  
憶というものをやはり表現する文化があるという点では、日本もそれからパプアニュー  
ギニアの私の関わったところだけではないと思いますけれども、様々にあるという。

相田先生もおっしゃった歌を歌うということも、その中には含まれてきているわけ  
です。やはり自分のその亡くなった人への思いというものを表現するときには歌、それから  
歌という形で言葉にはしなくても、一種の旋律というものを作っていくということは、  
何かそういった一つの共通性みたいなものがあるのかなと。違いを探し出すと、いっばい  
どんどん広がっていきますけれども、共通性というところを見ていくと、結構同じもの  
があって、そこに議論の展開というのがあるのかなと思います。

以上でよろしいでしょうか。

**安 井** ありがとうございます。オセアニアは非常に広域な範囲にわたり、さまざまな島嶼地  
域から成ります。それぞれの島で、たとえば歌や踊りだけを取り上げても、伝統的なも  
のだけでなく、現在も新たに多くのものが作られています。たとえば今年は、太平洋芸  
術祭という四年に一度開催される太平洋島嶼国や地域の大祭が予定されていましたが、  
コロナ禍で延期になりました。太平洋芸術祭のような大勢の人々の中で披露される歌の  
中には、鎮魂の歌や村の人たちが元気を出して生きていけるような歌など、さまざま  
場合に応じて創られた歌があります。そのような行為は、文化の一つの共通項として見  
出せるかと思います。

それで芸能という点に関連させてですが、林さんが民俗芸能のレスキュー活動、と言  
えばよいのでしょうか、そうした活動に関わってこられた中で、鎮魂や供養のために、  
まずは鹿踊りを皆で行っていこうと動き出されたことをご紹介されました。地域のコ  
ミュニティの共同体意識のようなものを盛り上げていくために、民俗芸能を持ち出され  
たのかな、というふうに最初はお伺いしました。しかし、必ずしもそれだけではなかつ  
たように思います。

震災に遭った地域だけではなく、現在、祭礼を支える担い手が不足するという問題を  
抱える地域が、全国にたくさんあります。この点について、実際に祭りの存続に関わっ  
てこられた川村さんから、付け加えていただけますか。

**川 村** ちょっと大きな話をしていますか。

**安 井** はい、どうぞ。

**川 村** 今日は、だから林先生のご発表の中の鹿踊りの取組はすごくよく分かったのですけれ  
ども、その前に私がレジリエンスという言葉は違和感があると、もっとはっきり言えば

気に食わないのですけれども、それは林先生のご説明いただいた中にも出てきたように、国土強靱化という言葉にレジリエンスが使われたときに、私の中でプツンといった瞬間でもあったと。国の言うことなんて、ほほうそと建前だけなのですが、特にひどい言葉ですよ。被害を被った三陸海岸中を、人がどんなに背伸びしても見えないような堤防で覆ってしまって、海と切り離してしまうことが国土の強靱化なのでしょうか。およそあり得ないことをこの国は今もやろうとしているわけですが、そういう言葉にレジリエンスという言葉が使われたわけです。

先ほどのご説明にあったように、もとは自然科学的な言葉だったものが、だんだんと社会科学へと移っていくにしたがって、意味やコンテキストもスライドしてきたように思うのです。文化のレジリエンスまでいくと、本来は単純な物差しなど存在しないはずの我々の日常性の回復度合いであったり、逆境に対する強靱力みたいな話になってしまうことになります。

さて大きな話というのは、ここでは災害の規模の問題になります。今日の相田先生のお話はすごく私には面白くて、改めて平安時代末期と現代というものをいろんな文献や資料から重ね合わせていただいて、その意味での人文科学的な意味での警鐘や教訓も与えていただけたと思うのですけれども。

貞観地震が本当にそんなに大きな地震だとは、東日本大震災が来るまで言われてなかったのです。ぶっちゃけほとんどの研究者も言及してこなかった。実際起きてみたら「ああ、想定外でした」というふうに平気で言えてしまう。それでもこの貞観地震や東日本大震災を引き起こした東北地方太平洋沖地震は、1000年ほどの間隔で起きる災害として、認識されています。確かに圧倒的に甚大な被害を与えたけれども、その程度の規模であったということもできます。

ここで想起したいのは破局噴火という言葉です。もとは小説の中の用語として用いられて、テレビ番組などでも紹介されたので、最近では、かなり一般の人にも常識化している言葉だと思います。噴火後に巨大なカルデラ（火山活動によって生じた広範な凹地）が作られることから、カルデラ噴火とも呼ばれます。破局噴火はその規模の大きさから、一度起きると壊滅的な被害を与えると考えられています。

つまり、巨大な破局噴火が日本で起きると、現代社会の基本的な体制は、多分一瞬で滅ぶと考えられます。そういう規模の壊滅的な自然災害というものが生じうるわけです。しかも、それが大体7000年に一度ぐらいは、この国というか、この国土では起きてきたことがわかっています。1万年未満なわけです。そうすると、次にもしそういう災害が起きた場合には、残念ながら恐らく日本のほとんどは当分住めなくなるだろうし、既存の社会も文化も成り立たなくなるわけですね。

その規模から考えると、文化、社会のレジリエンスなんて言葉は、ある種むなしく感じられます。私たちはそういう可能性を知りつつ、この国に生きているという現実も、どこかで踏まえていかなければならない。

今回のコロナの騒動で、この社会の脆弱性なんていうものが言われています。このような事態は、ひょっとすると日本だけではないだろうけれど、とりわけ災害大国の日本で生きるということは、どこかで諦念、あるいは達観のような部分を持って生きていかないといけないというふうに、個人的には、最近思っているのです。昔習った仏教的

無常観ではないですが、あるいは宗教的な観念が人々に果たした役割についても、人文科学の研究者は、視野に入れていく必要もあるのかもしれません。

ただ、あまりにも壮大な「ダモクレスの剣」にびびって生活するわけにもいかないと思います。我々にとって当面、想像可能な1000年に一度であったり、100年に一度の災害とか社会的な脅威というものに対して、文化的な想像力を働かしてどういうことができるのか、を考えることも必要な作業でしょう。例えば歌であってもいいし様々な芸能であってもいいけれども、そういったものの中に災害の記憶を結晶化して伝えていたり、社会としての癒しであったり、新たな復興、復旧に向けての歩みにつなげていく。そのようなツール、あるいは資源としての文化を、現実のリスクとどの程度折り合いをつけて想像できるかということだと思いのですね。

今度は話をマイクロなレベル、具体的な事例に戻しますが、先ほどの林先生の話で私が少し違和感を感じたところがあります。例えば私も博物館の人間ですから、鹿踊りのハード面ですね。材料となる鹿の角などが見つからないということでご苦労されて集めて、そして芸能の復活というか復興に寄与されたというのはすごく共感するのです。

ただその一方で、担い手の育成のような課題をどうにかするという事は果たして研究者がやることなんだろうかと考えています。多分そういう意図で安井先生は話を振られたと思うのですが、私は能登で30年ぐらい一つの祭に関わったり、あるいは兵庫県の明石では15年ぐらい調査活動を続けている芸能があります。その立場からあえて言わせてもらおうと、その社会で行事の担い手がなくなる、あるいは祭や芸能を続けていけなくなるぐらいの人材不足になる、というのは基本的には当事者の問題だろうと思います。それらの背景にある祭りや芸能の社会的な意義や価値観といったソフトの面に関わってくることは、研究者が簡単に口を挟んだり、介入したりしていいものなのだろうかと考えています。私自身は、当事者たちの問題で祭りや芸能がなくなるのは仕方がないことだと思っています。

今日の言葉で言うならばレジリエンシーが不足したのか、脆弱性が強まったのか分かりませんが、それがやはり一つの社会の現実だし、現代の日本社会は別に災害以外の場所でも全国津々浦々そういう問題に直面しています。そこを一つ一つ、何かできるのかということを考えていったときには、それは一朝一夕では多分不可能だろうし、そこに研究者が安易に関与するという事に対しては、私自身は否定的な立場です。

**安井** 川村さん、どうもありがとうございます。質問に対する“直球”を投げいただきました。キーワードのレジリエンスと関連させながら、今私たちが研究者として文化の創造性にどのように寄与できるのか、あるいは一歩引いて傍観していくのか、この点について議論したいと思います。

では、林さんに振ります。

**林** 画面を一つ共有させてください。宮城県の鹿踊りで今現在行われているもの、過去にあったけれども廃絶してしまったもの、現在活動は中断してしまっているもののリストです。圧倒的に廃絶が多いわけですね。現在まで続いているものというのはほんの一部でしかない。その理由というのは先ほどちょっと触れた、川村さんもおっしゃっていた担い手不足だけではないと思うのですが、確かにこうした芸能だけに限らないと思いますけれども、盛んなとき、それから衰退、さらにはそれ自体がなくなってしまう



ということは、ごく一般的といいますか、これまでもそれを繰り返してきたんだろうなと思います。

研究者が、じゃあ何ができるのかというところですけども、私自身は研究者が直接、後継者の育成に関わるというところまでは、やろうと思ってもそれはできないことだというふうに思っているわけなのですけれども、ただいろんな可能性というものをつないでいくというようなことはできるのではないかということで、先ほどお話ししました大船渡と釜石で行いました芸能というものを中心に据えて、行政それから業者、それから芸能を担っている団体、それから様々な形で、特に金銭面での支援をしてきた団体などをつなげる、そういう場の提供ということぐらいがせいぜいなところかなと思っています。

それから先は、個人的にはいろいろ相談を受けて推薦状を書いたりとか、そういったことはしているわけですけども、やはり直接私たちがそれにタッチしたとしても、それを継続していくことができないということは、かえって現地の方たちに迷惑をかけてしまうということもあるだろうし、限界は最初から感じてといいますか、そういうものだろうなというふうに思っている次第です。

**安井** 林さん、ありがとうございます。全面的に関わっていくというよりは、災害に遭った後の可能性、今後につないでいくための可能性の部分を支援する、そういうことと理解しました。

この点について相田さん、木場さんから何かございますか。相田さん、お願いします。

**相田** どういうふうな形で継承していくという動きと、もう一つ、川村先生がご紹介されましたような記念碑ですね。造像とかそういうふうな形で営まれるのもあります。そうしたものは場合によっては古い記念碑のもとに、もう一度その祭りが再興する契機になる、そんなメルクマールになるというふうなこともあると思います。

そういう意味で、逆に怖いのは例の慰安婦像ですけども、そういうふうなのを造られてしまうと、またそれがどこかで復活していくというふうなことにもなりかねないことなのですけども。

私の進めているもう一つの科研のプロジェクトで、生き物供養碑を集めているものがあります。かれこれもう10年になろうとしているのですけれども、供養の意図で造られた像があったときにはそれを祀るイベントが行われるわけですね。しかも、それらが置かれている所には、どんなに小さなものでも花が供えられている所が多い。ですので、機会があればその供養とかそういう営みが何かの機会に復活することは今後もあり得る。たとえその人たちがいなくなったとしても、そういうものに下手なはずらを行うことはできないので、またどこかで再び復活することがあると思うわけです。

特にこの前の震災でもかなりの多くの供養碑が消えていってしまっていますけれども、もしそれが今後新たに復活して、その場所に設置されれば、その場所の記憶とともに残されるのですが、場合によっては博物館行きになってしまいますと、その地域の文脈が逆に見えなくなってしまうという、これがある意味で博物館の欠点でもあるのですけれども、どこでというふうな情報が完全に移動してしまうと消えてしまうこともあるわけですね。

もう一つ、川村先生がおっしゃっていた身体の欠損のところなのですけども、実は



中国の、観相と関わる事なのですが、荀子とかあるいは王充の『論衡』や、荀子は非相篇で、王充は骨相編ですか、それらに聖人は異常な身体を持っているという素朴な信仰がありました。逆に聖人だからこそそういう異様な身体をしている。例えばせむしだとか、あるいは竜のような顔だとか、私たちが知っている偉人というのはどこかおかしな顔をしているという思想がありました。だからこそ聖なる能力とかそういうふうなことができたんだという発想ですね。それがずっと長らく続いていた訳です。逆に消えていったものもありまして、たとえば女子プロレスの前座として行われた小人プロレスなどもありました。けれども、そういう異相に対する関心と素朴な思いが根強くあったという文脈もあったということも付け加えさせていただきます。

**安井** 相田さん、ありがとうございます。

異形の身体に関しまして、いかがでしょうか、川村さん。私も先ほどの流れでお伺いしたいと思っていたのですが、レヴィ＝ストロースが神話学の中で、論理的に考えると欠損は悪であるとかマイナスであるとか、そういうふうに捉えられがちだけれども、しかし、例えば片目であれば、片目から十全たる二つのものに移行していくという形で、必ずしもマイナスと捉えられない、と指摘しています。また、異形の身体に対する畏敬の念もあると思います。先ほどの相田さんのご発言と併せてお答えいただけますか。

**川村** ありがとうございます。多分、むしろ相田先生から教えてもらうことのほうが圧倒的に多いと思いますし、今回ちょっと「山海経」とかをのぞいたときに、やはり中国や、場合によってはもっと広いアジア的な中での身体イメージみたいなものがあって、その中の欠損とか異形性みたいなものについても、考えないといけないだろうなというのは、今回の発表を機に実感したところです。

安井先生がおっしゃったレヴィ＝ストロースや、私も少し引っ張ったニーダムなどでも、人間の身体の異常性に対するマイナスのイメージとプラスのイメージ、つまり両義性みたいなものがあるよということは、人類学なんかではかなり広く言われてきたことだと思うのですね。

昨日の基調講演をされた小松先生も、それを日本の説話文学の中での片側人間性という形で議論されていると思うし、あの中でも「鬼の子小綱」という、半分人間・半分鬼の物語とともに、「福子」と言われるような、それこそ目もなくて鼻もなかったのかな、そういう不具の象徴みたいな存在が、お金を産み出してくれる、そういうプラスの意味合いで語られることもありました。

だけど、小松先生だと福子のイメージも、物語としてはプラスのイメージだけれども、その裏にはもう少し現実の差別的なものであったり排除の精神みたいなものが、やはり潜在していたのではないかという議論をされていると思うのですね。多分おのこの時代、古代も中世も近世も、いろんな時代の支配的な思想、信仰、イメージなどの中で独特のコスモロジーであったり世界観みたいなものに、そういう身体イメージが出来上がっていくのだろうなというふうに、大ざっぱには捉えています。

だから今日のお話は、背景として昔話や伝説に語られたイメージがあった中で、この時代に具体的な像が出てきたのは何でだろうと、どうしてだろう、というのをちょっと考えた次第であって、例えば中世の信仰の世界であったりとか、逆に現代社会であったりとの直接的な関連はもう少し資料を集めながら、研究を深めていきたいと思っています。

**安 井** 「身体イメージの想像と展開」という研究会を日文研で開催しておりますので、よろしければ、そちらにもどうぞお越しください。身体イメージは、時代と地域によって随分と変わってきますので、身体に関する表象—文化の表象の部分を一か二か掘り上げていくことができるか、これは重要な研究課題の一つと思っています。

時間が迫ってまいりました。レジリエンスという言葉に関連させて、次の展開へどう結びつけていくかを考えていきます。ご発表の中で川村さんが、「諦念、諦め」ということ、またゼロではなくてマイナスからの出発—これはタイトルに引っかけたことですが—、さらに林さんがおっしゃった鎮魂について引き続き考えていきます。マイナスから次にどう回復していくか、前向きに捉えるのかそうでないのか—たとえば病は死への準備だとみなすこともできるし、あるいは、最終的には死に向かうだけで回復できない病とみなすこともできます。そういった点も含めてレジリエンスに関して議論を進めてきましたので、最後に皆様からご意見を頂けたら、ちょうど終わりの時間になるかと思えます。ご発表の順番に相田さんからご発言いただけますか。

**相 田** レジリエンス以前に、全く動けないということを一年間過ごしました。住んでいるところが東京都ですので県境を越えての出張もできない。結局どうするかというと、足元をもう一回見詰め直すというふうなことしか手がなくなってしましまして、自分の研究を、これから残り時間の少ない中で無理やりにでも変えざるを得ない状況を痛感しております。

そうした中で、やはり過去どういうふうなことになってきたかという人たちのたくましさです。それこそゼロからというよりもマイナスというのが必ずどこかにあるということを考えながら今に至っております。ただ、現代の我々はどこかで置き去りにしてきたことがありはしないかということを考えております。

特に、今大きな堤防を造っていて、それが完成に当たっている状態の東日本の震災被害地の所へ行ったことがあります。私は震災以前に今の生き物供養碑の調査で、最初に行ったところが伊勢だったのです。そこも同じように大きな津波がありまして、そこらかしこ、やはり3メートルぐらいの堤防がずっと続いておりました。そういう近代の教訓が今の巨大な堤防に続いていったという、それよりも先、以前のことを考えないまま、ある意味でよくないような近代性をまねした繰り返しをやってしまったのかなということも、その津波の対応に対する現代の営みを見ていて思ったわけです。

それと同時に、今も新しい供養碑が増えていっている現実があります。しかも、様々な供養碑に供えられる花というのを大抵欠かさず供えられていることに気づかされるわけです。ある意味で地域での営みが、今までも東京でさえも見られる。そういう供養碑を供えるという地域の文化があって、同じ地域に私も住んでいるのですけれども、そこに全然目を向けていなかった自分の人生も反省しなければいけないのですが、そういう足元を、この強制的な巣籠もりの状態になっただ中でもう一度見つめるという機会を持つべきと思っています。そうした中で自分には素養はないのですけれども、もう一度、音楽とかそういう芸能に対しても、もう一度目を向けてみたいなという、そういう気分が今の感想です。

**安 井** 足元をもう一度見つめ直し、そこから研究を立ち上げるという点、たいへん重要だと思います。

順番がイレギュラーとなりますが、林さん、お願いしてもよろしいですか。

**林** レジリエンスという言葉ですけれども、確かに先ほど川村さんがおっしゃったみたいに、その言葉自体が一種の流行語だろうというふうには私は思っていて、またいつか新しい言葉が登場すれば、次第にこの言葉というのは使われなくなってくるだろうぐらいに思っております。

それで、国は強靱化という日本語に訳したわけなのですが、その国土強靱化ということで先にやったのは、先ほどお話ししましたように巨大堤防の建造だったので、それについては津波工学の人たちの中からもやはり違和感といいますか、反発というのは出ているわけです。そういったハードの面だけで津波災害というのは防げるものではないと。

同時に、海岸の利用、活用というような分野を研究されている方から、防潮林なんかもそうですけれども、様々な案というのが実際出てきたわけなのですが、国としてはコンクリートの壁を造るというふうにしてしまった。その裏も当然あるのかもしれませんが、それに対しては、必ずしも防災の分野の人たちが全部一致してそれに両手を挙げて賛同したわけではないということです。

それから、先ほど、外からあるいは上からの目線で使われるレジリエンスに対して、では内からの視点といいますか、それがどういうものかというのを考える必要があるのではないかというふうに安井さんがおっしゃっていましたが、一つはまずレジリエンスという言葉、あまりなじみのないというか、なぜもう少し分かりやすい日本語にして、その普及に努めないのか分かりませんが、それよりはやはり普段の生活、あるいは私たちが使っている文化というレベルにおいて、生活を取り戻すとか地域を再び活性化するとか、そういった中で何ができるのかということをも具体的に考えていく、そういった人たちとの一種の協働といいますか、そういうことを考えていくべきなのではないかというふうに思っています。

そんなところでよろしいですか。

**安井** はい、今回のキーワードであった「レジリエンス」は一種の流行語であること、きちんとわかりやすい日本語にする必要があること、それにもまして、生活を取り戻す、見直すことが大事だという点をご指摘いただきました。

それでは、木場さん、レジリエンスという言葉に関連させて、また今日のディスカッションを踏まえてご発言ください。

**木場** 今日のどの報告についても、面白く拝聴させていただいたのですが、川村先生が「諦めが大事だ」というところで、気になったところがあります。それは、私の師匠である倉地克直先生が「江戸時代人のしあわせとは何だろう」ということをおっしゃっていて、江戸時代の「しあわせ」は、漢字で書くと「幸せ」というのではなくて、「仕合せ」と表すことが多いです。その仕合せとは「仕合わせ」という動詞の名詞化なのですが、「仕合わせ」とは「つじつまを合わせる」とか「調整がうまくいく」ということです。江戸時代は身分制の社会なので、身分の中で分に応じた適切な振る舞いをするのが江戸時代人にとって「しあわせ」です。そこでは、人事を尽くすことが大事なのですが、人事を尽くした後どうなってもそれは仕方がないわけです。

東日本大震災のときにどんなに最新鋭の堤防を築いても、津波はそれを超えて甚大な

被害を与えてしまった。できる限りのことをやったら、あとは天命に任すしかない。人事を尽くして駄目だったら諦めるしかないという価値観が、江戸時代人にはあったのではないかということと話されていて、それが今日の川村先生の話とやはり非常に通底するものがあると思いました。できるだけのことをやることは、内容は違えど当時も今も同じだと思います。それでも人の力ではどうにもならないことはあるわけで、それに対してはある種の諦めを持ちながら、次につなげていくことが大事なのかなと思いました。レジリエンスと離れているかもしれませんが、そういうことを今日の報告、芸能の話聞きながら思ったりしました。

**安 井** 木場さん、「諦め」に続く「仕合せ」という大事なポイントをご指摘いただき、ありがとうございます。

時間もそろそろなくなってきました。川村さん、最後をお願いいたします。

**川 村** もう皆さん、語ってくれたからいいのではないですか。

**安 井** あ、そうですか。ちょうど55分なので、それではこれで終了といたしましょう。

皆さまの発言を受けて、重要な論点を提示することができました。本来であれば参加者の皆様から頂いた質問にも答えながら進めたかったのですが、それらの質問については、また改めてお答えいただくといたします。

私たちはまだコロナ禍で、自分たちの研究をどういうふうに進め、この状況を乗り切りって前に進んでいくかという渦中におりますので、あえてここではまとめず、このまま石原さんにお渡ししたいと思います。

それでは皆様、長時間にわたりどうもありがとうございました。

では石原知明さん、宋丹丹さん、よろしくをお願いいたします。

**宋** これをもちましてシンポジウムを終了いたします。登壇してくださった先生方、本当にありがとうございました。また会場の皆様、シンポジウムにご参加いただきありがとうございました。

#### 1-2-4 閉会式の挨拶

**王** 皆様、2日間にわたって、総研大文化フォーラムにご参加いただきありがとうございました。皆様のご協力もあり無事に全てのフォーラムが終了いたしました。本年度のフォーラムはいかがだったでしょうか。来年以降の参考のために、ぜひともQRコードよりアクセスしていただくアンケートの回答をお願いいたします。

それでは、これより閉会式に移りたいと思います。閉会式の司会を務めます文化科学研究科国際日本研究専攻の王紫沁です。よろしくお願いいたします。

閉会式に当たりまして、総研大文化フォーラム学生企画委員会委員長、石原知明さんからご挨拶を申し上げます。石原さん、よろしくお願いいたします。

#### 学生企画委員長の挨拶

石原 知明

まず初めに、今回の総研大文化フォーラム、このようにオンラインと現地との併用という形式でございまして、様々至らない点があったかと思いますが、それに対しては誠に申し訳ございませんでした。皆さんの中で、その中でも何か得るものがあったならば企画委員長としては



幸いに思います。

昨日の夜ちょっと手帳のほうを実は見直していました。手帳のほうを見直すと、今回の学生企画委員会、最初、第1回目の企画委員会は6月11日で、ちょうどほぼ六か月前ほどにございました。

六か月前というのを今から思い返せば、ちょうど春先の新型コロナウイルスで様々な行事が中止になったりやり方を変更したりしていたときに、少し終わったぐらいだったかと思います。

なので、私たち、最初に学生企画委員会で何をしなければいけないかという、この文化フォーラムを今年を行うのか行わないのかでした。結果的にはこのように何とか無事に行うことができたのですが、そこではいろいろ討論がありました。もちろんこの方式についても討論の内容でした。オンラインのみというのもありましたし、現地のみ、最終的に選ばれたのがこのように併用で何とかやってみようではないかという方式でした。

今回のテーマですけれども、当然、まずそもそもこのような方式になった理由が、新型コロナウイルスがという話でした。当然、皆さんが最初に、学生企画委員がみんな持ち寄ったテーマの中にも、COVID-19もしくは新型コロナウイルス、または疫病、そういうようなワードが散りばめられていました。

と同時に、もう一つ、それらを受けてその先に、未来へのまなざしというものもあると感じました。そこから今回のテーマは、「文化のレジリエンスとは？」で、サブタイトルのところに「<異>をつなぎ、未来へ」というワードが入っております。

今回のシンポジウムで、皆さんが様々な学問的垣根や領域、もしくは場所的な、地理的な環境さえも越えてつながり、それが未来へつなぐ第一歩になっていくことを心より願っております。

最後ですが、オンラインで参加していただいている皆様、もしくはこちら現場で見られている皆様、このような状況ですけれども、ご参加いただき、誠にありがとうございました。ともにこの企画、文化フォーラムを成功に導いてくれた企画委員の皆様には、本当に様々ご迷惑をおかけしましたが、皆さんのおかげで開催できたかと思います。本当にありがとうございました。

事務の皆様方にも、特に葉山本部の松菌様と、会場の国際日本文化研究センターの中上様には多大なるご迷惑をおかけしました。感謝してもし切れません。皆さんのご協力のおかげでこのように開催することができました。最後になりますが、誠に皆さんに感謝いたします。

ありがとうございました。(拍手)

王 ありがとうございました。

最後に、文化科学研究科国際日本研究専攻の稲賀繁美専攻長よりご挨拶を頂きたいと思います。稲賀先生、よろしく願いいたします。

## 挨拶

稲賀 繁美

今、石原さんのほうからきちんとしたご挨拶があったので、その後で私がしゃべるというのちょっと格好がつかえません。何分あったかな。止めてくださいね。

レジリエンスという言葉を使うということで、始めました。結局これはすごく悪い使われ方をしてしまっている言葉だ、ということがはっきりしました。これだけでも大切なことだと思います。言ってみればレジリエンス resilience という言葉は、今回の皆さんの話題を集めるた



めの一種のルアー、疑似餌であったかもしれませんが。だけど、それによって結局、一つの問題が持ち上がってきたということ、これが大切だったと思います。

私、手が三本もありませんので、討議資料を参照しながら、ここでマイクを手にして立っておしゃべりするのがちょっと難しいのですけれども、一つ言えることは、外国語の語彙をそのまま使うのが、時として極めて危険だということがある。翻訳したときに、そうとは気づかず話がずれてしまうのです。カタカナ語の流用は、日本の行政ではほとんど自動化して行われていますけれども、大体そこでは何かが（意図的に）隠（さ）れています。

例えば、コンプライアンス compliance という言葉がありますけれども、あれは服従という意味ですね。服従しなさい、屈服することが正しいのですよ、と政府が言っているわけです。それから、エンパワーメント empowerment という言葉があり、行政用語としては少数派への権限付与を意味しますが、これは今日、詳しくは展開しませんが、それなら力がない人は、権利を認められない、ということになる。無力は悪、という価値観ですが、それはおかしいと私は思います。力をつけていくということは必要ですけれども、力がない方は、じゃあ見捨てていい、ということにはならないはず。

レジリエンスにも同じようなことがございます。これはボールがもともとぼんぼんとはじけるといふ、そういう意味のラテン語から来ていますけれども、今、辞書を見ますと面白いことに「意地をはって敗北を認めない」というのがレジリエンスなのですね。これ、どこかの超大国の、そろそろ「元」になるはずの大統領が言っていることですね。

それで、今日の午前中の三つの発表、素晴らしい発表だったと思います。宋琦さんの提起されたことは、これは日本だけではなくて中国、インド、そして非キリスト教圏が近代において国家と宗教をどのよう扱っていったか、どう扱えばよいのか。これはとても個人研究では手に負えない。総研大の文化科学の中で共有すべき大きな問題だと思います。

それから、金丸さんのおっしゃったこれは、本当に文理融合なんて綺麗事で推奨されますけれど、現場に行くと、それが実践できなければ、通用しない、そうした現実があると。それから、「上のほうから」という言葉が出ましたけれども、行政から入ってくると、これは尺度が合わないのです。それで現場で何が起こってしまうかということについても、これは大変貴重な話。そして、環太平洋という圏域の置かれた環境を見ていかななくてはいけない。これは文理なんて超えた話です。そこへの出発点になる話だったと思います。

それから、三人目の前山さんと後藤先生、これも大変大切な話で、つまり文理融合なんて簡単に言えますけれども、そこで一体情報をどのように扱っていくのか。この情報、インフォメーションという言葉も、実は日本語では実に雑駁に使われています。データとインフォメーションとどう違うのでしょうか。そういうこと一つ分からないような情報教育がなされています。そうした欠落を考えていく必要がある。さらに本当なら、おふたりの議論を今から広げていくべきところですが、残念ながら、この場では時間もございません。

長くしゃべり過ぎました。簡略な指摘にとどめますけれども、今日、ヘリテージ heritage という言葉が出てきました。ユネスコでも intangible heritage が指定され、そのまま放置すれば絶えていって、なくなってしまうような文化を、行政の力によって何とか生き残らせよう、生き返らせようとしています。しかし、そうした財政援助の介入のおかげで現場が修復不能な変質をこうむってしまうという事態も発生している。これはユネスコで無形文化財保護運動に従事している現場の方たちが一番よく知っていらっしゃいます。

そのヘリテージという言葉、これは日本語でいうと「遺産、相続」というものですね。次の世代に継いでいくという営みであり、さきほども話題になりました。ところで、日本語だと、これは「継ぐ」という言葉は「償う」という言葉と極めて近く、密接につながっています。ところが英語圏ではheritageという言葉と、例えば「償う」compensateとは、語源として全然つながらないのですね。両者は欧米語の認識ではほぼ無関係です。

「償う」ということはどういうことかという、その出発点に、実は喪失や欠落があります。何か失われてしまったものがある。その取り戻せないものをどうするか。後に残された我々として、この喪失や損失にどう対処していくか。そのことが実は「次の世代に継ぐ」という営みに含まれている。我々の日本語の世界では少なくとも「継ぐ」と「償う」についてそのような連続した考え方がある。

今日、2日目のシンポジウムで面白かったのは、「欠損する身体」の事例です。「ひとつ目」とか「片腕」、「片足」、これはなぜでしょう。私が思いますのに、つまりそれは失われてしまったものがあるという事実を出発点にして、それを次の世代に継いでいくという意識ではないか。これは柳田國男が早くから指摘していて、ドイツ語ではEinseitigkeitつまり「片側性」などとも呼ばれますが、ここには、「欠損」をそれとして残す意思がある。そうした「異形」を石に刻んだ人々には、子孫に残す「遺産」のはたすべき役割について、大きな知恵が働いていたのではないかと、いう様に思われます。というのも、その「欠けた」部分、空隙に「霊」が宿り、今にまで残るわけですね。そのことは大変大切だと思います。

そして、そうした喪失の体験から歌が生まれ、詩が生まれます。我々は身近な人を亡くしたときに突然、歌が出てきます。それから詩が。なぜかそのときだけは自分が詩人になったように、不思議と出てまいります。鹿踊りも、その起源では同様の先祖儀礼です。おそらくは、もはやとりかえせない「喪失」を埋めるために、歌や詩が湧いてくる。だがその湧いてくる源は、自分たちのご先祖であり、そのご先祖は喪失としてしか残っていない。—resilienceの意味をもう一度問い返すうえでも、とても貴重な機会だったと思います。

この調子でやっていくと收拾がつかなくなりますので、このあたりでやめますけれども、今日、玄侑宗久さんの話が出てきました。彼の芥川賞受賞作「中陰の花」について、日文研の二代所長だった河合隼雄は「仏になるというのはほどけることだ」というのですね。つまり、個というものがあったのだけれども、それがこの世からあの世に行くことで、「ほどける」というわけです。そのように解けること、この世にあった人たちは「仏」になっていく。それを我々はどう見送っていくのか。そこに実は我々の生きざまがあります。

アーカイブズを作るときに、ストックとフローという話がありましたけれども、私がそこに噛み付いたのは、実はそのためでした。ストックを作るためにはフローが必要なわけです。その両方の関わりということが、実は文化の生態、さらには生命現象でありまして、それを基礎に情報学を考え直していく、これも大変いい機会になったと思います。

最後に、全員のお名前をお呼びできませんけれども、今回COVID-19の大変な状況の中で、前例がない文化フォーラムを企画立案し、実現に漕ぎつけてくださった、石原さん、前山さん、岩下さん、金丸さん、服部さん、宋さん、王さん、伊藤さん、本当にありがとうございました。事務の方にも本当に普段にはないような努力をしていただきまして、これも私、はたで見ていて本当に感動いたしました。「つなぐ」という言葉が出ましたけれども、この経験を来年度以降の下級生の人たちに、それこそ繋いでいく、開いていく、そうした「継承」ができればなによりと思いますし、その大変いい「遺産」を残すきっかけになったのではないかと、思います。

昨日は学長を初めオンラインでもご参加をいただきました。それから、このオンライン開催、今回は初めての実験ですけれども、総研大の中だけではなくて、外の聴講者にも開くということを試みました。これも続けていただければ、と思います。

配った資料が、今映像では提供出来なくてお申し訳ないのですが、実は来週、関係の行事が更に展開します。今回は、「国際日本研究コンソーシアム」とも共催のかたちで、一緒に「文化フォーラム」をやらせていただきました。この「コンソーシアム」には国際日本研究専攻も入っていますけれども、国際的に日本研究をすすめてゆく、日本国内の10か所を超える研究所や大学院組織と共同で運営しております。さらにその範囲を海外にも広げていこうという、そういう営み、ペキンやソウル、欧州や南・北米とも繋いでいます。

一つだけ、これは皆様のほうに情報の共有ができていますけれども、例えば二週間先に大阪大学のグローバル日本学研究拠点というところで、これも国際シンポジウムがございます。たくさんあり過ぎて大変なのですが、世界的に日本のことを研究して活躍している中堅から若い方たちが集います。本当はこうした行事とこの文化フォーラムとをくっつけて、共同開催ができれば、とも考えたのですが、とても2日、3日では一緒にできません。ただ、次の世代の学生さんたち、院生の方たちには、こういう海外との繋がりにあっても、積極的に率先してリードleadを取っていただくということは大変貴重なことだと思います。留学生の方たちの出身地との関係も深めていける。そうした可能性も開かれていると思いますので、またご尽力いただければと思います。

先ほど石原さんがきちんとしたご挨拶をなさったのに、全然そのあとをまとめることができなくなりました。このような閉会の辞をしてはならない、という悪い見本です。私、今年でこの専攻長もやめますし、総研大、日文研からも引かせていただきますけれども、最後にこういう大変素晴らしい機会を頂いたことを改めて皆様に感謝したいと思います。

大変長くなりまして申し訳ありません。以上でございます。(拍手)

## 締めと事務連絡

王 ありがとうございます。

以上をもちまして総研大文化フォーラム2020、全てのプログラムを終了いたします。ご参加いただいた皆様、先生方、また準備などにご協力いただきました学生、職員、事務の皆様、ありがとうございました。

重ねてのお願いになりますが、今回ご参加いただきましたフォーラムを振り返り、今後の企画、運営の改善のためにアンケートへのご協力をお願いいたします。オンライン参加の皆様はウェブ帳に掲載しているURLよりアクセスをお願いいたします。会場の皆様はQRコードよりアクセスをお願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

## 2 総研大文化フォーラム2020の運営について

### 2-1 学生企画委員について

#### 2-1-1 学生企画委員の組織と会議

2020年度の総研大文化フォーラムでは、学生企画委員会を月に一回のペースで行った。理由としては、例年とは異なる方法で行うことは決定的であり、方式・方法などについて綿密な打ち合わせが必要であったこと。打ち合わせは一度も顔を合わせて行うことができる保証がなく、例年より委員同士で密な関係を築くことが難しいため、できうる限りオンラインで顔を合わせる回数を増やし、積極的かつ有機的な連携を取れるように考えた結果である。

以下、委員会の経過を記す。また、各委員会の詳細については、資料として各委員会の議事録を添付しているのので、そちらを参照していただければ幸いである。

#### 委員会の経過

委員会は合計七回開催された。方式は全てWebex（ビデオ会議用アプリケーション）を用いてによる。委員会の開催時期は以下の通りである。

第一回 2020年6月11日（木）15：30～17：40

第二回 2020年7月17日（金）15：30～17：40

第三回 2020年8月7日（金）15：30～17：40

第四回 2020年9月4日（金）15：30～17：30

第五回 2020年9月25日（金）15：30～17：30

第六回 2020年11月6日（金）15：30～17：30

第七回 2020年12月11日（金）10：00～12：00

第一回目（6月11日）の委員会では、役割の決定、フォーラム事業実施の方法、テーマの絞り込みが主な議題となった。テーマについては、各委員から活発な意見交換が行われた。方式については、COVID-19の感染拡大状況等により臨機応変な対応が求められる中、現地の良さと、遠隔からでも参加できるオンラインとの良さを組み合わせることを目指し、6月頃から増え始めていた「オンラインと現地との併用方式」で準備を行っていくことになった。また、プログラムの大枠は前年のフォーラムを踏襲することとした。

第二回目（7月17日）の委員会では、「国際日本研究」コンソーシアムとの連携、テーマの決定、方式が主な議題となった。テーマのキーワードとして「レジリエンス」で決まり、詳細な開催趣旨については、Slack（オンライン・コミュニケーションツール）上でさらに行うこととなった。方式については、全体のスタンスとして「現地二割とオンライン八割」を意識することが決まり、如何にオンラインで実施をするのかがこれ以降の会議のメインとなった。また、フォーラムの終了後に成果物として「報告書」を発行すること、学生企画委員会を定期的で開催する（毎月第一週の金曜日の15時半から）ことが決定した。

第三回目（8月7日）の委員会では、分科会・シンポジウムのテーマ、基調講演の人選、リモート開催（オンライン開催）時のツールが主な議題となった。

分科会・シンポジウムのテーマについては、当初4ブロック作成し、キーワード（デジタル、イメージ、生命倫理、コミュニケーション、精神等）を踏まえてさらに話し合うという方



向で動いていたが、最終的にはシンポジウムのみを行うことになったために、事業の準備としては時間を大幅にロスしてしまったことは否めない。リモート開催（オンライン開催）時のツールについては、発表はZoom、議論等の場としてSlack、基調講演はYouTube Liveを用いるということになった。また、文化フォーラムを完全リモートで行うのは可能かどうか、コンソーシアムとの連携、報告集の作成の三点について、専攻長会議での審議と確認を依頼した。

第四回目（9月4日）の委員会では、専攻長会議における審議結果、分科会・シンポジウムのテーマ及び担当していただける教員、リモート開催（オンライン開催）時のツールと運用、チラシ・ポスターのデザインならびに記載内容などについて話し合った。専攻長会議での審議の結果以下のことが決定した。

①開催形態について：オンラインを原則とし、一部、対面で実施する方向について、承認。

②国際日本研究のコンソーシアムとの連携について：承認。ぜひお願いしたい。

③報告書の作成について：学生にとって負担にならない範囲で作成すること。テープ起こしなどの作業は、時間と労力を要するのではないか。また作った後に誰に配布するのか、予算等についても検討すること。以上を考慮することで、承認。

以上三点を踏まえて、「国際日本研究」コンソーシアムへの協力依頼を行い、文化フォーラムのチラシをコンソーシアム連携機関にも配布し、報告集作成に係る費用を援助してもらうことを依頼することになった。分科会・シンポジウムのテーマ及び担当していただける教員については、企画委員の博士論文執筆につながればという思いもあり、時間を割いて話し合ったが、上記のように、実施できなかつたため徒労になってしまった感が強い。リモート開催時のツールと運用については、基調講演、シンポジウム、口頭発表については対面、オンライン併用。ポスター発表はオンラインのみで開催すること。機材は基本的に日文研にあるものを使用する。参加者について、事前登録制の定員なしで対応することが決定した。チラシ・ポスターのデザインならびに記載内容については、内容を最後まで詰めることができず、細かい修正点を重ねることになった。このため、ポスターの発出が遅れた。

第5回目（9月25日）の委員会では、「国際日本研究」コンソーシアムの後援、分科会・シンポジウムのテーマならびに方式、リモート開催（オンライン開催）時のツールと運用について主に話し合った。

「国際日本研究」コンソーシアム委員会にて経費や後援に関して了承されたため、各書類やポスターにそれらを反映させることが決定した。分科会・シンポジウムのテーマならびに方式については、作業的に複雑になりすぎるため、分科会は廃止し、Slack上で提案があった、「アマビエから考える文化のレジリエンス」をシンポジウムのテーマとする事になった。依頼する先生について、各基盤機関の委員から積極的に働きかけていただくことになったが、結果的に各基盤機関の企画委員には、とても大きな心的負担を掛けてしまった。シンポジウムの開催趣旨もままならない状態で、日程の方が迫ってきていたため、無茶なお願いをしてしまったと思う。リモート開催（オンライン開催）時のツールと運用については、Zoomを中心にYouTube Liveを併用し、質疑応答はSlidoを活用。ポスター発表はZoomのブレイクアウトセッションを使用することで概ね決定した。予稿集については、オンラインが参加形態のメインであり、現地参加者の人数も予測が難しいことから、電子媒体のみで作成し、適宜印刷することとなった。

フォーラム開催前最後の打ち合わせとなった第六回目（11月6日）の委員会では、現状確認を中心に全体の確認を行った。特に心配な事項としては、当日の配信関係、シンポジウムの



打ち合わせが挙げられた。そのため、機材や通信状況を確認することを主眼に、オンライン開催ツールと運用の接続テスト（11月13日）を行い、足りない資材や必要資材の最終チェックを行うこととなった。テストについてはもっとはやく行うべきであったのだが、この段階になるまでフォーラムの全体像が見えず、テストする段階にまで至っていなかったのが実状であったとも思う。

フォーラム事業を終えての第七回目（12月11日）の委員会では、文化フォーラムについての評価反省ならびに意見交換、報告書の作成について話し合った。毎年意見書や申し送り事項を出しているが、専攻長会議での開催形態の決定が遅くなり、委員会の動き出しも遅くなるように感じられる。このため、専攻長会議への提案はできるだけ早めにしたいたいとの思いがあり、今回の評価と反省シートから総研大文化フォーラムの大枠についての意見をピックアップし、12月18日の専攻長会議に議題として提出することにした。

以上で全七回の学生企画委員会についての概略とする。

## 2-1-2 対面とオンラインの併用開催について

今回のフォーラムは、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、従来通りの対面方式に加え、すべてのイベントをオンラインとする方式での併用開催となった。この決定の経緯は、本報告集の末尾につけた資料「第1～8回学生企画委員会議事次第・議事録」を確認していただき、ハイブリッド方式の実現のための詳しい実施概要は本報告集の第3部を確認していただきたい。

## 2-1-3 会場準備

2016年の開催例を参考に、会場を入り口からもわかりやすいセミナー室1を会場に定めた。実際の会場配置図、資材リストは11月13日の接続テストの後、必要な資材の確認ができてからの作成になった。2016年の文化フォーラム時のリストを参照し、日文研総研大担当事務の中上さんと打ち合わせながら作成した。大きくは、会場での掲示物を中心とした印刷物は中上さんをお願いし、実施に関わる物品等は総研大葉山本部での準備の後に発送、印刷をお願いする資料については石原が作成することとなった。

ここからは文化フォーラム前日の会場準備について記録する。

12月4日の準備は10時より開始した。簡単な自己紹介と会場の案内を行った後、会場設営を行った。会場設営と共に、配信機器の接続を行い、プロジェクターの確認、原稿の読み合わせと修正、当日の立ち位置等の打ち合わせを行った。

オンライン併用、及び、会場参加者への配慮などの観点から、ポスター発表時には個別の部屋を提供する必要があったが、日文研の構造上、個別の部屋はメイン会場であるセミナー室1から距離がはなれてしまった。準備段階から懸案事項ではあったが、参加者の移動の問題と本部であるセミナー室1との距離があることから情報伝達の点で課題があったことは否めない。

内容を会場の特性に合わせて開催するのは当然の配慮であるが、準備の段階からCOVID-19による制限が多かったため、断念せざるを得なかった。

#### 2-1-4 開催後の活動

開催後の活動については、12月11日に第七回目の委員会を行い、文化フォーラムについての評価反省ならびに意見交換、報告書の作成について話し合った。

文化フォーラムの評価反省については、学生企画委員、各基盤機関担当事務より評価反省のシートを作成してもらい、意見交換を行った。その中から総研大文化フォーラムの大枠に関わる部分についての意見をピックアップし、12月18日の専攻長会議に議題として提出した。

報告書については、編集長に副企画委員長の前山和喜氏にお願いした。

報告書に掲載する文字起こし原稿については、文字起こし業者への依頼料を「国際日本研究」コンソーシアムに援助していただき、日文研の担当係と相談して業者を決める方向で進めていただいた。

報告集の内容としては、平成26年12月20日（土）21日（日）に実施した総合研究大学院大学文化科学研究科による企画事業「学术交流フォーラム2014 文化をカガクする？」の活動報告書を参考に、各企画委員に各自の担当したプログラムについて2020年12月30日を目処に執筆をお願いした。

文字起こし原稿については、1月15日に納品され、企画委員内で推敲を行い、発表された各先生方に内容の確認と校正をお願いした。

また、完成までのスケジュールとしては、以下のように決定した。

2月19日までに原稿を収集

2月24日までに内部で校正チェック

3月3日までに印刷会社に校正チェック

3月末までに印刷し葉山に郵送

4月頭までに各機関に発送する。

上記、報告集の完成を以て、2020年度総研大文化フォーラム学生企画委員会の活動は終了となる。

## 2-2 基調講演

### 2-2-1 企画趣旨

基調講演のテーマは、「見えない物に対する恐れと人間—文化研究とは人に何をもたらすのか—」である。これは、本フォーラムのテーマ「文化のレジリエンスとは？ —〈異〉をつなぎ、未来へ—」から、「レジリエンス」をキーワードに、2020年に猛威をふるった新型コロナウイルス感染症にまつわる社会の動きを振り返りながら、小松先生と学生企画委員のやりとりの中で設定されたものである。

人々は、古くから疫病や自然災害といった未知のもの、あるいは予測不可能な事柄に対して、恐怖や畏怖といった言葉で表現されるような恐れを抱いてきた。それは科学技術が進歩した現代においても同様である。特に2020年は新型コロナウイルス感染症拡大という事態に直面し、世界中の人々はウイルスという目に見えないものに対して恐怖し、それが人間の行動変化をもたらした。例えば、世界中の人々がマスクをし、手指消毒をし、外出を控えるといった行動の変化である。加えて、日本では疫病を退散させると言われる半人半魚の妖怪「アマビエ」が一躍有名となった。厚生労働省が啓発マスコットとして採用し、世間では種々のイラストやグッズが登場し、遂には2020年SNS流行語大賞第3位入賞を果たした。「アマビエ」という妖怪が、現代の新型コロナウイルスという未知の疫病に対して、ある種の対応策として機能している事実は、日本人の新型コロナウイルスに対するレジリエンスの形と捉えることができるのではないだろうか。基調講演では、こうした「アマビエ」といった妖怪、あるいは日本人が作り出した未知の疫病や自然災害等への解釈である怪異と人々の意識や行動の変化、社会の変化との関係についてお話しいただいた。

### 2-2-2 準備の経過

#### 開催形態について

新型コロナウイルス感染症の流行に配慮した開催形態について、学生企画委員による会議当初から議論がなされた。基調講演の開催形態についても同様に、講演者はどこで講演をするのか、聴講者は現地でも参加可能なのか、あるいは事前に講演の様子を録画して、それを当日配信するのかといった様々な検討がなされた。そして、2020年の総研大文化フォーラムは、対面とオンラインを併用して開催するという方針に従って、また講演者のご意向を伺った上で、基調講演の開催形態を以下のように決定した。

- ①講演者には当日、会場に来場いただき、登壇ねがう。
- ②講演の様子は当日、YouTube Liveを利用してライブ配信し、参加者は原則としてライブ配信を視聴する形で参加してもらおう。
- ③質疑応答はSlidoを利用する。その際、会場での質問を優先して受けつけ、Slidoで挙がった質問は、司会または学生企画委員を通して、講演者に伝える。

#### 講演者及びテーマについて

フォーラムの柱の一つとして位置づけられる基調講演であるが、2020年8月に学生企画委員による会議で国際日本文化研究センター名誉教授の小松和彦先生に打診することが決まった。決定に際しては、妖怪研究が国際日本文化研究センターの特色の一つであり、妖怪に興味を持つ人も多いということで、学生企画委員からの要望が大きかったという経緯がある。

小松先生に登壇をお引き受け頂くことが決定してから、具体的な講演の内容について議論を行なった。学生企画委員からは、レジリエンス、妖怪、怪異といったキーワードに端を発して、様々な意見が寄せられた。尚、議論は主にZoomでの会議やSlackを利用して行われた。

これと並行して基調講演の担当者は、講演者プロフィールの作成に取り組んだ。プロフィール作成後は、学生企画委員長の石原氏が小松先生の秘書に確認をとって、プロフィールの監修を行ってもらった。2020年10月には、学生企画委員長の石原氏が学生企画委員の意見を集約して、小松先生と面談を行ない、以下のような指摘を頂いた。

- ①大学院生に何か伝える内容を話したいし、研究者のたまごである君たちが何を求めているのかわからない。
- ②なぜアマビエをとりあげるのか？ゼロからなのか、現象についてなのか。
- ③コロナと疫病などのほうが広がりやすいか。
- ④アマビエだけだと行き詰まる恐れがある。
- ⑤大学院生の人たちが何を話してほしいのか。
- ⑥講演については引き受けるが、総研大の院生が聞いてくれる前提で話をしたい。それらを前提として共有してほしい。
- ⑦テーマについても今一度どこをどこまで、何を私に話してほしいのかを明らかにしてほしい。

以上の事柄を今一度話し合っ、取り上げてほしい内容のメモと、ポイントを何処におくのか、焦点を絞って整理してほしい。

これを受けて、再度、学生企画委員で議論し、基調講演で拝聴したい内容やその優先順位について意見を集約した。そして学生企画委員長の石原氏より、小松先生に最終確認をしてもらい、2020年11月に基調講演のテーマが「見えないものに対する恐れと人間—文化科学研究の観点から」に決定した。

## 2-2-3 当日の様子

### ライブ配信について

YouTube Liveを利用した、ライブ配信は特に大きな支障なく運用することができた。一方、Slidoを利用した質疑応答システムについては、聴講者が利用方法を認識できているのか確認する術がなかったこともあり、活用できていたのかは疑問が残った。

### 会場の様子について

2020年12月5日土曜日13:30からの開会式に引き続き、概ね定刻通りに13:50より基調講演を開始した。国際日本研究専攻教授 荒木浩先生の司会の下、小松先生のご略歴紹介、次いで講演に移行した。講演の序盤は、レジリエンスについて講話いただいた。次いで、院生の将来に役立つようにとご高配頂き、学生企画委員の挙げた質問に順次、回答する形式でお話いただいた。以下に学生企画委員による質問内容を挙げる。

- ①研究の問いの立て方について。
- ②「文化の研究」は未来に何をつなぐことができるのか。
- ③「妖怪を通じて人間の理解を深める『人間学』」について。(小松先生が「妖怪を研究するということは、妖怪を生み出した人間を研究するということにほかならない」と仰っていることを踏まえて)

- ④人の意識や行動の変化、社会の変化などと怪異との関係について。（例：古くから見えないものに対する恐れ（恐怖？畏怖？）があり、今も見えないウイルスに対して、市民レベルで出来る対策を講じるという、人間の行動変化がもたらされたこと。かつて人間が作り出した自然災害等への解釈である怪異（幽霊、精霊、妖怪など）が、現代の自然災害等の問題に対しても、ある種の対応策を生み出したり、人間の行動変容をもたらしたこと）
- ⑤人は今日のような病気や災害など困難と対峙した時にどのように、その困難に打ち勝ってきたのか。
- ⑥コロナが流行している初期の段階で、改めてクローズアップされたアマビエの流行に見える人間の心理とはなんだったのか。

以降、④の質問を中心に講演が続いた。「自然災害と怪異・妖怪」と題して、洪水に関しては長野県南木曾町与川の（蛇抜け）伝承について、地震に関しては安政二年（1855）の江戸大地震についてご紹介いただいた。地震は地下の龍・大鯰によって引き起こされるという民間信仰については、聴講者の関心が高く、その後、多くの質問が寄せられた。そして「疫病と信仰・妖怪」と題して、天然痘、麻疹、コレラを挙げて、それぞれについてご紹介頂いた。特に、その致死率の高さから、かつてコロリと呼ばれた「コレラ」への医学的対処や信仰（呪術的対処）対処の説明が、現地参加の聴講者の関心を集めていた。最後に、「蘇る記憶」として、新型コロナウイルス感染症によって話題となったアマビエについて、詳細な資料を提示頂き、またアマビエと類を同じくする妖怪として、予言獣についてご紹介頂いた。豊富な資料を交えながら、詳細に解説いただき、聴講者にとって大変有意義な時間となった。

#### 2-2-4 今後の課題

基調講演のテーマや内容を決定する経過の中で、曖昧さを残したまま基調講演を迎えてしまったきらいはあるかもしれない。今年は新型コロナウイルス感染症という不測の事態に見舞われ、例年の方法を踏襲するわけにいかず、議論が多岐に及んで時間が足りなかったとはいえ、基調講演の趣旨について、もっと時間をかけて議論する必要があったということは否めない。

当日、質疑応答の場面では、そのほとんどを現地参加者の質問を受け付けることに費やした。現地とWebの併用開催であるため、もう少し、Slidoに投稿された質問を取り上げてもよかったかもしれない。またSlidoというシステムを有効活用できていたのかについても疑問が残る。聴講者が利用方法を認識できているのか確認する術がなかったということは既に挙げたが、そもそもLive配信による聴講に慣れていない参加者にとっては、もう一つ別のシステムを利用するという点で、負担をかけてしまったのかもしれない。今回の取り組みを参考にし、今後、さらに誰もが簡単に利用し、聴講できるシステム作りが求められる。



## 2-3 口頭発表

### 2-3-1 企画趣旨

令和2年度の総研大文化フォーラム（以下フォーラム）は2020年12月5日（土）と6日（日）の2日間に渡って開催された。その両日に跨って行われた口頭発表セッションは、本フォーラム「開催趣旨」にあるように、「国際日本文化研究センターをメイン会場とし、オンラインでの参加もできるように環境を整備」して行われた。5日（土）15時30分から17時00分、6日（日）10時40分から12時10分、の計3時間で実施され、各基盤機関・専攻の教員・研究員と院生、さらに学外の院生も加えた計七名（六組）が研究発表をした。

本章は、口頭発表セッションの企画・準備・実施と今後の課題について報告する。まずは本セッションの企画趣旨を、フォーラム全体の開催趣旨も交え振り返る。

「新型コロナウイルス（COVID-19）をはじめとし、国家間対立、民族紛争、自然災害など様々な困難に直面」している状況下で、我々は「文化や文化研究に何ができるのか」を問われている（2020開催趣旨）。同じ文化科学研究といえども学問領域は広く、互いの領域を跨いだ視点を得る場として本セッションは位置づけられている。過去の委員たちも「文化科学研究科の異なる分野の研究内容を、自分の研究の今後の糧とすることを目的とすると共に、全く違う分野の人に自分の研究分野の方法及び意義をわかりやすく伝える練習と、この場が研究を通じた交流の広がりにつながることを目的」とし「各専攻・各分野を横断する学術的な交流を目指し」てきた（2014報告書）。今般のフォーラムでもそれは通底したものである。「文化の柔軟性や多様性を考え信じる」研究者たちの、＜異＞なるもの同士の対話を設ける機会とし、未来に向けて歩を進める端緒とするのが本セッションなのである。

### 2-3-2 準備の経過

#### 開催への危機感と、会場・オンライン併用型という形態の選択

2020年6月11日より始まった学生企画委員会は、当初よりCOVID-19の影響を鑑みながら、フォーラム開催自体を危ぶみつつもその運営形態の工夫により開催へ漕ぎ着けることも目標の一つにしてきた。それこそが総研大の文化科学研究科の手による「文化のレジリエンス」の証と捉える声も挙がった。

石原委員長は議論の中で感染拡大によりフォーラム中止もありうることも言及はしたが、一方で力強く準備を進めていく姿勢を崩さなかった。また、前山副委員長はコロナ禍での各学会の取組事例を委員たちに紹介し、厳しい社会情勢のもとでもフォーラムが成立しうる可能性を示してきた。これらを後押しする形で、葉山本部の学務支援係の松藺氏がメディアの特性と準備すべき機器の検証作業を進めて行った。その流れのなかで夏時点には、会場とオンライン併用型での開催の方向性で委員一同が一致することとなり、秋口の専攻長会議での正式決定に至ることとなった。この併用型という方式にもっとも関わるセッションが口頭発表であることは、当初より議論の場でも度々口にされてきた。

#### 発表者募集から進行方法の決定

しかし、当の発表希望者募集では申込みは低調であった。第一次の締め切りは8月28日であったが、二次の9月25日時点でもプログラム予定の定員を満たさなかった。危惧した教員・学生企画委員の働きかけが功を奏し、口頭発表・ポスター発表を通して見れば最終的に各専攻

から一名以上の発表者が出揃い、学外からも応募者があり、事なきを得た。「学問的垣根を問わず、様々な異>をつなぐ機会」（2020開催趣旨）の目鼻がついたのである。

□頭発表者六組七名のうち会場参加は六名で、遠隔地からのオンライン参加1名という内訳も把握できると、当初見込んでいたよりは発表者の中継環境への危惧はやや解消された。（オンライン参加の歴博・後藤真先生はその分野に長けていらっしゃる。）メイン会場・国際日本文化研究センターからのオンライン聴講者への配信と、質疑応答における円滑な運営への準備を中心に進めることができるようになった。

本セッションの司会進行は、例年と違い開催両日も学生委員が務めることとなった。これはコメンテーター教員を配することをやめ、議論の論点整理業務を司会が担うこともなくなったことから石原委員長が決断した。コメント時間がないことから、一人の発表時間は「おおよそ20分」とし、質疑応答を含めた「一人あたりの持ち時間を25分」と決め、各発表者に事前連絡した。また、聴講者からの質疑は会場参加者を優先とし、オンラインでの質問は時間内に収まらぬ場合には発表後のやり取りという形態も取り入れることとした。

### 2-3-3 当日の様子

#### 会場設置と人員配置

一日目の□頭発表セッションは、フォーラム最初のセッションである基調講演に続いて行われた。感染症対策として三密を避けるため、会場前方左の発表者席と聴講者間の距離は十二分に間隔を空けた。また、オンライン中継のための支障とならないよう、中央のスクリーンと発表者・聴講者の座席をそれぞれ配置した。司会・タイムキーパーは会場前方右に控え、その隣にオンラインでの質問書き込みを確認できるPCを配して、進行と質疑応答に備えた。質問者へのマイク受け渡し担当は、ウイルス対策で常に毎回アルコール消毒をして注意を怠らないよう務めた。配布資料については、各自で取れるように会場入口に予稿集とともに置いた。二日目もほぼ同じ形態を取ったが、発表者マイクは据え置きではなく各自の手持ちに変更した。これは前日のスタンド固定のままだと発表音声途切れたり不明瞭であることがオンライン参加者の声で指摘されたためである。

#### 発表と質疑応答

六組七名の発表者のほとんどが規定時間に沿って研究報告を行ったので、両日もプログラムの予定時刻通りにセッションは終わった。一人持ち時間25分（発表自体は20分）というのは研究発表としては長いとは言えないが、質疑応答は限られた教員や参加者に偏った部分もあった。しかし、学問領域を問わずに積極的に討論を求めた発言も見られ、学術的な交流が図られた印象を受けた。発表者と題目は下記の通りである。

#### □頭発表プログラム

1日目 2020年12月5日（土）15：30～17：00

「昭和初期の日本でのソヴィエト文化への視線—第一次五カ年計画（1928～32）への評価を中心に—」

吉川 弘晃（文化科学研究科国際日本研究専攻 学生）

「中国人日本語学習者の連語習得に及ぼす要因」

黄 叢叢（明治大学国際日本学研究科 学生）

「『平家物語』の堅牢地神」

児島 啓祐（文化科学研究科日本文学研究専攻 学生）

2日目 2020年12月6日（日）10：40～12：10

「神儒仏三教思想と国教一川合清丸の思想について」

宋 琦（文化科学研究科国際日本研究専攻 学生）

「災禍におけるアマの適応と生業の再編—三重県志摩半島を中心に—」

金丸 雄一（文化科学研究科地域文化学専攻 学生）

「近代科学資料アーカイブ構築のための課題分析」

後藤 真（文化科学研究科日本歴史研究専攻 准教授）

前山 和喜（文化科学研究科日本歴史研究専攻 学生）

#### 2-3-4 今後の課題

COVID-19の感染拡大の真っ只中で行われた本年のフォーラム運営は、ある意味、前例無き模索から始まった。結果的に無事終了となったが、やり切ることで目的となってしまう反省点もあろう。この運営形態は来年度以降のフォーラムのヒナ型になると考えられるだけに、ハウトゥーを次期委員には継承していただき、本来の目的である学術的交流の場としての質を上げるのに専心せねばならない。各研究に対する活発な討議にまでは至っておらず、異分野の研究への質問の難しさなども浮き彫りになっていたと感じた。また、同じ総研大内の自然科学分野研究者との学術的交流も皆無であった。これらの困難の解消のために、フォーラムの意義に立ち返り、真に＜異＞をつなぎ、未来へ歩を進める場に高めていくことが今後の課題である。

最後に。本セッションを実施するにあたり、発表者・聴講者の皆様、国際日本文化研究センターの皆様、葉山本部の学務支援係の皆様、各基盤機関事務の皆様、学生企画委員の仲間の皆様、お力添え賜ったすべての関係者に深謝いたします。無事2日間の口頭発表セッションを終えられたのは、稲賀繁美先生の閉会のお言葉通り、皆様のご尽力の賜物であります。来年度当番となる国立歴史民俗博物館の皆様には2021年度の成功と飛躍を心より祈念致しつつ、本章を締めさせていただきます。

## 2-4 ポスター発表

### 2-4-1 企画趣旨

令和2年度の総研大文化フォーラムでは、文化科学研究科から計六枚のポスター発表が行われた（内二枚は同一発表者による）。ポスターは、フォーラム会期1週間前からYouTube上に限定公開され、会期中は国際日本文化研究センターにおいても掲示された。発表は、会期1日目の17時15分から17時45分まで、会期2日目の10時から10時30分まで、それぞれ30分間で実施された。ポスター発表の企画・開催趣旨は、上述の「口頭発表」と重なるためここでの詳述は控える。ただし、対面とオンライン併用による前例のない発表形式は、文化のレジリエンスなるものを問う本フォーラムの趣旨のひとつの生々しい実践だったことを付言しておきたい。本章では、ポスター発表がどのように企画され、どのように実施されたか、また会期を終えて浮き彫りとなった課題について報告する。

### 2-4-2 準備の経過

新型コロナウイルス感染症の影響を考慮した上でどのような発表形式を採用すべきかは、学生企画委員会の開始時点からの大きな課題であった。完全オンラインでの開催となった場合、会場にポスターを掲示することは叶わない。その可能性を常に念頭に置いた上で、形式についての議論が継続して交わされた。この間、特に前山副委員長による他学会の前衛的な発表形式の共有が議論の進展を助けた。すなわち、オンラインによるポスター発表とは研究発表にとって新領域であり、やり方によっては従来の形式よりも有意義であるとの見方が共通認識として次第に形成されていった。10月下旬には、発表者に告示する具体的な発表形式が決定した。発表申込者には、ポスター印刷用データ（PDFファイル）の提出を依頼した上で、当日の発表形式を二つのパターンから選択してもらうことにした。この点について、以下に引用するポスター発表者用の案内文（葉山本部学務支援係松藺氏が作成）を参照されたい。

#### 1. 参加形態および当日参加予定について

ポスター発表者の当日の参加形態についての方針は、「地域文化学専攻、比較文化学専攻、国際日本研究専攻の発表者は会場（国際日本文化研究センター）での参加を認め、日本歴史研究専攻、日本文学研究専攻、学外の発表者はオンライン（Zoom）で参加する。（ただし、いずれの場合もポスター発表はオンラインで実施する。）」こととなりました。つきましては、≪氏名≫様の参加形態の希望および参加予定などについて、10月27日（火）【厳守】までに以下のURLのオンラインフォームからご回答いただきますようお願いいたします。

#### 2. ポスター発表の方法について

今回の文化フォーラムは初めてのオンライン開催となるため、ポスター発表において新しい発表方法を二種類試行いたします。発表者におかれましては、いずれかの方法を選択いただき、ご準備いただくようお願いいたします。

## ポスター発表の方法について

	Phase I 自己紹介 (全体)	Phase II 研究発表・質疑・討議 (個別)
発表内容を事前に 多くの参加者に 見てもらえます!	YouTube	YouTube Zoom
<b>Pattern A</b> 動画事前提出 【推奨】	30秒程度の自己紹介動画を事前に提出 (当日全員分の動画を再生)	3~5分の研究発表動画を事前提出 当日はZoomを用いて質疑・討議を実施 (動画は開催日前に文化フォーラムの YouTube Ch. にて限定公開)
<b>Pattern B</b> 当日配信	Zoom 持ち時間30秒で自己紹介 (生配信)	Zoom Zoomを用いて研究発表・質疑・討議を 実施(研究発表は適宜聴取者が来たタイミン グで行う)

### ○Pattern A・YouTube事前配信【推奨】

30秒の自己紹介動画と3~5分の研究発表動画をそれぞれ作成し、事前に提出いただきます。前日までに総研大文化フォーラム2020YouTubeチャンネルに掲載(限定公開)し、参加者には事前に発表内容を確認いただきます。当日はZoomの各セッションに分かれる前に自己紹介動画を運営側で改めて流します。残りの時間で質疑や討議をしてください。

### ○動画の提出方法について

ファイル形式: YouTubeに対応する形式(MP4を推奨します。)20GB以内

ファイル名: 「専攻・氏名・自己紹介」「専攻・氏名・研究発表」

以下のURLに動画をアップロードして提出してください。

提出〆切: 2020年11月20日(金) 厳守

### ○Pattern B・Zoom生配信

動画を事前に作成せず、当日その場で説明いただく方法です。当日順番になりましたら司会が指名しますので、30秒で自己紹介してください。Zoomの各セッションに分かれてから、研究発表・質疑・討議をしてください。

結果的には全発表者がパターンAを選択した。期日から大幅な遅れ等なく動画データが提出され、11月27日にYouTubeチャンネル上に各発表者の動画を公開するに至った。一方で、11月上旬に学務支援係松蘭氏より、従来通り会場にも紙媒体を掲示してはどうかとの提案があった。企画委員会における合意のもと、国際日本文化研究専攻事務の協力を得て、会場への掲示も行う運びとなった。尚、ポスター発表における各種原稿等の締め切り日は以下の通りである。

10月5日 予稿集原稿(二度の追加募集を経た最終締め切り)

10月27日 参加形態の希望伺い

11月9日 ポスター印刷用原稿(PDFファイル)

11月20日 事前配信用の発表動画

### 2-4-3 当日の様子

定刻、総合司会によるポスター発表開始のアナウンスが行われた。現地参加の聴講者は紙のポスターが掲示された各部屋に、オンライン参加者はZoom上で希望するブレイクアウトルームにそれぞれ移動した。現地参加の発表者は予めそれぞれに割り振られた個室で待機した。各部屋に一人、学生企画委員がサポート人員として配置された。ポスター発表のプログラムは以



下の通りである。

日本中世の女性の地位は低下したのか？—「性差（ジェンダー）の日本史」展によせて—  
小島 道裕（文化科学研究科日本歴史研究専攻 教授）  
退職者移動現象にみる日本人介護受給の国際化  
澁谷 美和（文化科学研究科地域文化学専攻 学生）  
『古事類苑』のつくられ方  
相田 満（文化科学研究科日本文学研究専攻 准教授）  
古楽器ヨウヒッコの演奏学習における自己とは？  
—ベイトソンの認識論を手がかりに考える—  
服部 裕規（文化科学研究科比較文化学専攻 学生）  
福島県相双地域の樹木伝承  
西村慎太郎（文化科学研究科日本文学研究専攻 准教授）  
泉田 邦彦（石巻市教育委員会 主事）  
武子 裕美（茨城県立歴史館 副主任学芸員）  
福島県双葉郡大熊町における複合災害帰還困難区域の歴史資料の保全  
西村慎太郎（文化科学研究科日本文学研究専攻 准教授）  
大関真由美（千葉市立郷土博物館 市史研究員）  
菅井 優士（大熊町教育総務課 学芸員）  
西口 正隆（土浦市立博物館 学芸員）

初日、紙のポスターは各発表者が発表を行う部屋の外に掲示されたため、部屋の中でPCと向き合う発表者が現地参加の聴講者に応対できないという問題が発生した。これはポスターを部屋の外に掲示した時点で容易に予測のつく事態であり、反省すべき点である。2日目は、初日の反省を受けて部屋の内側にポスターを掲示した。従来よりも発表者の器量が要求される形式ではあったが、発表はなんとか成り立った。二日間通して、参加者数は多くなかったものの、発表者は割りあてられた各部屋で、もしくはオンライン参加を通して、聴講者と時間いっぱい議論を交わした。尚、紙のポスターは、日文研にあるホワイトボードとマグネットを使用して掲示した。場当たりの方策だったことは否めない。しかし、会期直前まで感染症問題による開催危機に晒されていたことを踏まえると、やむを得ない判断だったと考える。

#### 2-4-4 今後の課題

ポスター発表を無事に開催できたことをまずは喜びたい。その上で、発表者数、聴講者数ともに例年に比べて少なかったことと、現場における混乱について反省したい。ポスター発表の参加申込数は、フォーラムそれ自体のテーマとも関わるかもしれないが、発表形式をより早い段階で示すことができればまた異なる結果になっていたのではないかと考える。具体的には、フォーラムの最初の募集段階で、事前の動画配信という方式が選択可能である旨についてアナウンスできていれば、より多くの参加者を募ることができたのではないかと推測する。実際にポスター発表者としても参加した筆者は、動画作成において独特の面白さを感じた。また、オンラインによる遠隔参加が可能でなければおそらく話す機会のなかったであろう聴講者の方々と議論の場を持てたことに喜びを感じた。これをポスター発表という枠組みに収めてよいものかどうかは分からない。しかし、感染症対策への考慮云々を抜きにして、このようなスタイルは学会発表における新形式のひとつになりうると感じた。より前衛的な発表形式を採用している学会がすでに少なくないことは、この点を裏付けるだろう。やや大げさに言えば、筆

者はここに、危機を逆手に取って未知を切り拓くひとつのあり方を見たのである。一方で、ポスター発表当日の混乱は、新たな可能性に振り回された結果だと言えるかもしれない。イレギュラーな状況では、当たり前のことを当たり前にこなすことが難しい。シンポジウムで耳にした「レジリエンスなんてものは幻想だ」という言葉が脳裏をよぎる。シミュレーションを尽くせども、現場では何が起こるか分からない。いずれにしても、全参加者に有意義な議論の場と時間を提供することが企画委員の使命であり、それが満足に果たせなかったことは大いに反省すべきである。これを踏まえて、企画委員の手に負えない会場整備等については業者に一任するという道もありえたと考える。

最後に、本ポスター発表は、石原委員長、前山副委員長はじめ、学生企画委員一同、葉山本部学務支援系の皆様、国際日本研究センターの皆様、各基盤専攻機関の事務の皆様のお力添えなくしては実現不可能でした。特に葉山本部の松菌さんには、上記引用の案内文の作成やYouTubeチャンネルの作成・管理等、多大なるお世話をおかけしました。この場を借りて皆様に今一度お礼申し上げます。本当にありがとうございました。前例のない事態におけるポスター発表の企画と運営で得られた知見が、総研大文化フォーラムの未来を拓く足掛かりになることを願います。

## 2-5 シンポジウム

### 2-5-1 企画趣旨

以下に開催趣旨文を引用する。

総研大文化フォーラム2020は「文化のレジリエンスとは？ ―＜異＞をつなぎ、未来へ―」をテーマに、文化の柔軟性や多様性をとおして＜異＞なるもの同士の対話を促し、COVID-19のパンデミックを乗り越え、未来に向けて進めていくことを目的としています。本シンポジウムは今年度の総研大文化フォーラムと関連して、「災いから考える文化のレジリエンス」というテーマで行います。

ここでの「災い」は自然災害や疫病など様々に降りかかる危機を指します。人間は多くの災いに見舞われながらも生活を営み、文化を育んできました。そこには災いから起き上がるための文化の「レジリエンス」があり、それは文化のあちこちに形を残しています。

今回のシンポジウムでは、異分野の研究者が多様な視点、時代、文化から研究成果を共有し、還元すると同時に、文学、歴史学、文化人類学、民俗学等の学問領域を横断し、包摂している文化科学研究の知見とその営みから、「文化のレジリエンス」とは何かを考えることで、過去・現在・未来へと繋がるヒントを得る機会になればと思います。

### 2-5-2 準備の経過

#### プログラムの変更及びテーマの改定

2020年9月25日の第5回目の学生企画委員会までは「分科会・シンポジウム」というセッションで行うという方向での検討を重ねたが、新型コロナウイルス感染症の影響や作業面の困難さ等の原因により、シンポジウムのみを行うことになった。

また、肝心のシンポジウムのテーマも途中で改定することになった。学生企画委員会では新型コロナウイルス感染症によって注目された「アマビエ」をテーマに入れ、聴講者の興味を惹くことを目的としたが、講演の範囲が狭く、話題として拡げることが難しいとのご指摘があり、「アマビエから考える文化のレジリエンス」から「災いから考える文化のレジリエンス」へとテーマの変更を行うこととなった。

#### 講演者の依頼について

学生企画委員会では講演を引き受けていただける可能性がある先生を候補者として討議し、各基盤機関の委員から先生方に依頼することになった。しかし、開催趣旨の文章もままならないまま、日程が迫ってきていたため、先生方へ登壇をお願いする用意ができていないにもかかわらず、先生方に登壇をお願いせざるをえない状況になり、依頼された先生方にも学生企画委員にも、負担をかけたことは間違いない。

### 2-5-3 当日の様子

#### ライブ配信について

登壇の先生方と司会は全員オンライン参加のため、Zoomで接続し、YouTube Liveでライブ配信を行った。質疑応答にはSlidoを用いた。途中通信が悪くなる部分もあったが、概ねスムーズに進行した。

## 会場の様子について

総研大文化フォーラム2020における重要なイベントとして、シンポジウムは全体的にはスムーズに行われた。講演される先生方の研究対象から「文化のレジリエンス」とは何か、いかに文化の柔軟性や多様性をとおしてCOVID-19のパンデミックを乗り越え、未来に向けて進めていくことができるかが語られ、聴講者にヒントが提示された。総合討議では、講演内容を中心に討論が交わされた。

### 2-5-4 今後の課題

全体に言えば、シンポジウムは円滑に行われたが、問題がなかったとは言えない。

学生企画委員会は月に一回の頻度で開かれたが、議題が未解決のまま放置され、委員長のところまで解決されたことも多く、委員長に大きな負担をかけた。

また、オンライン併用の開催形式ははじめてであり、使い慣れない方には迷惑をかけた。質問応答ツールとしてのSlidoが使えなかった方もいたであろうと推測される。

### 3 オンライン開催について

第3部ではオンライン開催ツールの選定プロセスおよび実際の運用を整理し、報告する。今回の総研大文化フォーラムは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受け、初めてオンラインと対面のハイブリッド（併用）開催を試行した。予算・時間・人員・機材が限られる中、無料のものまたは既に機関で所有しているもので、比較的簡便に使用できるオンラインツールを組み合わせた方法を模索したこともあり、この経験を今後活かせるように心がけて記述した。

#### 3-1 オンラインツールの選定

本章では、オンライン開催にともない、どのようにツールを用いたかをまとめる。繰り返すにはなるが、本フォーラムにとって前例の無いオンライン開催であり、ゼロからのスタートであった。機種選定にあたり、学生企画委員の連絡ツールでもあったSlack上で、各委員が参加した学会などの状況などの共有を行い、その中から自分たちでも運用できそうなものを選定する形で行なった。決定に際しては、時間の都合もあり学生企画委員の会議の参加者だけで選定した。

使用するオンラインツールは、表3-1のように三つの系統に大別される。

表3-1 使用するオンラインツールの主な分類

系 統	用 途	ツール例（採用は <b>太字</b> ）
配信系	・遠隔地にいる参加者が発表する ・フォーラムの様子を聴講者へ中継する	Zoom、Webex、Google Meet、 <b>YouTube</b> 、ニコニコ動画など
連絡系	・参加者への連絡や周知を行う ・参加者からの質疑を受け付ける	Webページ、 <b>Slack</b> 、MSTeams、 <b>Slido</b> 、メール
広報系	・イベントの開催を外部へ発信し、参加申込を募集する	<b>Peatix</b> 、EventRegist、 <b>総研大ホームページ</b> 、Facebook

第1が配信系で、主に2つの機能が必要であった。1つは、フォーラムの内容をオンラインの参加者に配信することである。もう1つは、オンラインとオフラインの発表者をつなぎ、ハイブリッド開催を実現することである。もし現地の内容を配信するだけであれば、後者の機能は必要なかったが、今回は遠隔地からの発表や質疑に対応する必要があった。配信系ツールは、オンライン開催の中心となるツールであり、この機能が停止した場合、フォーラムは成立しなくなる。第2が連絡系で、参加者への連絡や周知を行ったり、問合せを受けたりするために用いるツールである。第3が広報系で、参加者数の確保の要となる集客や申込受付のために用いるツールである。

ツールの選定にあたり重視したポイントは主に、①既に会場専攻（日文研）で所有しているか、無料または低額で使用できること、②操作が簡便で不慣れな参加者でも操作できると見込めること、③運営側も使いこなすことが可能で、学生や事務の負担軽減に資すること、の三点であった。



### 3-1-1 配信系ツールの選定

配信系ツールにおいては、日文研で既に導入しており授業等で実績のあるZoomを中心に検討を行った。

当初は、Zoom Meetingsを用いる方式を検討していた（図3-1）。学生企画委員会も類似ツール（Webex Meetings）を利用しておこなっていたため、全員にとってわかりやすかった。しかし、Zoom Meetingsは構造がシンプルで運営側がすべき操作がわかりやすい一方で、会議室内に発表者や聴講者が同じように入室するため、操作に不慣れな参加者が誤って講演中にマイクをONにして音が混線してしまったり、悪意ある者が妨害することができてしまったりするなど、混乱が生じる可能性があった。そのため発表者側と聴講者側を分離する案を検討することとした。

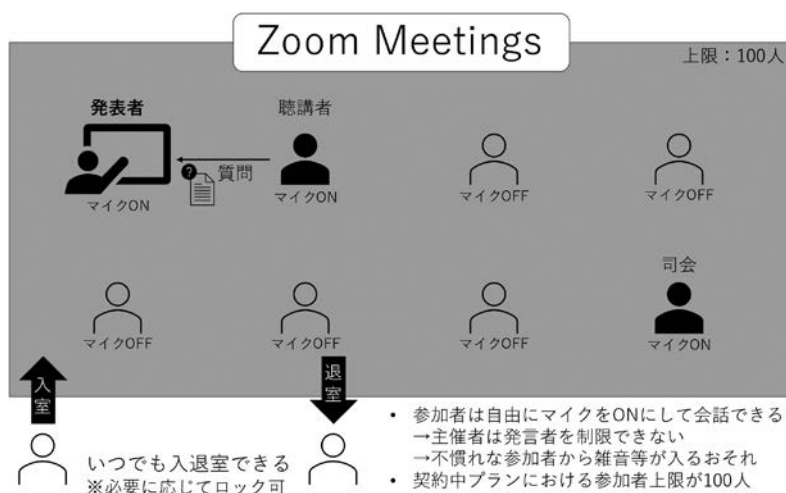


図3-1 第1の案：Zoom Meetings

次に提案されたのが、Zoom Webinarを利用する案である（図3-2）。前述の第1の案での懸念は解消されるが、月5,940円の追加料金を払う必要があること（日文研で持つアカウントに総研大の経費で機能追加することにも課題があった）や、運営側にZoom Webinarの経験を持つ者がいないこと、動作確認や練習の機会が十分にとれない（Zoom Meetingsは日文研・総研大双方に有料契約アカウントがあり、動作テストが可能だったが、Zoom Webinarは総研大・日文研両機関とも契約していなかった）ことから、この案は取り下げることとなった。

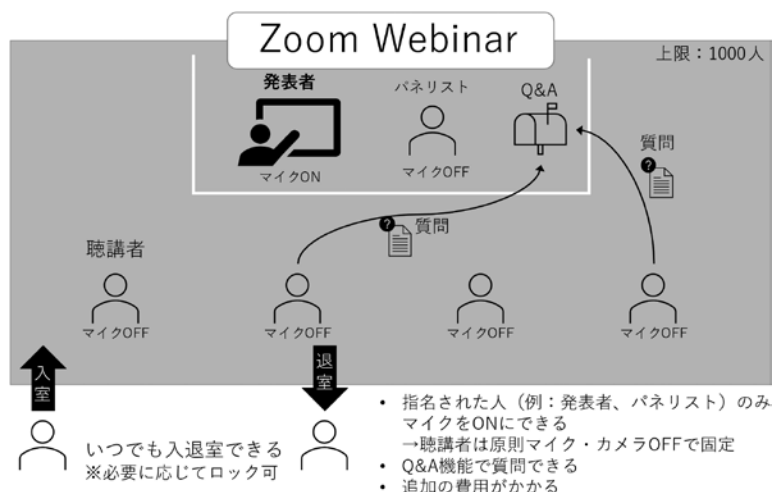


図3-2 第2の案：Zoom Webinar

最終的にZoom Meetingsのストリーミング配信機能を利用する第3の案が採用された(図3-3)。Zoom Meetingsの映像をYouTube Live (FacebookやVimeoも利用可能)にストリーミング中継し、聴講者は中継映像を観る方式となっている。一方向の配信となるため、質問などのための仕組みを別途用意する必要があるが、運営する学生や事務の経験に新たな内容を少し加えることで十分に実施でき、当初案の課題も解決できることから、この方法を用いることとした。

Zoom MeetingsのYouTube Liveストリーミング方式には、次のような利点がある。

- ホスト (共同ホスト不可) のみが配信できる
- ホストの画面設定が配信画面にも反映される
- ▷ 話者固定 (自動) または分割 (映像ONの人のみで分割される)
- 資料の画面共有も配信される
- ▷ 画面共有中は、話者が画面右上にウィップで表示される
- Zoom内のチャットは配信の対象外
- 20秒~30秒程度の遅延が生じる (「低遅延」設定の場合)
- YouTube Liveの配信画面にチャット機能がある

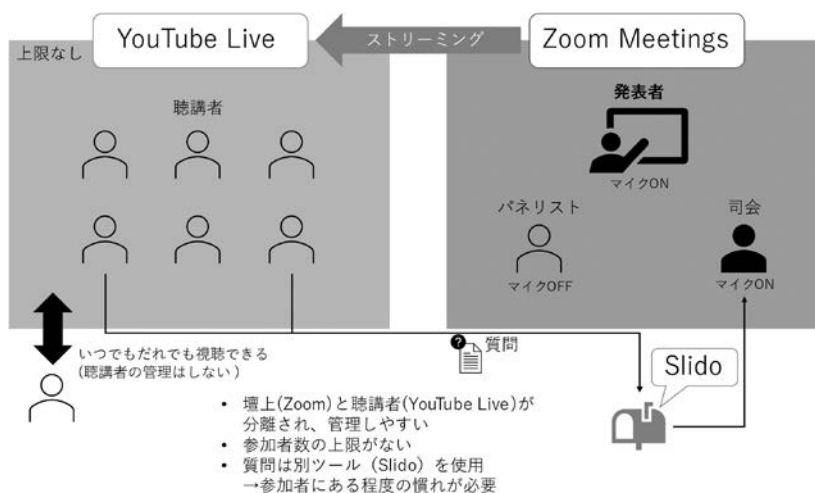


図3-3 第3の案 (最終案) : Zoom Meetings + YouTube Live

### 3-1-2 連絡系ツールの選定

次に参加者への連絡を行うツール (連絡系ツール) の選定について説明する。例年であれば、Webページのみで、それ以上は予稿集と現地での情報で事足りていたが、本年度は発表資料の配布や当日の発表時間外での質疑 (例えば懇親会や休み時間など) ができないため、個別にやり取りするための環境が必要であった。申し込み開始の段階では、オンライン開催の形態が確定していなかったためメールでの受付となったが、それ以降の情報発信をするためのツールの選定を行った。

例年利用しているWebページは、一覧性に優れ、見やすいレイアウトを実装することができるが、細かい連絡を行うには不向きでメーリングリストなどとの併用が必要である。一方Slackはレイアウトが固定されており、プログラム毎などでチャンネルを設置することとなり一覧性に劣るが、SNSの一種であるため細かい連絡を随時行うことには向いている。初めて利用する参加者にどのように使い方の説明をするかが課題として挙がったが、最終的にはSlackを利用することになった。

表3-2 連絡系ツールの特徴

	Web ページ	メーリングリスト	Slack
一覧性	○	×	△
レイアウト	○	△	×
速報性	△	○	◎
問合せ対応	×	△	◎
複数人での管理	○	×	○
アカウント登録	不要	不要	必要

実際の運用は、表3-3 のようにチャンネルを設置し、加えて全体のトップページに以下のような説明文を書き、アナウンスを行なった。

表3-3 Slackに設置したチャンネル一覧

#general	(デフォルト) 全体の連絡
#random	(デフォルト) 雑談部屋
#tools	オンラインツールの使用法の情報交換
#基調講演	基調講演に関する連絡、資料配付、終了後の質疑
#シンポジウム	シンポジウムに関する連絡、資料配付、終了後の質疑
#口頭発表	口頭発表全体に関する連絡
#口頭発表00_~	口頭発表個別チャンネル。資料配付、終了後の質疑応答用
#ポスター発表	ポスター発表全体に関する連絡
#ポスター発表00_~	ポスター発表個別チャンネル、ポスター共有、動画共有、終了後の質疑応答用

Slack運営の注意事項について説明させていただきます。  
 ダイレクトメッセージは原則として使用しないでください。  
 Slackの表示名については、以下のルールに従っていただければと思います。

- ・総研大の参加者：「専攻名\_名前」
- ・他機関の参加者：「所属名\_名前」（所属名は六文字程度に収めてください。）
- ・発表者は頭に「P\_」、学生企画委員は頭に「S\_」、事務担当者は「J\_」をつけてください。  
 例：「P国際日本\_総研太郎」「PS日本歴史\_総研花子」

表示名はプロフィール画面から修正できますので、フォーラム開始までにご修正いただけますと幸いです。

3月末で本Slackは閉鎖いたします。

企画委員からの重要な発信はすべて「ピン止め」の機能を使っています。

以下の画像を参考にクリックしてご覧ください。

会全体の質問→ #random のチャンネル

Slack、Zoom、Slido、YouTube Liveの使い方についての質問→ #tools のチャンネル

結果的には、当初の懸念の通り、使い方について効果的なアナウンスができず、全参加者が効果的に利用するには至らなかった。しかしながら、参加者より、「質疑応答が記録に残るので使いやすかった」とのコメントをいただいたり、実際に丁寧な質疑が行われたりしたチャンネルもあったことから、完全な失敗ではなかったと考えられる。

### 3-1-3 広報系ツールの選定

オンライン配信を行うことを機に、学外の方の参加もオンラインに限り認めることとしたため、従来のメール対応では参加受付に係る事務対応が追いつかないことが予測された。イベント集客ツールとして見かけることの多いPeatixとEventRegistを中心に比較記事などを参考に検討し、総研大の基盤機関のイベントでも採用例のあるPeatixを選択した。フォロー機能（フォローしたグループのイベント情報が継続的に届く）やグループ機能（イベントの種類などでグループを設定し、グループ内の共同管理者を設定することもできる）などで次回以降の文化フォーラムや総研大の他のイベントへの活用も期待できることも決め手となった。

### 3-1-4 その他のツールの選定

また、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点より、オフライン環境での質問の際に、できる限り口頭での発表を減らす必要が出てきた。そこで、質疑応答のためのツールの導入をすることにした。他の学会等での導入事例が複数見つかり、参加者の質問が全員に即時共有されるという利点から、Slidoを利用することとした。

同様に、例年は会場にて筆記する形式で行なっていた参加者アンケートも、できる限り接触を減らすために、オンラインツールを用いて行うこととした。ツールとしては、YouTube利用のためGoogleアカウントを作成したことから、同じアカウントで利用できるGoogle Formを使用することとした。実際のページは、本報告集の末尾に資料として掲載した。

## 3-2 各プログラムへの適応について

本節では、ここまでまとめてきたツールを、フォーラムの各企画にどのように導入したかをまとめる。各企画の詳細は、第2部で示した通りである。

### 3-2-1 開会式・閉会式

開会式・閉会式では、挨拶する先生方は長谷川学長を除いては会場での登壇であった。最もシンプルな方式で、会場の映像のみをZoom経由でYouTube Liveに中継した（図3-4）。

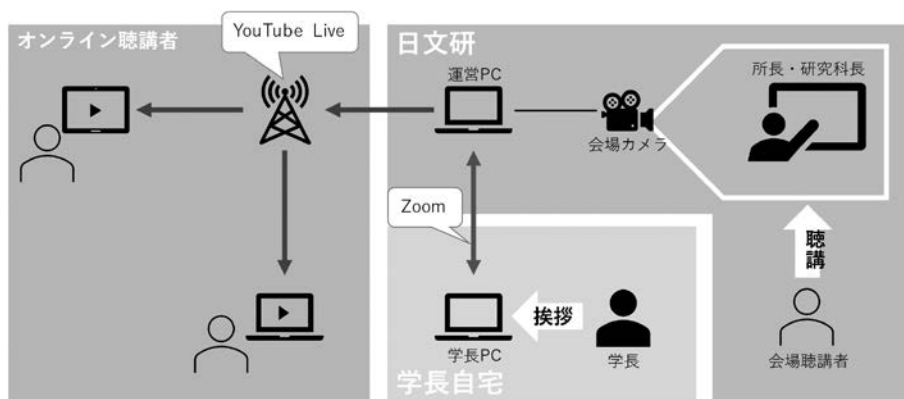


図3-4 開会式・閉会式の配信方式

Zoomを通さず直接YouTube Liveで中継することも可能であるが、長谷川学長がオンラインで挨拶すること、その後の講演・発表等で資料を投影すること、配信元（カメラから直接か、Zoom経由か）を途中で切り替えることはリスクが高く配信が途中で終了してしまう可能性があることから、Zoomを経由することとした。元々、学長は現地にて挨拶される予定であったが、自宅から挨拶することが決まったのが、開催の1週間ほど前であったため、他の対応をとることができなかった。挨拶を事前に録画しておくなど、配信をシンプルにするための方策も検討することが望ましい。

実際の挨拶の対応は、以下の通りである。事前にZoomに接続してもらい、映像・音声OFFで待機、出番になったら両方をONにして挨拶していただく。配信画面は話者固定とし、オンライン参加者には学長の映像が全画面表示されるようにする。この画面固定の際に他のZoom参加者が音を出してしまうと、そのアカウントが全画面表示されてしまうので、マイクをOFFにするように指示を出しておくことが大事であった。

### 3-2-2 基調講演

基調講演では、講演者（小松和彦名誉教授）、司会（荒木浩教授）ともに会場での登壇となり、講演中はPowerPointプレゼンテーションを投影することとなった。そこで開会式・閉会式の構成に加え、プロジェクターにつながっている発表者用PCをZoomにも接続し、PowerPoint投影画面をZoomに共有することで、オンライン聴講者にも資料内容が見えるようにした（図3-5）。この際に、講演者が使うPCの設定で、会場のスクリーンをサブモニターとして接続しておくことが重要である。PowerPointをスライドショーとして再生すると、サブモニターの方にスライドが表示されるので、その画面をZoomの画面共有で接続するようにした。また、オンライン聴講者の質疑応答のためSlidoを同時に稼働し、会場参加者およびオンライン参加者の質問を随時受け付けた。司会者の手元にあるPCは、Slidoの管理者アカウン



トとしてログインしておき、質問を確認できるようにした。

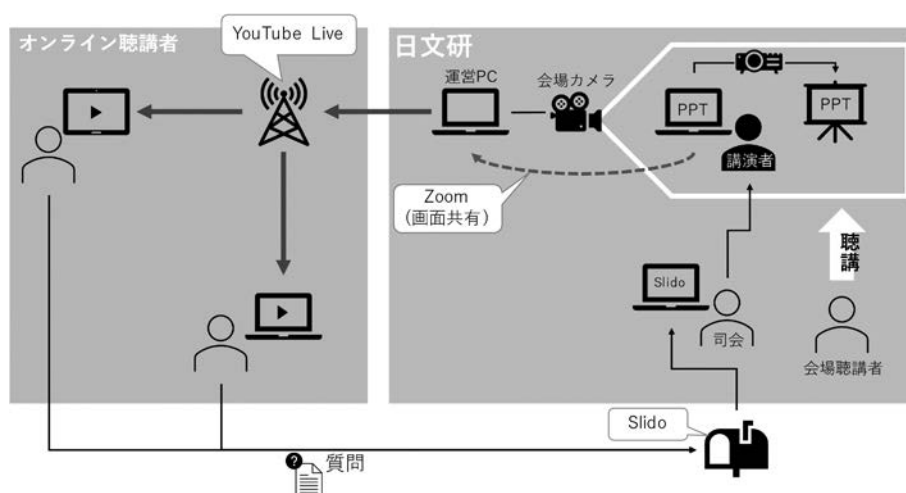


図3-5 基調講演と口頭発表の配信方式

### 3-2-3 口頭発表

口頭発表は、基本的には基調講演と同じ方式で配信を行った。ほとんどの発表者が会場発表となったが、会場・オンラインのハイブリッド発表が1件あった（余談ではあるが、筆者の前山の発表である）。ハイブリッド発表の際はオンライン発表者がZoomに入室し、PowerPointを投影した。画面共有を1回1回切り替えないように、どちらかの画面で固定し、もう一人が発表する際には、固定している側でスライドを送ってもらうように事前をお願いをしていた。また、当日は会場とオンラインの話者を切り替える際にハウリングしてしまった。切り替える際には全てOFF（配信者側でミュートにする機能がある）にしてから、必要があるところをONにするなどの配慮が必要であった。

### 3-2-4 ポスター発表

ポスター発表は、会場では、複数の発表者が同時に各自の発表を行い、会場・オンラインの参加者ともに、聴講者は関心のある発表を聞きに行く形式である。結論からいうと、なかなか無理のある実施であった。もし、オンラインを前提とする開催方式を採用するのであれば、ポスター発表は募集しない方がよいと思われる。今回は、オンライン併用開催が決定する前に募集が始めることになってしまい、決定時にはポスター発表の応募があったため、なんとかして開催しようということになった。

ポスター発表は、ほかの企画と異なり、Zoom内だけの実施とし、YouTube Liveへの配信は行わないこととした。当日は、Zoom内にブレイクアウトルームを必要数設置し、Zoom上各自自由に移動できるように設定した（図3-6）。

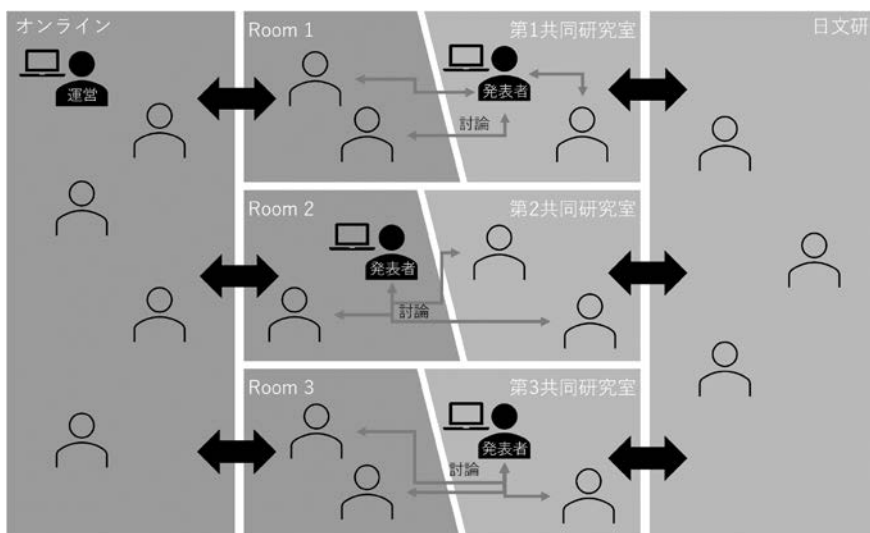


図3-6 ポスター発表の配信方式

まず配信をするためには、音が混ざらないようにするため、発表件数分の個別の部屋を用意しなければならない。今回は日文研の共同研究室を使わせていただいた。また、その各部屋をZoomに接続し配信するため、パソコンもその数分必要になるが、今回はその台数のパソコンを用意することができなかった。苦肉の策として、学生企画委員個人のパソコンを各部屋で接続し、現場のコントロールとオンライン配信のコントロールの両方を企画委員が一人で担った。

発表者の参加方法も現地とオンラインの両方であった。対面の発表者は、各部屋で待機してもらい、割り当てられたZoomのブレイクアウトルームで対応しつつ、実際に現地で参加している参加者と話す必要があり、これがなかなか大変であった。オンラインでの発表者は、割り当てられたZoomのブレイクアウトルームに参加し、そのまま発表を行う。しかしこれだけだと、現地での参加者がZoomの配信を見られないため、前述の学生企画委員のPC越しにやり取りしていただいた。1台のノートパソコンの画面とカメラを複数人で利用することになってしまったが、事前に大きなモニターや、プロジェクターとスクリーンを用意するなどして、より良い環境を提供するべきであった。オンラインでの参加者より、対面同士で質疑応答している場合に質問しにくいとのコメントをいただいた。この点、各部屋を担当している委員が適宜ファシリテーションをすることも必要であることも言及しておく。

最後に、必要になる学生企画委員の役割をまとめる。各部屋少なくとも学生企画委員が1名、全体を取り仕切る委員が1名以上、配信のためのZoom（メインルーム）で聴衆者を通話しながら誘導する委員、現場の案内をする委員に加え、委員が発表者であり人数が少なくなることにも注意が必要である。

### 3-2-5 シンポジウム

シンポジウムは、司会を含め登壇者の全員がオンラインとなったため、Zoom内の討議の様子を会場とオンラインへ配信することとした（図3-7）。パネリストは各自資料を画面共有して報告を行なった。配信側にとっては一番実施しやすい方式であった。

今回は、登壇者の全員がオンラインであったため問題はなかったが、もし対面での登壇者がいる場合は、開場で1つの音を拾い、各登壇者に1台ずつパソコンを用意しカメラで撮影し、

それを配信に乗せることで対応が可能と思われる。

質疑応答は、司会の安井先生に質問の内容が見えるよう、Slidoに統一した。会場参加者は直接Slidoに入力していただくか、挙手の代わりに紙に記入していただき、それを学生企画委員の方で回収し代理で入力を行なった。

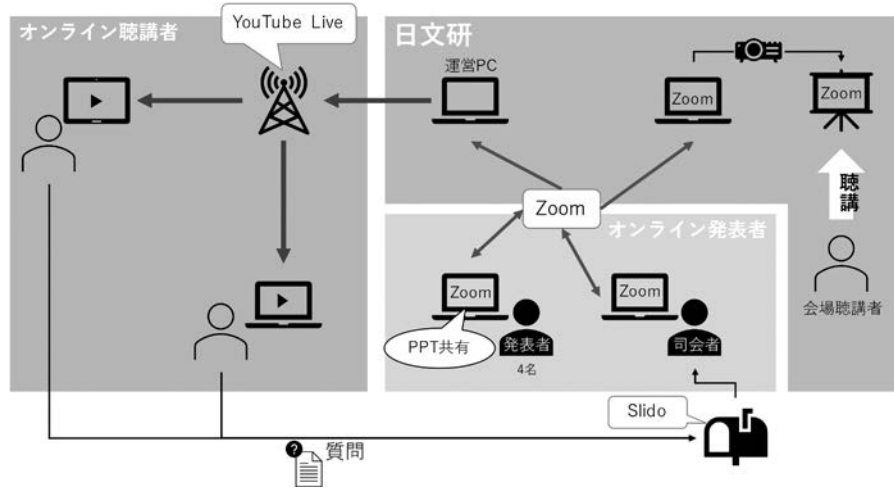


図3-7 シンポジウムの配信方式

### 3-3 オンライン配信環境の整備

本章では、ここまでで取り上げていないオンライン配信に関わる事柄についてまとめる。

#### 3-3-1 配信機材の接続構成と確保

本節では前節のとおりとなった接続方法に合わせた、実際の機器の準備について述べる。現地での機器の接続構成は下図（図3-8）の通りとなった。

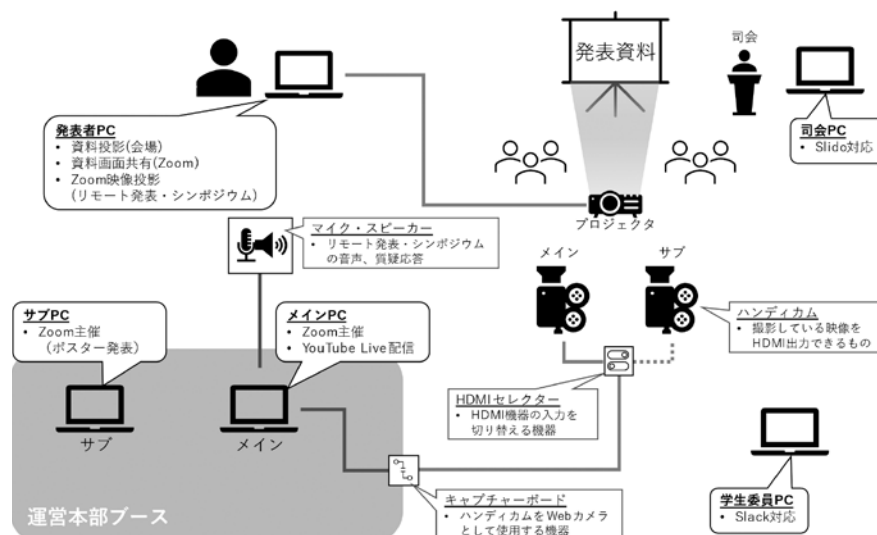


図3-8 現地での接続構成

必要になった機器の一覧を表3-4に示す。

表3-4 機器一覧

機器名	確保方法	台数	備考
ノートPC（配信用）	総研大備品	2	1台は予備
ノートPC（発表者用）	日文研備品	1	
ノートPC（ポスター発表ホスト用）	日文研備品	1	
ノートPC（司会用）	日文研備品	1	
ノートPC（ポスター発表発表用）	各自	件数分	Slack対応も各個人のPCで実施
HDMIケーブル	日文研備品	-	発表者PC接続用 部屋備え付け
HDMIケーブル	持込	1	配信映像伝送用 長いものがよい
HDMIセレクタ	持込	1	カメラ2台の切り替え用
キャプチャーボード	総研大備品	1	新規購入
ハンディカム	総研大備品 日文研備品	1 1	HDMIスルー出力に対応したもの。 常時給電が必要
Web会議用スピーカー・マイク	日文研備品	1	USB接続
プロジェクター	日文研備品	1	部屋備え付け
カメラの三脚	持込	2	
OAタップ	日文研備品	3~4	

今回のフォーラムではカメラ1台で対応できる範囲の運用（三脚に固定した状態でできるアングル移動はあり）だったため、最低限の機器で対応できたが、複数台のカメラを同時に動かすような場合では、複数の映像入力に対応したキャプチャーボードの導入が必要となる。機器の操作で画面分割やワイプ表示などができるものもあり、導入の検討に値する。

### 3-3-2 ネットワーク環境

フォーラムで使用する各PCがインターネット接続する方法は、それぞれの用途に応じて仕分けを行った。高い接続品質と安定性が求められる配信用PCは有線LANで接続し、そのほかのPCは来訪者用Wi-Fiやeduroamなどの無線LAN接続とした。その場合、注意しなければならないのは、対面参加者と同じルーターを使用することになる可能性が高いため、性能などを事前に確認しておく必要がある。

会場でのインターネット接続には申請や設定などが必要な場合があり、事前に確認し確実に利用できるよう準備することが求められる。特に、開催当日は週末のため情報システムの担当者が出勤していない可能性が高いため、前日までに問題を解消しておくことか、事前に調整を行い出勤してもらうことが重要である。



### 3-4 オンライン開催の結果

7月の研究発表募集開始から、フォーラム終了までの運用の経過について、表3-5にまとめる。新型コロナウイルス対応のため、募集開始が例年より遅く、「その時点でできることから実施する」という変則的な経過となった。

表3-5 オンライン関係の運用

日付	内容	使用ツール
7月22日	口頭・ポスター発表 募集開始（当初〆切：8月28日）	HP、学内通知
8月28日	口頭・ポスター発表 募集延長（延長〆切：9月25日）	HP、学内通知
9月28日	口頭・ポスター発表 追加募集（〆切：10月9日）	HP、学内通知
10月9日	イベントポスター掲載	HP
10月16日 ～17日	Peatixに不正アクセス	
10月27日	聴講募集 開始	HP、Peatix、 学内通知
	Slack運用開始	Slack
10月30日	口頭発表・ポスター発表詳細掲載	HP、Peatix
11月13日	事前配信テスト（Zoom、YouTube Liveの動作確認等）	Zoom、YouTube
11月17日	Peatix、不正アクセスがあったことを公表	
11月20日	Peatixに関するお知らせを掲載	HP
11月27日	予稿集掲載	Slack
11月30日	【ポスター発表】ポスター掲載	Slack
	【ポスター発表】自己紹介動画、研究発表動画掲載	YouTube、Slack
	【ポスター発表】Zoom接続情報周知	Slack
	YouTube Live（当日配信）のURL、SlidoのURL周知	Slack
12月3日	シンポジウムの報告テーマ等掲載	HP、Peatix
12月4日	前日リハーサル 接続確認、カメラアングルの確認、音声確認等	YouTube、Zoom、 Slido
12月5日	フォーラム1日目	
	10:00 接続テスト（聴講者用）	Zoom
	13:30 開会式、基調講演、口頭発表	Zoom、YouTube、 Slido
12月5日	17:00 ポスター発表、1日目総括 18:00	Zoom
	質疑応答（プログラム時間外）	Slack
12月6日	フォーラム2日目	
	10:00 ポスター発表	Zoom
	10:40 口頭発表、シンポジウム、閉会式 16:30	Zoom、YouTube、 Slido
	質疑応答（プログラム時間外）	Slack
	事後アンケート	Google Form

#### 3-4-1 開催前の運用状況

専攻長会議において、フォーラムの開催形態（あるいは開催そのものの可否）について、感染状況を注視したいという判断があり、フォーラムの概要が示せない中、準備スケジュールの

関係で発表の形態や時間帯などの情報が未定のまま発表者募集を行うこととなった。詳細に不明なところが多いことや新型コロナウイルス感染症拡大により研究や授業に遅れがあったことの影響もあると思われるが、発表者はなかなか集まらなかった。1度の期限延長と1回の追加募集を行い、研究科長から各専攻への呼びかけなどが行われた結果、11名12件の申込を得た。

9月中旬に開催形態を対面・オンライン併用とすることが専攻長会議により決定され、ようやく本格的にプログラム内容の詳細の検討が始まった。実施するプログラムを決定した後、10月9日にポスターが完成しホームページに掲載され、オンライン参加の方法や対面参加を許容する参加者の範囲が確定した10月末頃より聴講者の募集を開始した。対面参加は関西圏の専攻（地域文化学、比較文化学、国際日本研究）の教職員・学生と発表者のみ認めるものとしたため、該当する専攻にのみ対面参加申込フォームの情報を通知した。同じ頃に口頭発表の順番が決まったことから、ホームページとPeatixに反映させている。

11月初め頃より葉山事務では中継方法の詳細を検討し、YouTube Liveの配信テストやZoomとの連携機能の試行を行っていた。同時期から必要な機材の確認を行い、ハンディカムをパソコンの外部カメラとして接続するために必要なアダプタの購入を行った。開催まで1ヶ月を切った11月13日に実際の会場でレイアウトの確認や配信テストを行い、当日に向けた課題等の洗い出しを行った。

11月17日に広報・集客ツールとして利用しているPeatixが不正アクセスによる個人情報流出を発表し、本フォーラムにおいても対応を検討した結果、不正アクセスが行われた日時（10月16～17日）が聴講者募集開始（10月27日）以前であり、本フォーラムのためにアカウント登録した方への被害はないこと、発覚後のセキュリティ強化も行われていることから、イベントページにお知らせを掲載したうえで利用を継続する判断を行った。今回の不正アクセスはPeatixのシステムが動作するAWSで発生したものであり、利用者からは見えない部分であったが、オンラインツールの利用を検討する際にはセキュリティ強度（パスワードの条件が十分か、2要素認証が導入されているかなど）を確認し、リスクがあることを考慮して利用することも大切であると再認識する出来事となった。

ポスター発表において、発表者に事前に動画を作成してもらい、聴講者にあらかじめ視聴してもらう方法をとることとなり、提出された動画を総研大文化フォーラムYouTubeチャンネルに掲載（限定公開）し、まとめて視聴できるよう再生リストも整備した。11月末に予稿集とともに動画の情報を周知した。

シンポジウムについては、テーマやパネリストの選定に時間がかかったことや、各パネリストの参加形態の確定にも時間がかかり、直前の数週間で様々な対応を行う必要が生じた。特にパネリストとの打ち合わせがフォーラム直前となり、2回目の打ち合わせはフォーラム1日目に行われたことで、Zoomを同時時間帯に複数稼働させる必要が生じたことは反省点である。

口頭発表については、大半が会場での発表であったため、大きな問題は生じなかったが、会場とオンラインのハイブリッド発表となった1組について、発表方法の調整が直前となりご迷惑をおかけしてしまった。

オンライン聴講の申込数については、募集開始直後とフォーラム直前に多くの申込があり、最終的には86件となり一定の成果があったと認識している。ただし申込後の動線（招待URLによりSlackに誘導する）については、招待URLに有効期限があったことや、Slackのアカウント作成に苦戦する参加者がいるなど、課題が残った。

### 3-4-2 当日の運用状況

配信系は概ね順調であった。通信の中断は一度も発生せず、配信用PCなどの機器も無理なく動作しており、映像も鮮明であった。一方で音声についてはプログラム間の切り替え時にハウリングが発生する場面があり、一部の発表者の声がかきとりづらい状況があるなど、課題が残る結果となった。既にある機材を活用することである程度の品質を確保できた映像に対し、音声のための機材はほとんどなく、相性問題もあることから、鮮明な音声を配信するほどの機材の組み合わせを検討することができなかった。今後の本学のイベントや遠隔授業などでも活用できると見込まれることから、鮮明な音声を収録できる機材をそろえることも検討するべきかもしれない。

ポスター発表においては、各者のポスターが一覧できない、Zoomのブレイクアウトルーム機能に苦戦する参加者がいた、発表者が現地参加者の質問に偏りがちで両立が難しかったことなど課題が残った。

連絡系ツールの活用状況にも課題が多かった。設けたチャンネル数が多かったのか、各チャンネルの議論はあまり活発にならず、大半のチャンネルで運営からの連絡の一方通行となった。ツールの使い方についての説明を準備する余力が運営側になく、参考URLのみ示して参加者相互で解決する形としたことも不親切であった。

質疑応答に利用したSlidoについても、「文字数制限があって書き切れない」（文字数160byte≒80字）という意見があった。進行においても会場参加者の質問を優先しがちでオンライン参加者からの質問まで回らない発表もあった。結果としてSlackの個別チャンネルでオンライン参加者の質問に答える形式となり、リアルタイムの質疑応答を実現するというSlidoの存在意義が薄れてしまった。質問の方法については、要検討である。

### 3-4-3 今後の課題

今回のオンライン運営は、この章の筆者である情報学出身の学生企画副委員長の前山和喜と、この手の業務に詳しい総研大の学務課学務支援係松園崇氏の2人でほとんどを行なうことになってしまった。私たちにとっても初めてのオンライン形式のフォーラムの運営であったため、当日にならなければわからないことが多く、ほかの委員に指示を出すことができなかったことが、2人で運用するしかなかった事情である。今後は、仕事を明確にし、事前に仕事を割り振っておくことが望まれる。

また、当日使用した機材は、総研大の葉山キャンパスと日文研の機材を併用する形で運用したため、他のキャンパスに在籍する学生は実機を前日準備まで触ることができないという問題があった。予算や情報機器の取り扱い、セキュリティの観点から、これを解決することは難しいと思われるが、今後、オンライン開催も併用していく場合には、必ず解決しなければならない課題である。

オンライン開催を併用する場合は、必ずインターネット接続が必要である。こればかりは変えようがない事柄である。オンライン開催が決まった時点で、会場となる基盤機関の企画委員は、情報関係の担当部署と密に連絡を取り、有線のインターネット環境をできる限り整備しなければならないと考える。連絡をする際は、「少なくとも利用可能な有線のLANケーブルを3口と、参加者（少なくとも数十人）が同時接続しても問題の無いWi-Fi環境が必要であること」を伝えた方がよいであろう。また、会場の音を配信に乗せるためのケーブル（今回は用意でき

なかったが、本来であればミキサーも必要である)を前日までにセッティングしてもらえるようをお願いしておくことも忘れてはならない。

対面・オンラインのハイブリッド開催にあたり、多くの方にご迷惑をおかけしてしまった。この場を借りてお詫び申し上げます。しかし、この経験をそのまま形式的な反省点としておくのでは意味がない。そこで報告集の1つのパートとしてオンライン運営の記録を残すことで、今後のフォーラムに少しは貢献することになるのではないかと思い、執筆をさせていただいた。次年度以降の学生企画委員にノウハウとして引き継いでもらえれば幸いである。

## 4 関係者による開催総括およびアンケート結果

### 4-1 総研大文化フォーラムの評価と展望

フォーラム事業担当 国際日本研究専攻 専攻長 稲賀 繁美

#### ◆1日目の総括

##### 1. 「見えないものへの恐れ」について

開会式の挨拶で、国際日本文化研究センター所長の井上章一氏は、リオデジャネイロの病院で診察のおり、ベッドに上がるのに思わず靴を脱いで、医師に叱責された経験を語った。身体に内面化された慣習が異文化の環境下で逸脱行動とみなされる「文化摩擦」にresilienceの現場を見る観察である。2001年のニューヨークのテロに続く時期、北米合衆国の空港では、安全検査のために、靴を脱がされたが、筆者は、空港の検査室に設けられた絨毯を素足で踏んだその瞬間に、なんともいえない開放感、懐かしさが、足元から身体に湧き上がってきたのを、今に至るまで、痛烈に記憶している。だが、この束縛からの素足の解放は、屋内でも靴を履く文化圏の人々には、人前で裸体を晒すような違和感がある。

つづく基調講演で、小松和彦名誉教授は、危機に際会した場合の復元力が発揮されるためには、余白すなわち動きのためのマージンの確保が不可欠であることを確認した。日本語の古語では、例えば車輪の軸と軸受とのあいだの「あそび」であり、それなくしては、およそ生命の営みはありえない。現在、世界は、COVID-19と呼ばれるウィルスによる「自然界からの脅威」に対して、いかに文化的にこれを克服するか、という問いとその対応に追われている。今回の文化フォーラムも、この状況下で「文化のレジリエンス」を主題とした。だが小松先生は、生態学用語たるresilienceを文化に適用することに疑義を呈した。

その基調講演の題名には「見えないものに対する恐れ」とあった。自然科学系の学術では分析結果の数値化により、自然現象を「可視化」することに意義を見出す。だが実際には可視化された世界の裏側には、見えず、聞こえず、データとしては把握できない「隠された次元」が広がっている。可聴域、あるいは可視光線（さらにはお望みなら紫外線や赤外線さらにはX線……）で捉えられる識閾だけで「現実」を再構成するのは、重大な見落としが発生する。そうした認識上の盲点は、実際には至るところに隠されている。さらに「不可視」を「可視」に変換し回収するだけで十分なのか。むしろ「見えないもの」への「恐れ」に、人間の本质もあるのではないか。ヒトは「恐れ」をいかに手助け、あるいはいかに畏怖してきたのか。こうした方法論的な反省が、基調講演には込められていた。

##### 2. 口頭発表

ひとつの生態系は或る識閾を超えると復元可能性を失い、崩壊を遂げ、次の系へと変貌を遂げる。Resilienceとは語源としては復元弾性の謂だが、右にふれた「あそび」も、そうした弾性確保のための「余地」marginでもある。ロマン派の詩人John Keatsには「否定的能力」negative capabilityという言葉が知られる。現在の「コロナ禍」でも、医療現場や精神科の一部で、「回答のない問題への対処能力」といった意味合いで、この言葉が援用（あるいはいささか誤用？）されている。

こうした概念を参照しつつ、初日午後の3つの口頭発表に短評を加えておきたい。



まず吉川弘晃さんは「昭和初期の日本でのソヴィエト文化への視線」と題し、第一次五カ年計画期（1928～32）の日ソ文化交流を概観した。一般論として、外からの刺激をいかに受容するかの対応には、受け身の柔軟性ととも、相手に食われてはしまわない反発力も要求される。Resilienceという語彙にも、語源的にこうした伸び縮みが含意されている。だがこれは異文化交流における自己変容を分析するのに、どこまで有効なのだろうか。

次に黄叢叢さんは、中国人日本語学習者の連語習得の現場をアンケート調査に基づき、分析した。「試験を受ける」とか「大学を受ける」といった表現の場合、中国語では「受」という動詞は用いない。だが「評価を受ける」に相当する中国語表現では「受」を用いる。後者より前者が習得困難なことは、容易に想定できよう。Resilienceも、「受ける」行動に伴う反応だろうが、この観点からの日中比較も興味ある課題だろう。と同時に、日本語あるいは中国語として馴染まない表現でも、そのほうがより実感が湧く、という場合も少なくない。現時点での用法に照らして、正解か誤答かという頭ごなしの基準で分析をすすめる代わりに、それこそ言語変貌における可塑性可能性や詩的放縦 poetic license といった観点から文化の相互接触における resilience を測定するという可能性も開けるはずである。

三番手の児島啓祐さんは、『平家物語』に現れる「堅牢地神」に関する実証的な用例探索と考証を旨とする詳細な研究成果を披露した。「地震災害」との関連での「文化のレジリエンス」にふさわしい話題選択、との判断でもあったのだろうか。「災異叙述」の蒐集検討としての意義は、たしかに明確だが、その検討結果の提示が、今回の文化フォーラムの「主題」にいかなる貢献をなすのか、いまひとつ踏み込んだ研究意図を表明することも、大切な誘いの一歩となるだろう。

総じて一日目の3発表は、今回の「文化フォーラム」のテーマにどのように関与するのか、その問題意識がなお希薄であることは、認めざるを得まい。

いささか老婆心からの忠告、あるいは主催責任者の側にたった反省事項となるが、一般に、学会への発表申請の場合などには、その会合のテーマとの整合性や、当該の発表がいかにそのテーマの掘り下げや、相互連関の強化に貢献できるのかをも十分に計算しないと、採択却下となる恐れも大きい。学会の統一テーマそのものも、とりわけ大規模な年次総会などでは、ご祝儀で便宜的な「流行り言葉」に過ぎない場合もなくはない。逆に小規模な研究会であればあるほど、お門違いな提案は、いかに学術的に優れていても、評価されない憂き目に遭う。学会的環境の resilience を「読む」技能や気配りもバカにはならない。

「幸せ」とは「仕合わせ」に由来するとの発言が、木場貴俊さんからあったが、そうした社会的配慮も、会合を求心力ある盛会へと導く要因として、ゆめゆめ疎かにはできまい。

### 3. ポスター発表

第1日後半から2日目午前にかけて、ポスター発表があった。担当専攻の専攻長として、ほぼ全員のご発表について討論を交わす機会を得たが、同時並行で六件の発表となったため、この場で逐一の話題に対して筆者としての個人的意見を述べることは、差し控えたい。

一般論として、主催会場の事業担当者としての反省をいくつか述べておきたい。まずオンラインでの個別の討論と、展示ポスターとの併用には、各地に分散した会場の都合もあって、なお技術的に改善すべき点が残った。また事前に事務局よりビデオによる自己紹介を依頼したが、準備時間が不足して、直前のお願いとなったため、2日目のシンポジウムの依頼ともど

も、出席者に少なからぬご迷惑を及ぼしたことも、反省点となる。

今回の「文化フォーラム」は、総合研究大学院大学の全学事業として、冒頭には長谷川眞理子学長からもご挨拶を頂いた。自然系をもふくむ複数の専攻から、聴講希望があったとの報告を得ている。また国際日本研究専攻が所属している「国際日本研究コンソーシアム」との共催の許可を取り付け、コンソーシアム参加機関の院生による参加や発表を得たのは、今後の運営でのひとつの可能性の開拓だったといえよう。将来には、より拡大した参加者をオン・ラインで繋ぐような催し物へと脱皮することも、可能かもしれない。これをきっかけに、担当となった専攻の基盤機関だけではなく、文化科学研究科を構成する複数の施設案内を、オン・ラインを活用して、より充実させ、総合研究大学院大学や人間文化研究機構には直接属さない研究機関への発信や相互交流の機会とすることも有効だろう。

とりわけ本年度は、COVID-19の影響で、4月に入学したものの、葉山の大学本部をはじめ、研究施設への来館もままならず、自宅待機を余儀なくされ、実験や調査にも支障をきたしているばかりか、同級生や上級生とまだ生身で接する機会もない、という窮状を訴える新入生もある。こうした逆境をnegative capability発揮の機会へと転じて、例えば卒業生とも連携をめざすオン・ライン開催へと発展する可能性、さらには、関連する「国際日本研究コンソーシアム」の国際的な規模の研究会と連絡をつけることも、ZoomやWebinarといった新登場の機器活用とも相まって、積極的に開発してゆくべき方途とも言えるだろう。こうした新たな試みに前向きにご協力を惜しまれなかった、葉山本部および、各専攻さらにはその基盤機関の事務担当者の皆様にも、この場を借りて、ひとこと深謝申し上げる。

## ◆ 2日目の総括および、閉会の辞

### 1. Resilienceへの反省

1日目の小松和彦名誉教授による基調講演、および2日目午後のシンポジウム「災いから考える文化のレジリエンス」によって、今回のテーマに挙げられた「文化のresilience」、とりわけ和語に訳された「レジリエンス」の不適切さが浮き彫りにされた。だがこれは、選ばれた題目が「疑似餌」として有効に働いた証左であり、流行語を無批判に流通させる風潮の危険性を確認するうえでも、貴重な機会となった。思えばgovernabilityとは「統治能力」と誤訳されたが、本来は「被統治能力」すなわち、「お上」の命令を上意下達ですなおに受け入れる、「国民」側の「能力」。compliance研修などと言われるが、これもcom皆がpliすなわち平伏するという恭順・服従がいつのまにか「国民の良識」にすり替えられた用法。Empowermentが推奨されるが、これはそうした「力量」を望めない弱者の切り捨てを正当化する「自己責任」の議論と表裏一体である。Resilienceに「国土強靱化」の訳を与えたところにも、現在この国の「国土」意識、「強靱さ」への幼稚な憧れが反映されている。

さらにresilienceの現在の用法を見ると「敗北を認めない意固地な姿勢」という英語解説もみえる。どこかの超大国の「前」大統領は、見事にresilienceを発揮しておられる訳だ。そしてこの「飛び跳ね能力」という弾性復元を語源とする術語は、生態系が損傷を被った際の回復限界を測定する術語から、社会科学用語・行政用語へと変身を遂げるなかで、国家が獲得せねばならぬ国是の到達目標、国民が果たすべき義務へと、すり替えられた。だが沿岸部を中心に発達した都市文明は、「自然災害」に対して、きわめて脆く、復元性を著しく喪失している。そうした「敗北」を認めない「片意地」が「国策」となっている。国際日本文化研究センター

創設者、故・梅原猛が「文明災」と命名した「事象」である。

## 2. 2日目口頭発表

以上を前提として、2日目午前の口頭発表に手短かに言及したい。

宋琦さんの川合清丸研究は、まだ端緒といいながら、近代における西欧圏とその外部との思想的な出会いにおいて発生した宗教・思想上の重要な課題に肉薄する。近世の神儒仏の「三教」思想は、明治政府のキリスト教容認や神祇制度の度重なる改変とも連動して、儒教を表向きは宗教から除外する反面、神道に超宗教的な役割を担わせ、キリスト教倫理に対抗させようとする思想動向と連動する。一八九三年にはシカゴ万国博覧会を機に「世界宗教議会」が持たれ、日本からも仏教関係者が参加する。新渡戸稲造の『武士道』は世紀末転換期の宗教思想をめぐる世界的な潮流に棹さしており、姉崎正治の比較宗教学設立も含め、インド亜大陸での同時代の思想傾向、東洋的精神性 spirituality の議論（例えば富澤かな氏の研究）やイスラーム社会の近代化論とも比較が有効となる。これはとても研究者ひとりで探求可能な課題ではない。将来、国際日本研究の共同研究課題として、世界思想史的な視野から探求されるべき、壮大な課題が、ここに集約されている。総括者の専門に引きつけるなら、横山大観に《迷児》が知られる。暗黒のなか、老子、孔子にキリストが幼児に進むべき道を諭しているが、その方向は定かでない。敬神家・大観はとりわけ後年は皇国史観に傾く人物だが、人格化された神格をもたない神道は、この絵画作品には、もとより登場しない。大観が菱田春草とともにインドに招かれるのは、1902年、日英同盟締結直後のこととなる。

金丸雄一さんの三重県志摩半島地域を中心とする「アマ」（海女のみならず男性を含む海人）をめぐる発表は、「黒潮大蛇行」による環境の変化に晒される環太平洋の海産資源と、漁労を生業とする人々の営みとの接点を、両者の相互作用のなかに克明にあとづける。英虞湾から北の海底の磯根の生態系は均衡を失っているが、これにCOVID-19による商品需要の落ち込みが重なり、漁労に立脚した生活は、外部からの給付金なしには立ち行かない危機に直面している。海藻の水揚げが激減する一方、サザエの漁獲は急増しており、生態系の resilience が崩壊する危険性も指摘されている。行政の関与も含め、「アマ漁」や素潜り漁の置かれた複雑な現状を一般化するのには不適切だが、ここには気候変動や海洋学、生物資源学・社会学・行政学などの複合が要請され、また志摩半島を集約点として環太平洋全域におよぶ問題意識の共有が課題となる。現場は文理融合した分析あってはじめて有効なモデル構築の出発点となる。そしてここには水半球の資源問題という21世紀の課題が集約されている。人間文化研究機構に留まらず、総合的な調査プロジェクトが必須となるはずだ。

第3に後藤真准教授と前山和喜さんによる「近代科学資料アーカイブ構築のための課題分析」。これも総括者による問題意識に沿った整理に留めるが、デジタル・アーカイブの問題点を縦横に指摘した貴重な報告だった。まず観測機材のデジタル化や機器の更新にともない、初期デジタル・データの保存や二次使用に必要な環境が急速に喪失している。また時代遅れになった技術はデジタル記録に保存しても、もはやそれを使い熟せる使用者が存在しない。端的に言って読めない記録が膨大に増加している。さらにここには、コトとモノとの分離が顕著となる。デジタル情報は、それを載せる媒体からは遊離する傾向を呈するが、これは従来のモノ保存に重点を置いた博物館行政の保存方針では、回収不可能となる。いわば情報記録の resilience は、digitalization の進行とともに、急速に劣化している。



総括者は近年『博物館の憂鬱』といった研究書刊行に関与し、「タイム・カプセル」理念そのものが決定的に時代遅れとなっている事例に注目し、資料保存の paradigm そのものが抜本的な変質を遂げている状況を考察した。また「デジタル人文学」の近年の趨勢についても、理系の技術を文系に応用するといった「文理融合」理念では、かえって現場の喫緊の要請に対応できない背理を指摘してきた。とりわけ電子機器に関しては、現在の範例から遡行して過去の遺産を解析することには、方法論的に限界があり、それを超克することは、かえって技術上の断絶という事実を覆い隠し、偽りの連続性を捏造した歴史理解・歴史記述へと逸脱しかねない。これは1980年代にW. Benjaminの著作の再評価とともに、歴史記述における解釈学的循環／裁断として、しきりに議論された哲学的難題だが、昨今の資料資源学では、そうした知見は、あたかも存在しなかったかのごとく、忘却されている。

端的にいえばクロード・シャノンの情報理論に基礎をおいた範例 paradigm は、その出発点で、記号の伝達性そのものを communication と同一視したが、それゆえ捨象された膨大な領域が、今日、次世代以降の情報学の展開／転回には不可欠となっている。これは筆者が現在進めている共同研究会「蜘蛛の巣上の無明」の根幹に関わるので、ここに詳述の余裕はないが、先に『映しと遷し』（花鳥社、2019）題する論集で、萌芽的に扱った「不可視領域」に帰着する。これまた、本来ならば総合研究大学院大学の総力をあげて取り組むべき課題と認識しているが、その関係の科学研究費補助金申請は四度にわたり非採択となっており、今期で引退する筆者としては、本件は後世に託す他ない、将来の課題となる。

### 3. 「<異>をつなぎ、未来へ」

以上を受けて、総括の総括としたい。本フォーラムの副題には「<異>をつなぎ、未来へ」とあった。遺産を未来に継ぐことが、archivesの使命だろう。「継ぐ」tsuguは日本語では「繋ぐ」tsunaguや「償う」tsuginauときわめて近傍にある語彙群となる。ところで「遺産」は英語ではheritageあるいはlegacy、これに対して「償う」はcompensateで、欧米語では両者には語源的に相互関係は見いだせない。日本語の場合、「つぐ」ことには「つぐない」の意味が含まれているが、「償う」とはなんらかの損失・喪失を前提としている。「継ぐ」には取捨選択が回避できず、そこにresilienceが働く。言い換えれば「継ぐ」こと、すなわち次世代へと「繋ぐ」ことには、その裏に犠牲を伴うほかない、との意識が言語的にも確認できる。ここに「死者」と「生者」とをいかに「繋ぐ」かの問題が、姿を現す。

川村清志先生の発表では、気仙沼に残る、片手片足の石碑の事例が報告された。欠損には、言語的な秩序（「象徴界」）にも回収できなければ、非現実による代償幻想（「想像界」）にも転嫁できない、表象不可能な現実（「現実界」）が託されている、とのラカン派的解釈が演者からは示された。それへの補助線となるが、この欠損像には、後世が過去を「継ぐ」際にその前提として心得ねばならない「喪失」が刻み込まれている、とは言えまいか。そして、近親者の死に際会すると、その喪失を「償う」べくそこにはおのずと歌が生まれ、踊りが出現する。それが「まつり」のひとつの発生論的原初形態でもあったはずだ。

シンポジウムでも話題となった玄侑宗久には、出世作『中陰の花』がある。近親者の供養を話題とする短編小説だが、その文庫版への解説で、河合隼雄は死者つまり「ほとけ」は、個としての人格が「ほどける」ことで成仏し「ほとけ」になるのだ、と説いている。固有名を帯びた主体は死を契機として、無名の存在へと「ほどけ」てゆき、この解体とともに、先祖の一員

へと変貌する。これもシンポジウムで話題となった岩手や宮城の「鹿踊り」は宮澤賢治も「鹿踊りのはじめ」で取り上げた話題だが、ここで賢治は、人間の世界と鹿たちの世界とが「つながる」一瞬を捉えている。さらにその鹿踊りは先祖供養でもあり、死者が生者の世界から「ほどける」ための儀礼でもある。「つなぎ」「ほどける」服喪には<異>世界との遭遇は不可欠の契機であった。おりから没後半世紀を迎えた小説家の三島由紀夫は、創造が経糸だとすれば、礼儀礼節は横糸であり、両者が交差するところに霊性が宿ると語っていた。よく考えれば危険な思想にも直結する想念だが、我々の文脈では「創造」にあたるところに、世代間を「つなぐ」「つぐない」のありかを重ねることもできよう。

\*

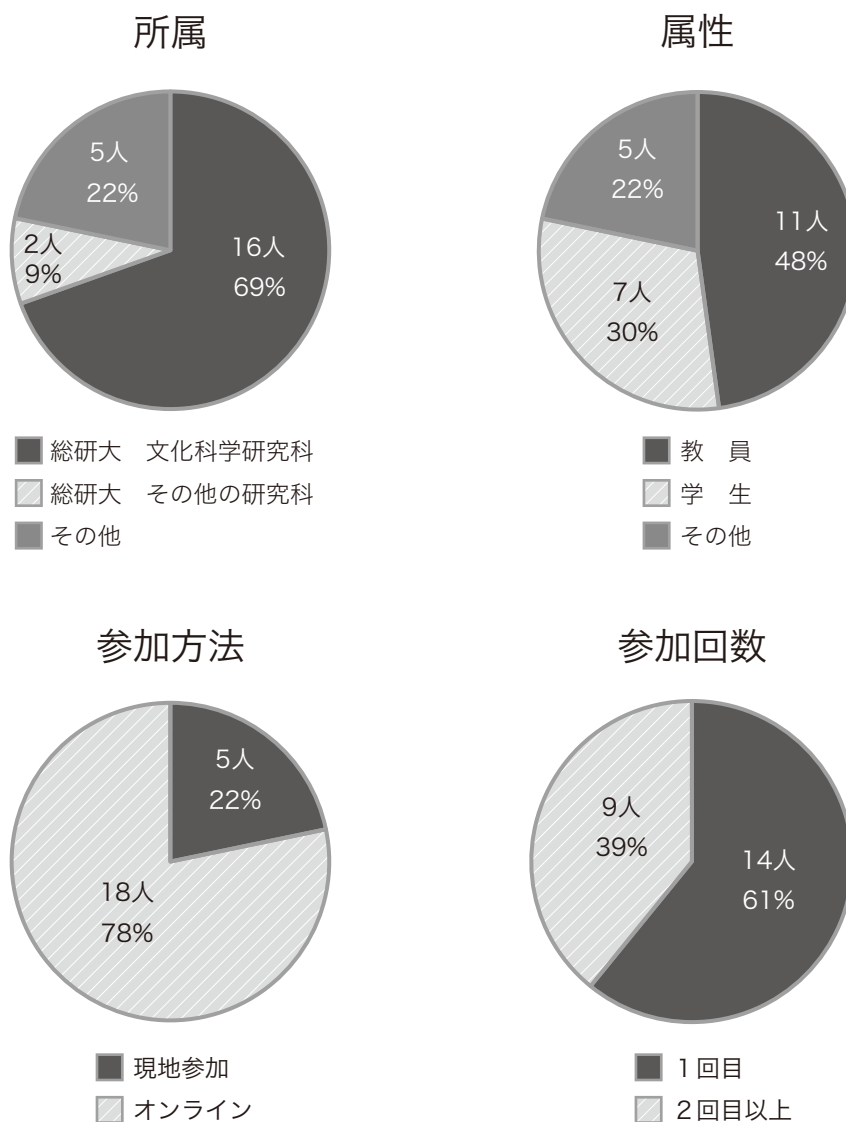
はじめてのオン・ライン開催となった今回の「文化フォーラム」が、それにふさわしい事業報告書・論文集を残し、それが、総合研究大学院大学の異なる分野を「つなぎ」、今の災厄を通して、将来の世代へと経験を「つなぐ」機会として生かされることを祈念し、関係者皆様への謝意を込めつつ、フォーラム事業担当専攻の専攻長としての総括に替えたい。



## 4-2 アンケート分析

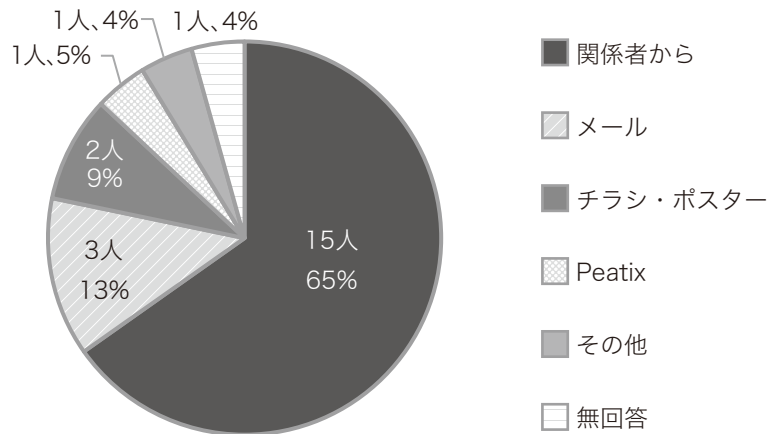
実施時期：令和2年12月6日（日）～14日（月）  
対象者：発表者、講演者、会場聴講者およびオンライン聴講申込者  
実施方法：Google Formによるオンライン回答  
回答数：23件

### 1. 回答者の属性について（択一回答）



## 2. 参加のきっかけについて

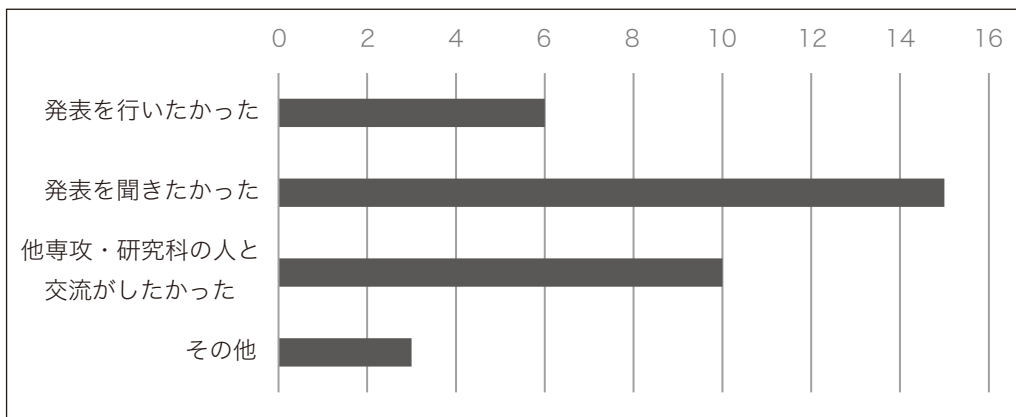
Q. 今年度に開催するフォーラムを知ったきっかけについて（択一回答＋その他自由回答）



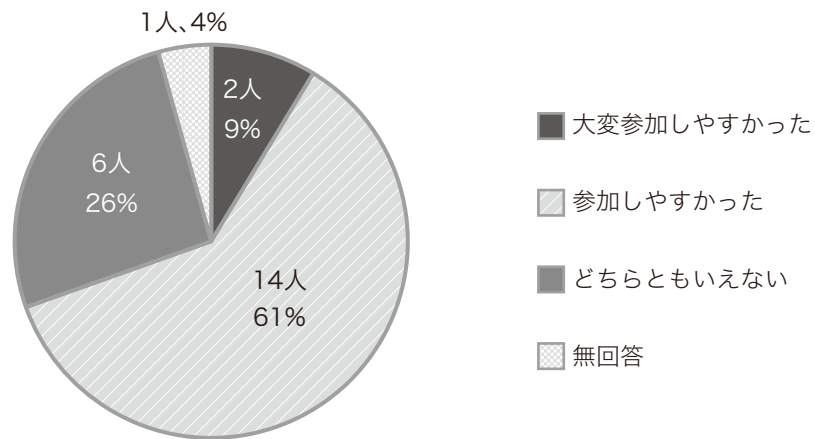
（その他の回答）

- 歴博へ「性差（ジェンダー）の日本史」を見に行ったことがきっかけ
- 「性差の日本史」について、ニコニコ美術館の配信を視聴したことがきっかけ

Q. 本フォーラムに参加された目的を全てご回答ください（複数回答可＋その他自由回答）

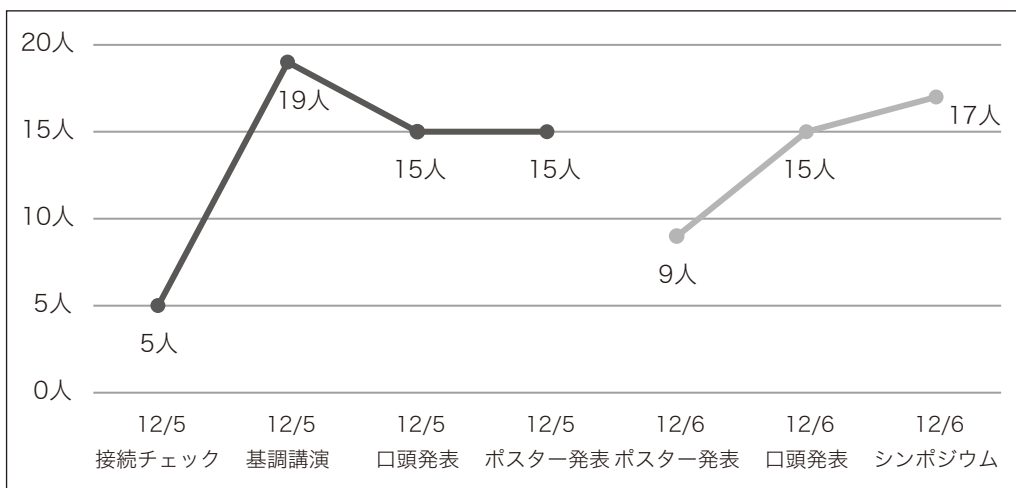


Q. 開催時期についての印象（択一回答）

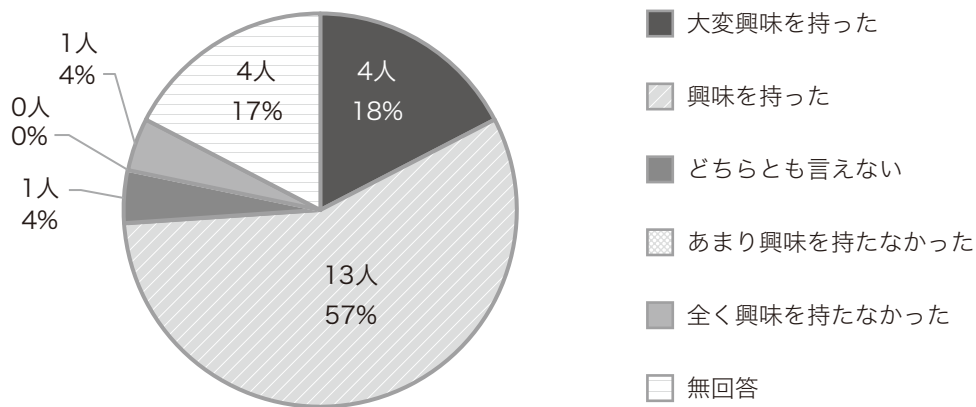


3. 各プログラムについて

Q. 参加したプログラム全てを選択してください（複数回答）



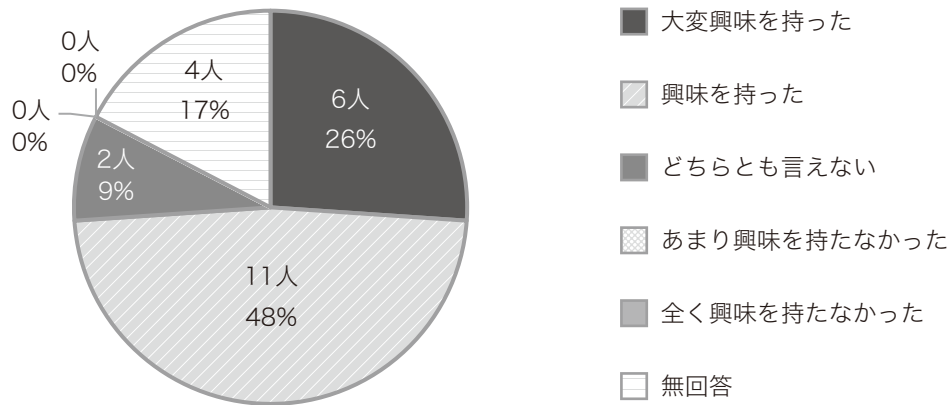
Q. 基調講演の印象をお聞かせください（択一回答）



Q. 基調講演について、ご意見があればお書きください（自由回答）

- とても面白かったです。質疑応答の時間が少したりなかったと思います。
- ご講演内容は素晴らしかったものの、残念ながら講演内容自体よりも、Zoomを使い慣れていない方々による音声干渉やハウリング、その他トラブルの方が気になってしまった。
- 普段歴史や民俗という分野とは別の分野で研究しているので、全くの門外漢なのですが、自分の分野だとどうい論理展開になるのかということや、プレゼンの仕方の違いを考えながら、大変面白く聞かせていただきました。講演テーマにどのように自分のテーマを関連づけるやり方が非常に面白かったです。
- オンラインで聞きましたが、音声の聞き取りが困難でした。
- テーマに沿ったとても充実した内容でした

Q. 口頭発表の印象をお聞かせください（択一回答）

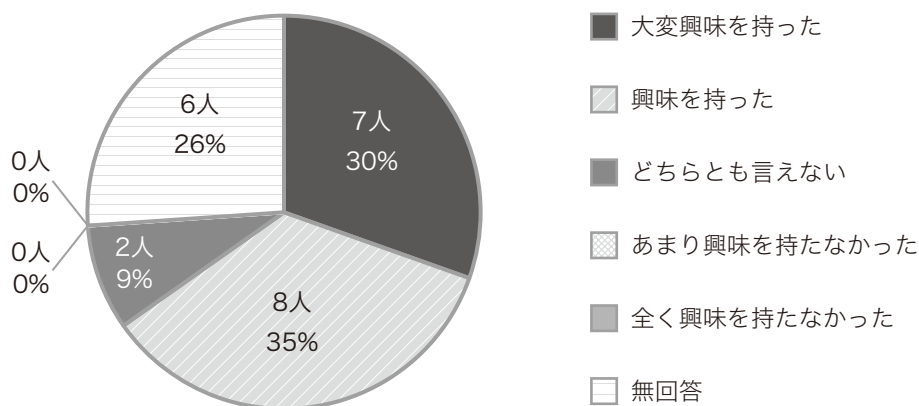


Q. 口頭発表について、ご意見があればお書きください（自由回答）

- 質疑はほぼ運営委員と発表者同士に限られていたのが、非常に残念でした。
- 他専攻・他大学院で進められている成果を学ぶことができた。今後もいろいろな領域・大学の発表者の交流の場であって欲しい。
- また質疑応答の時間は少し短かったです。
- こういった意義深い研究が、もっと広く世に知られて欲しいと思う。
- 出来れば全部に印刷資料がほしかった



Q. ポスター発表の印象をお聞かせください（択一回答）

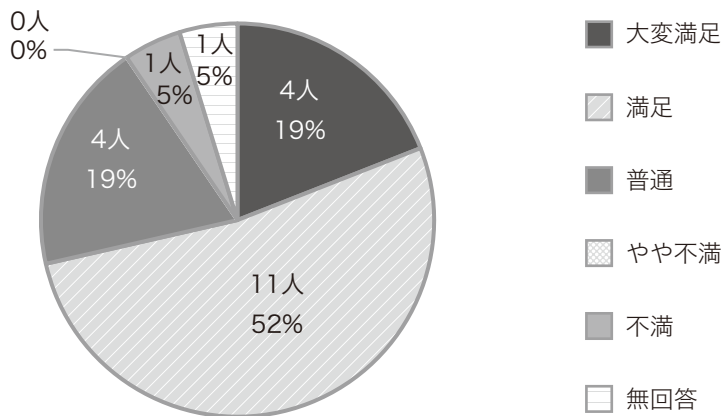


Q. ポスター発表について、ご意見があればお書きください（自由回答）

- ポスターの対面とオンライン併用のアイデアは面白いですが、発表者の負担が大きかったですし、現地参加者がほとんどいなかった点に鑑みても、オンラインのみに限定すべきだったのではないかと思います。
- 交流の場として機能していた。2日目も事前画像を共有する時間があったのも良かった。もし共有されていたら、勘違いです。申し訳ありません。
- 研究発表をなさった先生に直接質問ができて、光栄だった。また、一流の研究者がこんなにも謙虚でいらっしゃることにあらためて感激した。
- テーマの持ち方と発表方法や議論の進め方が、自分の分野とかなり違うんだなと考えながら聞かせていただきました。直接お話しして、どういう方向性を目指しているのか、どういう点が（量的ではなく）質的な研究にこそできることなのか、どういう点が地域性の理解になるのかを直接お尋ねできてよかったです。
- ヨウヒッコの発表、楽器にもその視点にも発表者にも興味持ちました。

#### 4. フォーラム全体を通して

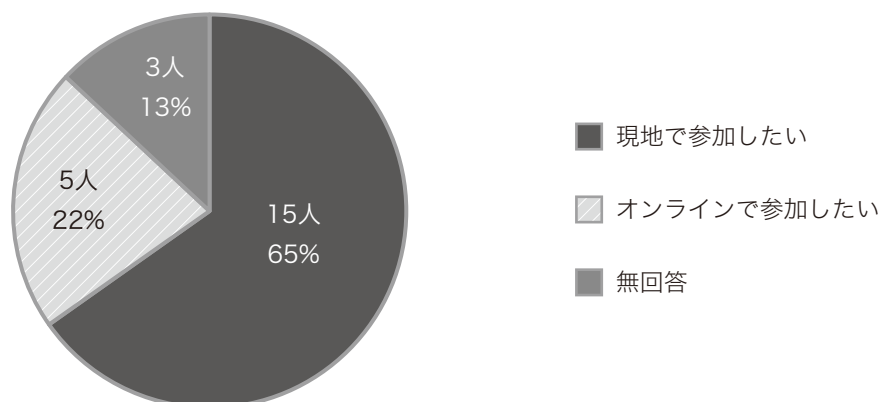
Q. フォーラム全体を通した満足度をお聞かせください（択一回答）



Q. 総研大文化フォーラムについて、ご意見があればお書きください（自由回答）

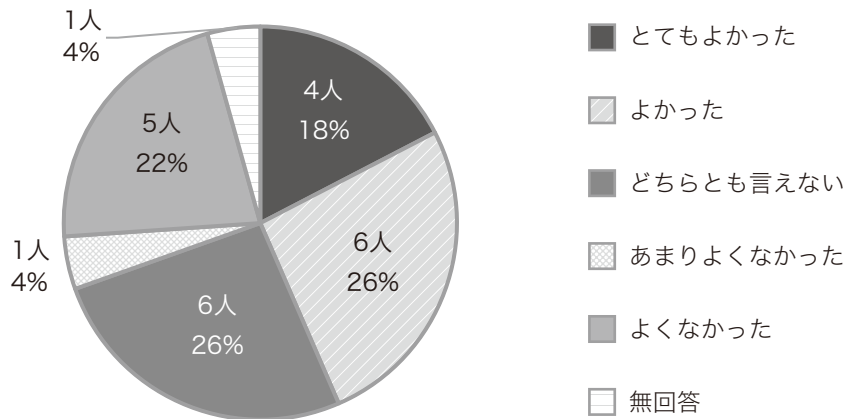
- 楽しかったです。もし他専攻の発表があればもっと面白いと思います。
- 内容盛りだくさんではなく、もっと簡略化・省力化してよいと思う
- 今回は学外の者にも門戸を開いて下さって光栄です。一方で、参加者がとても少ないことは残念でした。総研大の存在自体があまり知られていないのではないのでしょうか。せっかく意義ある研究をなさっているのに、もっと総研大と研究内容・実績について、広報・宣伝をなさるのが良いかと思います。
- 私は現在別分野にいる学生なのですが、異分野の研究にも興味があり、院修了後もお話を聞けるチャンスが欲しかったので、外部の人間にも参加方法が開かれたのは嬉しい点でした。総研大は広い視点を売りの一つにしていますが、自分の分野だけに汲々としていると、やはり視点は狭くなります。たとえ自分の研究成果で直接的には貢献しないとしても、学問分野を支える上でどういう思想があって、どういう方向性が分野において全うとされるのかがわからないままだというのはお互いに分断が強まると思います。ぜひこのまま続けていってください。
- オンラインでの参加でしたが、うまく入ることが出来ませんでした。そのため配信されているポスター発表しか拝見出来ず、大変残念でした。オンラインでの参加は、操作などのハードルが高いので、十分な事前の情報提供が必要かと拝察します。総研大フォーラムを、今後もオンラインで行う可能性がありますので、今回のオンライン開催での反省点を十分にご検討頂くことは、大変意味のあることと拝察します。
- 参加のためのurlが分かりづらく、随分手間取りました
- Peatixというアプリ(?)に不慣れなため、2度目にログインの方法がわからなくなり、あらためて参加登録をし直しました。PeatixとSlackとSlidoとZoomとYouTubeの関係がはよくわからないながらも、すべての報告を聞くことができました。

Q. 次回のフォーラムも参加したいと思いますか？  
(次回は国立歴史民俗博物館で開催予定です) (択一回答)



## 5. オンラインツールについて

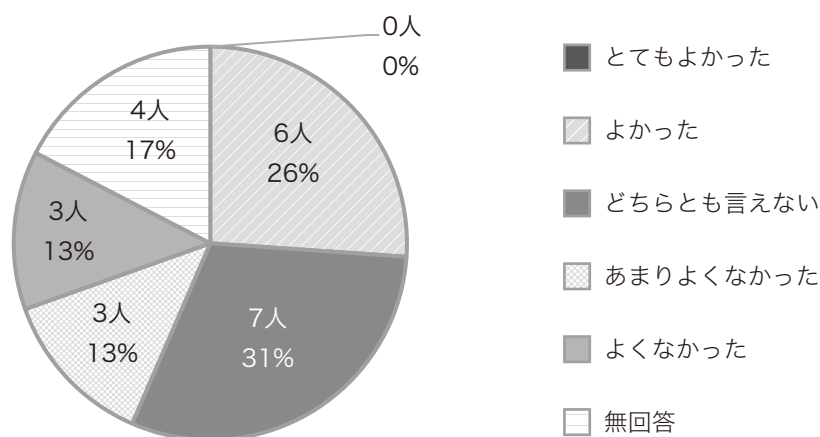
### Q. 情報共有（Slack）はどうでしたか？（択一回答）



### Q. 情報共有（Slack）について、ぜひご意見をください（自由回答）

- ログインが大変難しく、運営委員同士のやり取りには良いのですが、一般参加者としては不便極まりなかったです。なぜそのツールを使うのか理解できませんでした。
- 情報共有ができますが、使い方は少し不便です。
- 情報の共有方法としてはわかりやすいが、スレッド自体はもう少し改善の余地があると思われる。
- 初めてなので慣れなかった
- Slackにしても、今回のオンライン開催にしても、学外の者にも門戸を開いて下さって光栄です。
- 使いにくかった。
- SlidoやZoomなどで質問方法や情報が錯綜しており、どれを使えばいいのかわからなかった。
- 他の方の情報が頻繁に入るのですが、最も重要なフォーラムに参加する方法が分からなかった。

Q. 質問サイト (Slido) はどうでしたか？ (択一回答)

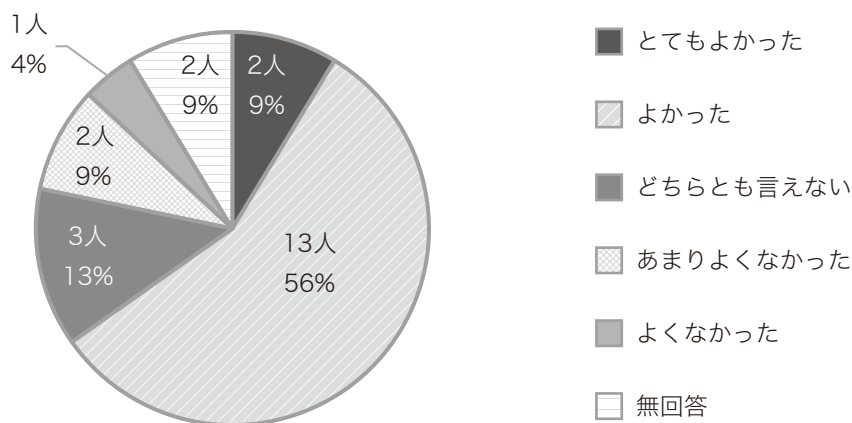


Q. 質問サイト (Slido) について、ぜひご意見をください (自由回答)

- その存在すら、発表者及び聴講者であった私や、私の専攻の事務の方も、把握しておりませんでした。口頭発表でも、実際にほとんど書き込まれていなかった点に鑑みても、委員や日文研の事務員の方を除いて、正直まったく周知がなされていなかったのではないのでしょうか。最後のシンポジウムでも、司会者がそこに書き込まれたコメントを全く拾うことができなかった点に明らかなように、不必要なツールであったと考えられます。Slackの掲示板機能で充分でした。事実、先生方の質問はSlackに書き込まれておりましたし、結局シンポジウムでの書き込みはコピーしてSlackに移植されておりました。不要な混乱が生まれていました。
- 入力に時間を要し、会場の進行に間に合わなかった。ただし、のちに発表者より丁寧な回答をいただけたため、とても良かった。
- Slidoでの質問を見ているほどの余裕がなかった。
- 少し不便だと思います。
- こちらは文字数などに制限があるようで、やや使いにくかった。
- 大学や研究機関等ではSlidoがよく使われるが、ZoomのQ&A機能で質問を寄せる方が皆にとって使いやすいと思う。
- SlidoやZoomなどで質問方法や情報が錯綜しており、どれを使えばいいのかわからなかった。
- @で指名して発言しないと質問してもメールが届かないため、発表者に気づいてもらえない場合があったので、できれば@指名は禁止しないでほしいです
- 見方が悪かったのかもしれませんが、他の人がどのような質問をしているのか、見てみたかったです。
- Slidoを通じて発表者に質問したところ、答えは発表者からメールで来ました。そういうものなののでしょうか？



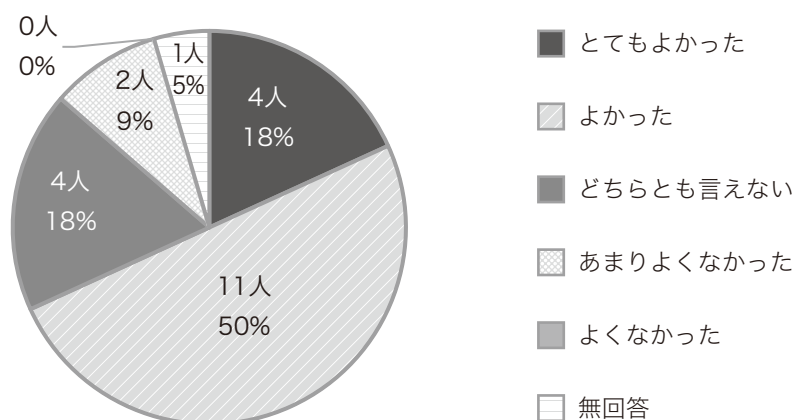
Q. オンライン配信（YouTube Live）はどうでしたか？



Q. オンライン配信（YouTube Live）について、ご意見があればお書きください

- 会場マイクのハレーション。難しいですけれど、マイクの使い方練習も必要かもしれない。
- この方向性がコロナの如何にかかわらず、今後のデフォルトだと思います。
- オンラインならば、遠方にも、在宅で介護や育児などをしている人でも、身体に障害があって会場へ来るのが難しい人でも参加できるので、今後はオンライン開催が基本になると良いと思う。
- 音声テストをして、きちんと発表者の音声をひろっているのかを確認するべき。ディスカッションのやりとりが聞こえない時があった。
- 現地滞在の時間を取られずにリアルタイムに視聴できるのは大変よかった点だと思います。一方、直接発表者とお話できる機会が限られるのが残念ですが、新型コロナが終息しても、オンラインで視聴する選択肢は残ると大変嬉しいです。
- フォーラムに入ることは出来ませんでした。ポスター発表の配信を見ることができました。
- 参加のためのurlが分かりづらく、随分手間取りました
- 音声が聞き取りづらかったです。
- YouTubeだとライブ感がないように感じた。

Q. オンライン開催（全体）はどうでしたか？



Q. オンライン開催（全体）について、ご意見があればお書きください

- このたびは大変お疲れさまでした。異例の事態ながら、見事に完遂なされたことに、運営委員や事務の方々、先生方には頭が上がりません。以下、改善点を思いつく限り列挙いたします。

**改善点**

- まず、例年は宿泊施設を用意していただいていたはずですが、今年は各自で予約しなければならないことを、現地参加者にあらかじめ連絡がなかった点です。私は行く直前になって、今年は予約を自分でしなくてはならないことを知り、慌てて予約をとりました。宿泊方法やアクセス方法等は、事前にアナウンスしていただきたかったです。大変、困りました。
- フォーラムに関して、今年は報告集を作る旨を、発表申請〆切直前になって聞いた点です。それほど大きな変更点は、ある程度、早い段階で連絡が必要ではないでしょうか。また、査読無しの報告集にどれほどの意義があるかも疑問で、もしもおこなうならば、『総研大文化科学研究』との連続性を持たせれば良いのではと思われました。自由でアイデア重視の発表ができる点が魅力であり、また、もしも論文化する場合は別所に投稿すると思われるからです。
- 特定分野の学会との違い、自由度は高く、テーマの妥当性をキリキリと論じることなく（レジリエンスの問題点を確認する結論となった）、しかし前進できたのではないかと。発表者確保、運営、進行いずれもお疲れ様でした。
- 試みとしては良かったと思います。準備・運営のご苦勞を拝察します。
- 今年の状況で仕方がないですが、現地参加したいです。
- スタッフは、よく頑張ったねとしか、言えない。

- 今回運営にあたった方々の苦労には敬意あるのみ。ただし、今後も同じレベルを強要するようなことは避けたい。学生に参加を強制するのは本末転倒。
- オンラインならば、遠方においても、在宅で介護や育児などを行っている人でも参加できるので、今後はオンライン開催が基本になれば良いと思う。尚、私自身は通訳・翻訳業を行なっているので、その面で何かお役に立てると嬉しいです。  
尚、いろいろと実現困難な理由があるのは理解できるのだが、できれば「性差の日本史」は、全国巡回展示していただければと思う。あるいは、特設ウェブサイト等でずっと閲覧できるようにしていただければとも思う。
- 情報共有サイトが分散していて、どこを見ていけばリアルタイムにお知らせが来るのか、最初少し戸惑いました（YouTubeとSlackとSlidoを反復横跳びしていたので）。このような開催方法が初めてのことで運営の方は大変だったと思います。お疲れ様でした。直接現地に行けない異分野の人間にも門戸を開いてくれてありがとうございます。
- 1.特に初日の音声聞き取りづらく、次回は調整を万全にしてほしい。  
2.放送URLの確認が面倒だった。意図的にしているならば良いですが、YouTube Liveを選んでいるわけですしもっとアクセスしやすくしては。  
3.前記に近いですが、資料も取りやすくして欲しい。  
4.告知。各発表をビジュアル1枚で広報するなど一目で伝わる要素を作っては。  
5.イベント全体のロゴマークなど用意しては。
- コロナ流行がなければ、やはり現地開催の方が良いのではないのでしょうか。金銭的な理由などから移動できない方対象に、オンラインでの参加も可能であるように、ハイブリッドでやる、という方向も今後は考えられますね。オンライン開催の場合は、丁寧に参加方法などを情報共有することが大変大事なことで存じます。
- 長時間をオンラインで参加するのはちょっとキツイですね。もう少し細切れにでも、ゆっくりできる休憩時間が挟まるといいと思います
- SlackやSlidoについてはあまりよく分かりませんでした。

### 4-3 学生企画委員としての総括と反省

2020年度学生企画副委員長 前山 和喜

本節では、学生企画副委員長の視点から、今回のフォーラムについて思うところをまとめる。2020年は、COVID-19の感染拡大という未曾有の事態に陥り、研究活動だけでなく日々の生活にも大きな変化を求められた一年であった。本年度の学生企画委員は、出口の見えない未来に不安や戸惑いを抱きながら活動をするようになった。本総括も今年の特異な事情が多分に含んでいることをご容赦いただきたい。

本フォーラムの学生企画委員が組織され、活動を開始したのは、(一度目の)緊急事態宣言が解除されて間もない6月頭のことである。実施するの可否かも確定していない状況でのスタートとなった。そのような中で、テーマの選定を行ったが、やはりどうしても時勢を反映せざるを得なかったように思う。後になってみれば、時勢と切り離し、自由にテーマ設定をすればよかったと気が付くのだが……。結果的にテーマは、「文化のレジリエンスとは？－〈異〉をつなぎ、未来へ－」に決定した。やはり議論になったのは「レジリエンス」という言葉である。総研大文化フォーラムの性質上、(いわゆる)理系の人たちも参加するため、(いわゆる)文系過ぎないテーマが求められるが、「レジリエンス」に“理系性”を押し付けてしまったのは反省すべき点である。今後は、必ずしも理系性を意識しすぎることなく、学生企画委員がやっていて面白いと思えるテーマを選定すべきである。

学生企画委員間のやり取りは、一か月に一回行われる学生企画委員会(約3時間)とSlackがすべてである(特に今年は大学に登校する機会も少なかったため、各専攻の事務とのやり取りも希薄になってしまったように思う)。各委員は、言ってしまうと、そのチャンネルで得られる情報だけで、行動しているため、どうしても他人任せにならざるを得ない。各委員の所属がバラバラであるのだから、むしろ積極的に連絡を取っていくことが求められる。そのための仕組みづくりをすることは、副委員長が担うとよいと思われる(今年度、その仕事をしなかったのは副委員長の筆者である)。委員長は思っている以上に多様な仕事(特に連絡や調整の仕事が多い)があるため、そこまで手が回らないと思われる。

また、意思決定の遅さは、ぜひとも改善すべき点である。フォーラムに関する意思決定は「学生企画委員会での決定→専攻長会議での承認」という流れになる。にもかかわらず、本年度の学生企画委員会の日程は、その月の専攻長会議よりも後にあるため、学生企画委員会での決定が承認されるまでに、約一か月のインターバルがあった。各委員の負担にはなってしまうが、学生企画委員会は専攻長会議の日程の前後に小まめに行うべきである。

結果的に、夏ごろまでに決まったことの半分以上は、秋に決めなおしとなった。懇親会や現地での特別プログラム、分科会シンポジウムなどである。社会的情勢に左右されることになるとのあいまいな見積もりではなく、最初から具体的に決定してしまえばよかったのだが、例年のやり方をできる限り踏襲しようという性格が学生企画委員の中にあっただけのように思われる(自分も持っていた)。来年度は外的(社会的・人間的をともに含む)な要因に左右されることなく意思決定を行っていくことが望まれる。

委員同士が初めて対面で会ったのは、フォーラムの前日準備の日であった。オンライン通話の画面越しでしか見たことなかった各委員の雰囲気や人柄をその時初めて知ることになる。現地での作業を通じて、業務的な付き合いだけでなく、オンライン飲み会などによって日常的な会話をする機会を作り、各委員の人となりを知っておくことの重要性を感じた。奇しくも、二月

に行われた総研大の物理科学研究科共通専門基礎科目「プロジェクトマネジメント概論」を（他専攻であったが）履修した際に、同じような話を学ぶことになった（もう少し早く知っていたら、少しは学生企画委員の仕事の割り振りなどの運営をもう少しうまくできたかもしれない）。

フォーラム本番は、常に人手が不足していたが、各委員が主体的に動いたことで、大きなトラブルなく、無事終えることができた。企画委員の人員は、例年の対面実施の時と同じ人数であったため、オンラインのための業務にも人員を割かなければならなかった今年は、必然的に人手不足になった。この点、事前に分かっていたことであるため、手を打つべきであった。ただ、ここには、研究活動で忙しい博士課程の学生の中から、誰を補充するのか、どのように決めるのかなど人員確保のための意思決定の難しさがある。来年度もオンラインを併用した開催が見込まれるため、事前に多めの人数確保が望まれる。

また、個人的な思いではあるが、オンライン開催のためのほぼすべての業務を二名（前山と総研大学務課務支援系の松園さん）で行なったことはとても大変であった。ほかの委員に手伝ってもらおうにも、現地での運営業務があったり、そもそも業務を分業（指示ややり方を教えること含め）することが難しかったりと、割り振ることができなかった。ある程度の流れは事前に把握していたが、それ以上に、マイクやカメラの環境、オンラインの接続環境など、現地入りしてからでないとうわからなかったことが多すぎたためと考えられる。事前に、オンラインで現地環境を各委員に周知したり、配信のための設備は何を使うのかなどを整理したりと、次年度以降はできる限りの情報共有をする業務をあらかじめ設定しておく必要があるだろう。これは全くの個人的な希望であるが、今後の開催ではオンライン配信に関する業務はすべて外部団体（企業）に委託する方がよいと思われる。

最後に、総研大文化フォーラムについて、課題を投げかけて本総括を終える。本フォーラムを続けていく上で、一定の答えを出さなければいけないことは、「誰のためのフォーラムであるか」と「何のためのフォーラムであるか」の二点である。学生だけで決められることではないため、ぜひとも専攻の先生方にも問いかけたいことではあるが、まずは、学生企画委員会の中で、認識を揃えることが重要だと思われる。もちろん、学生のためのフォーラムであり、成長の場であるという安直な答えはすぐ出るのだが、実態がそのようになっているかは、ぜひとも適宜思い返して欲しい。

末筆ではあるが、オンライン併用開催の運営は、総研大学務課務支援系の松園さんがいなければ、まず間違いなく遂行することが出来なかった。この場を借りて、お礼申し上げます。



## 5 資料

### 5-1 第1～8回学生企画委員会議事次第・議事録

#### ■第1回学生企画委員会議事録

##### 【概要】

- ◆日時：令和2年（2020）6月11日（金）  
15:30～17:40
- ◆場所：Webexによるオンライン会議
- ◆出席者（敬称略）：
  - 学生企画委員：全員出席（石原、前山、岩下、金丸、服部、宋、王、伊藤）
  - 担当教員等：池谷、稲賀
  - 事務：各基盤専攻大学院係、葉山本部・学務支援係

（議題）

#### 1. 「総研大文化フォーラム」について

稲賀専攻長から、会議の最後にまとめて発言があった。

#### 2. 学生企画委員会について（学生企画委員長、副委員長および役割分担について）

学務支援係から、「役割分担表（案）」（資料2）に基づき、学生企画委員会の委員長及び副委員長を選出することについて説明があり、委員長は慣例により会場校となる基盤機関の専攻から選出を行うこと、副委員長は次年度の総研大文化フォーラム担当専攻である日本歴史研究専攻から選出したい旨提案があり、了承された。

なお、他の役割分担については、今後プログラム等を固めていく過程において、各作業内容等を精査し、適宜担当者を決めていくこととした。

委員長の選出について、会場校となる国際日本研究専攻の委員3名で議論した結果、国際日本研究専攻の石原委員が委員長に立候補し了承された。

副委員長については、石原委員長から、慣例に基づき、日本歴史研究専攻の前山委員を副委員長として推薦したい旨提案があり、了承された。

■委員長 国際日本研究専攻 石原知明

■副委員長 日本歴史研究専攻 前山和喜

#### 3. 開催日程・今後のスケジュールについて

学務支援係から、「2020スケジュール素案」（資料3）に基づき、今年度の総研大文化フォーラムは12月5日（土）・12月6日（日）の2日間の日程で行うこと、及び6月～7月までに行うべき作業スケジュール等について以下のとおり説明があった。

6月までに開催趣旨、プログラムの大枠及び募集要項を決定する。

7月初めに学内周知を行う。

会議開催回数はグループウェアでの意見交換を踏まえ、回数を増やすことも可能であること。

加えて、稲賀専攻長から、以下の補足説明があった。

開催日程は12月5日・6日と決定しているが、（新型コロナウイルス感染症の影響を注視しながら）場合によっては、開催日程について再検討する可能性があり得ること。

会場は現在のところ日文研となっているが、日文研で実施するのか、京都市内の別会場で実施するのかを検討する必要があること（かつて国際日本研究専攻が会場校の際に、別会場で実施したことがある）。

テーマについて、本日の会議でできる限り議論すること。

スケジュールについて質問等があり意見交換を行った。

- ・口頭・ポスター発表について、8月末では〆切日程が少し早いのではないか。（宋委員）
- ・申込〆切の時点で、（予稿集原稿まで）提出しなければならないのか、それともテーマ・要旨のみの提出でよいのか。（王委員）
- ・スケジュール案は例年の作業スケジュールを基に作成している。口頭・ポスター発表の申込時は、テーマ・要旨のみの提出でよい。予稿集原稿の〆切日を別途設けている。昨年度は発表数が集まらず、〆切を一か月程度延長した経緯がある。（学務支援係）
- ・11月・12月は（日文研で）様々な行事が開催予定である。1つは国際日本研究コンソーシアムが11月に東北大学と共同で実施される予定である。新型コロナウイルス感染症のため、現在のところ状況がはっきりとしておらず、また準備が大変となるが、準備を上手く進めることができれば、コンソーシアムと合同で開催することもあり得る。また、11月に九州の平戸で三浦按針の没後400年の催しが開催される予定である。（このように他行事との兼ね合いから）場合によっては、皆さんが1つの場所で（開催・参加）できない可能性があり得る。その場合に、オンラインで各基盤機関をつないで開催する形態も検討する必要があることを頭に入れておいてほしい。

（稲賀専攻長）

- ・このような（新型コロナウイルスによる影響がある）現状では、オンラインによる開催については例年以上に考える必要があるかと思う。（石原委員長）
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により、各基盤機関の行事予定に変更が生じているかと思う。各行事開催が延長となり、文化フォーラム開催時期と重なる可能性がある。他行事と文化フォーラムの開催日程がバッティングする場合、準備作業の負担になりかねないので、くれぐれも無理のないように進めてほしい。（稲賀専攻長）

→各委員においては、所属機関における大きな会議・イベント等の行事開催日程の変更情報を収集し、学生企画委員会内で情報共有するようお願いしたい。

（石原委員長）

#### 4. テーマについて

石原委員長から、「総研大文化フォーラム2020テーマ・趣旨案」（配布資料1）及び「参加募集要項・プログラム2016～2019」（参考資料1）に基づき、本日の会議に先立ち、学生企画委員に対し意見照会を行った今年度で開催するフォーラムのテーマ・趣旨案に関する回答結果に基づき、意見交換を行いたい旨提案があった。

テーマ案に関する意見交換の内容は、以下のとおり。

##### ○各テーマ案とその趣旨の説明について

- ・今年度は新型コロナウイルスがトピックに上がっている。新型コロナの影響を乗り越える際に、過去の医療や医療従事者の経験が乗り越える手立てになっている。また、2016年に発生した熊本地震においても医療に限らず、文化財が失われる危機になった際に、今までに培ってきた技術等が文化財の修復等に貢献している。これらのことを踏まえ、テーマ案を作成した。（岩下委員）
- ・「災禍を越える人の知」というテーマを提案する。災いは人災・天災の両方の観点から、災禍を越える人の知、紡がれてきた文化の強靭さを考える。弾力性、レジリエンスによって、人間の文化・人の知は、このような状況を乗り越えてきて、人類史的にも今の社会の繁栄に至っているのではないかと思う。文化科学研究の領域から、歴史・人類史的な視点も踏まえ、（災禍に）向き合ってきた歩みから、今の時代どのように向かっていくかを（テーマとして）取り上げた。今年度は新型コロナにより、自身の職業分野においても例年と比べ大きな

影響が出ている。また、天災により、人の生活・生業は大きな影響を受ける。このように様々な観点から、フォーラムにおいて学際的に扱うことができるのではないかと思います。

(金丸委員)

- ・新型コロナ対策として、今年度のフォーラムの開催形態がオンラインによる開催になることも念頭において、「参加する」ということはどういうことであるか、フォーラムを通して学際的に考えたい。また、いかに知的交流の場を開けるかも考えつつテーマ案を作成した。(服部委員)
- ・今年は新型コロナの影響により、全世界で知をわかち、文化を交流することが重要であると意識された。本研究科は四つの基盤機関に分かれており、(物理的な距離があるため)日常的に交流することが難しく、毎年開催される文化フォーラムを通して、他機関・他研究分野との交流が行われており、本研究科においては重要な機会となっている。今年度は日文研が会場校であるので、日文研の特色を踏まえて、フォーラムを開催したくテーマ案を作成した。(宋委員)
- ・今年は、新型コロナウイルスの世界的な蔓延により、「世界」というものが意識された年ではないかと思う。同時に今までの考え方や生活様式が大きく変わっていくことが予測されている。その中で改めて問われることは、国ごとのもしくは世界という尺度で作られてきた「文化」ではないかと思ひ、「文化」を学際的に見つめること、見つめ直したものを新たな考え方のベースにできるのではないかと考えてテーマ案を作成した。人類の長い歴史の中で育まれてきた知恵を研究し還元できるのではないかと、本フォーラムを今一度「文化」を考え捉え直す機会にできればと思う。(石原委員長)
- ・テーマを考えた出発点は、新型コロナの影響がある。また、過去の文化フォーラムの

テーマを見ると、異分野の交流が中心的な考え方であったように思う。新型コロナによる影響により、今年是世界中で様々な交流が制限されているように、新型コロナのようなパンデミックがこれからの社会に与える影響を考えたい。国際関係にも大きな変動が見られる中で、今後ますます異分野・異文化の垣根を越えられる力が必要になると思ひ、テーマ案を作成した。(王委員)

- ・このような状況下にある(新型コロナによる影響がある)社会では、生活の一部を変えざるを得ない状況になってきている。今後、変わっていくであろうことや、変わらない普遍的な「価値」や「文化」を見通す時には、足場をきちんとしなければ、何が変化し何が変化していないのか不安定のまま、より混沌とした社会になってしまうのではないかと思う。価値観をしっかりとほかることができるようにするために、「文化」というものをより深く知る必要があるのではないかとの思ひから、文化科学研究の成果を共有するというフォーラムを行うことで、今の不明瞭な未来を進むための足場を築いていくというメッセージを込めてテーマ案を作成した。(前山副委員長)
- ・自身の研究対象は江戸時代の出版物である。古典と向き合う機会が多い。過去というのは言い換えれば、歴史や古典のことを指している。異なる時代や地域の人々が残した文物やまたその営みすべてのことを指して、過去としている。過去の人々が様々な問題に対して、正面から知を集結させて対処してきているので、過去から学ぶことが多くあると思う。また、過去から得られた英知というものが現代社会の混沌とした混迷の時代をよりよく生きるための導きになるのではないかと思っている。今年度はコロナウイルスの影響で通常どおりの研究活動が行えない状況にある。だからこそ、他分野との交流を今まで以上にもち、他分野

との交流の積み重ねが未来への財産・誇りになればよいと思い、テーマを作成した。  
(伊藤委員)

### ○各委員からのテーマ案の説明を受けての意見交換

- ・1つ共通のキーワードとして、「新型コロナウイルス」が上げられるのではないかと。(コロナウイルスによる影響が社会にある)その中で、「文化」のもつ力の1つとして、先人たちの思いといったものをベースに、(今後の社会を)どのようにしていくかについて考えることが、各テーマに共通するものだと感じた。その中でも、服部委員の「参加」という言葉が耳に残っている。確かに今回のフォーラムは従来とは異なる開催形態で実施し参加することが求められているものになるかと思う。皆さんの意見を伺いたい。(石原委員長)
- ・テーマについて、グループウェアで補足的に議論を進めてほしい。また、修正等はグループウェア等で行うことも構わないが、できれば基本的なテーマ・趣旨の決定を本会議の場で行ってほしい。(学務支援係)→各テーマに共通するキーワードについて、各自の意見を述べてほしい。(石原委員長)
- ・やはり、「コロナ」は共通のキーワードとして上げられる。印象に残ったのは、服部委員と宋委員のタイトルである。(岩下委員)
- ・各委員ともコロナを扱っているが、コロナよりは普遍性のある表現の方がよいのではないかと。例えば、歴史的な考察があることも踏まえると、「災い」「災禍」といった言葉がよいのではないかと。学際的な講演や発表を視野に入れるのであれば、そのような言葉がよいと思う。また、人の知恵による「弾力性」もキーワードとしてはよいのではないかと。(金丸委員)
- ・キーワードとして、「過去を見つめ直す」

を上げたい。1点確認したいが、テーマによって、募集する口頭・ポスター発表の内容が絞られるものなのか。(服部委員)

- ・昨年度のフォーラムに参加して思ったこととして、テーマに寄りかかりながらも各発表者が自分の専門的な研究を発表することがメインであるとの印象を感じた。本当に大きな部分は、包括性をもった言葉を選ぶのがよいと思う。(石原委員長)
- ・印象深いのは、金丸委員と王委員のテーマである。今、一番大きな出来事としては、やはりコロナウイルスが上げられる中で、「つながる力」が一番必要であると思う。(宋委員)
- ・「参加」という言葉が1つインパクトがあった。また、金丸委員の意見を伺って、(コロナではなく)もっと広い意味で「災い」「災禍」という言葉を用いることがよいと思った。会場となる日文研は日本文化を国際的な視野で、学術的に研究している研究所であることから、「つながる」ということに注目してもよいと思う。(石原委員長)
- ・確認したい点として、テーマは各委員が提案した案から選ぶのか、それともキーワードから検討することも可能か。(王委員)→(各委員の提案を参考にしつつ)皆で練り上げて新しいものを作りあげるというイメージでいる。過去のフォーラムではどのようなであったかを宋委員に説明いただきたい。(石原委員長)
- ・過去のフォーラムでの経験上、各委員の意見を合わせて、新しいテーマを作り上げることも可能であった。(宋委員)
- ・皆さんの研究分野は様々であるので、あまり専門的にならず、分野に関わらず、すべての人が参加できるキーワードがよいと思う。(王委員)
- ・「レジリエンス」がキーワードに入ると収まりがよいと思う。また、時間軸として過



- 去と今をつなぐというのがいくつかテーマとして上がっていたが、「レジリエンス」という言葉を中心として全体で意見をまとめ直すことがよいと思う。(前山副委員長)
- ・「レジリエンス」という言葉を用いると収まりがよいとの部分をもう少し説明いただきたい。(石原委員長)
  - ・弾力性があるだとか、これからの社会において災禍・災いとどのよう関わっていくのかについて、各委員からテーマとして上がっていたように思う。その辺りを大きく包み込むキーワードとして「レジリエンス」が妥当ではないかと感じた。(前山副委員長)
  - ・キーワードとして、「つながる」「文化」「知恵」を踏まえながら、文化科学を大きく捉えテーマを決めていくのがよいと思う。(伊藤委員)
  - ・本日の会議において、趣旨も大まかに決めなければならないのか。(石原委員長)
  - ・資料3のスケジュール案で示しているように、6月中旬くらいまでに、グループウェア等で意見をまとめていただき、来週中くらいには決めていただきたい。7月には全学的に募集周知を開始する必要がある。募集要項には、テーマ・開催趣旨を記載する必要があるので、本会議である程度議論を進めていただき、グループウェア等でまとめていただきたい。(学務支援係)

本会議での意見交換を踏まえ、学生企画委員から提案されたテーマ案に共通するキーワードに基づき、テーマを作成しグループウェア等による意見交換を経て、今年度で開催するフォーラムのテーマ及び開催趣旨を固めていくことを確認した。

## 5. プログラムについて

学務支援係及び石原委員長から、「参加募集要項・プログラム2016～2019」(参考資料1)に基づき、従来の慣例では、初日に基調講演・口頭発表、2日の午前中に口頭発表、午後にシンポジウムを行う流れである旨説明があった。

加えて、石原委員長から、今年は新型コロナウイルスによる影響により、各機関において行事等が後ろ倒しとなり、文化フォーラムの開催日程と重なる可能性があり得ることから、遠隔での参加方法も念頭において開催形態を検討する必要があること、日文研は最寄り駅からアクセスしづらいことを踏まえ、京都市内の別会場での開催やチャーターバスの手配も検討する必要がある旨説明があった。

以上のとおり開催形態について意見交換を行った。

- ・リモートで開催した学会の例があれば教えてほしい。(服部委員)
- ・自分が所属する学会では、Zoomを用いてリモートで学会を開催し、かつYouTubeで動画配信した。通常の実開催時と異なる点として、学会外の参加ができず、学会に登録している研究者のみが参加できる形式であった。文化フォーラムは対面での開催に意義があると思うので、オンラインとの併用での開催を検討したい。(石原委員長)
- ・もし、オンラインでの開催になった場合、ポスター発表をどのように行うかを考えているか。(王委員)
- ・ポスターを画面に映しながら説明することもできるのではないかと。細かい部分は今後検討していく必要があるが、4月・5月で様々なことがリモートで実施された感想として、(フォーラムも)リモートでの開催は可能であると思う。(石原委員長)
- ・自分もリモートでの開催は可能であると考える。自身が所属する学会では、3,000人



規模の学会を二重パラレルセッションで実施した。ポスターセッションも小グループに分け、時間を区切って交代でパラレルセッションで実施できていたので、技術的には可能である。通信環境が整っていれば、ポスターセッションも可能であると考えている。(前山副委員長)

- ・プログラムと役割分担を決めていかねばならないが、これは連動するので、規模と開催形態のような骨太の骨格となるものが決まらなると決められないのではないかと思う。箱と中身として、箱で言えば、会場を借りるのか、会場までの移動手段を主催側で手配するのか。また、コロナの今後の影響も考慮しなければならぬ。(金丸委員)
- ・オンラインでの開催やオンラインを併用しての開催についての意見も伺いたい。(石原委員長)
- ・併用プランは今後も同様の事態が発生し得ること、災いに対してどのように答える(対処する)のかという部分で、イベントのプログラム開催の例示になるのではないかと思う。(金丸委員)

プログラムの大枠は従来のフォーラムを踏襲することとし、開催形態はオンラインを併用することを前提として検討するとの提案があり、了承された。

## 6. 開催通知・チラシ等の作成について

学務支援係から、「総研大文化フォーラム2020」の開催通知案(資料4-1)、「総研大文化フォーラム2020参加募集要項案」(資料4-2)、「(参考)総研大文化フォーラム2019ホームページ」、及び「総研大文化フォーラム2016~2019チラシ」に基づき、以下のとおり説明があった。

グループウェア・メール審議等でテーマを決定の上、プログラムの大枠及び参加申込期日等を設定し、7月初めに開催通知を発送す

るとともに募集要項(例年同様のフォーマット)を周知できるよう作成準備を進める。

加えて、石原委員長から、新型コロナウイルス感染症の影響により、すべてが従前どおりにいかないこと、様々なパターンを想定して対応していきたいとの発言があった。

## 7. その他

作業進行のためのメーリングリスト作成及びグループウェアの使用について

学務支援係から、「学生企画委員会におけるメーリングリスト及びグループウェアの使用について」(資料5)に基づき、メーリングリストの作成と併せ、フォーラムに関する作業進捗状況の確認等を行うため、フリーのグループウェア(Slack)を登録設定すること、グループウェアの利用にあたっては、学務支援係から構成員各位に招待メールを送付することについて説明があった。

## 8. 次回学生企画委員会の開催日について

次回学生企画委員会の開催日程については、進捗状況に応じてグループウェア等で調整の上、後日日程調整を行うこととした。

- ・昨年度フォーラムにおける運営側の評価・反省を確認できるものはあるか。

(石原委員長)

- ・19年度の委員会では引き継ぎ事項は作成していないが、18年度の委員会では引き継ぎ事項を作成している。(学務支援係)
- ・昨年度委員会の反省点として、ホスト専攻の委員で決定し進めることが多く、他専攻の委員が何を行えばよいのか具体的にわからなかったため、役割分担の割り振りを決めた後に、各担当で何を行うのか役割分担と作業内容を明確にするとよいと思う。

(前山副委員長)

- ・本フォーラムの開催にあたり予算はつくのか。チャーターバス等を手配することも可

能か。 (石原委員長)

- ・すでに学内で配分額が決定しており、本会議で意見の出たチャーターバス借用やオンライン開催に向けた機材購入などはあまり高額でなければ、見積等を提示いただき、配分予算範囲内で調整できると思う。

(学務支援係)

加えて、王委員から、オンライン併用開催とは別にすべてをオンラインで開催することも視野に入れて準備を進めた方がいいとの意見があった。

18年度の委員会における引き継ぎ事項をSlackで共有することとした。

#### 稲賀専攻長及び石原委員長からまとめ

会議の最後に、稲賀専攻長及び石原委員長から、本日の会議についてまとめがあった。

- ・開催趣旨について、文化フォーラムは文化科学だけでなく全学的に開かれており、理系学生の発表参加申し込みもあるので、広く異分野に対する開放性が必要である。

テーマを決定する際は、本日の会議でできたキーワードを上手くひねって作ればよい。アトラクティブである程度キャッチーであることを頭に入れて置き、例えば「つながる力」などを副題として入れていけばよい。

全体のテーマの下にサブテーマをつくる必要がある。今回でできたキーワードから選び作成していけばよい。いくつかのセッションを行う場合、議長は学生企画委員もしくは適切な方を指名する必要があり、議長はそのセッションにおける全体を把握できる必要がある。また、いくつかサブテーマをつくり、最終的にプログラムを作っていけばよい。

招待講演を行うならば、講演者の調整が必要になるので、その点は留意すること。

会場や日文研との(会議室等の借用の)交渉については、企画委員で原案を作成すれば、交渉役は担う。今年の新型コロナウイルスの影響下においては、新しい前例を本委員会で作っていく必要があるが、ロジスティクスな問題は、オンラインを併用して行うことを前提に考えるとよい。

役割分担は個々の委員が得意なことを行えば上手くいく。チームグループでの学習のよい機会として企画・運営を行ってほしい。新型コロナの影響により、各機関の行事日程が変更しているため、委員会内で情報共有をしっかり行うこと。また、各機関において、どのようなネットワーク環境を持っているかを事前に確かめておくこと。

学会を自分たちで作りに上げていく最初の経験になるかと思うが、本フォーラムの企画・運営での経験は今後の研究生生活等に役立つものになるので、頑張っていたきたい。

(稲賀専攻長)

- ・(今年度のフォーラムには)新しい試みが多数行われることになるかと思う。前例が無い状態からのスタートとなるので、ぜひ各委員の力を組み合わせて、フォーラムの企画・運営を行いたい。 (石原委員長)

## ■第2回学生企画委員会議事録

### 【概要】

◆日時：令和2年(2020)7月17日(金)  
15:30~17:40

◆場所：Webexによるオンライン会議

◆出席者(敬称略)：

- 学生企画委員：全員出席(石原、前山、岩下、金丸、服部、宋、王、伊藤)
- 担当教員等：池谷、稲賀
- 事務：各基盤専攻大学院係、葉山本部・学務支援係

◆決まったこと

- ・テーマ
- ・口頭発表とポスターの投稿日程
- ・懇親会は中止
- ・「現地二割とオンライン八割」というスタンス
- ・分科会→統合シンポジウムという流れ
- ・役割分担は、Slackで随時行なう
- ・基調講演の人選は、Slackで行なう
- ・フォーラムの終了後に「報告書」を発行して、成果として残るようにする
- ・定期的に学生企画委員会を開催する（毎月第一週の金曜日の15時半から）

◆出たアイデア

- ・リモート参加はある程度の人数さえ分かれば自由で良いのでは？
- ・リアルタイムの発表だけでなく、ビデオ投稿もありなのではないか？
- ・YouTube Liveなどを使えば、フィールドワークもできるのではないか？
- ・報告書は、レポジトリで公開するのもありだが、著作権などにも注意する必要がある

■詳細な議事録

1. テーマ、開催趣旨、プログラム、開催形態についての説明

- ・テーマに掲げた「レジリエンス」という言葉についての議論

◆石原委員長

- ・理系の人も掴みやすい「レジリエンス」という言葉を使った

◆池谷教授

- ・「レジリエンス」はキーワードだが、危機や予測不能などコンテキストの下で使っている
- ・理系の人も参加しやすいようにというものを考慮すること

◆稲賀教授

- ・開催趣旨の文章は良いが、タイトルは繋いだらこうなったのかなという印象
- ・具体的なイメージ（何を扱うのか）を考え、個々のセッションが成立するようにアイデアを出していく必要があると思う

2. 「国際日本研究」コンソーシアムとの連携について（議題8を先に扱った）

◆稲賀教授

- ・リンクの共有 → <https://cgjs.jp/>
- ・国際日本研究コンソーシアムの説明
- ・国際日本研究コンソーシアムの基盤機関である日文研のお膝元の国際日本研究専攻も参加した
- ・10近い団体が参加している。海外の研究機関との連携の可能性もある
- ・このコンソーシアムをうまく学生が利用できるようであれば、ぜひ使って欲しい

◆池谷教授

- ・今回は紹介というところまでに留め、連携の提案は次回以降に回してはどうか

◆稲賀教授

- ・承知した

◆石原委員長

- ・今回は連携の可能性の共有ということで次の議題へ行く

3. 役割分担について（資料1）

◆石原委員長

- ・役割分担の確認
- ・資料11ページのように作業を進めていく

◆学生委員一同

- ・承知した

4. 募集要項案、開催通知案、申込書様式、ポスター原稿作成要項など

- ・各種書類について（資料2-1、2-2、2-3）

◆石原委員長

- ・各種資料について、一度確認してもらったと思うが、これでよいか

◆学生委員一同

- ・承知した

◆学務支援係

- ・7月22日までをめどに流すことになっているが、21ページの「原稿作成要綱」について、確認してほしいことがある
- ・ポスター発表に関して、例年持ち込みも可にしていたが、今年はオンラインと併用ということで、持ち込みを不可とし、事前提出のみとしたいが、それでもよろしいか

◆石原委員長

- ・私はデータの事前提出のみで良いと思っているが、他の学生委員はどう思うか
- ・承認の方は手で丸を作って欲しい

◆前山副委員長

- ・提出締切が一月前となっているが、どうしてか。オンライン提出となってもそれは変更なしか

◆学務支援係

- ・見づらいことや事前準備のために余裕をもって提出としたい

◆学生委員一同

- ・承知した

◆石原委員長

- ・リモート参加・発表について、どのように扱うか
- ・「両日参加する」の下の欄に「両日すべてのプログラムにリモート参加する」という文を付け加えればよいのではないか

◆前山副委員長

- ・リモートで基調講演のみ参加するなど、一部分のみ参加する人は、どうするか

◆石原委員長

- ・リモートで参加することさえ分かれば、極論、どのプログラムに参加するかは分からなくてもよいかもしれない

◆前山副委員長

- ・「現地参加」と「オンライン参加」の欄を最初に作っておいてそれを選んだ上で、どのプログラムに参加するかを選べばよいのではないか？

◆石原委員長

- ・そのやり方もありだと思う
- ・また、リモート発表（オンライン参加）をするのもありとするか
- ・その点、どのように扱っているか

◆服部委員

- ・「新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今回メイン会場となる国際日本文化研究センターを中心にオンラインを併用して行います。参加方法については決定し次第お知らせします」というところだけではないか

◆石原委員長

- ・学務支援係へ尋ねるが、これまで話し合ってきたようなオンラインとの併用を記載することはできるか

◆学務支援係

- ・記載については可能であるが、実際にオンラインとの併用が出来るかどうかは、やり方を決めてからでないと判断できない

◆服部委員

- ・参加するかを決める際に、実際にどのように行うかが書かれていないと決められないのではないか

◆前山副委員長

- ・現地参加を希望していたが、直前に感染拡大防止の観点から移動の自粛をせざるを得ない状況になる可能性もあるため、対応を決めておく必要があるのではないか、またオンラインでのみ参加したい人は詳細を書いておいて欲しいと思うはずである

◆石原委員長

- ・オンラインでなら行きたい人は一定数いると思う。それが書かれていないため、このままではいけないと思うが、次の議題にも関わるため一度ペンディングしておく

- ・ほかに何か意見はあるか

◆王委員

- ・まだ先のことなので、現時点では判断がしづらい
- ・懇親会も開催しない可能性がある」と記載するべきではないか

◆石原委員長

- ・その通りである。すべてのプログラムについてそれが言えそうである
- ・懇親会の部分にも注意文を付け加えるということでよいか

◆学生委員一同

- ・承知した

## 5. 対面開催の可否について

◆石原委員長

- ・感染が拡大してきている現状であり、見通しも立たない状況であるため、準備の段階からすべて対面の可能性を消し、オンラインでの開催に絞ることも考えられるが、委員のみなさんはどう思われるか。現状どのように思っているか
- ・まず学務支援係に尋ねるが、完全リモートの実例もあるが、実現可能か

◆前山副委員長

- ・自分はコンピュータの歴史について研究しているが、コンピュータ系の学会はすべてオンライン開催をし、歴史系の学会はすべて中止になっている。フルリモートについては、学問分野ごとによって温度差があると思われる

◆学務支援係

- ・文化科学研究科としての了解を得る必要があるため、この場では決定できない

◆石原委員長

- ・可能性は低くないと思われるため、一度確認を取ってもらうことはできるか

◆学務支援係

- ・承知した

◆王委員

- ・美術系でも実施例はあるため、実現可能性は高いと思われる
- ・また、部分的参加も増えると思うため、そのような枠組みもしっかり準備をする必要があると思われる

◆服部委員

- ・関連して、オンラインにすると、例年よりもかなり大きな規模のフォーラムになることが予想される
- ・枠組みの拡大について、崩してはいけない部分などもあるか

◆石原委員長

- ・簡単には決められない部分であるが、これこそテーマの「レジリエンス」でもあるように思われる
- ・今回のキーとなる部分でもあるため、決めるなら早めのほうがよい

◆金丸委員

- ・ウェブに比重を設けた開催という通知を出してはどうか
- ・フォーラムをやりきるという点を意識する必要があると思う

◆石原委員長

- ・現状、従来通りの対面に比重を置いてオンラインを検討しているが、今回はオンラインに比重を置いて、現地開催も併用するというようにする可能性は十分にあると思われる

◆前山副委員長

- ・昨年度参加した感覚からすると、会場に集まって、史料やポスターを基に議論するところに面白さがあったように思う
- ・フルリモートではそれができなくなるため、フォーラムの意味という点からも考える必要があると思う

◆宋委員

- ・中国ではほぼ全てオンラインで行われており、他大学の授業なども受けることができ、可能性が広がっている



- ・今回のフォーラムへの参加は、学外からの参加も考慮してもよいと思われる

◆王委員

- ・国際日本研究コンソーシアムとの連携にも通じる話だと思う

◆石原委員長

- ・ここまでの議論を踏まえ、比重としては「現地二割、オンライン八割」として話を進めていこうと思うがそれでよろしいか

◆学務支援係

- ・今の段階ではそれでよいのではないか
- ・直近の開催通達は、「テーマ」「日程」「予稿」「ポスター発表」に留め、開催形態は決定し次第ということにしようと思う

◆石原委員長

- ・そのような発出にしようと思うが、ひとまずはそれでよいか

◆学生委員一同

- ・承知した

## 6. リモート開催（オンライン開催）時のツールについて

◆石原委員長

- ・皆さんはどのようなツールを使っているか

◆前山副委員長

- ・ZoomとYouTube Liveをつかっていた
- ・YouTube Liveの場合は、外に広く公開する場合であった。質疑応答はSNSを併用して行っていた
- ・発表の形態を決めてから、ツールを決めるという順番になると思う

◆王委員

- ・Zoomを使う。ただそこまで大きな会ではない
- ・基調講演やシンポジウム、フィールドワークはYouTube Liveを使うことができると思う

◆石原委員長

- ・開催の形態が決まってからツールを決めるということで、これもペンディングにしよう

うと思う

## 7. 各プログラムの代替措置について

◆石原委員長

- ・この会議進行を作った時点では、現地開催を軸に考えていたため「代替」とあるが、これまでの流れで、オンラインに比重を置くことが決まったので、そのままプログラムの議題として進めようと思う
- ・今回のテーマ「レジリエンス」を具体化していく上で重要になってくる話である
- ・現状、「基調講演」「シンポジウム」「口頭発表」「ポスター発表」がフォーラムとしての柱になっている
- ・「基調講演」「シンポジウム」については、公開の可能性もあると思う
- ・「口頭発表」「ポスター発表」については、応募数によっても変わると思うが、セッションを設けて「シンポジウム」の代わりに「分科会」をするのはどうか
- ・各委員、専門分野を持っていると思われるので、チューターの教員を軸に、自分の博士論文につながるようなところで、参加者を募って分科会を開催する。その上で、各セッション（分科会）の意見を吸い上げて、全体統括のシンポジウムを開くという案はどうか

◆王委員

- ・分科会をする上で、募集はどのように行うのか

◆石原委員長

- ・できれば、企画委員のテーマに沿った分科会を立ち上げるのがよいと思う

◆王委員

- ・そうすると、普通の学会の区分と変わらないような形式になってしまうのではないか

◆石原委員長

- ・その通りである。テーマ募集についてはもう少し練る必要がある

◆服部委員

- ・この企画委員とすると理系の人が少ないのではないか

◆石原委員長

- ・その通りである。応募してくれた人の中で依頼をするか、我々の知り合いに依頼するかなどが考えられるのではないか

◆服部委員

- ・シンポジウムの形態は、壇上と聴衆で隔たりにあるように思うので、そこもうまくやれると良いと思う

◆金丸委員

- ・今年度の入学者はフレッシュマンコースが無かった。文系理系が混ざるような学際的な機会にもなるとよい

◆服部委員

- ・動画を作っておいて、発表するという形態もありなのではないか

◆前山副委員長

- ・コンピュータグラフィックス系の学会だと、ベストペーパー・ベストプレゼンテーション賞の他に、ベストデモンストレーション賞などもあったりする
- ・発表の形態も、口頭発表とポスター発表に固執する必要もないのではないか

◆石原委員長

- ・それは面白いと思う。動画などを事前に撮影しておき、それをループ再生しておき、質問があれば別の媒体で個別にという方法をとれば、これまでのポスター発表のような取り組みができるかもしれない

◆前山副委員長

- ・レジリエンスについて、確かに分科会という形態をとるのであれば、楔を打って発散しないように進行することもできるのではないかと感じた

◆石原委員長

- ・オンライン開催とした場合、プログラムの内容はこれでよいか
- ・懇親会は開催が難しいように思う

- ・フィールドワークは、YouTube Liveなどを使えば実現できるのではないかと感じた

◆岩下委員

- ・懇親会担当として、懇親会の実施について考えていたが、現地二割、リモート八割としても、懇親会の実施に係る労力は、そう変わらないと思われるため、実施は見送ってもよいのではないだろうか

◆石原委員長

- ・今回は、対策を考えて結果的に無しとなつては労力がもったいないので、最初から懇親会は無しという方向で良いと思うが、皆さんはどう思われるか

◆学生委員一同

- ・承知した

◆学務支援係

- ・プログラムについてはこの会議で話し合ってもらって構わないが、大きな枠組みについては専攻長会議にける必要がある
- ・懇親会については、ここで決めてしまつて構わない

◆石原委員長

- ・それでは懇親会は無しということにする

◆石原委員長

- ・基調講演の人選について話し合いたい
- ・「文化のレジリエンス」というテーマでフォーラムを行うが、これを具体化するような基調講演が望ましいと思われる
- ・皆さんの中で、アイデアや人脈を持っている人は教えていただきたい
- ・これについてはSlack

◆金丸委員

- ・羽生順子先生を前回挙げた理由は、「文系と理系をやっている」「狭域と広域をやっている」「民俗考古学的な古い部分も扱っている」「京都を活動の拠点としている」である

◆服部委員

- ・対談という形態がありなのであれば、文系

先生と理系先生を呼んで意見を戦わせると  
いうのも面白いのではないか

◆王委員

- ・理系の先生が来ると、基調講演として面白いと思うが、対談とした場合、テーマ設定が難しいのではないか

◆石原委員長

- ・昨年度はどうであったか

◆前山副委員長

- ・自分は選定に関わっていないので、存じ上げない

◆宋委員

- ・自分も存じ上げないが、基本的には主催専攻の先生が多いのではないか

◆石原委員長

- ・主催機関からというところ
- ・妖怪研究の権威であられる小松先生
- ・文理融合という観点から、建築学出身の井上先生
- ・「異」という観点からすると、日本とブラジルの関係史をしている根川先生
- ・日文研には「異」に関する強みがあるので、その点も考慮して決めていきたい
- ・基調講演の人選については、Slackを用いて行っていきたい

◆石原委員長

- ・分科会を行う方針については、それより  
しいか

◆学生委員一同

- ・承知した

**8. 今後のスケジュールについて（特に各種  
担当における）**

◆石原委員長

- ・今後は、各担当に分かれて、進めていきたいと思っている
- ・応募数によって異なってくると思うが、基本的には前回の資料3の通りに進めていく
- ・細かいことについては事務と連携して進めていくとあるが、この「事務」とはどの事

務を指しているのか

◆学務支援係

- ・この「事務」は、業務によって様々であるため、詳細は後程

◆石原委員長

- ・今回のフォーラムは、終了後に「報告書」を作り、発行したいと思う
- ・基調講演、口頭発表やポスター発表については、ある程度文字起こしや原稿を掲載し、成果として書けることを目指して行っていきたいと考えている
- ・今までは発表としての成果にはなっているが、文書としての成果になっていないため、経歴に書きにくいという問題点があった。そこで、報告書として発行することで、成果として書けるようにしたいと思う
- ・先のコンソーシアムとの連携の成果にもなりうると思われる

◆王委員

- ・予稿集との違いは何か

◆石原委員長

- ・発表後の発行物として、ポスター本体も掲載し、成果物として発行するところに意味があると思っている
- ・発表を軸にすれば、手間もそこまでかからないのではないか

◆学務支援係

- ・報告書を作ること自体には問題はないと思うが、予算との兼ね合いもあるため、次回  
の専攻長会議での了解を得る必要があると思  
われる

◆服部委員

- ・鍵付きアクセスや公開アクセスかも考慮する必要があると思われる
- ・公開してほしくないと思う方もいるのではないか

◆石原委員長

- ・現時点では、そういうものを作れた

◆前山副委員長

- ・総研大のレポジトリがあり、そこで公開が

できそうである

◆王委員

- ・著作権についてもクリアにする必要があると思われる

◆石原委員長

- ・それでは、このような形で、報告書を作るということ自体について皆さんはどう思われるか

◆学生委員一同

- ・承知した

◆石原委員長

- ・今回の議事録はとっていると思われるが……

◆学務支援係

- ・今回から学生委員の方をお願いしたいと考えている

◆石原委員長

- ・承知した。今後は各委員の持ち回りの仕事として進めていく

◆石原委員長

- ・次回学生企画委員会の開催日について、今後は定例化していきたいと思っている
- ・昨年度の反省点として顔を合わせて話し合う機会が少なかったということがあげられる
- ・意見をすり合わせる機会が少なかったように思われるため、今年度は専攻長会議の前に行いたいと思っている

◆学務支援係

- ・すでに日程は決まっているので、後で共有する

◆石原委員長

- ・とりあえず、第一週の金曜日の15時半から17時半を定例会としたいがそれではどうか

◆学生委員一同

- ・承知した

## ■第3回学生企画委員会議事録

### 【概要】

- ◆日時：令和2年（2020）8月7日（金）  
15:30～17:40

- ◆場所：Webexによるオンライン会議

- ◆出席者（敬称略）：

○学生企画委員：石原、前山、岩下、服部、宋、王、伊藤

○担当教員等：池谷、稻賀

○事務：各基盤専攻大学院係、葉山本部・学務支援係

### ■ 今回の議題と主な決定事項一覧（詳細は次項以降にまとめた）

#### 1. 「国際日本研究」コンソーシアムとの連携について

⇒ 9月4日の専攻長会議を経た上で再検討。

#### 2. 口頭・ポスター発表の申込件数の中間報告

⇒ 8/7現在、ポスター2件（1人で2件）のみ。ひとまず応募締め切りまで見守る。

#### 3. チラシ・ポスターのデザインについての中間報告

⇒ デザイン案については全員賛成。特に裏面に記載する情報について話し合う必要あり。

#### 4. 分科会・シンポジウムのテーマについて

⇒ 分科会は全部で4ブロック作る方向で考える。今回出たキーワード（デジタル、イメージ、生命倫理、コミュニケーション、精神等）を踏まえてさらに話し合う必要あり。

#### 5. 基調講演の人選について

⇒ 小松先生をお願いする方向で進める。

## 6. リモート開催（オンライン開催）時のツールについて

⇒ 発表はZoom、議論等の場としてSlack、基調講演はYouTube Liveを用いる。

## 7. 全体の時間配分について（開始時刻と終了時刻）

⇒ 1日目：13～18時、2日目：10～16時  
※1日目10～12時を希望者向けのオンラインツールのチュートリアルセッション枠とする。

## 8. 今後のスケジュールについて（特に各種担当における）

⇒ チラシ・ポスターデザインの完成版は次回会議時（9/4）に確認予定。

## 9. その他（専攻長会議で審議が必要な内容）

- ・完全リモートは可能かどうか
- ・コンソーシアムについて
- ・報告集について

### ■詳細な議事録

#### はじめに

- ・全体的なやり方（オンライン開催が可能かどうか等）とコンソーシアムとの連携については、9月4日の専攻長会議を経ないことには最終決定は不可。（池谷教授）

#### 1. コンソーシアムについて

##### ◆参考事項（稲賀教授）

- ①国際日本専攻が今年度からメンバーに入っている教育協力プログラムに該当するものについては、コンソーシアムとして支援が可能。
- ②学生企画委員会側から要請があれば支援したいとのこと。日文研の研究支援事務局のmatterとして取り上げてもらえる。
- ③最初の連絡役は稲賀先生が引き受けてくださるが、企画委員が日文研の研究協力課と

直接やりとりすることも可能。研究協力課に企画委員会への参加をお願いすることも可能。

##### ◆論点と決定事項

- ・チラシやポスターをコンソーシアム加盟機関に配ることはできるか？（石原）
- ⇒ 両法人に承諾を得ることができればネット公開含めてできる可能性あり。（稲賀教授）
- ⇒ 基本的には9月4日の専攻長会議を経た上で検討する。

#### 2. 口頭・ポスター発表の申込件数の中間報告

##### ◆8/7現在の申し込み件数

- ポスター発表：2件（1人で2件）
- その他：0件

##### ◆参考事項（学務支援係）

- ・募集要項の発表が昨年（7/12）より10日遅れ。
- ・昨年の中間発表時点（8/23）での申込者は五名。
- ・締切1週間前（8/21頃）に期限延長を検討することも考慮に入れてもよいかもしれない。

##### ◆論点と決定事項

- ・1人の総研大教員が2件のポスター発表を応募してよいか？（学務支援係）
- ⇒ 1人2件の前例は無い、募集要項に発表件数を制限する内容は無い。
- ・外部の研究者と連名でポスター発表してよいか？（学務支援係）
- ⇒ 外部研究者の発表例は過去にあり。
- ・法人主導の研究プロジェクトの研究成果を発表してよいか？（学務支援係）
- ⇒ いずれも問題ない。（石原）
- ⇒ ポスター発表の形式にもよるのでは？（前山）



- 基本的には総研大の院生が発表すべきで、全専攻から出ることが望ましい。その上で空き枠があれば、外部研究者もありと考えるかどうか。(池谷教授)
- 各委員による水面下の動きや分科会のテーマも関わってくる。(稲賀教授)
- ⇒ 応募締め切り後に全体を見て判断する。

### 3. チラシ・ポスターのデザインについての 中間報告

#### ◆参考事項

完成版（印刷前段階）は次回会議時に確認予定。

今回よりも完成度の高いものをSlack上でも共有予定。(王)

#### ◆論点と決定事項

- ・デザインについて
  - 王委員より示されたデザイン案に全員賛成。
  - 注意点（稲賀教授）
    - ・表面に絶対載せるべきロゴの確認が必要。
    - ・裏面に載せる情報の確認が必要。
    - ・会場等の不確定要素をどうするかをよく考える。
  - 裏面について、分科会のテーマも踏まえた上で話し合う必要あり。
  - ・QRコードの使用について
    - ネット上にフォーラムの情報を載せるページを作ってリンクさせれば、変更情報を随時確認できて便利。(王)
    - 技術的にも可能でぜひやるべきだが、過去にハッキングの例もあるので、どこまでの情報を公開すべきか、総研大本部に確認を取ることも見越して考える必要がある。(稲賀教授)
  - ・ホームページの作成について
    - 外部（参加しない人）に公開すると難しい。内部であれば難なく可能。(前山)
    - 代わりに参加者用のSlackを作成してはどうか？(前山)

メリット：情報（資料）の共有がしやすい。議論が残る。発表ごとにチャンネルを立てることができる。コストがかからない。

- 内部（参加者）向けのサイトの作成は可能だと思われる。(学務支援係)
- 次年度以降も使えるページを作れば、報告集や毎年の成果等を残すことができる。(王)
- 総研大のホームページ内にあるフォーラムのページに予稿集や報告集等を載せることは可能。しかし、ホームページの更新は葉山キャンパス付近からでないと不可能なため、随時変更の可能性がある開催情報の公開には不向き。(学務支援係)
- ・内部向けホームページの作成の難易度について
  - 悪いことをする人がいないという前提であれば作成は簡単。(前山)
  - グーグルアカウントを取得してドライブに資料等を保存、またグーグルサイトの利用も方法のひとつ。(前山)
  - ・ツイッターアカウントを作るのはどうか？(王)
  - オープンになるので何かしらに抵触する恐れ。運営も大変では？(石原)
  - なんとも言えない。(学務支援係)
  - ・Slackについて
    - 参加申し込みがあった人をSlackに引き入れる。(石原)
    - 作ったSlackページは、学会終了後も議論の場として残しておいて自然消滅か、もしくは年度末で閉じる等、期限を事前にこちらで決めておく。(前山)
    - Slackを使ったことのない人にとってはハードルが高い可能性もある。(前山)
  - ・上記ホームページ関連の議論のまとめ
    - ⇒ 総研大のホームページ内にある文化フォーラムのページで報告集等のデータ蓄積を賄い、即時的なやりとりはSlackで行

うのほうか。(石原)

⇒ SlackやZoomの使い方(マイクのミュート等のマナー含む)、タイムテーブルをどう示すかが課題。(学務支援係)

#### 4. 分科会とシンポジウムのテーマについて

##### ◆前提事項

- ・全部で4ブロック作る方向で考える。(石原)
- ・広い射程を持ちつつもクリティカルなワードが必要(副題等による補足説明も可能)。
- ・「つなぐ」のサブテーマとして「近づく」「逆らう」「飛び越える」「恐れる」等のキーワード(つなぎ方に言及する動詞)を立てるのもあり。(稲賀教授)

##### ◆論点と決定事項

- ・それぞれのテーマと主導する委員について(案)
- デジタル、コンピューターサイエンス、デジタルアーカイブ等、理系との接点。(前山)
- イメージ、芸術系(伊藤・王)
- 医療人類学、生命倫理、病(illness)と疾病(disease)、「異」と闘う(岩下)
- コミュニケーション、リズム(服部)
- 広い意味での精神(例:平安時代に生きる人々が共通して持っていた精神性)(石原)
- ⇒ 分科会のテーマはポスター裏面の前提にもなるため、今後さらなる話し合いが必要。

#### 5. 基調講演の人選

##### ◆現在の候補

- ・羽生淳子(人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 客員教授)
- ・井上章一(国際日本文化研究センター 所長)
- ・小松和彦(国際日本文化研究センター 名誉教授)
- ・根川幸男(国際日本文化研究センター プロジェクト研究員)

##### ◆論点と決定事項

- ・妖怪研究が国際日本文化研究センターの特色の1つであり、妖怪に興味を持つ人も多いのではないか。
  - ・集客力があるかどうか。
  - ・地理的にも精神的にもやりとりが難しくないような信頼関係を築くことが可能かどうか。
- ⇒ 小松先生にお願いする方向で進める。

#### 6. リモート開催(オンライン開催)時のツールについて

※いずれの案も専攻長会議で全体の開催形式を承認してもらうことが前提

##### ◆現在の候補

有力候補: Slack Zoom YouTube Live  
その他: Webex(最近バーチャル背景を実装) Google Meet

##### ◆論点と決定事項

- ・使用ツールと用途について
- ⇒ Slack プログラムに応じた各種チャンネルと口頭発表用のZoomへのリンクを用意。議論の場としても用いる。Zoom 口頭発表用。
- ・基調講演をYouTube Live(オープンな形式)で行うことについて
- 確認事項(学務支援係)
- ・発表内容をオープンにすることを発表者がOKするかどうか要確認。
  - ・YouTube Liveは実績がないので要確認。
  - ・配信者登録はどうか。
- ⇒ 全体の開催形式を踏まえて改めて検討する。

#### 7. 全体の時間配分について

1日目: 13時開始/18時終了(研究発表、基調講演)

2日目: 10時開始/16時終了(研究発表、シンポジウム)

※1日目の10~12時に、希望者に向けたオ

オンラインツールのチュートリアルセッション枠を設ける。

## 8. 今後のスケジュールについて

今回の企画委員会（9月4日15時半）で、チラシ・ポスターの確認、発表申込者数の把握を行う。ポスターに記載する内容についてはSlack上でも確認する。

## 9. 専攻長会議で審議が必要な内容について

- ・完全リモートは可能かどうか
- ・コンソーシアムについて
- ・報告集について

⇒ 全員同意。

## ■第4回学生企画委員会議事録

### 【概要】

◆日時：令和2年（2020）9月4日（金）  
15:30～17:40

◆場所：Webexによるオンライン会議

◆出席者（敬称略）：

- 学生企画委員：石原、前山、宋、王、伊藤、服部、岩下
- 担当教員等：池谷、稲賀
- 事務：各基盤専攻大学院係、葉山本部・学務支援係

### ■主な決定事項一覧（詳細は次頁以降に記載）

今回の企画委員会日程：9月25日金曜日  
15:30～17:30（予定）

#### 1. 専攻長会議における審議結果について

文化フォーラムのチラシを多めに印刷して、コンソーシアム関連機関に配布するといった企画委員の要望を、9月15日に基盤機関の日文研で開催される会議において、稲賀専攻長より伝えてもらう。

#### 2. 分科会・シンポジウムのテーマについて

#### 3. 分科会・シンポジウムの担当していただける教員について

（各分科会・シンポジウムの担当）

①前山 ②伊藤、王 ③岩下、服部、宋、金丸（文化人類学）④石原

Slack上で議論して、近日中（できれば9月2～3週目まで）に、

○大きなストーリー（どういうシンポジウムの内容にしたいのか）を決めて、テーマの文章を作る。

○担当してほしい教員をピックアップする。

#### 4. リモート開催（オンライン開催）時のツールと運用

○基調講演、シンポジウム、口頭発表については対面、オンライン併用。ポスター発表はオンラインのみで開催。

○機材は基本的に日文研にあるものを使用する。

○参加者について、事前登録制の定員なしで対応する。

#### 5. 全体の時間配分について

○現地プログラムに関して、ギャラリートークを企画し、各基盤機関を繋いで、館長や図書館長に話してもらう。

○全体の時間配分について、大まかな配分は現在の計画に沿って、次回、詳細な時間配分について話しあう。

#### 6. チラシ・ポスターのデザインならびに記載内容について

○会場の下にオンライン参加が可能という表記を追記して、裏面に、詳細についてはホームページの確認をするように表記する。

## ■詳細な議事録

### 0. 次回の企画委員会日程について

フレッシュマンコース開催と次回の定例会議の日程が重なってしまうため、日程を変更することとなった。

次回の会議日程：9月25日金曜日15:30～17:30（予定）

### 1. 専攻長会議における審議結果について

審議結果（学務支援および池谷研究科長より）

- ①開催形態について：オンラインを原則とし、一部、対面で実施する方向について、承認。
- ②国際日本研究のコンソーシアムとの連携について：承認。ぜひお願いしたい。
- ③報告書の作成について：学生にとって負担にならない範囲で作成すること。テープ起こしなどの作業は、時間と労力を要するのではないかと。また作った後に誰に配布するのか、予算等についても検討すること。以上を考慮することで、承認。

・国際日本研究のコンソーシアムに関して、基盤機関の日文研のほうで9月15日に会議があるので、それまでに学生企画委員の方で要望事項を、窓口である私のほうに伝えてほしい。（稲賀専攻長）

・連携に関して、今、思いつくのは、文化フォーラムのチラシにコンソーシアムの名前を掲載し（共催かなど協力形態は不明）、コンソーシアムの連携機関にも配布する。加えて、報告集作成に係る費用を援助してもらえればと考えている。

ご指摘いただいた報告書作成に関する学生の負担については、テープ起こしを、外部に委託できないか検討する。報告書の配布先については、各種基盤機関とコンソーシアム加盟機関の図書館、国立国会図書館に配布できれば、それなりの成果が得られると思っている。（石原）

## 稲賀専攻長の助言

先ほどの発言を受けて、共催、協賛、後援、協力なのは、コンソーシアム事務局に問い合わせてはっきりさせる。

要望事項については口頭では聞いたが、後ほどメールで送ってほしい。

チラシの掲載に関して、ホームページ掲載に関して確認が必要ではないか。

あとはチラシの配布先に加えて、コンソーシアム側での参加希望者の扱いについて、それから報告書の作成に関して、文字起こしの際の費用がコンソーシアムの方で負担してもらえるのかについても確認する。この他、会議後に要求したいことが生じた場合はメールで知らせてほしい。またコンソーシアムの要望についても確認したい。

報告書に関して、以前つくられたサンプルを確認してほしい。また作成時は、背表紙に開催情報をきちんと印字してほしい。そして今年は例年と異なる形態で進めているので、その過程が大切な記録となって、今後の役に立つかなと思っている。

### 2. 分科会・シンポジウムのテーマについて

・今日の会議の中でテーマについて考えすぎではないかという稲賀先生の助言もあって、思ったが、もっとテーマを大きくしてはどうか。例えば今、出ている案をカッコの中に収めてしまって、前山さんのテーマでは、レジリエンスの蓄積といったワードで括ってしまうのはどうか。それでカッコの中にそれぞれのキーワードをいれたらと思うが、どうだろうか。

それで教員については、みなさんに想定して、意見をあげてほしい。（石原）

・分科会の形式、形態はそれぞれで決めるのか。割と一方的に講演会のような形になるのか、あるいは座談会のような形になるのか。（服部）

・基本的には座談会と考えている。担当して

いただく先生と委員の皆様を中心に座長と  
なって、他の皆様に振ってもらうというこ  
とを想定している。それに関して、参加形  
態というのも検討事項に挙がってくる。つ  
まり、この分科会に参加するかどうかとい  
うことも申し込みの段階で聞かないといけ  
ないかもしれない。どの分科会に参加する  
のかも聞いたほうがベストと思う。もしく  
は参加申し込み後、Slack上で振り分けても  
いいかもしれない。(石原)

- ・ここに参加したいという希望はあると思  
う。それから最適な参加人数の設定もある  
と思う。先に応募形式にすることで、人数  
の制限ができると思う。(服部)
- ・オンラインなので、何とか対処できる気も  
しなくはない。あくまで分科会形式とし  
て、細かいことは各担当者と先生にまかせ  
たほうがいいのか。(石原)
- ・例えば議論のフェーズは事前に撮影してお  
いて、それをオンタイムで見た後に、質問  
を受け付けるためにオンラインで待機して  
いるという方法もある。そうすると、人を  
集めやすい。見てもらって、コメントがあ  
ればSlackに書いてもらう。フィードバッ  
クは遅くなるが、割り込みを許さないの  
であればいいかもしれない。また先生に頼む  
としても、そのほうがいいのかもしい。  
(前山)

### 稲賀専攻長の助言

人数制限についてはオンライン参加だから  
心配なくてもいいと思う。それから現在、挙  
がっているのはテーマじゃなくて、副題。そ  
れはそれで残してもらっていいが、それをま  
とめる、そしてレジリエンスとくっつけるた  
めのキーワードがない。これがあると参加  
者もわかりやすくなる。例えば、伊藤さん  
と王さんが担当しているものは、最初、せ  
っかく京都でやるからという話だったと思  
う。じゃあ“京都”と今回のテーマをどう繋げる

のか、1つ出てくるといいと思う。それから  
医療人類学や生命倫理といったことは、今回  
なぜ出てくるかという、もうはっきりして  
いるわけで、レジリエンスの中でこれを取り  
あげるといことがピタッとわかる文言を考  
えたらいいと思う。イメージに関して、イ  
メージが生き残っていくということはどうい  
うことなのかっていうのを出せばいいのでは  
ないか。デジタルに関しては分野の話になっ  
てしまって、ところがコミュニケーションと  
いうのは実際の使い方、それでこの二つの使  
い分けというのが、似たり寄ったりになると  
面白くないので、予稿を見ながらテーマを  
はっきり出すと参加者側もわかりやすい。参  
加者の頭を働かせるきっかけを出していつ  
てはどうか。これは先生方にもお願いする  
ときにも、キャッチフレーズがあるかどうか  
で違っていき、みなさんも説明しやすいと思  
う。自分の責任だって受け身になるのでは  
なくて、攻めていく方向で発想を変えた  
ほうがいいのか。

それから前もって録画するという件は、  
先生がその方が、都合がいいなら、そう  
してしまえばいいと思う。デジタルでや  
るのだから、臨機応変に対応すればいい  
と思う。

神戸大学が世話しているAASアジアや  
他の企画等を検索してみて、情報収集し  
たいと思う。

- ・このあと、Slack上で、分科会・シンポ  
ジウムのテーマをそれぞれ、出し合っ  
てほしいと思う。その中でテーマと、  
担当していただきたい先生を決めてほ  
しい。それを来週、再来週までに決  
めたいと思う。(石原)

### 3. 分科会・シンポジウムを担当していただく教員について

- ・シンポジウム開催手順として、先生1  
人と学生委員とで分科会を行って、そ  
こで話したことをもとに、先生に話  
していただいて



シンポジウムを行うということを想定したので、教員を決めるということが肝要になってくる。

これに関して、去年のシンポジウムに登壇していただいた教員には報酬は支払われているのか。(石原)

- ・謝金に関して、事前に申請してもらえれば、規定に基づいて支払いができる。

今年の申請は10月16日となっているが、それはあくまで支払いのための申請で、9月には内諾をとっていた。(学務支援)

- ・それぞれの担当で、要望する担当していただきたい先生はいるか。(石原)

- ・前回の会議では、医療人類学がテーマのひとつに挙がっていたが、医療人類学でお願いできそうな先生が思いあたらない。また参加者も限られてくることを考慮すると、民博の学生で文化人類学という大きなテーマでやってみたい。(岩下)

- ・基調講演をお願いしようとしている小松先生は、妖怪のイメージも強いが、文化人類学の分野なので、前回のテーマに挙がっていたテーマの一つである。(石原)

- ・医療人類学でいえば、指導教官の安井先生が、出産について研究されている。研究会にも参加しましたが、韓国や中国の病院に行き出産について研究されているよう。(宋)

- ・では、民博のみなさんと宋さんとで、1つのシンポジウムのテーマについて担当してもらおうということでしょうか。(石原) →岩下、服部、宋承認。

- ・その他、担当のみなさん、いかがでしょうか。(石原)

- ・デジタルアーカイブとなると誰でも大丈夫だと思う。コンピューターサイエンスかつ歴史もわかるという話になると指導教員が思い浮かぶ。デジタルアーカイブについて、歴史資料を今の情報技術でどう扱うかということだけでなく、コロナのこともある

ので、現代というデジタル時代を、どういうふうにアーカイブしていくかと考えると、話しやすいと思う。(前山)

- ・私の指導教員はどちらかと言えば文学が近いので、ちょっとイメージと離れていると思う。できれば王さんと協力して、身内で決めていけたらと思う。(伊藤)

- ・もしよろしければ稲賀先生にお願いしたい。(王)

- ・仮に名前を挙げてくれてもかまわない。(稲賀)

- ・ではテーマ等についてはこの後、Slack上で議論し、近日中(できれば9月2週目まで)に、各担当で大きなストーリー(どういうシンポジウムの内容にしたいのか)を決めて、テーマの文章を作り、担当してほしい教員のピックアップまでしてほしいと思う。(石原)

#### 稲賀専攻長からの助言

担当者は責任があるということもあって、各担当者が自分の頭の中で考えてしまっている。しかし、まとめ係りが自分で制御できなくてもいい。自分の守備範囲というのはあまり考えなくてもいいのではないかと。そして委員会で考えた「文化のレジリエンス」をうまく拾い上げられるように考えておく必要がある。

それから、気心がわかっている先生に頼むのはいいと思う。これに関して、現在、名誉教授になっている先生で、かつてフォーラムに熱心に関わってくださった先生がいらっしゃる。過去の記録を見てみるとよいと思う。

#### 4. リモート開催(オンライン開催)時のツールと運用

- ・まず、Slackで各種チャンネルを用意して、口頭発表用のZoomへのリンクを用意して、口頭発表の議論の場として用いる。Zoomは口頭発表用に使う。そして基調講

演は、YouTube Liveで行えないかということで、前回の話は終わっている。これに関して学務支援より、委員のみなさんに確認してほしいことがあるとのことで、よろしくをお願いします。(石原)

- ・オンライン回線で開催することで発生する課題を、学務支援のほうでまとめた(別紙 オンライン開催について、Word文書ご参照のこと)。

これまで申し込みを受け付けていたのは発表者のみである。続いて、開催形態が決まってくると、聴講者を受け付けることになるが、その受付をどうするのかという点を検討しないとイケない。学内の者は従来通り、申込書の提出でいいと思うが、今回、オンラインで実施するプログラムが出てくるので、その部分に関しては学外の者にとって敷居が低くできるということを考えて、各プログラムをどれだけ開放するか、いくつか選択肢があると思うが、開放する規模によって、より便利なツールというモノが変わってくると思う。

例えば、Peatixというツールは、オンラインでチケットを発行できるようなサービスで、チケットは、有料でも無料でも構わない。これで参加登録すると、イベントや接続に関する連絡についても行うことができる。また配信用の原稿を配ったりすることもできる。

次に、どのプログラムを対面として、どれをオンラインとするのかについて、基調講演、シンポジウム、口頭発表に関しては、1つのステージの上で1人が発表するということなので、対面とオンラインの併用は可能かなと思う。ただし口頭発表は、もし分散開催で各基盤や個別でやるとなった場合は、対面は難しいのではないかと。ポスター発表に関しては、対面にしてしまうと聴衆がランダムに来てしまったり、質問が対面とオンラインで双方から寄せられたり

すると、手が回らなくなると思うので、どちらか、おそらくオンラインのみになると思っている。こちらはどうするのか、委員のみなさんで話し合ってもらいたい。

次に機材の調達ということが大きな課題として挙げられる。特に基調講演やシンポジウムだと、ある程度、鮮明な映像を流す必要があるため、機材をどのように確保するのか検討する必要がある。口頭発表やポスター発表に関しても配信用の機材を、どのように用意するのか、こちらですべて用意するというのは予算的にも厳しいと思うので、話し合ってもらいたい。また事前にリハーサルする機会も設けておく必要もあるのではないかと。

最後に、オンライン開催に必要なサービスの契約について、無料で使えるものならアカウントつくるだけでいいが、例えばZoomだと、ある程度、人数が入ると40分間という制限がついてしまう。有料のアカウントが必要な場合、早めに検討してほしい。加えてZoomについてはホスト数、同時開催数についても検討してほしい。

(学務支援)

- ・今年はコンソーシアムまで周知するので、例年よりは多くの参加者が見込める。定員なしの登録制が一番、広い募集になると思う。

開催形態については、配布資料「オンライン開催について」のとおりになるだろうと思う。基調講演、シンポジウム、口頭発表については対面、オンライン併用で、ポスター発表はオンラインのみになるのではないかと。前回、話し合ったような、映像を流すという形になると思う。

機材の方は確認しておく。基本的に日文研にあるものを使用する。ポスター発表とオンラインについては、基本的に基盤機関の回線利用になると思う。サービスの契約について、日文研で保持しているZoomのアカウントを、どれだけ使用するか確認す

る。(全部で四つ?)あとはWebexも使用する。

- 聴講者の申し込み方法について、学内については申込書の提出でいいと思う。学外については学内者用のテンプレートを変えてもらった形式を用意して、各関係機関に配布してもらう、もしくはホームページ上から用紙をダウンロードして、申し込んでもらうという形をとって、申し込みがあった人をSlackに、定員なしで呼び込んで、そのあとに繋げていきたい。申し込みの段階で、所属と名前を明らかにしてもらえたら、問題はないのではないか。(石原)
- ・Zoomで発表者に何も権限を与えずに、聞くだけしかできないZoomのリンクがあった。(→Zoomビデオウェビナー)このウェビナーを使えば、参加者を広く募集して、大丈夫なんじゃないかと思う。またウェビナーに参加する人の名前を表示してもらえれば、会の運営を妨げるような人は入ってこないと思う。(前山)

### 稲賀専攻長からの助言

プレナリーセッションをやっているとき、オンラインのコマンドまで対応できない。そうするとオンラインのコマンド担当を設定しておかないといけない。担当は、ある程度、経験があって、面子がわかっている人でないとできないのではないか。海外の学会を見ても、成功するかどうかはコマンドの力量に左右される。初めから上手くやる必要はないが、力量を踏まえて、役割分担は考えておいた方がいい。

かなり参加者があって、多くの質問が寄せられた場合、すべてに対応できないので、Slackに挙げてもらって、対応する旨を伝えておく必要がある。また多くの質問があった場合、運営側で調整させていただく旨を事前に一言、伝えておくことも必要かと思う。

### 5. 全体の時間配分について

- ・1日目の10:00~12:00では、オンラインのチュートリアルセッション枠を設ける。13:00~18:00は基調講演と研究発表が中心になるが、発表者数によって微修正する。2日目は10:00~16:00迄で研究発表と分科会からのシンポジウムを検討しているが、これに加えて現地プログラムを開催しようか検討しているが、いかがでしょうか。(石原)

### 現地プログラムの開催について

- ・オンラインで何らかの形で行う。例えば、日文研の図書館長の映像資料と一緒に見るとかはできるかなと思うが、もし、難しいなら行わなくてもいいと思う。(王)
- ・確認だが、小松先生にお願いするとしたら、小松先生は現地の会場で講演されるのか、それとも研究室でされるのか。(前山)
- ・小松先生は、現地の会場に来てもらうことになると思う。(石原)
- ・そうすると現地プログラムの配信方法も、例えば、歴博の回線を各自が繋いで、同時に見ると支障が出るのではないかと。そう考えると、歴博の参加者は、例えば一つの部屋に集まってみるといった対策が必要になってくるのではないかと。そうした環境設定を考えても色々、難しいと思った。(前山)
- ・現地プログラムを日文研で行うのではなくて、例えば歴博や民博でギャラリートークを企画するのはどうか(各基盤機関を繋いで、館長や図書館長に話してもらう)。(王)
- ・では先ほどの、各基盤機関を繋いで、館長や図書館長に話してもらうという企画は今回のテーマに沿っているので、実施してみたいと思う。(石原)
- ・全体の時間配分について、具体的な時間配分については、次回、話し合うが、大きな流れは現在の設定でいきたいと思う。現地

プログラムを1日目と2日目、どちらに実施するかは発表者の人数次第になると思う。(石原)

### 稲賀専攻長からの助言

面白い企画だとは思いますが、時間的余裕があるかなど関連してくる。去年は国文研で行ったが、極地研を見物できたり、国文研も展覧会をやっていたりした。見ていくと結構、時間がかかる。こういった企画は参考になるが、今年はない。

それから発表者数等によって、現地プログラムは柔軟に対応しないといけない。そのうえで、こういう場合、各基盤機関の所長や図書館長の話は、事前に録画してもいいのではないか。それで質疑応答になったら、そこからライブにするという手もある。それで4機関5分撮っても20分になるにわけて、膨大な録画データを限られた時間以内に編集することが大変になる。それから各機関の紹介映像もあるが、皆さんに余力があれば学生のみなさんで映像を作るのもいいと思う。ただし、負担はあると思う。それから1年生は本部に行ったこともないので、本部から何か出してもらおうという手もある。ただ、そうするとあっという間に時間が膨らむので、やりだすと編集が大変だと思う。

### 6. チラシ・ポスターのデザインならびに記載内容について

- ・コンソーシアムの共催や協賛といった協力形態が決定したら、ポスターに反映させないといけない。(石原)
- ・会場については、オンラインがメインなので例年と記載を変更している。(王)
- ・表の記載について、「分科会・シンポジウム」にしてもらえると、より今回のやりたいことが伝わると思う。それから12月5日10:00~12:00のところに接続チェック時間という表記を入れてほしい。加えて、

5日のポスター発表のあとに、現地プログラム改めオンラインプログラム(オンライン特別プログラム、オンラインセッションプログラム)を枠として入れる。

アクセス内容の地図を抜いて、オンライン接続方法や説明を加えてはどうか。

会場の下にオンライン参加可能と追記してほしい。(石原)

- ・できるだけ対面参加を制限したほうがいいので、例えば対面参加は日文研の方のみと制限したほうがいいのではないかと。

(学務支援)

- ・1つ目、方法として、会期が近づいてきて条件が変わることがあるので、ホームページを確認してほしい旨、記載しておく。

現時点で、参加方法については明確に決めないで、オンライン参加は参加方法の一つであることと、会場にきたい人は会期直前に、各自、ホームページを確認することを伝達するというのはどうか。ほとんどの展覧会が今、そうしている。(稲賀専攻長)

- ・ポスターの印刷はどこに依頼したらいいのか。不備がないか確認するために、印刷サンプルが欲しい。(王)

- ・ポスターの印刷について、日文研の研究支援係に話をしたら、部数を刷ってもらえる。(石原)

### 7. 今後のスケジュールについて

- ・予算について、大きい予算が出てくるときは早めの相談とスケジュールを組むことが必要。大きい予算でなければ大丈夫だと思う。(学務支援)

- ・ある段階で、予算について学務支援とコンソーシアムとで、調整が必要だと思うので、よろしくお願ひします。それから今日の専攻長会議で、専攻長の先生方に各専攻の学生さんで、いい発表があれば出してほしいと伝えておいたので、各先生方は既にご承知なので、必要があれば連絡をとって



もらえれば話が通りやすいと思う。

(稲賀専攻長)

- ・今日の資料の11ページに役割分担表が載っている。基盤機関の事務の方の担当も掲載されている。今後、9月末以降から文化フォーラムの準備が忙しくなることが懸念される。つきましては、学務支援から委員のみなさんに直接、連絡がいくことが多々あると思いますので、こまめにSlackをチェックしてほしい。(石原)
- ・WEB会議は月1度で、スピードが足りない。Slackの中で意思決定することが多々、でてくるとおもう。特にポスターやチラシに関しては、募集の際に同時に出してしまうことになるので、今日明日くらいで、スピード感をもって、対応をお願いします。(学務支援)
- ・ポスターの締め切りは、いつくらいに設定するか。(石原)
- ・事務として、詳細はホームページで案内しますという記載を入れたポスターの締め切りについては、どれだけ応募期間を設けるかということ、加えてポスター完成までの期間とのバランスで調整して決めていけたらと思う。(学務支援)
- ・例年を考えると、10月中旬に聴講者の参加申し込みを締め切っている。12月上旬が実際の開催なので、オンラインであることを踏まえると、10月末までいけるのかな。(石原)
- ・対面での参加者とオンラインでの参加者で締め切りが変わってくる可能性はある。(学務支援)

## ■第5回学生企画委員会議事録

### 【概要】

- ◆日時：令和2年(2020)9月25日(金)  
15:30~17:30
- ◆場所：Webexによるオンライン会議

### ◆出席者(敬称略)：

- 学生企画委員：石原、前山、宋、王、伊藤
- 担当教員等：稲賀
- 事務：各基盤専攻大学院係、葉山本部・学務支援係

### ■主な決定事項一覧(詳細は次頁以降に記載)

次回の企画委員会日程：11月6日金曜日  
15:30~17:30(予定)

※次回の委員会の前に別途打ち合わせの必要あり。

## 0. ツールの紹介

→Slidoについて、前山委員から紹介があった。

### 1. 「国際日本研究」コンソーシアムの協力について

→「国際日本研究」コンソーシアム委員会にて、経費や後援に関して了承された。

### 2. 口頭・ポスター発表の申し込みについて

→9/25応募締め切りの時点で、口頭発表1件、ポスター発表5件。

→Peatixを活用した聴講参加券の配布について、学務支援係から説明があった。

Peatix他オンラインの運用を前山委員が担当する。

→他大学の学生についても先生の推薦があれば発表可能。

### 3. 分科会・シンポジウムのテーマならびに方式

→分科会は廃止。Slack上で服部・岩下委員が提案した「アマビエから考える文化のレジリエンス」をシンポジウムのテーマとする事で合意。

→依頼する先生について、各基盤機関の委員が積極的に働きかけること。



#### 4. リモート開催（オンライン開催）時のツールと運用

→各プログラムの実施方法（案）をもとに、ツールを運用する旨、了承された。

#### 5. 全体の時間配分について

→口頭発表の集まりが悪いため、時間の短縮や調節をする必要がある。

#### 6. チラシ・ポスターのデザインならびに記載内容について

→チラシ・ポスターにコンソーシアムの「後援」を明記する。

→ポスターの配布枚数について了承された。

#### 7. 予稿集について

→電子媒体のみで予稿集を作成する旨、合意。予稿集原稿締切を第二次募集の応募者のみ10/12に延長。作成スケジュールについては予稿集担当が再検討する。

#### 8. 今後のスケジュールについて

→参考資料をもとに、各種担当で司会台本や動線資料を作成願いたい。

#### 9. その他（専攻長会議で審議が必要な内容など）

→口頭発表件数が少ないため、10/9まで応募申込を延長。予稿集締切は別途案内する。

→開会・閉会の挨拶を先生方に依頼する。

### ■詳細な議事録

#### 0. ツールの紹介

Slidoについて、前山委員から紹介があった。質問やアンケートをリアルタイムでとることができる。

#### 1. 国際日本研究コンソーシアムの協力について

・国際日本研究コンソーシアム委員会(9/15)にて、以下の三点が了承された。

1 フォーラムのチラシ・ポスターへの「国際日本研究」コンソーシアム名称及びロゴの掲載、コンソーシアム会員機関への配布、コンソーシアムウェブサイトへの掲載、配布先・連絡先への案内

2 コンソーシアム会員機関からの参加希望者のとりまとめ

3 報告書の作成に要する経費の支援

・報告書の経費は年度内の執行になる。年度またぎは追徴金を取られる可能性があるため、年度内に会計を締めてほしい。また、コンソーシアムの事務と葉山本部の事務とでフォーラムについて連携やサポートをお願いしたい。（稲賀専攻長）

・協力形態については、コンソーシアムがフォーラムを「後援」する旨、承諾された。なお、専攻長会議（9/18）でコンソーシアムの後援が了承された。

予稿集の原稿締切期日が10/5になっており、第二次募集者にとっては早すぎるのではないか。（稲賀専攻長）

・事前にコンソーシアム事務（日文研）と葉山事務とが電話で連絡を取り、以下の事項を確認した。（学務支援係）

1 コンソーシアムの「後援」の手続きについては不要であること。

2 経費の流れについてはコンソーシアム事務（日文研）と葉山とで対応すること。

・ポスターに「後援」の文字を入れてほしい。（石原委員長）

・ロゴの前後ではないところに「主催」や「後援」の文字を入れる。（王委員）

## 2. 口頭・ポスター発表の申し込みについて

9/25時点で口頭発表1件、ポスター発表5件。

### 〈一般聴講者（オンライン参加者）の申込について〉

Peatixを活用した聴講参加券の配布について、学務支援係から説明があった。すでに学務支援係が仮アカウントを試みており、以下のURLからプレビューを確認できる。

<https://peatix.com/event/1646300/view?k=e4e90e4ccd1d16d1e50271b1ac7511fca bfc0bdf>

- ・オンライン聴講参加券「チケットを申し込む」（無料）をクリックし、オンライン参加を申し込むことができる。参加者数の把握や直前の接続方法の告知に使える。参加者人数は200人としているが変更可能。総研大HPへの告知や広報は学務支援係が行う。Peatixの運用や細かい編集をする担当委員を決めていただきたい。（学務支援係）
- ・Peatixの運用担当をしたい。それに際して、チケットの発売期限はいつに設定しているのか知りたい。（前山委員）
- ・発売期限は途中参加を鑑み、12/5の後半に設定している。期日の変更可能。（学務支援係）

### 〈他大学の学生による発表について〉

- ・他大学の学生で発表を希望している人がいる。（宋委員）
- ・過去にも他大学の発表者がいたので可能だが、事前に文化科学研究科の先生に推薦をもらう方がよい。（学務支援係）

## 3. 分科会・シンポジウムのテーマならびに方式

### 〈テーマについて〉

- ・服部・岩下委員がアマビエを出発点とする

シンポジウムができないかを提案している。アマビエは使い古された感もややあるかも知れないが、大衆的かつ多面的で、テーマに広がりを持たせられそうである。よって、分科会は廃止し、「アマビエから考える文化のレジリエンス」をシンポジウムの大テーマとする。（石原委員長）

### 〈依頼する先生について〉

- ・小松先生はお一人ではなく、日文研の先生方もお呼びし、シンポジウムを開催したい。（石原委員長）
- ・他の機関の先生方をお呼びし、多様性を持たせることはできないか。また、依頼する先生を早急に決め、依頼をお願いしたい。（学務支援係）
- ・依頼する先生に工夫を持たせたいと思っている。人員に関しては、昨年度は一つのテーマに三人をお呼びしていた。（石原委員長）
- ・小松先生とお電話した際、具体的に講演会で何をやるのかを相談にきてほしいと依頼があった。また、小松先生にシンポジウムにお呼びする先生方の推薦や紹介をいただけるのではないかと思う。（稲賀専攻長）
- ・各基盤機関の委員のみなさんが積極的に先生に働きかけをお願いしたい。各基盤機関から協力を得た方が、文化科学研究科の催しとして適切である。具体的に、日文研の場合では、広島県三次市の妖怪博物館で展覧会があり、働きかけをすれば人が集まると思う。また、民博の場合は、「怪異と驚異」展関連のシンポジウムが行われたため、誰かお呼びできると思う。各基盤機関でさまざまな企画が行われているので、先生・学生を含めてお呼びすることができると思う。また、今年の特殊事情により各自がバラバラな状態であるため、これを機会に一緒に何かを作り上げることができるのではないかと思う。（稲賀専攻長）

- ・歴博、国文研でお呼びできそうな先生方はいらっしゃるか？ (石原委員長)
- ・候補はあるが、シンポジウムの開催趣旨があれば依頼しやすい。どれくらいの温度で呼ばれているのかを伝えられたらと思う。 (前山委員)
- ・国文研では感染症に関してご発表されている先生方がいらっしゃったので、声をかけてみたいと思う。 (伊藤)
- ・各基盤機関で感染症や怪異に関する同様の企画が行われている。それらの応用編としても開催を考えられるのではないかと思う。 (稲賀専攻長)

#### 4. リモート開催（オンライン開催）時のツールと運用

※資料1 各プログラムの実施方法（案）参照。

- ・Zoomを中心にYouTube Liveを併用し、質疑応答はSlidoを活用。ポスター発表はZoomのブレイクアウトセッションを使用する。 (石原委員長)

#### 5. 全体の時間配分について

※資料2 タイムテーブル（案）を参照。

- ・口頭発表の集まりが悪いため、発表者を募る必要がある。 (石原委員長)
- ・二日目口頭発表に2時間分必要なのか。一日目の口頭発表を削るのはどうか。 (前山委員)
- ・二日目の口頭発表を削り、終了時間を早めることもできる。口頭発表者は少なくとも四人は集めたい。 (石原委員長)

#### 6. チラシ・ポスターのデザインならびに記載内容について

※資料3参照。

- ・ポスターについてはほぼ問題ないが、のちほど「後援」の文字を王委員に入れていただく。ポスターの配布枚数について、学務支援係

が各研究機関とコンソーシアム連携機関とに配る枚数をエクセルで作成された。

(石原委員長)

- ・研究科に配る枚数は概ね例年通りだが、オンライン開催がメインであることと、開催専攻の日文研への一般来客者が少ないことを加味し、例年より少なくしている。

(学務支援係)

- ・同施設に属している研究機関（例えば立川）は、配布物を回してもらう必要がある。具体的に日文研は何部減らしたのか？また、コンソーシアム加盟機関への配布はだれが受け持つのか？ (石原委員長)

- ・日文研は例年より70部減らした。総研大より大きい機関には数をそろえ、逆に学生のいない機関には枚数を少なく設定している。配布については、コンソーシアムとの協定で会員機関への配布が含まれているため問題ない。 (学務支援係)

- ・チラシやポスターのはけ方はどうにでもなる。配布物による集客人数は極めて少ないが、ペーパーで流通させることに社会的必要性がある。配布枚数よりも使い方の工夫が必要である。なお、記録の時に足りなくなることがあるので注意すること。

(稲賀専攻長)

- ・印刷発注業務は日文研の事務が受け持ち、色校正等の微調整は委員が担当する事で了承を得ている。 (王委員)

#### 7. 予稿集について

##### 〈予稿集の位置づけ〉

- ・11/30が納期ということは予稿集の発送はしないのか？ (前山委員)
- ・予稿集の利用の仕方について、発送するならスケジュールをもっと早く組む必要があり、当日配布だと急ぐ必要はなくなる。 (教育支援係)
- ・電子データに関しては、参加者全員に事前に配布する方向で決定したい。 (石原委員長)

### 〈媒体、部数について〉

- ・紙・データ併用型に賛成。（石原委員長）
- ・予稿集作成に関して、疑問点や懸念される点ある。（稲賀専攻長）
- 1 昨今は紙媒体で予稿集を作成しなくなっている。紙媒体は必要か？
- 2 会場に何人集まることがわからないため、部数の推定が難しいこと。
- 3 土壇場での原稿差し替えの対処を考えておく必要があること。
- 4 委員が校正まで担当するのか、発表者の自己責任か？
- 5 電子データの管理は以外と大変。データ作成を基準に日程を組んだ方がよい。
- 6 発表題目と数行の説明を事前に公表するだけでも、開催内容を周知させられる。
- 7 投稿者に電子データをどこまで公開するのかを周知させる。ポスター自体を公表してしまうと盗用される可能性がある。
- ・基本的にデータで配布し、会場にいる数人分には基盤機関のプリンターで数部印刷し配布することもできる。また、データ作成のみを業者に発注依頼することができる。（伊藤）
- ・予稿集は電子データのみとし、業者に依頼することとする。また、電子データには発表要旨のみ公開する旨、周知する。また、報告集に発表原稿を載せることも発表者に了承を得たい。（石原委員長）
- ・報告集に載せると同様の内容が論文で提出できなくなる。そのあたりを考慮してほしい。（稲賀専攻長）

### 〈台割りについて〉

- ・オンライン独自のページを設けるか？（伊藤）
- ・内容が未定のため、オンライン独自のページは無しとしたい。（石原委員長）
- ・緑色の部分の原稿（予稿集ページ構成案参照）を担当委員にお願いしたい。（伊藤）

### 〈スケジュールについて〉

- ・予稿集作成スケジュール（案）は、紙と電子媒体の両方で制作することを念頭に置き、納期を開催5日前の11/30に設定し、校正二回のスケジュールで日程を組んだ。しかし、電子データのみで作成に決定したため、改めてスケジュール案をSlack上に掲げる。（伊藤）
- ・日程を決めるに当たって、いつぐらいまでに何人分のページを確保するのかでスケジュール感が変わる。業者の発注の場合、国文研で業者の選定、スケジュール調整を行い、発注手続きは国文研・葉山のどちらかで担当する。（教育支援係）

### 〈予稿集の原稿締め切りについて〉

- ・二次募集に発表を申し込んだ方のために、予稿集の原稿締切を10/12に延ばす。入稿時期を過ぎた提出はできるだけ避けたい。（伊藤）
- ・学務支援係の方で発表者に原稿締切日の延期を告知していただく。ただし、予稿集をデータのみで配布するため、二次募集以降に申し込みをした発表者については、別途締め切りを案内する。（石原委員長）
- ・原稿の提出方法についてはドロップボックスを用意し、そこにアップロードしていただく方向にしたい。（学務支援係）

## 8. 今後のスケジュールについて

- ・参考資料をもとに、各種担当で司会台本や動線資料を作成いただきたい。（石原委員長）
- ・オンライン独特のものとして、Zoomの使用手順やシステム運用のスケジュールについても踏まえて作成いただきたい。昨年度のはSlack上に投稿した。（学務支援係）

## 9. その他（選考長会議で審議が必要な内容など）

- ・昨年度の10月の専攻長会議では進捗状況の確認のみであった。（学務支援係）
- ・開会閉会の挨拶は、参加される先生の状況を見て挨拶をお願いする。日文研の井上所長が予定を空けていらっしゃるので挨拶をお願いしたいと思う。（石原委員長）
- ・発表者の件等、専攻長会議で要望をかけることも可能である。ただし、先生方のネットワークのみでは成り立たないため、学生の積極的な働きかけが求められる。また、学会発表的なモデルに縛られるのではなく、数人が集まってフリーディスカッションを行うなど、一人が独立して発表する必要もない。オンライン上で集まる機会を提供することも有効ではないか。（稲賀専攻長）
- ・発表締め切りを10/9まで延ばし、学務支援係から告知していただく。懇親会については別途検討したい。（石原委員長）

## ■第6回学生企画委員会議事録

### 【概要】

- ◆日時：令和2年（2020）11月6日（金）  
15:30～17:40
- ◆場所：Webexによるオンライン会議
- ◆出席者（敬称略）：
  - 学生企画委員：石原、前山、岩下、金丸、服部、宋、伊藤
  - 担当教員等：稲賀
  - 事務：各基盤専攻大学院係、葉山本部・学務支援係

### ■主な決定事項一覧（詳細は次頁以降に記載）

今回の企画委員会日程：12月11日金曜日  
10:00～12:00（予定）

#### 1. 現状確認

- ・参加者数・申込件数（現地・オンライン）  
→現地3名（Google）、オンライン六名（外

部の方も含む）。

- ・予稿集  
→初版ができ、校正しているところ。
- ・口頭発表とポスター発表  
→口頭発表：現地5名、オンライン1名（後藤先生）
- ・ポスター発表  
→全員オンライン
- ・基調講演  
→小松和彦先生「見えないものに対する恐れと人間—文化科学研究の観点から—」
- ・シンポジウム  
→司会：安井眞奈美  
登壇者：相田満 川村清志 木場貴俊 林勲男  
近いうちに、司会の安井先生と打ち合わせ。
- ・タイムテーブル  
→担当者の名前を入れたように、各プログラムを担当することになる。
- ・オンライン運営  
→4番のところで説明した。

#### 2. 基調講演（最終確認）

→小松先生への話していただきたい内容は資料1の順位をお願いする旨、了承された。

#### 3. シンポジウム（最終確認）

→資料2の開催趣旨を予稿集に掲載すること。  
→登壇者の発表タイトルと内容について、各担当の学生委員から説明した。

#### 4. オンライン開催ツールと運用

→YouTube Liveを使う方針。  
→民博と葉山本部からパソコンをそれぞれ3台ぐらい援助された。  
→カメラなどの機材は葉山本部を中心に、日文研と金丸さんが補助されること。



## 5. 今後のスケジュールについて（特に各種担当における）

→各プログラムの担当者に台本の作成願、副委員長にアンケートの作成願（作成後は全員で共有する）。

→12月4日（金）のタイムテーブルに合意された。

## 6. フォーラム終了後について

→アンケートの集約（第七回学生委員会までに）。

→報告集の作成について（2月末－3月頭を目処に）、編集長の選定（できれば学生企画委員長以外の委員の方）、文字おこしの業者への依頼確認、各発表者からの原稿提出願、報告書への記載内容案に関して、了承された。

→評価反省（ペーパーの提出）：できれば事務も含めて全員が出すこと。

→第七回学生企画委員会12月11日（金）  
10:00－12:00（仮）

## 7. その他

→物事を決めてから先生に連絡すること。

### ■詳細な議事録

#### 0. 議事録について

- ・学生の負担が多すぎるという声があるが、議事録は今年学生委員会でどんな話題が出るのか、特に今年はオンラインで行うので、今までやってなかった経験を次の世代にわたるなどの役割を果たしている。そして、報告書の最後に入れる可能性があるため、ちゃんと使い道があると考えながら、やっていただきたい。（稲賀専攻長）
- ・今年は報告書を作りたく、来年につながっていくスペースになってほしい。議事録はどのような話があるのかはとても大切だと思うが、負担にならないように簡単に作っていく。（石原）

#### 1. 現状確認

- ・**参会者数・申込件数（現地・オンライン）**
- ・現時点で対面の方は3名（Google）、Peatixの方は（オンライン）外部の方も含めて六名。多くの参加者を募集したいので学生さんにもぜひ宣伝してほしい。

（学務支援係）

- ・皆さんの方から特に同じ研究科の院生の皆さんにオンラインで参加できるので是非申し込んでくださいというふうにアピールすることをお願いしたい。（石原）

#### ・予稿集

- ・今の段階で予稿集の初版ができて、著者に校正していただくところであり、順調に進めていると思う。（伊藤）

- ・伊藤さんがおっしゃった通りにおおむね大丈夫であるが、最初の締め切りまでに出していただけない小松先生のプロフィールの情報、シンポジウムの開催趣旨と登壇者のプロフィールを今日の資料で予稿集に載せても大丈夫であるのか。（国文研教育支援係）
- ・シンポジウムの方は大丈夫であるが、小松先生のプロフィールは今日の会議が終わってから秘書の方に確認しようと思う。間に合うのか。（石原）

- ・基本的には問題ない。ただし、スケジュール上の締め切りは11月10日であり、校正の方は1回目が終わったが、11月11日から第2回目の校正に入る予定であるが、その前をお願いしたい。そして、プログラムのシンポジウムのところであるが、発表される先生のお名前を一応入れたが、個別の発表タイトルは待てれば出すかどうかを確認したい。（国文研教育支援係）
- ・今日書いた開催趣旨やプロフィールなどを確認してもらってからパッチングしようと思う。（石原）
- ・そうしたら、国文研に出していただければ運営できる。また、もし今日の開催趣旨、

プロフィールなど変更しない場合なら、改めて提出する必要はないが、プログラムのタイトルのところの情報を願います。

(国分研教育支援係)

- ・資料1-2には小松先生のプロフィールのところであるが、令和2年(2020)秋瑞宝重光章奨を受賞されたので、これも入れた方がいい。また、総研大文化フォーラムなので、総研大の名誉教授をぜひ掲載していただきたい。(学務支援係)
- ・この後、確認してから掲載させていただく。ただし、小松先生のプロフィールのページ数は気になっている。(石原)
- ・石原さんがおっしゃったプロフィールのページ数について、今のプロフィールの文字の幅が広いので、いただいた資料を1ページに収める方針でやろうと思う。

(国文研教育支援係)

#### ・口頭発表・ポスター発表

- ・口頭発表について、現地の方は5名であり、オンラインの方1名(後藤先生)である。タイムテーブルによると、1日目は日文研現地で吉川さん、黄叢叢さん、児島さん、2日目は宋埼さん、金丸さん、後藤先生はオンラインである。基本的にはZoomになっておるが、後藤先生は大丈夫であるのか。(石原)
- ・後藤先生は一人だけオンラインなら現地にいくと考えているので、もしかして現地で発表するかもしれない。しかし、12日まで長期出張されるので、12日以後に現地か、オンラインかを確認すると連絡する予定である。(前山)
- ・ポスター発表に関しては、今の段階でポスター原稿をいただいたのは澁谷さん一人だけになっているが、締め切りは11月9日なのでまだ数日ある。そして、発表の方法について、みんなは動画を選択しているので、当日Zoomで全部説明するのは一人も

いらっしゃらない状態である。

(学務支援係)

- ・相田先生はポスター発表をしていただいて、シンポジウムも登壇されるので、どのように調整するのか。(国文研教育支援係)
- ・ポスター発表は全体オンラインなので、日文研にはポスター発表用の部屋を用意しておるので、オンラインでしたらオンラインで発表できる。シンポジウムの方は登壇、いわゆる舞台の形になっている。(石原)

#### ・基調講演

- ・小松先生は「見えないものに対する恐れと人間—文化科学研究の観点から」というテーマで講演される。そして、研究者の卵である院生たちの将来のために役に立つまたは少し参考になれるようにと望んでおられる。そのため、文化科学研究の院生たちはぜひともたくさん参加していただきたい。私の方から今日の確認内容をお送りいたし、講演内容の最終確認することになっている。(石原)

#### ・シンポジウム

- ・シンポジウムの司会の安井先生は現地参加していただけることになっている。今日の会議が終了後、安井先生と、登壇者のテーマなどについて一度打合せしたいと考えている。シンポジウムの登壇先生の発表タイトルなどについてのちほどお話しする。(石原)

#### ・タイムテーブル

- ・タイムテーブルについて、特に確認することはないが、一応担当者の名前だけを入れた。具体的なことは後で話し合うことになっている。全体的な流れはこれで問題ないと思う。(石原)
- ・学長と永田理事は日文研現地で参加される。もう一つは二日目日曜日の昼ごはんの休憩が12時10分から13時までになっている

るが、近くのコンビニは歩いて10分ぐらいである。ここで買うかまたは近くの休日に配達できるお弁当の業者があるのかについて確認したい。(学務支援係)

- ・現状確認しているところであるので、後程ご報告する。(石原)

### ・オンライン運営

- ・オンラインの方は後の4番のところで説明する。(石原)

## 2. 基調講演内容(最終確認)

- ・基調講演の優先順位について、資料1-1のように上から下の順位でお願いしたい。今日中に書き加えることができるので、もし何か聞きたいことがあれば、どんどんお話ししていただきたい。そして、プロフィールのところであるが、先ほどの受賞と総研大名誉教授を書き加えると問題はないと思う。(石原)

## 3. シンポジウム(最終確認)

- ・資料2の開催趣旨をそのまま予稿集に提出しようと思う。登壇者のプロフィールについて、去年までは司会のプロフィールはなかったが、今年はつき加えるようになった。(石原)
- ・川村先生の発表タイトルは「Resilience? : (マイナス) から始める現実生活」である。具体的な内容は分らないが、おそらく「レジリエンス」という言葉を使って民俗学的なところから零からではなくてマイナスから始めるんだと予想する。(前山)
- ・木場研究員のタイトルは「怪異を作る」である。具体的には見えない恐怖はどのように、どうして怪異なのかなどの江戸時代近世の話になっている。(石原)
- ・林先生は民俗芸能が、災害被災地における生活の再建や地域の復興に果たす役割と、そうした民俗芸能への支援活動について、

脆弱性とレジリエンスという概念をヒントに東日本大震災の事例からお話する。民俗芸能はかぶることなら、もう一つのテーマがあるが、かぶるのはなさそうである。

(服部)

- ・仮のタイトルでも大丈夫であるが、タイトルがあれば送っていただきたい。相田先生はタイトルと内容は遅れそうであるが、前に伊藤さんが話した地震の話であると思う。(石原)
- ・安井先生のご専門は文化人類学・日本民俗学である。最近、医療史、身体などについていろいろ研究されている。(宋)
- ・安井先生はいろんなところで司会され、経験が豊富な方であるので、問題はないと思っている。また、発表順番は今のタイムテーブルにし、テーマを加えて先ほどの予稿集のところに入れることになる。総合討議の方向性について、これは安井先生と後日話さなければならないが、災いとか、文化のレジリエンスなどについて討論するが、開催趣旨の最後のように時代背景をいれ、過去・現在・未来への時代順に進めばと思うが、皆さん何かご感想があれば、教えていただきたい。(石原)

## 4. オンライン開催のツールと運用

- ・YouTube Liveの方は全部業者に任せたいそうである。YouTube Liveのメリットは映像が残りやすい。Zoomを使う場合は参加者が参加し、その中に一人が発表しているという形になっている。現地で発表する発表者はカメラを通して現地発表者を写しながら行うほかに、画面共有が必要であり、報告者も報告用のPCを使わなければならないため、準備が必要である。その一方で、YouTube Liveの方は全体的に撮影しなければならない。(石原)
- ・そちらは当初YouTube Liveを想定したのはZoomより映像の質が良く、Zoomは

ミーティングなので双方向になるので参加するパソコンの方にも一定のスペックが必要になると、主催者とか運営の方にとってややこしいと思う。また、マイクは勝手に音を出すとかなどの問題もある。YouTubeの方は映像が残りやすい面と参加者が多少増えても負荷は増えないのはメリットである。あとはZoomよりYouTubeの方はURLですぐ入れるので見えやすいと思う。

(学務支援係)

- ・YouTubeなら途中参加しても最初から見れるに対して、Zoomは巻き戻しができないので、できるのならYouTubeの方がいいと思う。(前山)
- ・では、YouTube Liveを使用する方向で考えよう。次、各チームに必要なPC台数について、基本的には前山さんがおっしゃった通り、メールコマンド用は一台、発表者用のPCは一台と運営用の一台である。コメント、スライドなどはアカウントを使って接続するのに対し、配信用のPCは日文研のパソコンを使うことになる。もう一台のパソコンを借りてZoom接続を確認する方がいいと思う。あとは皆さん各自のパソコンで作業分担ではなく、総合チェックしながらという感じとは思いますが、メインとしてのパソコンを3台用意したら行けるというイメージである。(石原)
- ・3台はぎりぎり足りるかと思って、配信用は1台で、有線で接続する。あと、配信用のYouTube LiveならYouTube Live専用の1台とZoomならZoom専用の1台のように分けた方がいい。コメントとSlackは1台であるが、発表中のコメントの対応と会場のコメント対応が両方必要であるので、なるべく運営用のパソコンと発表中のコメント用のパソコンを分けた方がいい。学生委員がパソコンを持ってきていただきそれで何とか対応する。学務支援係は当日対応できるのか。(前山)

・学生の私物より、各基盤機関のパソコンがいいと思うので、民博からパソコンを持っていくのは可能である。そして、トラブルを避けるために、パソコンを多めに準備した方がいい。(民博研究支援係)

・葉山からは2、3台ぐらい持ち運べる。ただし、長距離持っていくので、早く教えていただきたい。(学務支援係)

・民博は学生委員が数名おられるので、できる限り台数確保するように調整する。(民博研究支援係)

・関西の民博と日文研は3台、3台と葉山の3台を用意していただき、前山さんと伊藤さんの方の私物があれば問題ないと思う。(石原)

・こちらはパソコンを早めに送る可能性が高い。それに、その時にパソコンの接続について、教えていただきたい。(学務支援係)

・日文研ゲスト用のWi-Fiがあるので、それが一番強いと思う。また、接続テストの日程は11月13日午後1時からになる。(石原)

・カメラは必要であるので日文研のカメラが古いならこちらから持ち込もうと思う。また、日文研の様子を見て購入する可能性もある。(学務支援係)

・機械は2台ぐらい提供できるが、具体的なことは接続テストの当日に日文研の現場に来てみて決める。(金丸)

## 5. 今後のスケジュールについて（特に各種担当における）

- ・各プログラムの担当者に台本の作成をお願いする。去年の進行メモはすでにSlackにアップしたので、ご参照お願いする。また、前山さんにアンケートの作成をお願いする。タイムテーブルのほうは基本的には会場担当が司会することになっている。Slackなどの運営は前山さんであるが、YouTubeの担当はまだ分からない。休憩などの会場の面について1日目は宋さ



- ん、2日目は王さんをお願いします。(石原)
- ・ポスター発表であるが、複数の発表者は京都に来るので、複数の部屋がいり、カメラもいるという理解でよろしいか。(前山)
  - ・日文研の方は部屋を用意しているが、当日使える部屋の数は限られるので、数人が一つの部屋で発表する可能性が高いと思う。そして、司会の方はメインの会場ですることになっている。(石原)
  - ・会場担当は司会なら、現場担当はどうなるのか。(前山)
  - ・いる人に頼むしかないが、現場の様子を見て決める。また、会場担当が進行メモを作成する時にもし部屋の番号などが分からない場合、そのまま置いておいてほしい。ただ、個人名とか年月日とかの説明の方は書いていただきたい。前山さんのアンケートの方は葉山から送ってくれるデータのもとで作成していただきたい。
- 12月4日の話であるが、資料の4で書いたように午後1時に集合し、1時10分に自己紹介、会場見学などして、40分から当日のレイアウトの確認など、14時30分から各基盤機関事務の方をお願いして接続テストする。15時からリハーサルなどして17時に終わると思う。
- 12月4、5、6日に日文研ハウスに泊まる学生委員は六名である。葉山の皆さんは別のところに泊まることになっている。
- 12月4日の晩御飯はレストラン赤鬼か、コンビニか、または日文研ハウスで調理するかをお願いします。12月5、6日のお昼はまとめて調達することになっている。ただし、来られる人の方の分は分からないため、一応20ぐらいを注文する。学長と理事の方は中上さんと相談しながら用意する。(石原)

## 6. フォーラム終了後について

アンケートの集約について、できるだけ第七回学生企画委員会までに集約すること。

報告書の作成について、来年の2月末-3月頭に出せるようにする。また編集長は学生企画委員長以外にお願いしたい。文字おこしの業者への依頼を確認し、各発表者は発表をもとに原稿を提出していただく。報告集への記載内容案は添付したものををご確認お願いします。

もう一点の評価反省について、来年度につながるため、今年はどうなるのかについて学生委員は出すようお願いしたい。また、各立場から評価していただきたいため、事務の方も提出していただければ幸いと思う。

次回の学生企画委員会は12月11日(金) 10:00-12:00

添付した資料6の報告集への記載内容案について、ご意見などがあれば、教えていただきたい。

資料7は評価・反省シートについて、このように簡単に作っている。最後は参考資料のように来年度につながる申し送り事にまとめている。

## 7. その他

- ・歴博の先生方から、物事を決めてから連絡してほしいと強く訴えられた。(前山)

## ■第7回学生企画委員会議事録

### 【概要】

◆日時：令和2年(2020)12月11日(金)

10:00~13:00

◆場所：Webexによるオンライン会議

◆出席者(敬称略)：

○学生企画委員：石原、前山、岩下、服部、宋、伊藤

○事務：各基盤専攻大学院係、葉山本部・学務支援係



## 1. 各種報告

- ・最終参加者数
- ・申込件数（現地・オンライン）
- ・アンケート結果
- ・評価反省シートの発表と感想

## 2. 報告集について

- ・編集長の選定 → 役割決め
- ・報告集内容
- ・文字起こしの業者決め
- ・必要などころへの原稿協力依頼
- ・口頭発表者の原稿締め切り（1月15日）
- ・各種掲載許可書
- ・報告集の冊子化

## 3. 専攻長会議等への提案

- ・検討事項
- ・文化フォーラムの成果と課題
- ・来年度以降への提案と課題
- ・来年度企画委員への申し送り事項？

## 4. 今後のスケジュールについて 次回企画委員会必要か否か

- ・なし

## 5. その他

- ・次回学生企画委員会の開催日について

### ■詳細な議事録

#### 1. 各種報告

##### ・最終参加者数

（総研大文化フォーラム2020 参加者数・申込者数報告を参照）

学務支援係：

1日目（12月5日）95名、2日目（12月6日）76名

YouTubeの方は最大同時視聴者数の記録であり、再生回数は120台。

##### ・申込件数（現地・オンライン）

（総研大文化フォーラム2020 参加者数・申込者数報告を参照）

学務支援係：

専攻ごとの統計がみえる。各専攻の参加者数に大きな差がない。今年は外部の参加が多めになる。

##### ・アンケート結果

学務支援係：

現時点は八点を集計。基調講演について、内輪ネタを含む内容は外部参加者に向けていないなどの意見がある。現地参加者が少ないため、オンラインのみに限定すべきなどの意見がある。長文もあり、今後の反省としては報告集に入れたいが、現時点は回答数が少ないため、細かい分析がまだ難しい。詳しい内容は学生委員各自で確認できる。

##### ・評価反省シートの発表と感想

（総研大文化フォーラム2020 評価と反省シートを参照）

石原委員長：

- ・提出分はSlackで共有した。順番で簡単に報告することをお願いしたい。全体通してはよかったが、文化フォーラムの意図と意義が最後まで見えにくかった。教育の位置づけについて専攻長会議で検討をいただきたい。委員長として一番の反省点は皆さんと全体像を共有できなかったこと。

前山副委員長：

- ・外部からみれば多分よくできたが、準備段階の見えない部分に失敗があった。オンラインを強くし過ぎると石原委員長が言った意義が少なくなってしまう。

宋委員：

- ・全体がよかった。委員長に大きな負担をかけてしまったことは一つ目の反省点である。二つ目はツールがやや複雑であること。特にSlidoでの質疑に不便を感じた。

王委員：

- ・ポスター発表が最終的に採用した形式はコミュニケーションを重視する元来の目的からややはずれた感じ。ツールの使用は難しいと思う。特にSlidでの質疑は時間がかかり、オンライン参加者の質問はほとんど答えられなかったことに不便を感じた。役割分担について、委員長への負担が大きいため、分担者を増設・増やすべき役割部分がある。

岩下委員：

- ・全体について、不明な点が多いわりに当日は順調に進行できたことはよかった。会場の意見は同感。準備段階について、会議の効率がやや低い。討議で決めることとすばやく決めることを分けると効率的になる。昨年の資料を活かして最初にスケジュールを立てて動けばよかったこと。

石原委員長：

- ・トップダウン経営の切り分けが不明であったことも私の反省点である。

服部委員：

- ・テーマに制約が大きかったが、もう少し時間をかけて決めればよかったこと。理系の方々が企画側に入らず、漠然とその参加を求めるとテーマと発表に制約をかかってしまう。撮影と会場設営を業者に頼むほうがよいのでは。

伊藤委員：

- ・反省点として、10・11月の開催直前にバタバタになった印象がある。オンラインツールの使用方法の共有が難しかった。

学務支援係：

- ・補足として、全体的にそれぞれの分野の進捗が見えづらかった。事務の立場を越えたことがある。作業の線引きは曖昧だった。

石原委員長：

- ・森さん（事務（民博））は今回欠席だが、今回出された意見を専攻長会議で報告することや、体制の再検討などについてご意見

を頂いた。

研究支援係（日文研）：

- ・総研大構成員はPeatix経由での申込が不要にしてほしかったと意見があった。会場担当事務としてスケジュール管理など十分なサポートができなかった。ポスター・チラシの発送はもっと早く進めるべきだった。次年度以降の実施する際は綿密な打ち合わせが必要であり、役割分担の線引きを明確にしてから始めるべきである。毎年の開催は事務の忙しい時期にあたるため、時期を見直してもよいのでは。オンラインと対面併用の実施に協力学生の雇用も検討しては。

教育支援係（国文研）：

- ・準備作業は苦勞したので体制の改善が必要：学生委員と事務の役割の線引き；例年の進捗管理の実績を引き継ぐ方法。直近の専攻長会議で具体的に議論するほうがよいのでは。

事務（歴博）：

- ・学生委員がほとんどの仕事をやっているように見えたけど、来年度歴博での開催にあたり事務としてはどうしたらいいのか。対面の参加者が少ない印象があった。

石原委員長：

- ・歴博の上野さんと平山さんからもご意見を頂いて、本フォーラムの位置付けについてやはり色々な意見がある。開催規模を縮小する意見はアンケートにも見受けられる。

→ 3.につづく

## 2. 報告集について

### ・編集長の選定

前山副委員長に決定。

### ・報告集内容

（報告書記載内容案を参照）

#### ・文字起こしの業者決め

学務支援係：

- ・「国際日本研究」コンソーシアムの資金をいただき、日文研の担当係と相談して業者を決める方向で進める。

#### ・必要などころへの原稿協力依頼

石原委員長：

- ・前山副委員長にリストアップをお願いする。

#### ・口頭発表者の原稿締め切り（1月15日）

石原委員長・学務支援係：

- ・1月15日の締切は問題なし。

#### ・各種掲載許可書

石原委員長：

- ・これからシンポジウムの登壇者に依頼。学務支援係に掲載許可書の作成・配布をお願いする。

#### ・報告集の冊子化

石原委員長：

- ・冊子化する担当の事務と基盤機関を決める必要があり、編集長前山副委員長所属の歴博にお願いしたい。

事務（歴博）：

- ・予算の問題があるので、何部を作る？

学務支援係：

- ・数量はこれから前山副委員長と相談。先に歴博に立替っていただくが、のち葉山本部がフォーラムの経費で支払う。

石原委員長：

- ・冊数に関して、各基盤機関に一冊、できれば総研大全基盤機関に一冊ずつ配布したい。国立国会図書館に一冊を納本、各学生委員に一冊を配布したい。他にはデータで配布する。参加者にはSlackを経由してデータを配布する。

前山副委員長：

- ・データ配布について、総研大の機関リポジ

トリに入れるのか。

学務支援係：

- ・学務支援係から交渉する。冊子本は葉山の図書館にも一冊入れたい。

### 3. 専攻長会議等への提案

#### ・話題・検討事項・文化フォーラムの成果と課題・来年度以降への提案と課題

石原委員長：

- ・以上のように様々な問題点があり、まずは報告集での反映と専攻長会議への提案から始まる。ただ提出の形について事務方のご意見を頂きたい。今回の文化フォーラムの成果といえばまずはオンライン・対面併用の開催が実施できたこと。そしてオンライン上の限りでは問題なく進行できたこと。課題についてはたくさんがあり、専攻長会議で提出したいと思う。また来年度以降への提案と課題とも関わる。

#### ・来年度企画委員への申し送り事項

石原委員長：

- ・申し送り事項について参考資料（2018年まで）を参照して作成したいと思う。

学務支援係：

- ・報告集と重複する部分もあるから効率良くできればと思う。

前山副委員長：

- ・歴博の先生各位も来年度の開催を期待している。ただ歴博の特性を考えた上で来年度の話をするべきである。

### 4. 今後のスケジュールについて 次回企画委員会必要か否か

石原委員長：

- ・今後の仕事は報告集と来年度企画委員への申し送り事項がある。それをふまえて今後のスケジュールを決めるが。報告集は2月末に完成する予定である。口頭発表者の原稿締め切り（1月15日）と文字起こしの

原稿のチェックが一番時間かかる作業になるかもしれない。少なくとも一月末までに初稿を完成したい。

前山副委員長：

- ・初稿ができた後の2月中旬頃、必要があれば会議を開こうと思う。

学務支援係：

- ・2月中旬の会議だとまだ日程の調整が必要。

石原委員長：

- ・もう一つの確認事項がある。来年度のフォーラムへの動き出しは何月頃から始まるか。

学務支援係：

- ・学生企画委員への依頼は今年度の3月中旬（締め切りは4月まで）。今年初回の委員会は6月半ば頃。12月18日（金）は文化科学研究科の専攻長会議がある。稲賀専攻長から今回の文化フォーラムの報告をいただくが、専攻長会議でお話いただきたい課題や提案とはは次回の専攻長会議の検討事項になる。

前山副委員長：

- ・例年同じように意見書や申し送り事項を出す、専攻長会議での開催形態の決定が遅くなる可能性が高いため、委員会の動き出しも遅くなる気がする。専攻長会議への提案はできるだけ早めをしたい。

石原委員長：

- ・私も同じ意見で、今回の評価と反省シートを今月18日の専攻長会議に出したいが。

学務支援係：

- ・提出できる形に整える作業が間に合うのか。

服部委員：

- ・専攻長各位の文化フォーラムに対する認識は学生委員側とギャップがあるので共有してほしい。来年度の委員長の負担が大き過ぎないように専攻長会議で話をして頂きたい。

前山副委員長：

- ・歴博は人手不足の事情があるので、抜本的な改革は難しい。

王委員：

- ・専攻長会議に出す提案は大枠なものではない。報告集は編集長が分担と締切を決めていただいて、次回の委員会は不要と思う。

石原委員長：

- ・私は提出分のシートに基づいて18日の専攻長会議への提案をまとめる。他にご提案ある方は13日までに提出ください。

## 5. その他

- ・次回学生企画委員会の開催日について



## 総研大文化フォーラム 2020

### 口頭・ポスター発表募集要項

#### 「文化のレジリエンスとは？ — 〈異〉をつなぎ、未来へ—」

##### 開催趣旨

今、私たちは、新型コロナウイルス（COVID-19）をはじめとし、国家間対立、民族紛争、自然災害など様々な困難に直面し、文化や文化研究に何ができるのかを問われています。

人類の歴史を振り返ると、こうした予期せぬ事態に幾度となく見舞われ、そのたびに試行錯誤し、乗り越えてきました。私たちは文化の柔軟性や多様性を考え信じることによって、〈異〉なるもの同士の対話を促し、未来に向けて歩を進めていかなければなりません。そこで、本年度のテーマは「文化のレジリエンスとは？ — 〈異〉をつなぎ、未来へ—」を掲げます。

レジリエンスとは「復元力」「反発性」「弾力性」「再起性」「適応力」「柔軟性」「回復性」などといった広い意味合いを持った言葉です。今回のフォーラムではあえて定義をせず、多彩な視点から「文化のレジリエンス」を検討することによって、文化科学の可能性を共有したいと思います。さらに、文化科学研究の知見で社会におけるレジリエンスを問い直すという、より踏み込んだ視点も提供したいと考えています。

今年の総研大文化フォーラムは、国際日本文化研究センターをメイン会場とし、オンラインでの参加もできるように環境を整備します。学問的垣根を問わず、様々な〈異〉をつなぐ機会となるように、皆様の参加をお待ちしております。

令和2年度学生企画委員長	石原 知明
文化科学研究科長	池谷 和信
国際日本文化研究専攻長 (フォーラム事業担当)	稲賀 繁美



## 日程

---

令和2年12月5日（土）～12月6日（日）

## プログラム（予定）

---

基調講演、口頭発表、ポスター発表、シンポジウム（予定）

※詳細については、決定次第随時総研大ウェブページに更新掲載します。

<<https://www.soken.ac.jp/event/6723/>>

## 参加資格

---

- 総研大に所属する学生（本学の正規生、ただし休学者を除く）・教員並びに文化科学研究科が本フォーラムへの参加を認める方

※学生の方は、本フォーラムへ参加するにあたり、予め指導教員へ報告をお願いします。

## 口頭発表・ポスター発表について

---

本フォーラムへの参加にあたり、発表（口頭発表・ポスター発表）をされる方を募集いたします。発表を希望する方は、（様式1）「口頭・ポスター発表申込書」とあわせ、（様式2）「発表要旨テンプレート」にタイトルと要旨（200字以上、400字以下）を記入の上、所定の期日までに提出してください。

なお口頭発表を希望する参加者が多数の場合、全体のタイムテーブルにおける時間配分の調整等の観点から、発表者を選考させていただく場合があります。予めご承知置さください。

## 応募方法

---

### (提出書類)

(様式 1) 「口頭・ポスター発表申込書」

(様式 2) 「発表要旨テンプレート」

### (書類提出先)

- 文化科学研究科に所属する学生・教員について

所属専攻の大学院係へ所定の書類を提出してください。

- 文化科学研究科以外の学生・教員並びに学外の参加希望の方について

学務課学務支援係 (Mail to: [gshien@ml.soken.ac.jp](mailto:gshien@ml.soken.ac.jp))宛に、所定の書類を提出してください。

### (提出期日)

- 発表希望者 (口頭発表・ポスター発表) について

申込締切：8月28日(金) 17:00 必着

## 予稿集原稿の作成について

---

口頭発表・ポスター発表の発表者には、下記の期日までに予稿集原稿を提出いただきます。

別紙 1 「総研大文化フォーラム 2020 予稿集原稿作成要領」をご参照の上、(様式 4) 「予稿集原稿テンプレート」に基づき、A4 判の書式 1 ページ以内に収まる文量で原稿の作成をお願いいたします。

予稿集原稿提出締切：10月5日(月) 17:00 必着

## ポスター印刷用原稿の作成について

---

ポスター発表者には、下記の期日までにポスター印刷用原稿を提出いただきます。

別紙2「ポスター発表原稿作成要項」をご参照の上、作成してください。ポスターはA0サイズになります。

ポスター印刷用原稿提出締切：11月9日（月）必着

## 総研大文化フォーラム 2020 担当者

---

令和2年度学生企画委員会

委員長 国際日本研究専攻 石原 知明

副委員長 日本歴史研究専攻 前山 和喜

文化科学研究科長 池谷 和信

国際日本研究専攻長（フォーラム事業担当） 稲賀 繁美

## 本件に関する問い合わせ先

---

国立大学法人総合研究大学院大学 学務課学務支援係

〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）

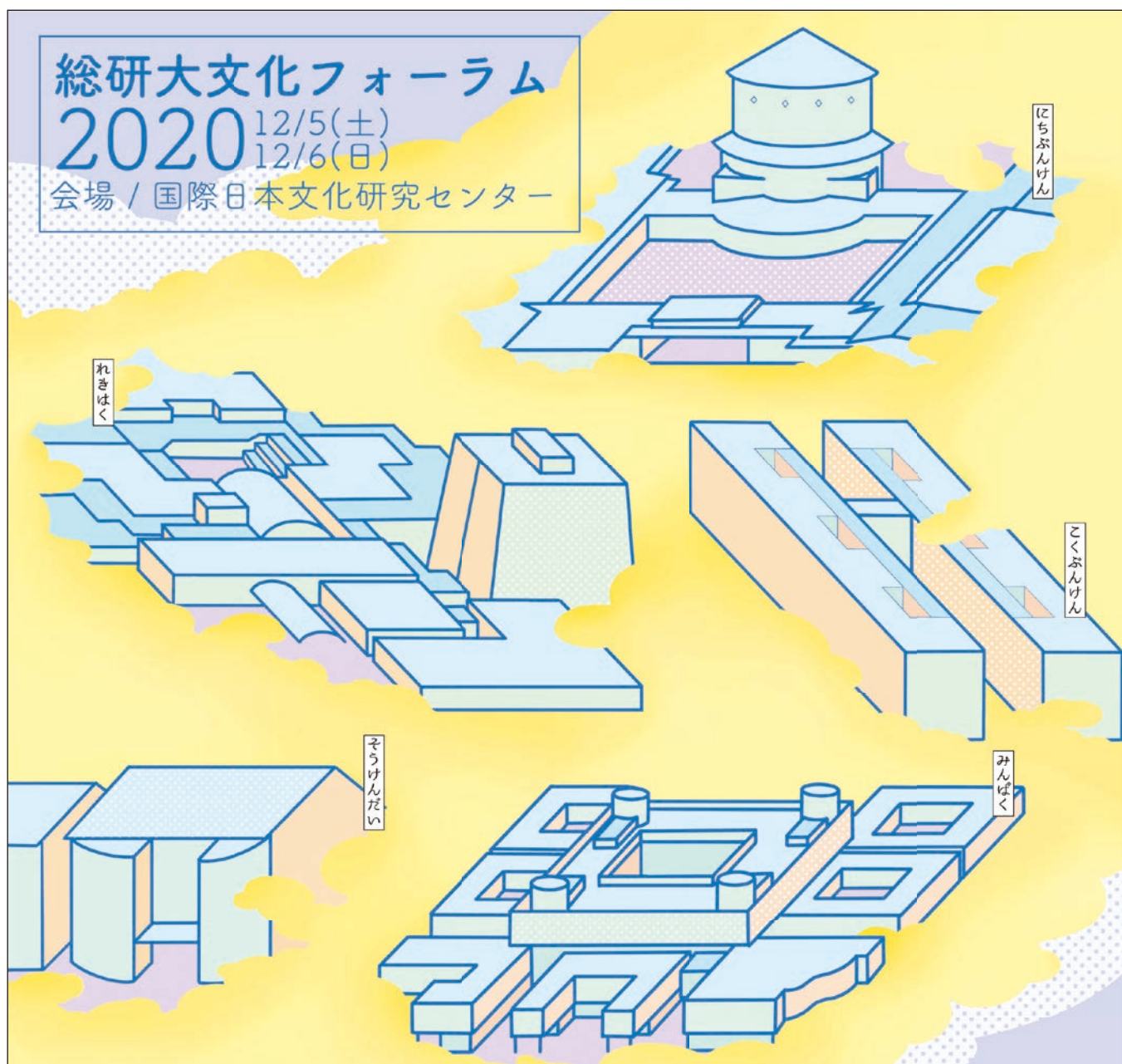
TEL : 046-858-1583、1531、1647

E-mail : gshien@ml.soken.ac.jp

# 総研大文化フォーラム

2020 12/5(土)  
12/6(日)

会場 / 国際日本文化研究センター



## 文化のレジリエンスとは？

< 異 > を こ な ぎ 、 未 来 へ

参加申込方法、最新情報はこちらから



### オンライン参加可能

主催 総合研究大学院大学文化科学研究科  
後援 「国際日本研究」コンソーシアム  
会場 人間文化研究機構 国際日本文化研究センター  
京都府京都市西京区御陵大枝山町3丁目2  
問合せ 国立大学法人 総合研究大学院大学 学務課学務支援係  
Tel: 046-858-1583, 1531, 1647 E-mail: gshien@ml.soken.ac.jp

12 受付・開会式  
基調講演 小松和彦  
国際日本文化研究センター名誉教授  
12/5 口頭発表  
5 ポスター発表

12 ポスター発表  
口頭発表  
12/6 シンポジウム  
6 閉会式

※ 新型コロナウイルスの影響により、会場やスケジュールなどは変更になる場合があります。最新情報はQRコードより当フォーラムの特設ページでご確認ください。

S O K E N D A I 国立大学法人  
総合研究大学院大学  
2020 NEW THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
国際日本文化研究センター  
International Research Center for Japanese Studies



「国際日本研究」コンソーシアム  
Consortium for Global Japanese Studies



# 総研大文化フォーラム2020

## 文化のレジリエンス とForumは2020? 〈異〉をつなぎ、未来へ

今、私たちは、新型コロナウイルス(COVID-19)をはじめとし、国家間対立、民族紛争、自然災害など様々な困難に直面し、文化や文化研究に何ができるのかを問われています。

人類の歴史を振り返ると、こうした予期せぬ事態に幾度となく見舞われ、そのたびに試行錯誤し、乗り越えてきました。私たちは文化の柔軟性や多様性を考え信じることによって、〈異〉なるもの同士の対話を促し、未来に向けて歩を進めていかなければなりません。そこで、本年度のテーマは「文化のレジリエンスとは? -〈異〉をつなぎ、未来へ-」を掲げます。

レジリエンスとは「復元力」「反発性」「弾力性」「再起性」「適応力」「柔軟性」「回復性」などといった広い意味合いを持った言葉です。今回のフォーラムではあえて定義をせず、多彩な視点から「文化のレジリエンス」を検討することによって、文化科学の可能性を共有したいと思います。さらに、文化科学研究の知見で社会におけるレジリエンスを問い直すという、より踏み込んだ視点も提供したいと考えています。

今年の総研大文化フォーラムは、国際日本文化研究センターをメイン会場とし、オンラインでの参加もできるように環境を整備します。学問的垣根を問わず、様々な〈異〉をつなぐ機会となるように、皆様の参加をお待ちしております。

12.5<sup>[土]</sup>

13:00

10:00~12:00 接続チェック

受付・開会式

基調講演 小松 和彦名誉教授  
国際日本文化研究センター

口頭発表

ポスター発表

18:00

12.6<sup>[日]</sup>

10:00

ポスター発表

口頭発表

シンポジウム

閉会式

16:30

主催 総合研究大学院大学文化科学研究科  
後援 「国際日本研究」コンソーシアム  
会場 人間文化研究機構 国際日本文化研究センター  
京都府京都市西京区御陵大枝山町3丁目2  
問合せ 国立大学法人 総合研究大学院大学 学務課学務支援係  
Tel: 046-858-1583、1531、1647  
E-mail: gshien@ml.soken.ac.jp

### アクセス

- JR京都駅(烏丸中央口)から  
京阪京都交通バス「21」、「21A」、「26」で約45分
- JR桂川駅から  
ヤサカバス「1」、「6」で約30分
- 阪急桂駅(西口)から  
京都市バス「西5」、「西6」で約30分  
京阪京都交通バス「20」、「20B」で約20分  
※バスはいずれも「桂坂中央」行き、「桂坂小学校前」  
又は「花の舞公園前」下車で徒歩約5分

### オンライン参加方法

<https://www.soken.ac.jp/event/6723/>  
あるいはQRコードからご確認ください





## プログラム

1日目 12月5日(土) 13:30~18:00

会場: 1階セミナー室1

13:30 ~ 13:45 開会式

YouTube

13:45 ~ 15:15 基調講演

YouTube

Slido

見えないものに対する恐れと人間—文化科学研究の観点から—  
小松 和彦 (総合研究大学院大学 名誉教授)  
司会: 荒木 浩 (文化科学研究科国際日本研究専攻 教授)

15:15 ~ 15:30 休憩

15:30 ~ 17:00 研究発表会 口頭発表

YouTube

Slido

昭和初期の日本でのソヴィエト文化への視線  
—第一次五カ年計画(1928~32)への評価を中心に—  
吉川 弘晃 (文化科学研究科国際日本研究専攻 学生)

中国人日本語学習者の連語習得に及ぼす要因  
黄 叢叢 (明治大学国際日本学研究所 学生)

『平家物語』の堅牢地神  
児島 啓祐 (文化科学研究科日本文学研究専攻 学生)

17:00 ~ 17:15 休憩

17:15 ~ 17:45 研究発表会 ポスター発表

Zoom

Slack

17:45 ~ 17:50 休憩

17:50 ~ 18:00 一日目総括

Zoom

## 2日目 12月6日(日) 10:00~16:30

会場：1階セミナー室1

10:00 ~ 10:30 研究発表会 ポスター発表

Zoom

Slack

10:30 ~ 10:40 休憩

10:40 ~ 12:10 研究発表会 口頭発表

YouTube

Slido

神儒仏三教思想と国教一川合清丸の思想について

宋 琦 (文化科学研究科国際日本研究専攻 学生)

災禍におけるアマの適応と生業の再編—三重県志摩半島を中心に—

金丸 雄一 (文化科学研究科地域文化学専攻 学生)

近代科学資料アーカイブ構築のための課題分析

後藤 真 (文化科学研究科日本歴史研究専攻 准教授)

前山 和喜 (文化科学研究科日本歴史研究専攻 学生)

12:10 ~ 13:00 休憩

13:00 ~ 14:30 シンポジウム

YouTube

Slido

災いから考える文化のレジリエンス

報告1 平安前期のレジリエンス—六国史時代と現代を見比べて—

相田 満 (文化科学研究科日本文学研究専攻 准教授)

報告2 Resilience? : - (マイナス) から始める現実生活

川村 清志 (文化科学研究科日本歴史研究専攻 准教授)

報告3 怪異のつくり方

木場 貴俊 (国際日本文化研究センター プロジェクト研究員)

報告4 被災地における民俗芸能の役割とそれへの支援

—脆弱性とレジリエンスから考える

林 勲男 (文化科学研究科地域文化学専攻 教授)

司会：安井 眞奈美 (文化科学研究科国際日本研究専攻 教授)

14:30 ~ 14:45 休憩

14:45 ~ 16:00 シンポジウム (総合討議)

YouTube

Slido

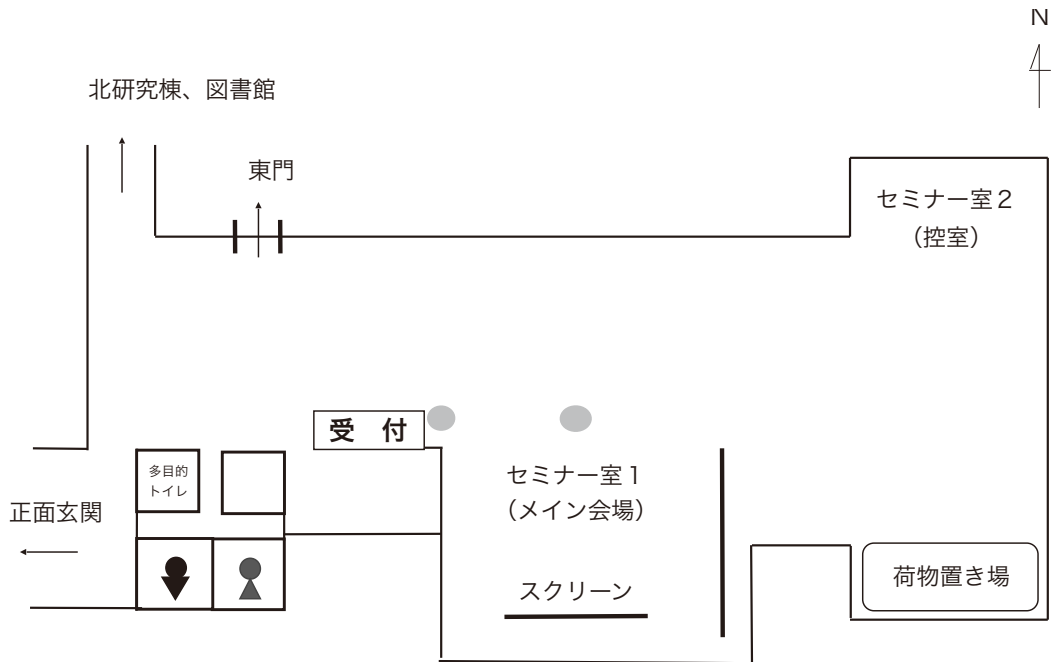
16:00 ~ 16:10 休憩

16:10 ~ 16:30 閉会式

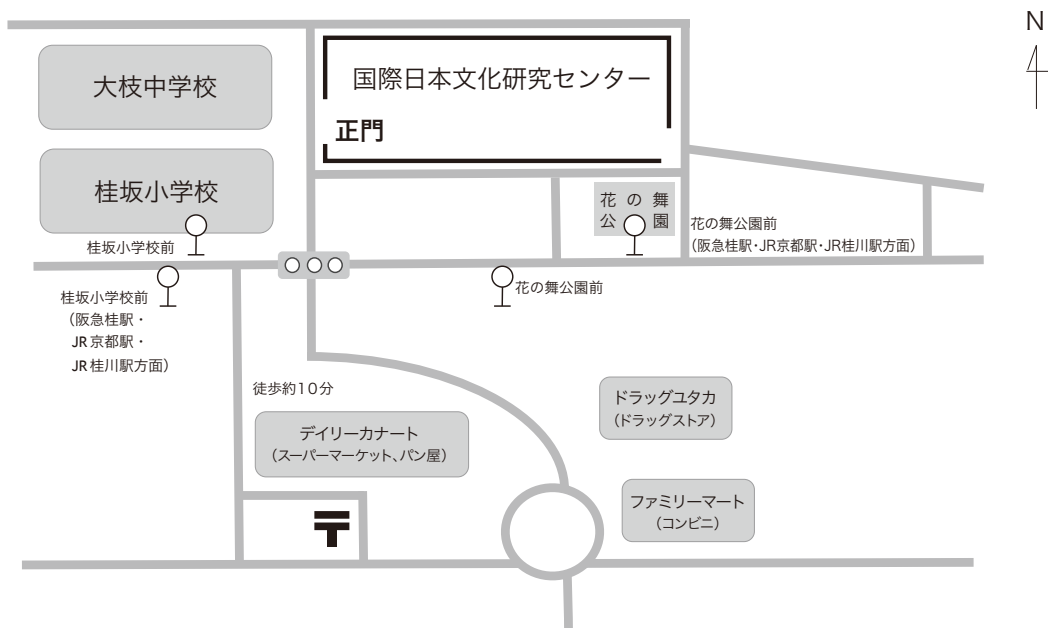
YouTube

## 5-5 当日会場案内図

### 会場案内図



### 会場周辺図

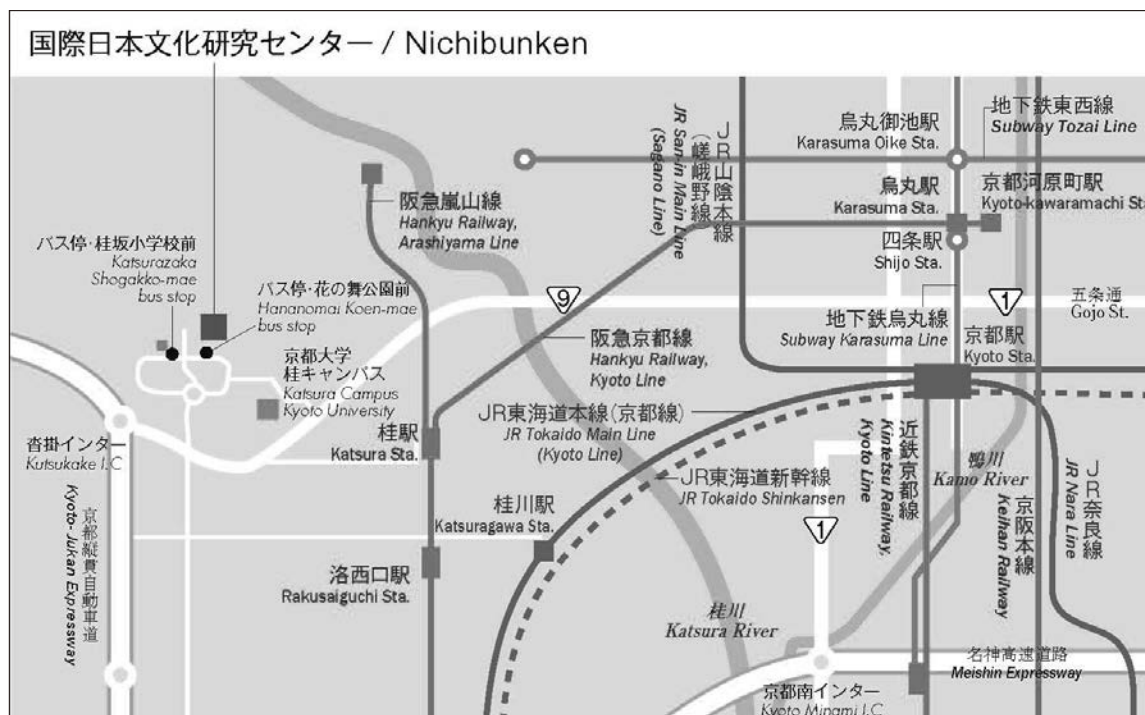


## 交通案内

### 国際日本文化研究センター

〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3丁目2番地 Tel.075-335-2052

<http://www.nichibun.ac.jp/ja/>



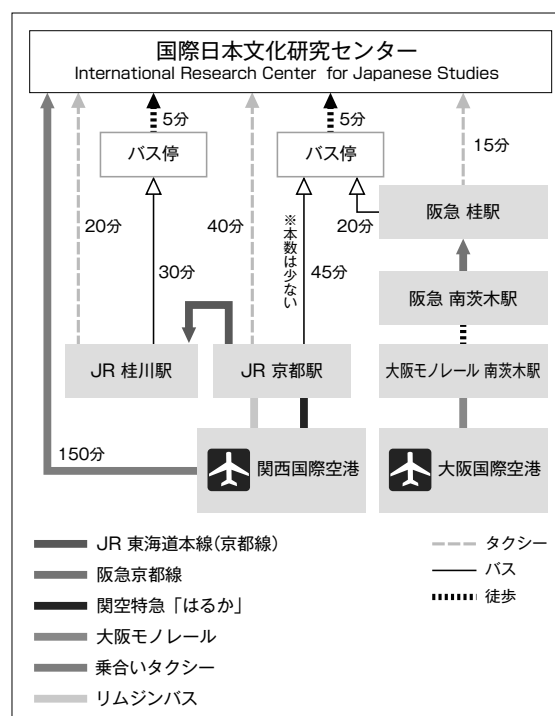
## アクセス

### バス利用の場合

- 阪急桂駅（西口）から  
京阪京都交通バス「20」、「20B」桂坂中央行きに乗車（約20分）、「花の舞公園前」下車、徒歩約5分。  
京都市バス「西5」、「西6」桂坂中央行きに乗車（約30分）、「桂坂小学校前」下車、徒歩約5分。
- JR京都駅（烏丸中央口）から  
京阪京都交通バス「26」桂小橋経由桂坂中央行きに乗車（約45分）、「桂坂小学校前」下車、徒歩約5分。  
または、「21」、「21A」桂坂中央行きに乗車（約45分）、「花の舞公園前」下車、徒歩約5分。
- JR桂川駅から  
ヤサカバス「1」、「6」桂坂中央行きに乗車（約30分）、「花の舞公園前」下車、徒歩約5分。

### タクシー利用の場合

- 阪急桂駅西口から約15分（約1,500円）
- JR桂川駅から約20分（約2,000円）
- JR京都駅から約40分（約3,500円）



## 5-6 アンケートの項目

### 総研大文化フォーラム2020 アンケート

この度は、総研大文化フォーラムに御参加いただき誠にありがとうございました。  
今回実施したフォーラムを振り返り、今後の企画運営の改善にフィードバックを行うため、参加者の皆様へアンケートの回答についてご協力をお願いしたいと考えております。  
アンケート結果は、次回フォーラム企画の際に参考とさせていただきますことと併せ、本学の各種教育事業の改善を目的として利用させていただく場合があります。お答えしたくない設問項目については、無理にお答えいただく必要はございません。何卒ご協力のほどよろしくお願いたします。

\*必須

#### 所属について

- 総研大 文化科学研究科
- 総研大 文化科学研究以外の研究科
- その他:

#### 教員/学生等の区分について

- 学生
- 教員
- その他: \_\_\_\_\_

#### 参加方法

- オンライン
- 現地参加
- その他: \_\_\_\_\_

#### 本フォーラムへの参加について

- 初めて
- 2回目以上



今年度に開催するフォーラムを知ったきっかけについて

- チッシ・ポスター
- 関係者から
- メール
- 総研大HP
- その他: \_\_\_\_\_

本フォーラムに参加された目的を全てご回答ください（複数回答可）

- 発表を行いたかった
- 発表を聞きたかった
- 他専攻・研究科の人と交流がしたかった
- その他: \_\_\_\_\_

開催時期についての印象をお聞かせください

- 大変参加しやすかった
- 参加しやすかった
- どちらとも言えない
- 参加しにくかった
- 大変参加しにくかった

参加したプログラム全くを選択してください（複数回答）

- 12/5 接続チェック
- 12/5 基調講演
- 12/5 口頭発表
- 12/5 ポスター発表
- 12/6 ポスター発表
- 12/6 口頭発表
- 12/6 シンポジウム
- その他: \_\_\_\_\_

基調講演についてお聞します

「見えない物に対する恐れと人間—文化科学研究の観点から—」  
講演者：小松 和彦（総合研究大学院大学 名誉教授／国際日本文化研究センター 名誉教授）

基調講演の印象をお聞かせください

- 大変興味を持った
- 興味を持った
- どちらとも言えない
- 興味を持たなかった
- 全く興味を持たなかった

基調講演について、ご意見があればお書きください

回答を入力

口頭発表についてお聞します

1. 「昭和初期の日本でのソヴィエト文化への視線—第一次五カ年計画(1928~32)への評価を中心に—」  
発表者：吉川 弘晃（国際日本研究専攻 学生）
2. 「中国人日本語学習者の連語習得に及ぼす要因」  
発表者：黄 麗華（明治大学国際日本学研究科 学生）
3. 「『平家物語』の堅牢地神」  
発表者：児島 啓祐（日本文学研究専攻 学生）
4. 「神儒仏三教思想と国教—川合清丸の思想について—」  
発表者：宋 琦（国際日本研究専攻 学生）
5. 「災禍におけるアマの適応と生業の再編—三重県志摩半島を中心に—」  
発表者：金丸 雄（地域文化学専攻 学生）
6. 「近代科学資料アーカイブ構築のための課題分析」  
代表発表者：後藤 真（日本歴史研究専攻 准教授／国立歴史民俗博物館 准教授）  
共同発表者：前山 和吾（日本歴史研究専攻 学生）

口頭発表の印象をお聞かせください

- 大変興味を持った
- 興味を持った
- どちらとも言えない
- 興味を持たなかった
- 全く興味を持たなかった

口頭発表について、ご意見があればお書きください

回答を入力

ポスター発表についてお聞きます

「日本中世の女性の地位は低下したのか？」

発表者：小島 道裕（日本歴史研究専攻 教授／国立歴史民俗博物館 教授）

「退職者移動現象にみる日本人介護受給の国際化」

発表者：誠谷 美和（地域文化学専攻 学生）

「『古事類苑』の作られ方」

発表者：相田 満（日本文学研究専攻 准教授／国文学研究資料館 准教授）

「古楽器ヲウレツコの演奏学習における自己とは？—ヘイトソンの認識論を手がかりに考える—」

発表者：服部 裕規（比較文化学専攻 学生）

「福島県相双地域の樹木伝承」

代表発表者：西村 慎太郎（日本文学研究専攻 准教授／国文学研究資料館 准教授）

共同発表者：泉田 邦彦（石巻市教育委員会 主事）

武子 裕美（茨城県立歴史館 副主任研究員）

「福島県大熊町における複合災害帰還困難区域の歴史資料保全—自治体や地域住民との地方協創—」

代表発表者：西村 慎太郎（日本文学研究専攻 准教授／国文学研究資料館 准教授）

共同発表者：大関 真由美（千葉市立郷土博物館 市史研究員）

官井 優士（大熊町教育総務課 学芸員）

西口 正隆（土浦市立博物館 学芸員）

ポスター発表の印象をお聞かせください

- 大変興味を持った
- 興味を持った
- どちらとも言えない
- 興味を持たなかった
- 全く興味を持たなかった

ポスター発表について、ご意見があればお書きください

回答を入力

フォーラム全体についてお聞きます

回答はすべて任意です

フォーラム全体を通じた満足度をお聞かせください

- 大変満足
- 満足
- 普通
- 不満
- 大変不満

総研大文化フォーラムについて、ご意見があればお書きください

回答を入力

次回のフォーラムも参加したいと思いますか？（次回は国立歴史民俗博物館で開催予定です）

- 現地で参加したい
- オンラインで参加したい
- 参加したいと思わない

情報共有（Slack）はどうでしたか？

- とてもよかった
- よかった
- どちらとも言えない
- あまりよくなかった
- よくなかった

情報共有（Slack）について、ぜひご意見をください

回答を入力

質問サイト（Slido）はどうでしたか？

- とてもよかった
- よかった
- どちらとも言えない
- あまりよくなかった
- よくなかった

質問サイト（Slido）について、ぜひご意見をください

回答を入力

オンライン開催についてお聞きます  
オンラインで参加した方のみ回答してください

オンライン配信 (YouTube Live) はどうでしたか？

- とてもよかった
- よかった
- どちらとも言えない
- あまりよくなかった
- よくなかった

オンライン配信 (YouTube Live) について、ご意見があればお書きください

回答を入力

オンライン開催 (全体) はどうでしたか？

- とてもよかった
- よかった
- どちらとも言えない
- あまりよくなかった
- よくなかった

オンライン開催 (全体) について、ご意見があればお書きください

最後に、フォーラム全体、又は各プログラムの内容、進行等運営全般について、良かった点・今後改善して欲しい点など、感想もまじえてご自由にお書きください。

回答を入力

最後に差し支えなければお名前をお書きください (任意)

回答を入力

【確認用】 アンケートを送信してもよいですか？ \*

- 確認の上、問題が無ければこのラジオボタンを選択してください

送信

Google フォームでパスワードを送信しないでください。



当日の発表内容（提出していただいた方のみ）

## 神儒仏三教思想と国教——川合清丸の思想について

文化科学研究科・国際日本研究専攻 宋琦

**要旨：**本発表では、神儒仏三教史の研究視野に立ち、思想家の川合清丸を取り上げて、彼の思想を通して明治初期における神儒仏三教思想と国教とのかかわりを考察する。1888年に川合清丸は山岡鉄舟の援助で「日本国教大道社」を設立した。1891年に彼は『日本国教大道社設立主意』を著し、冒頭に「国教は国の精神なり、我が国の精神は神儒仏の三道なり、三道合して大道をいう」と書かれ、彼は神儒仏三道による国教を確立しようとしていた。川合清丸の活躍していた時期に、1889年に「大日本帝国憲法」が制定された。憲法には国の宗教についての内容が含まれるが、それは主に伊藤博文などの政治家の意思であると思われる。結局神儒仏三道は日本の国教とはされなかったが、在野思想家としての川合清丸は「国教」について自らの理解と主張を打ち出した。それゆえ、彼の思想の分析によって、政治面ではなく、社会面における国の「宗教」への希求を窺うことができるのであろう。

**キーワード：**神儒仏 国教 川合清丸 伊藤博文

### 一、矛盾する「国教」と「信教の自由」

『精選版日本国語大辞典』によれば、「国教」の意味は、国家がその国民が信奉すべきものとして指定し保護する宗教である。この内容から見れば、国教は「宗教」である。明治時代の日本には、川合清丸（1848～1917）という人物は、神儒仏三道による国教を確立しようとしていた。彼は国教をどのように理解したのか、またなぜ神儒仏を国教として提唱したのか。

まず時代背景を確認してみる。明治14（1881）年の国会開設の勅諭の発布以後、政府内では伊藤博文を中心に憲法案の起草が進められた。七年後の明治21（1888）年「日本国教大道社」が設立され、川合清丸はその主幹であった。翌年の明治22（1889）年2月11日、大日本帝国憲法が正式に発布され、なかの第二十八条の内容は、「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」。日本は国教を設置しなく、「信教の自由」を憲法に書き入れた。そのあと、「信教の自由」は日本に定着した。昭和21（1946）年に公布された日本国憲法の第二〇条第一項の内容は、「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない」。これは実行している憲法なので、「信教の自由」は今の日本においても有効である。

「信教の自由」は日本の独創ではなく、西欧の多くの法令に現れてきた。例えば早い313

年にミラノ勅令 (Edictum Mediolanense) の内容によって、キリスト教が公認され、全帝国市民の信教の自由が保障される。そして、1789 年のフランス革命の基本原則を記した人間と市民の権利の宣言 (Déclaration des Droits de l'Homme et du Citoyen) と 1948 年に作成した世界人権宣言 (Universal Declaration of Human Rights) においても、人は宗教の自由に対する権利を有すると決められている。「信教の自由」は人権の一方面と思われつつ、普遍的な認識となってきた。

言葉の意味からいえば、「国教」と「信教の自由」は矛盾な存在である。もし国民が信奉すべき宗教があれば、「自由」の意味は消えてしまった。これは極めて明確なことである。明治時代までの日本では、「国教」はなかった。江戸時代にキリスト教弾圧の事件があったとしても、それは強制的な信教ではなく、社会的なタブーを示したと思われる。ある意味では、明治時代まで日本には「信教の自由」が存在していた。

## 二、西洋の風潮と前代の遺風

しかし、西洋から来たものはやはり新鮮なもので、それを抱くのはその時代の人々の心にある悸動であった。自分を見直す時に、西欧の様々な方面を参照することが多く存在していた。「大日本帝国憲法」における「宗教」の部分は、その例として考えられる。

明治 21 (1888) 年 3 月に伊藤博文は手沢本の「大日本帝国憲法」を書いた。内閣野紙がつかわれ、赤い書き込みあり、「浄写三月案」とも呼ばれる。第二十八条は「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」という内容で、後に正式に発布された「大日本帝国憲法」において、この部分の内容がそのまま採用された。伊藤博文の赤い書き込みの内容は以下のとおりである。

中古西欧宗教ノ盛ナル、之ヲ内外ノ政事ニ混用シ以テ、流血ノ禍ヲ致シ。而シテ東方諸国ハ又嚴法峻刑以テ之ヲ防禁セント試ミタリシニ、四百年來奉教自由ノ説始メテ萌芽ヲ發シ以テ、仏國ノ革命北來ノ獨立ニ至リ、公然ノ宣告ヲ得。漸次ニ各國ノ是認ヲ經、現在各國政府ハ或ハ国教ヲ存シ、或ハ社会ノ組織又ハ教育ニ於テ依一派ノ宗教ニ偏祖スルニ拘ラズ、法律上一般ニ各人ニ對シ奉教ノ自由ヲ予ヘザルハアラズ・・・・而シテ国教ヲ以テ偏信ヲ強ルハ、最モ人知自然ノ發達ト學術上競争ノ進化ヲ、障害スル者ニシテ、何レノ國モ政治上ノ威權ヲ用イテ、以テ宗教学術無形ノ問題ヲ制圧セントスルノ權利ト機能トヲ有セザルヘシ。

伊藤博文によれば、宗教が盛んであれば政治環境は安定できない。これは中古西欧から得た教訓で、それに対して東方諸国は「嚴法峻刑」で宗教の隆盛を防止していた。信教の自由はフランス大革命に至って、宣言のなかに記録された。その後、各国はそれを認めて、良好な社会秩序が維持できるようになった。もし国教があれば、それは「人知自然ノ發達」と「學術上競争ノ進化」の障害となり、宗教学が權威に制圧されるべきではない。このような考え

に基づいて、当時の憲法には「国教」についての内容がなく、西欧の「信教の自由」が現れるようになった。

### 三、歴史の鏡にある川合清丸の姿

憲法が作られていた期間、川合清丸たちは「国教」を目指して努力をしていた。日本国教大道社は明治 21（1888）年に成立し、社主は山岡鉄舟、主幹は川合清丸である。機関誌は『大道叢誌』（1号～352号）、事務所は東京にあった（明治 21 年—明治 23 年 本郷区龍岡町麟祥院内、明治 23 年—明治 44 年 本郷区駒込吉祥寺町吉祥寺境内、明治 44 年—大正 6 年 小石川区関口町鳥尾邸隣地）。教育機関としての大道学館（明治 25 年—明治 30 年）は一時期存在していたが、大正 6（1917）年に解散された。

山岡鉄舟は社主といっても、それは名目のことで、川合清丸は事実のリーダーと考えられる。河合清丸はどういう人物なのか。彼の全集は 1930 年代に出版され、十巻からなっている。巻ごとに序文があり、具体的な情報を以下のようにまとめている。

巻数	標題	序文を寄った人物	序文を寄った人物の身分
第一巻	三道並行篇	床次竹二郎	政治家、衆議院議員、内務大臣、鉄道大臣、通信大臣、政友本党総裁。
第二巻	神道即国体門	清浦奎吾	官僚、政治家。位階は正二位。勲等は大勲位。爵位は伯爵。
第三巻	神道即国体門	江木千之	明治時代から大正時代にかけての日本の文部・内務官僚、政治家。
第四巻	儒道即経世門	井上哲次郎	明治時代の哲学者。帝国大学で日本人初の哲学の教授。
第五巻	仏教即解脱門	秋野孝道	明治時代から昭和時代前期の僧。曹洞宗大（現駒沢大）学長、曹洞宗管長。
第六巻	仏堂即解脱門	関精拙	明治から昭和にかけての臨済宗の禅僧。臨済宗第七代天龍寺派管長。
第七巻	諸子即百家門	頭山満	明治から昭和前期にかけて活動したアジア主義者の巨頭。
第八巻	経世時論篇	徳富蘇峰	明治から昭和戦後期にかけてのジャーナリスト、思想家、歴史家、評論家。
第九巻	経世時論篇	三宅雪嶺	日本の哲学者、国粹主義者、評論家。
第十巻	詞藻及手束篇	加藤熊一郎	仏教学者、作家、教育家。雄弁学（弁論）に関する著作を多く残した。

これらの人物は 1930 年代に各分野の有名人である。彼らが川合清丸についての評判（部分）

を付録として本稿の最後に別添している。評判の内容から見れば、川合清丸は基本的によい評判を得て、「憂国家」「尊王」「愛国」などは頻出の言葉である。しかし、ひたすら褒美ではなく、何かの立場に立ちながらより客観的な評判も現れた。とりわけ井上哲次郎は学問の角度から話を展開し、彼の目から見た川合清丸の活動は、儒教の普及によい影響を与えた。川合清丸の宣伝していたのは、人間の経綸と修養にかかわる内容として、魅力がある。また、関精拙は川合清丸を「憂国慨世の志士」として、高い評価を与えているが、「大思想家」となれるかどうかは疑問である。川合清丸は、この全集が上梓されたときの十数年前に亡くなった。このような評判は、歴史に関する鏡に映された彼の姿である。本当の川合清丸はどういう姿だったのだろうか。

#### 四、川合清丸の核心思想

明治 21 (1888) 年に、「日本国教大道社」が成立された。同じ年に、川合清丸は『日本国教大道設立大意』を作成した。冒頭の内容は以下のとおりである。

国教は国の精神なり。我が国の精神は神儒仏の三道なり。三道合して大道と謂ふ。君に忠し国を愛するは神道より善きは無し。世道を経綸するは儒道より善きは無し。煩悩を解脱するは仏道より善きは無し。昔、先王此の三道を調和して以て国教と定め給ふや旧し。

最初の二句を合わせて読んでみれば、「神儒仏の三道」は「我が国の精神」、「国の精神」は「国教」なので、我が国の国教は神儒仏の三道となっている。これは川合清丸の主張の中心ともいえる。神道・儒道・仏道をそれぞれ紹介した後、昔の「先王」がこの三道を「国教」として定めたことを彼は明記している。ここで「先王」ということは極めて目立つと思われる。「先王」という言葉は、前近代の書籍によく出ているものである。『精選版日本国語大辞典』(小学館、2019年3月4日更新版)によれば、「先王」の意味は前代の君主、昔の聖王。ここでの「先王」は誰なのか。

『論語・学而第一第一二・礼の用は和を貴しと為す』において、「有子曰、礼之用和為貴、先王之道斯為美、小大由之、有所不行、知和而和、不以礼節之、亦不可行也」という内容がある。この「先王」の意味は基本的に堯・舜・禹・湯・文・武など古代中国の先王を指している。日本の「先王」を言えば、荻生徂徠(1666-1728)の「先王の道」は有名である。『弁道』において、「先王の道は、天下を安んずるの道也。その道多端と雖も、要は天下を安んずるに帰す」という内容がある。これは同じく中国の先王を指している。ただし、川合清丸の「先王」は神道・儒道・仏道の三道を「国教」として定め、神道があるため、この「先王」は中国の「先王」ではない。おそらく類比のように、日本の古代の「王」と指している。記紀神話に記録される王様や天皇ではないかと思われる。

この神儒仏の三道は「日本国教大道社規則」にも表れている。第十三条の内容は、「本社ハ漸次神儒仏其他道学ノ正義ヲ講述セル書籍ヲ出版シ賛成員ニハ原価ニテ需ニ応ズ」、第十

四条の内容は「本社ハ将来ニ神儒仏兼学ノ学校ヲ興シ大ニ国教皇張ノ基礎ヲ立ツベシ」であり、神儒仏は大道社の核心といえる。神儒仏はここで「大道」と呼ばれるが、「三教」という呼び方はより普遍である。神儒仏は明治時代以前も存在していた思想で、石田梅岩（1695-1744）と二宮尊徳（1787-1856）などの人物は民衆教化運動においてそれを提起した。川合清丸の「神儒仏」が、彼らの「神儒仏」とは必ず同質なものではない。その理由は、川合清丸の時代背景として、国民国家というイデオロギーはすでに成立していた。川合清丸は「神儒仏」を「国教」までに押し上げた。

川合清丸の『国教論』（1889）には次のような内容が記されている。

客あり揖して問て曰く、国教とは何ぞや。答て曰く、政府の認定して、国王の進行する教法是れなり。曰く我国の国教は何ぞや。曰く神仏の二教是れなり。客蹙然として怪しめる色あり曰く、帝国憲法第二十八条も言わずや『日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨グズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス』と、然れば則ち羅馬旧教、耶蘇新教、希臘教等も、亦政府の許す所なり。国教たるもの何ぞ神仏の二教に限らむや。

曰く是れある哉子の憲法に味きや。『日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨グズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス』とは日本臣民の権利を規定せられたるものにて、言を易へて云はゞ日本臣民は、何等の宗教を信ずるも国家に害を為さざる以上は、政府は之を度外に置くと云ふ事なり。其は元来信教は人の精神上に属するが故に、形体を支配する所の政事を以て左右すべきものにあらずと云ふ理屈より規定せられたるものにて、独り本邦のみ然るにあらず、他の国教を立てたる外国に在りても、敢て国教外の宗教を禁ぜず、其の国に障害を興へざる以上は現に信教の自由を許せり。……其のこれを度外におかざるのみならず、保護して以て国教と認定せらるゝものは唯神仏の二教あるのみ。

「国教」について聞かれた際に、川合清丸の答えは神仏の二教である。聞き手としての客は、帝国憲法の「信教の自由」をもって、なぜ神仏の二教は国教に限られるかと聞き続いた。川合清丸は「信教の自由」の前提を強調し、その前提は国の障害とならないことである。彼によれば、一つの国において「国教」があても、国の障害にならない宗教を禁じることはしない。日本の場合、神仏は「政府の認定して、国王の進行する教法是れなり」、すなわち「国教」である。

ここでは、彼の思想における一つの変化がある。この段落の内容から見れば、客は帝国憲法の内容を引用したので、この時点では帝国憲法（1889年）がすでに頒布された。日本国教大道社の設立大意に書かれた「神儒仏」のなか、「儒」は脱落した。一つの原因は近代の宗教概念の立場から、儒教・儒道は宗教ではない疑問がある。もう一つは、帝国憲法には「信教の自由」が書き入れされたが、「国教」についての内容はなかった。このような場合、彼は「神儒仏三教」を「国教」として宣伝するのが不適切となってしまった。



「神儒仏三道」は「国教」となれないと、どういう存在なのか。1893年に、川合清丸は『国之大経』を著した。彼は「神儒仏」を「国之経」と呼ばれ、「神道主之」の「太廟」「皇統」「宗祀」、「儒道主之」の「忠孝」「仁義」「至誠」、「仏道主之」の「智慧」「解脱」「因果」の九項目を「国家九経」と見做されていた。

川合清丸は「神儒仏三道」を「国の経」という新しい名前を付けて、神道と仏教を「国教」と認識していた。官僚層はどのような考えであったのか。1888年6月18日の第一審会議・第一読会の際に、議長伊藤博文は「大日本帝国憲法草案」についての陳述がある。

此原案ヲ起草シタル大意ヲ陳述セン……又タ宗教ナル者アリテ之カ機軸ヲ爲シ、深ク人心ニ浸潤シテ、人心此ニ歸一セリ。然ルニ我國ニ在テハ宗教ナル者其力微弱ニシテ、一モ國家ノ機軸タルヘキモノナシ。佛教ハ一タヒ隆盛ノ勢ヲ張り、上下ノ人心ヲ繫キタルモ、今日ニ至テハ已ニ衰替ニ傾キタリ。神道ハ祖宗ノ遺訓ニ基キ之ヲ祖述スト雖、宗教トシテ人心ヲ歸向セシムルノ力ニ乏シ。我國ニ在テ機軸トスヘキハ、獨リ皇室アルノミ。

伊藤博文の発言によれば、日本における宗教の力は微弱で、国の機軸となれない。仏教は衰えたもので、神道は宗教として人心を集めるのが難しい。これは川合清丸の理解とは全くことなる視点である。さらに、伊藤博文の意見では皇室は国の機軸となれる。すなわち万世一系の天皇である。

安丸良夫は「この「信教の自由」は、国家意思をすすんで内面化してゆく、“自由”を基本的な性格とするものであり、厭世的・超世俗的宗教意識や民族的諸信仰は、こうした“自由”によって克服されねばならないものであった」<sup>1</sup>と述べている。「信教の自由」というものが国家意思として決められると、「自由」について把握は課題となっている。西欧のような宗教戦争を体験したことがない東アジアの人々として、国家と宗教との関係についての思考を行う際に、全く初心者といえる。西欧式の「宗教」や「宗教の自由」などを通して、自分を振り返ってみれば、西洋への憧れと内面的な迷いが同時に存在していた。

## 五、まとめ

以上の考察によって、本研究の内容を次のようにまとめている。まず、神儒仏三教思想は江戸時代までに社会における重要な思想であるが、明治時代になっても、その生命力がみられる。また、川合清丸は神儒仏三道を「国教」として、認められるように努力したが、失敗に終わった。その根源を言えば、川合清丸の思想においては、封建制度の国における教化を目的とする教えと、近代国民国家における「国教」概念との混淆がみられる。このようにすれば、国民国家の建立期に、官僚階層と民衆階層のあいだに大きい格差が存在していた。た

---

<sup>1</sup> 安丸良夫『日本ナショナリズムの前夜朝日選書、1977年、40頁。

だし、彼の思想の分析によって、政治面ではなく、社会面における国の「宗教」への希求を窺うことができるので、意義が大きいといえる。

#### 付録：川合清丸についての評判

明治二十年前後ヨリ、国家ノ現状ヲ憂ヒ、時代ノ趨勢ヲ慨キ、之ヲ匡救セムト。神儒仏ノ三道ヲ基調トシテ、尊王愛国ノ大義ヲ説キ、忠孝仁義ノ大道ヲ唱道スルコト、實に三十年一日ノ如ク、其ノ至誠ニ至リテハ何人モ感激セザルモノナク。

——床次竹二郎（1867-1935）『川合清丸全集・第一巻・序文』

山岡鉄舟居士より、活如来と讃歌せられし、川合清丸翁は、一世の師表と仰ぐに足るべき人なりけらし。

——清浦奎吾（1850-1942）『川合清丸全集・第二巻・序文』

蓋し翁は、神儒仏の蘊奥を尽くして、之を国家経綸の原理、人道綱紀の基調と為したるなり。就中、神道は翁の家学なるを以て、其研究の業績、最も光彩赫灼たるを覚ゆ。

——江木千之（1853-1932）『川合清丸全集・第三巻・序文』

すなわち緋いて之を覽るに、此篇たるや儒教が神仏二教と共に並び行われて相悖らず、永く我国の教とすべき所以を明にし、又能く儒教の要旨を把握して、之を人生の経綸、若しくは修養に資せしめんとするの意思あるを見る。而して其至誠熱情に至っては益々として紙面に流露して居るのである。川合翁の文章が読者を惹付ける一種の魅力あるは之が為である。

——井上哲次郎（1856-1944）『川合清丸全集・第四巻・序文』

翁は鉄舟と得庵を打して一丸と為し、之に加ふるに其の家学たる神道の蘊奥を究尽し、且つ維摩の定力と、東坡の文才を兼備し、之を総合するに、烈々たる大和魂を以てし、憂国慨世の余り、日本国教大道を創立し、破邪顕正の大旆を掲げて、教界の文壇に大聲疾呼すること、實に三十年一日のごとくなりき。

——秋野孝道（1857-1934）『川合清丸全集・第五巻・序文』

川合清丸は、幼いより家学の神道を学び、又当時の普通学たる儒学を学んで、天稟の才能を益々發揮したには相違ないが、若しちゅうねん仏道に入ること無く、一生破仏家で終わったならば、憂国慨世の志士として、後世に聞ゆることありとするも、果たして之を百代の末迄も伝ふるに足りるべき、大思想家と成り得たか否かは、疑問である。

——関精拙（1877-1945）『川合清丸全集・第六巻・序文』

川合氏は嘉永元年伯耆の神宮の子として生まれ。夙に神道を国教とし、異端邪説を排斥するを欲し、明治十四年儒学を京阪み修め、十七年鳥尾得庵と仏教を論じ、之に従ひ、更に鉄舟につ就き、神儒仏三道を国教とするに決した。その努力は全集に見るを得るが、意気及び才識に於て平田篤胤に譲らず。

——三宅雪嶺 (1860-1945) 『川合清丸全集・第九卷・序文』

先生の学は、諸子百家を悉くして東洋思想の蘊奥を究め、先生の思は、神儒仏三道の融合にあつて、東洋道德の精髓を攫み、先生の唱ふる所は、純日本主義に立脚して建国の理想を發揚し、人間靈性の琴線に触れて既に共鳴を麵天下に得たるもの、之れを今日に復活し現代に再興するは、真に現代人を更生せしめ、警覺せしむる一大基準を示すものといふへし。

——加藤熊一郎 (1870-1949) 『川合清丸全集・第十卷・序文』

## 当日の発表スライド（提出していただいた方のみ）

※著作権上、配布できない箇所については、黒塗りとした。

**CONTENTS**  
1.流行病と疱瘡神→祇園祭へ  
2.災害の記憶と『古今和歌集』東歌  
3.災害を記念する作品群  
参考  
相田満『時空間とオントロジで見る和漢古典学』勉誠出版,2016.2

疫病鎮静  
布多天神社  
令和二年七月二十六日

平安前期のレジリエンス  
—六国史時代と現代を見比べて—

本研究成果は本研究はJSPS科研費JP 16H01760「日本における「生き物供養」「何でも供養」の連環的研究基盤の構築」の助成を受けたものです

総研大フォーラム  
2020.12.06  
日本文学研究専攻  
相田 満

2

## 東京都調布市布多天神社 本殿の裏の森に鬼太郎が住んでいる設定





御嶽神社 (火災盗難)  
 祓戸神社 (祓除)  
 庖瘡神社 (疫病沈静)



3

4

歌番号	災害地・記号	出来事年表	出来事	古今和歌集撰者事歴	撰者事跡年表	平成以降の出来事
1092 ア		天長7年(830)1月3日	出羽国大地震(日本後紀38逸文・類聚国史171)			
1092 イ		嘉祥3年(850)10月16日	庄内大地震(文徳実録)			
		★貞観5年(863)1-3月	喉逆病大流行			
		■貞観5年(863)5月20日	神泉苑にて御蓋会			
1097-1098 ウ・甲斐歌		貞観6年(864)5月25日・7月17日	富士山噴火		紀貫之生?	
		■※貞観6年(864)6月	祇園御霊会創始(祇園社本録)			
		貞観6年(864)7月14日	肥後国大風雨			2020年7月:熊本県豪雨
		貞観10年(868)7月8日	播磨国地震			1995年:阪神淡路大震災
1087-1088-1089-1090-1091-1093	エ・陸奥歌	貞観11年(869)5月26日	貞観大地震・津波			2011年:東日本大震災
(1095-1096)	(オ・常陸歌)	貞観11年(869)6月15日-18年3月9日	貞観の入寇			2013年~日韓関係悪化
		貞観11年(869)12月14日	伊勢神宮への告文。日本国は神国なりの言辭の始まり。			
1095-1096	オ・常陸歌	貞観12年(870)8月28日・13年2月26日・16年11月26日	大宰府管内の全在留新羅人の陸奥に帰化させ、筑波山の神位を上げる。			
		★貞観14年(872)1-3月	喉逆病大流行。瀬海客来のためおされる。			
1092	カ・陸奥歌	元慶2年(878)3月15日	出羽元慶の乱			
1094	キ・相模歌	元慶2年(878)9月29日	関東大震災			
1100	ク	元慶4年(881)12月6日	京都大地震			
1094-1099-1100	ケ・相模歌・伊勢・冬の賀茂	仁和3年(887)7月30日	仁和大地震			
			凡河内躬恒甲斐少目		寛平6年(894)	
			紀友則任土佐様		寛平9年(897)	
		延喜5年(905)4月18日	古今和歌集奏上		延喜5年(905)	
			紀友則50歳で没		延喜5年(905)以後	
			凡河内躬恒没		延長3年(925)以降	
			紀貫之没		天慶8年(945)	

※八坂神社社伝『祇園社本録』の説。天長1年(970)6月14日御霊会を祇園祭とする(二十二社註式)。  
 ※特に断りのない限り貞観・元慶・仁和時代の記事は三代実録による



## 参考：六国史中に出現する「地震」「地動」という文字

書名	地震	地動	計621例	取扱時代
日本書紀	20	5	25	神代～持統天皇11(697)年
続日本紀	78	6	84	文武天皇元(697)年～延暦10(791)年
日本後紀	104	4	108	延暦11(792)年～天長10(833)年
続日本後紀	49		49	天長10(833)年～嘉祥3(850)年
文徳実録	82		82	嘉祥3(850)年～天安2(858)年
三代実録	273		273	天安2(858)年～仁和3(887)年

### 六国史の記述密度

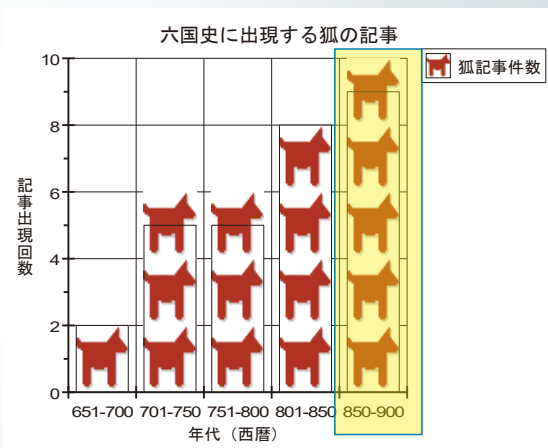
	対象期間(年月)	巻数	一巻あたり年月	一見出宛字数
日本書紀	太初～	30	…	87
続日本紀	94年5ヶ月	40	2年3ヶ月	78
日本後紀	41年2ヶ月	40	1年強	58
続日本後紀	17年2ヶ月	20	10ヶ月強	85
文徳実録	8年6ヶ月	10	10ヶ月強	87
三代実録	29年1ヶ月	50	7ヶ月強	101

5

## キツネ記事出現の傾向:頻度の観点から

- キツネ記事出現の特徴
  - 記事はいずれにも偏在
- 同一単位の時系列で見ると、時代が下るほど出現回数が増すという特徴がある
  - 六国史が後代のものになるにつれて、一巻あたりに割かれる記事が増加する傾向がある。
  - 三代実録の採録方針の特徴ゆえか。

6



## 『古今和歌集』 卷20・東歌

君をおきて あたし心を 我もたば  
末の松山 なみもこえなむ

貞観地震：貞観11年5月26日（869年7月9日）

河野幸夫（こうの・ゆきお）,歌枕「末の松山」と海底考古学」,国文学2007.12臨時増刊号

河野幸夫「海底遺跡が語る貞観地震—平安時代の仙台湾に沈んだ島の伝説を教訓に—」,日本経済新聞,2011.8.16文化欄

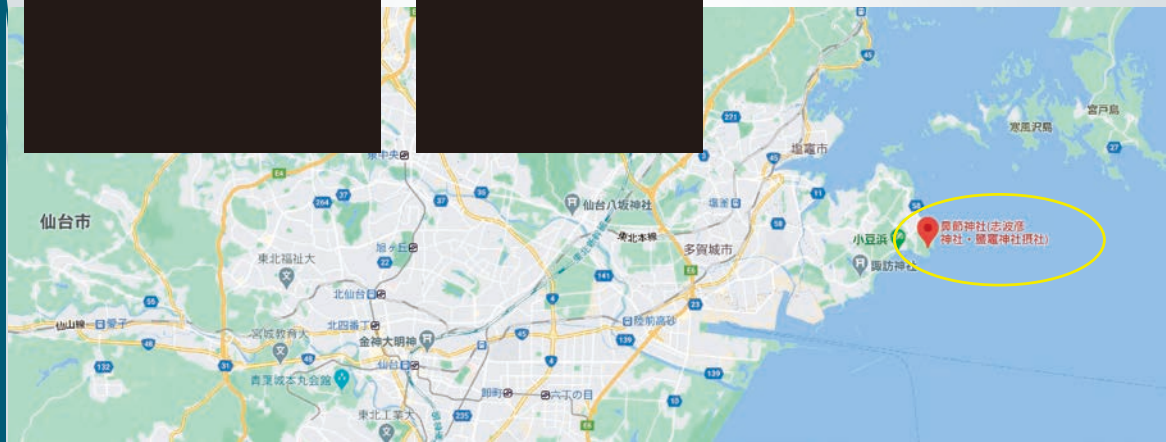
- ▶ 吉田東伍「貞観十一年陸奥府城の震動洪溢」（『歴史地理』8-12、1906〔明治39〕.12.1）
  - 渡辺史夫「わが国で初めて「貞観地震」「貞観津波」を歴史地理学的に解説した吉田東伍の研究論文『貞観十一年陸奥府城の震動洪溢』について」（阿賀野市立吉田東伍記念博物館 研究概報1,2011.5.11）
    - ▶ 「末の松山」の歌にもふれる

## 聖地七ヶ浜 [宮城県宮城郡七ヶ浜町花湊浜誰道 1]

鼻節神社〔はなぶし〕元社

(志波彦神社・鹽竈神社摂社)の発見が契機

かななぎ（漫画：武梨えり／アニメ：2008放映）





◎ 『古今和歌集』 卷20・東歌

11

陸奥歌 10 87 阿武隈に霧立ちくもり明けぬとち君をばやらじ待てばすべなし【一】／阿武隈川（宮城県亘理郡亘理町）河口（市）……※東日本大震災では震度6強を観測した地域。

10 88 陸奥はいつくはあれど塩竈の浦漕ぐ舟の綱手かなしも【一】／塩竈浦（宮城県塩竈市）

10 89 わが背子を都にやりて塩竈の離の島の松ぞ恋しき【一】／塩竈（宮城県塩竈市）

10 90 をぐる崎みつの小島こじまの人ならば都の苞つとにいざと言はましを【一】／小黒崎・美豆の小島（宮城県大崎市）……※東日本大震災では震度6強を観測した地域。

10 91 みさぐらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり【一】／宮城野（宮城県仙台市宮城野区）

10 92 最上河のほればくたる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり【一】／出羽国府（山形県酒田市）

10 93 君をおきてあたし心をわが持たば末の松山波も越えなむ【一】／末松山（宮城県多賀城市）……※（吉田1906）（河野2007・2011）など。

相模歌 10 94 こよろぎの磯立ちならし磯菜摘むめざし濡らすな沖にをれ波【一】／小田留磯「小余綾」（神奈川県大磯町）

常陸歌 10 95 筑波嶺のこのもかのもに陰はあれど君が御蔭にます陰はなし【一】／筑波根（茨城県つくば市）

10 96 筑波嶺の峰のみち葉落ち積もり知るも知らぬもなべてかなしも【一】／筑波根（茨城県つくば市）

甲斐歌 10 97 甲斐が嶺をさやにも見しがけけれなく横ほり臥せるさやの中山【一】／甲斐嶺（山梨県南アルプス市）・小夜中山（静岡県掛川市）

10 98 甲斐が嶺を領越し山越し吹く風を人にもがもや言つてやらむ【一】／甲斐嶺（山梨県南アルプス市）

伊勢歌 10 99 をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも覆て語らばむ【一】／麻生の浦（三重県鳥羽市浦村町）

冬の賀茂の祭の歌 11 00 ちはやぶる賀茂の社の姫小松万世経とも色は変はらし【一】（藤原敏行朝臣）／賀茂の社（京都市）



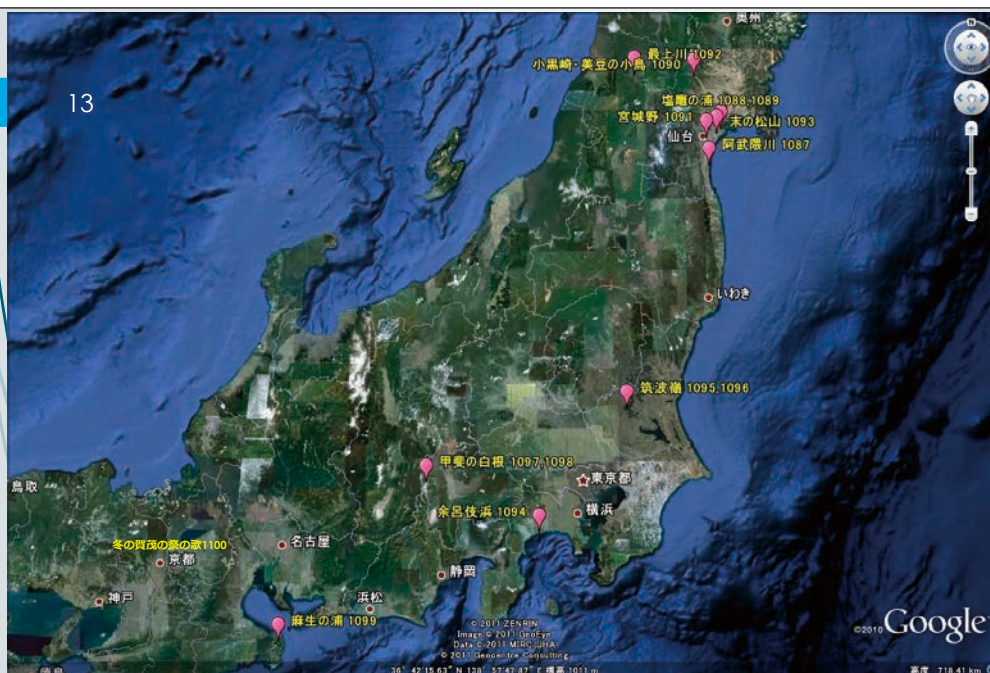
## 地域から読む仮説

12

『(貞観)儀式』巻10・十二月大難儀

- ▶ 平安京内の疫鬼を本来隠れ住んでいた四方の堺の域外に追い払う儀式
- ▶ 「四方之堺」・・・東方陸奥、西方遠値嘉〔五島列島〕、南方土左、北方佐渡と規定
- ▶ 東歌の配列は陸奥以東の東国からの疫鬼の侵入を、神域で「やはらげ」た？
  - ▶ 陸奥→相模国→常陸国筑波山→甲斐の富士山→伊勢神宮→賀茂神社
- ▶ 鎮魂の営みに、歌や音楽が大きな役割を果たした
- ▶ 1000年の時を超えた普遍の営み
- ▶ 「祥瑞天之所祚於人主。災異天之所誠於人主」〔祥瑞は天の人主に祚(さいはひ)する所。災異は天の人主を誠むる所〕(『三代実録』序文)
  - ▶ 「天人感応説」の考え方は当時の通念
- ▶ 『古今和歌集』の掉尾を飾る東歌一群の読み直し

13



『古今和歌集』巻二十一「東歌」に見える地名  
 参考：吉原栄徳『和歌の歌枕・地名大辞典』(おうふう、2008年) など

## 大災害の記憶の風化

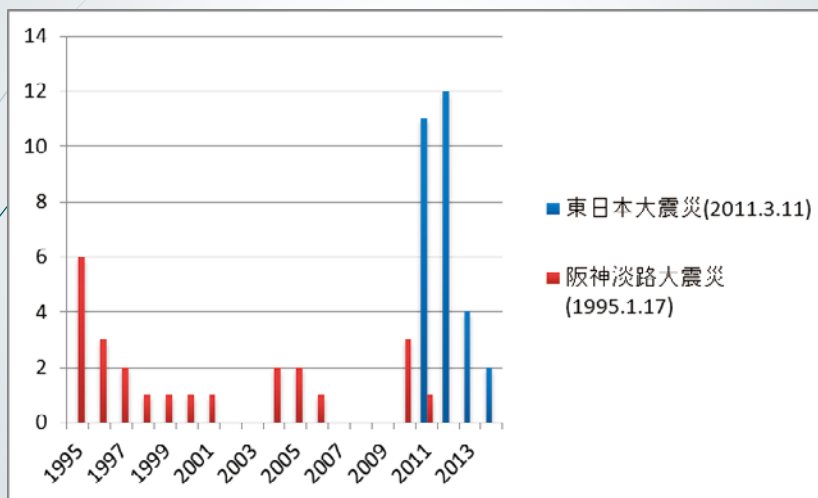
さらなる大事件の発生→忘却

- ▶ 記憶の風化を防ぎ、忘れないためには？
  - ▶ 犠牲者を供養し、災害を記念するイベントとモニュメントの造営
- ▶ 主題とする作品で比較：対象事例(Wikiカテゴリ)
- ▶ **1995年1月17日阪神・淡路大震災：20年で23件**
  - ▶ 6,500人余の死傷者 行方不明者 3人、負傷者 43,792人、被害総額約10兆円
- ▶ **2011年3月11日 東日本大震災：3年で27件**
  - ▶ 死者15,885人、行方不明者2,623人、負傷者6,148人（2014.4.11時点）

## 災害を記念する作品群の誕生頻度

いずれも3年を契機に急減・・・服喪期間？

阪神淡路大震災は2005・10年に件数増加・・・10周年・15周年？







## Googleで「音楽」と掛け合わせ検索

- 阪神淡路大震災 + 音楽 816,000件
  - 東日本大震災 + 音楽 5,520,000件
  - 東北関東大震災 + 音楽 817,000件
- Accessed 2014.5.9 in Taiwan
- 阪神淡路大震災 + 音楽 1,030,000件
  - 東日本大震災 + 音楽 29,000,000件
  - 東北関東大震災 + 音楽 1,360,000件
- Accessed 2019.11.14 in Taiwan

## 災異（祥瑞の反対語）と前近代

- ① 災異が背景にあって生まれる奇譚・怪談
  - .....説話集・談話記録（『今昔物語集』27「内裏の松原にして鬼人の形となりて女を・ふ語第八」= 『三代実録』記事に原話（仁和3年8月17日「地震の翌日」あり、『癡心集』4-9「武州入間川沈水の事」など）
- ② 災異を回顧・記録するもの
  - .....史書（六国史など）・図絵
- ③ 災異が契機となって生まれる諺・言葉・妖怪
 

.....むくりこくり（蒙古襲来の記憶）・人魚（地震）
- ④ 鎮魂の文芸.....詩文・歌・文集
- ⑤ 歴史地名.....福井県**九頭竜（くずりゅう）川**、**九頭龍神社（東京都多摩市）**

[暴れ川が龍「流」にたとえられる]

**蛇：蛇陀羅区悪谷（じゃだらくあしだに）**  
 （広島市安佐区八木 [2014年8月20日大土砂災害] の旧呼称）

## 国文学研究資料館の収蔵品 22

<https://www.nijl.ac.jp/search-find/articles/tsushin/368.html>

## 災害と向き合う

相田満, 文部科学教育通信No368/  
[シアース教育新社]掲載

## —『地震津浪末代噺乃種』(ヤ3-161)—



図1 津波の図



部分拡大 その2



部分拡大 その1

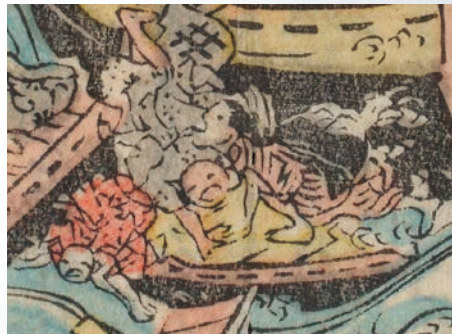
『地震津浪末代噺乃種』は後に安政南海地震と呼ばれる大地震と津波を記録した瓦版を再録した章双紙である。前半は嘉永七年甲寅十一月四日(一八五四年十二月二十三日)に発生した安政東海地震に揺れた大阪の様子と、後半は翌日嘉永七年甲寅十一月五日に今度は南海地震により大阪を襲った大津波の顛末を記す。両災害の記事の間には、「大昔(宝永四年)地震津波開書」と題する百四十八年前の宝永四年十月四日(一七〇七年十月二十八日)に起きた津波被害をもつた宝永大地震の記事をはさむ。

現在では嘉永七年に十一月四日に安政東海地震が、翌日に安政南海地震が起きたことがわかってるが、当時の大阪人にとっては十一月四日の東海地震の大揺れからして大変なことで、翌日の地震にもなう大津波被害の記憶が強烈だったために、このような記載となったのだろう。

嘉永七年という年は、三月に日米和親条約の締結、四月に内裏炎上などの大事が起こり、十一月に東海・南海の二つの巨大地震の発生という大事件や災厄が多発した。これにより十一月に安政と改元されたが、以後も巨大な地震が頻発した。このため、後には安政前年に起きたこれらの巨大地震を総称して安政地震と呼ぶようになったのである。

地震のエネルギー指標となるマグニチュード(M)換算では安政南

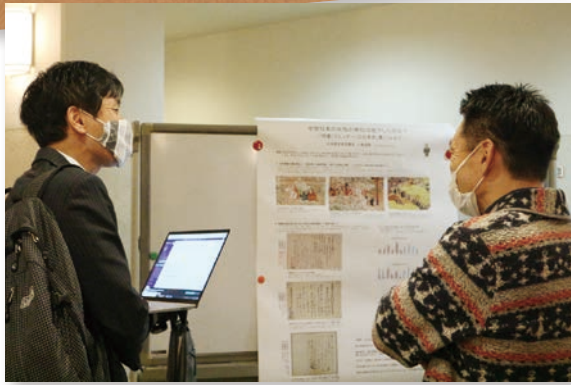
## 部分拡大







当日の写真





## 謝 辞

国際日本研究専攻 博士課程2年 学生企画委員長 石原 知明

この度は本報告書をお読みいただきありがとうございます。総研大文化フォーラムは2016年、国際日本文化研究センターを会場として行われたのを皮切りに、文化科学研究科の基盤機関である国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館、国文学研究資料館と一年ごとに会場を持ち回り、2020年で一周し、「国際日本研究」コンソーシアム後援のもと国際日本文化研究センターで行うことになりました。しかし今年は皆さんご存じのように、2020年はまさに大変な幕開けとなりました。学生企画委員で最初テーマの案を持ち寄った際にも、COVID-19、新型コロナウイルスという名称が飛びかいました。そしてもうひとつ、この時代、状況を超えたとき、もしくは超えるために、文化研究に何ができるだろうか、という「未来へのまなざし」もありました。それらの持ち寄られた意見をまとめたときに「レジリエンス」というキーワードが出てきました。それらの意見交換を経て、本フォーラムでは「文化のレジリエンスとは？<異>をつなぎ、未来へ」をテーマに掲げました。

「文化のレジリエンス」とは何か、今回のフォーラムを通じて、答えが出るものではもちろんなく、明確な答えがあるようなものであるとも思ってはいません。しかしながら、総研大文化フォーラムという場が、学問的垣根を越えて、様々な異をつなぎ、みなさんの今後へのヒントや、研究の参考になるような機会となったならば、今年度の学生企画委員長としてうれしく思います。

最後に謝辞を、ご後援いただいた「国際日本研究」コンソーシアムには重ねて御礼申し上げます。

日文研の先生方にも様々ご指導ご鞭撻または支援をしていただきました。特に稲賀専攻長には、多大なるご支援をいただきました。

また、事務の皆さまには、勝手に知らない私を導いてくださいました。お手数をおかけすることも多かったかと思いましたが根気強くお付き合いいただきました。ありがとうございました。

最後に、一緒に総研大文化フォーラム2020を開催まで導いてくれた学生企画委員の皆さま、このような頼りない委員長でしたが、皆さんのおかげで開催できたと思っております。ありがとうございます。

## 編集後記

日本歴史研究専攻博士課程2年 報告集編集委員長（学生企画副委員長） 前山 和喜

本年度は、初めての対面・オンライン併用開催となり、右も左も（さらに開催されるのかさえも）分からないまま学生企画委員の活動が始まりました。フォーラム当日まで、一度も対面で会ったことはなかったのですが、オンラインでの学生企画委員の会議や、Slack上でのこまめなやり取りによって、無事フォーラムを完遂することができました。そして、その最後の仕事として本報告集を発行するに至りました。

この報告集に関しては、否定的な意見もありましたが、特別な開催形態となった本年度のノウハウを残す必要性を感じた学生企画委員の意見により発行することとしました。できる限り丁寧にまとめましたので、今後の学生企画委員の参考になれば幸いです。来年度のフォーラム当番校（予定）である日本歴史研究専攻からの唯一の学生企画委員であるという理由で前山が編集委員長を務めることになりましたが、まさか報告集の作成がこれほどまでに大変とは思いませんでした。個人の意見ですが、次年度以降は、もっと簡易的な報告集の作成でよいと思われます。

最後に本報告集の発行に当たりご寄稿いただきました、学生企画委員、総研大本部の事務の方、各基盤機関の専攻事務の方、ご協力いただきました皆様に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 令和2年度学生企画委員会

委員長 国際日本研究専攻 石原 知明  
副委員長 日本歴史研究専攻 前山 和喜 (報告集編集委員長)  
委員 日本文学研究専攻 伊藤 美幸  
(50音順) 地域文化学専攻 岩下 夏岐  
国際日本研究専攻 王 紫沁  
地域文化学専攻 金丸 雄一  
国際日本研究専攻 宋 丹丹  
比較文化学専攻 服部 裕規

後 援 「国際日本研究」コンソーシアム

## フォーラム担当教員

文化科学研究科長 池谷 和信 教授  
国際日本研究専攻長 稲賀 繁美 教授

## 総研大文化フォーラム2020報告集

文化のレジリエンスとは? : <異>をつなぎ、未来へ

発行日 令和3年3月31日  
編集 総合研究大学院大学 文化科学研究科  
総研大文化フォーラム2020学生企画委員会  
デザイン 王 紫沁  
発行者 国立大学法人 総合研究大学院大学 文化科学研究科  
事務局 総合研究大学院大学 学務課学務支援係  
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町 (湘南国際村)  
電話 046-858-1583 FAX 046-858-1632  
印刷 株式会社 正文社



S O K E N D A I

